

# 門前町道下元町遺跡

一般国道 249 号改良事業に係る  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1985

石川県立埋蔵文化財センター



# 門前町道下元町遺跡

一般国道 249 号改良事業に係る  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

石川県立埋蔵文化財センター



## 例 言

- 1 本書は一般国道 249 号線改良工事に係る鳳至郡門前町道下地内に所在する、道下元町遺跡、道下元町 B 遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡の試掘調査、発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターが主体となって実施した。試掘調査は昭和 56 年 8 月 10 日から 13 日にかけて行い、平田天秋、西野秀和が担当した。本調査は昭和 57 年 4 月 25 日から同年 10 月 16 日まで現地調査を実施し、平田、福島正実、米沢義光、垣田修兎、土上正男、西野が担当した。
- 3 発掘調査にあたって次の諸氏の御教示を受けた。  
佃 和雄（門前町立櫛比小学校教頭）、四柳嘉章（県立中島高校教諭）、高 一男（県立門前高校教諭）、市堀元一、宮下栄仁、本田秀生（石川考古学研究会）
- 4 発掘調査の実施にあたっては、輪島土木事務所、門前町教育委員会、(株)協栄建設の助言、協力を受けた。
- 5 本遺跡出土遺物の整理作業は、昭和 59 年度に石川県埋蔵文化財協会に委託して実施した。  
（担当——浅野豊子、松田智恵子、北田琴美、小間博文、馬場正子、辻森由美子、北 洋子、米沢富士枝、土井真知子、小屋玲子、正木直子、新谷由子、川端敦子、黒田和子、大藤雅男、勝島栄蔵）
- 6 本遺跡出土の石質鑑定は、藤 則雄（金沢大学教授）が行い、「石器圏について」の玉稿を受けた。
- 7 本報告書の編集は、平田、西野があたり、次のように分担執筆した。  
第 1～3 章（西野）、第 4 章第 1・2 節、第 5 章第 1 節（市堀元一）、第 4 章第 3・4 節、第 5 章第 3 節（平田）、第 5 章第 2 節（藤 則雄）、第 4 章 4 節（10）宮下栄仁、
- 8 本遺跡の遺構、遺物実測図、写真、8 mm フィルム、出土遺物、調査日誌等の資料は、本センターにて一括して保存管理にあっている。
- 9 本報告書の遺構、遺物挿図、写真図版の指示は次の通りであるが、適宜変更したものについては挿図に明示している。
  - （1）方位は全て磁北を表示する。
  - （2）水平基準は海拔高で表示する。（単位 m）
  - （3）挿図の縮尺  
縄文式土器拓影・実測図、石器、弥生式土器拓影、須恵器、土師器、陶磁器——1/3、珠洲焼——1/4。
  - （4）写真図版中の復元土器の縮尺は統一していないが、破片は約 3 分の 1 の縮少である。
  - （5）写真図版中の遺物番号は、挿図内番号と一致する。
  - （6）遺物の計測値の単位は、cm、g である。



## 目 次

第1章 遺跡の環境 .....	1
第1節 地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1
第2章 調査に至る経緯と経過 .....	7
第1節 調査に至る経緯と経過 .....	7
第2節 調査日誌 .....	7
第3章 遺跡の範囲と遺構 .....	12
第1節 遺跡の範囲 .....	12
第2節 遺構の配置と層序 .....	12
第3節 遺 構 .....	27
(1) 配石址、(2) 配石排水溝、(3) 土塁、(4) 井戸、(5) 土坑、(6) 建物跡	
(7) 道路、(8) 石垣、(9) 石組井戸、(10) 東調査区最下層	
第4章 出土遺物 .....	43
第1節 縄文時代の遺物 .....	43
(1) 土器、(2) 石器	
第2節 平安時代以前の遺物 .....	90
第3節 中世の遺物 .....	96
1 国産陶磁器	
(1) 土師質土器 (2) 瓦質土器 (3) 珠洲 (4) 越前 (5) 瀬戸・美濃	
2 輸入陶磁器	
(1) 青磁 (2) 白磁 (3) 染付 (4) 李朝	
3 土製品	
(1) 土錘 (2) 鞆の羽口	
4 石製品	
(1) 石鏃 (2) 石臼 (3) メンコ (4) 砥石 (5) 硯 (6) 石錘	
5 木製品	
(1) 漆器 (2) 箸状木器 (3) 舟形 (4) 円盤 (5) 桶底 (6) 不明品	
6 鉄、銅製品	
(1) 鏡 (2) 鐔 (3) 小刀 (4) 鉄鏃 (5) 鋏 (6) 筭 (7) 鍋 (8) 釘 (9) その 他 (10) 銅銭	
第5章 成果と課題 .....	158
第1節 縄文時代について .....	158
第2節 石器の石質とそれに基づく石器圏 .....	162
第3節 奈良・平安時代以降の集落について .....	167

## 挿 図 目 次

第1図 門前町の位置 .....	1
第2図 周辺の遺跡 (1/25,000) .....	2

第3図	遺跡の位置 (1/10,000)	4
第4図	発掘地点の位置 (1/10,000)	11
第5図	西調査区グリッド割図 (1/500)	13
第6図	第1遺構面配置図 (1/250)	13
第7図	第2遺構面配置図 (1/250)	13
第8図	第3遺構面配置図 (1/250)	14
第9図	第4遺構面配置図 (1/250)	14
第10図	東調査区グリッド割図 (1/500)	15
第11図	東調査区遺構配置図 (1/250)	15
第12図	土層断面図 (1/80)	16
第13図	土層断面図 (1/80)	16
第14図	第1遺構面平面図 (3-1) (1/80)	17
第15図	第1遺構面平面図 (3-2) (1/80)	18
第16図	第1遺構面平面図 (3-3) (1/80)	19
第17図	第2遺構面平面図 (2-1) (1/80)	20
第18図	第2遺構面平面図 (2-2) (1/80)	21
第19図	第3遺構面平面図 (2-1) (1/80)	22
第20図	第3遺構面平面図 (2-2) (1/80)	23
第21図	第4遺構面平面図 (3-1) (1/80)	24
第22図	第4遺構面平面図 (3-2) (1/80)	25
第23図	第4遺構面平面図 (3-3) (1/80)	26
第24図	第1号配石址実測図 (1/50)	28
第25図	第2号配石址実測図 (1/50)	28
第26図	第3号配石址実測図 (1/50)	29
第27図	第5号配石址実測図 (1/50)	29
第28図	第8号配石址実測図 (1/50)	29
第29図	第6号配石址実測図 (1/50)	30
第30図	第7号配石址実測図 (1/50)	30
第31図	第1・2号石組溝・第4号配石址実測図 (1/80)	32
第32図	土塁実測図・断面図 (1/50)	34
第33図	第2号井戸実測図 (1/30)	35
第34図	土壇実測図 (2-1) (1/50)	36
第35図	土壇実測図 (2-2) (1/50)	37
第36図	道路実測図 (1/50)	38
第37図	石塁実測図 (1/50)	38
第38図	石組井戸実測図 (2-1) (1/40)	40
第39図	石組井戸実測図 (2-2) (1/40)	41
第40図	拡張区下層実測図 (1/50)	42
第41図	出土遺物 縄文式土器 (1/3)	44
第42図	出土遺物 縄文式土器 (1/3)	45
第43図	出土遺物 縄文式土器 (1/3)	46
第44図	出土遺物 縄文式土器 (1/3)	47

第45図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	48
第46図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	49
第47図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	50
第48図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	51
第49図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	52
第50図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	53
第51図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	54
第52図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	55
第53図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	56
第54図	出土遺物	縄文式土器	.....	57
第55図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	58
第56図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	59
第57図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	60
第58図	出土遺物	縄文式土器・弥生式土器 (1/3)	.....	62
第59図	出土遺物	縄文式土器 (1/3)	.....	63
第60図	出土遺物	無文式土器 (1/3)	.....	64
第61図	出土遺物	注口形土器・突起部・土製品 (1/3)	.....	65
第62図	出土遺物	土器底部 (1/3)	.....	66
第63図	出土遺物	土器底部 (1/3)	.....	67
第64図	出土遺物	土器底部 (1/3)	.....	68
第65図	出土遺物	土器底部 (1/3)	.....	69
第66図	酒見シンドウ遺跡の土器 (1/3)	.....	70	
第67図	酒見シンドウ遺跡の土器 (1/3)	.....	71	
第68図	酒見シンドウ遺跡の土器 (1/3)	.....	72	
第69図	酒見シンドウ遺跡の土器 (1/3)	.....	73	
第70図	酒見シンドウ遺跡の土器 (1/3)	.....	74	
第71図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	77
第72図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	78
第73図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	79
第74図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	80
第75図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	81
第76図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	82
第77図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	83
第78図	出土遺物	石器 (1/3)	.....	84
第79図	出土遺物	土師器 (1/3)	.....	91
第80図	出土遺物	土師器 (1/3)	.....	92
第81図	出土遺物	須恵器 (1/3)	.....	94
第82図	出土遺物	須恵器・灰釉陶器 (1/3)	.....	95
第83図	出土遺物	土師質土器・土錘・鞆の羽口 (1/3)	.....	97
第84図	出土遺物	瓦質土器 (1/3)	.....	98
第85図	出土遺物	珠洲・甕 (1/4)	.....	100
第86図	出土遺物	珠洲・甕 (1/4)	.....	101

第87図	出土遺物	珠洲・甕 (1/4)	.....	102
第88図	出土遺物	珠洲・甕 (1/4)	.....	103
第89図	出土遺物	珠洲・壺 (1/4)	.....	105
第90図	出土遺物	珠洲・壺 (1/3)	.....	106
第91図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	108
第92図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	109
第93図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	110
第94図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	111
第95図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	112
第96図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	113
第97図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	114
第98図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	115
第99図	出土遺物	珠洲・鉢 (1/3)	.....	116
第100図	出土遺物	越前・甕 (1/3)	.....	118
第101図	出土遺物	越前? (1/3)	.....	119
第102図	出土遺物	越前・甕 (1/3)	.....	120
第103図	出土遺物	越前・甕・壺 (1/3)	.....	122
第104図	出土遺物	越前・鉢 (1/3)	.....	123
第105図	出土遺物	越前・鉢 (1/3)	.....	124
第106図	出土遺物	瀬戸・美濃 (1/3)	.....	126
第107図	出土遺物	瀬戸・美濃・季朝・その他 (1/3)	.....	127
第108図	出土遺物	青磁 (1/3)	.....	129
第109図	出土遺物	青磁・白磁 (1/3)	.....	131
第110図	出土遺物	石製品 (1/4)	.....	133
第111図	出土遺物	石臼 (1/4)	.....	134
第112図	出土遺物	石製品 (1/3)	.....	135
第113図	出土遺物	木製品 (1/3)	.....	136
第114図	出土遺物	箸状木器 (1/3)	.....	138
第115図	出土遺物	鉄・銅製品 (1/2.5)	.....	139
第116図	遺構出土遺物	第1号土壇、第2号土壇、1号井戸他 (1/3)	.....	140
第117図	遺構出土遺物	溜桝、第2号配石 (1/3)	.....	141
第118図	遺構出土遺物	第3号配石、ピット (1/3)	.....	142
第119図	遺構出土遺物	第1号配石排水溝 (1/3)	.....	143
第120図	遺構出土遺物	第2号配石排水溝 (1/3)	.....	144
第121図	遺構出土遺物	第1号配石周辺 (1/3)	.....	145
第122図	遺構出土遺物	第1号配石周辺 (1/3)	.....	146
第123図	遺構出土遺物	ピット (1/3)	.....	147
第124図	グリッド別銅銭出土状況 (1/600)	.....	.....	148
第125図	銅銭拓影 (3-1)	(1/1)	.....	152
第126図	銅銭拓影 (3-2)	(1/1)	.....	153
第127図	銅銭拓影 (3-3)	(1/1)	.....	154

## 表 目 次

第1表	遺跡地名表	3
第2表	石器一覧表	85
第3表	出土銅銭一覧表	149
第4表	グリッド別銅銭一覧表 (3-1)	155
第5表	グリッド別銅銭一覧表 (3-2)	156
第6表	グリッド別銅銭一覧表 (3-3)	157

## 図 版 目 次

図版1	発掘区全景航空写真 (東方から)、同 (南方から)
図版2	遺跡遠景 (北方から)、遺跡近景 (西方から)
図版3	配石址出土状況全景 (西方から)、同 (東方から)
図版4	配石出土状況近景 (西方から)、第1号配石址 (南方から)
図版5	第2号配石址 (北方から)、第3号配石址 (西方から)
図版6	第2号溝出土状況 (南方から)、第1・2号溝完掘状況 (北方から)
図版7	遺物出土状況 1 鎗 2 土錘 3~5 刀子 6 第1号配石址内銅銭
図版8	第2遺構面検出状況 (東方から)、同近景 (東方から)
図版9	土塁端部検出状況 (西方から)、同 (南方から)
図版10	第2遺構面検出状況近景 (北方から)、同 (東南から)
図版11	1 石囲炉 2 第1号土壇 3 ピット内埋納土器 4 第2号土壇 5 木柱根 6 第2号井戸
図版12	第4遺構面検出状況 (西方から)、同 (東方から)
図版13	1 第4遺構面近景 2 縄文時代ピット群 3 縄文時代包含層の状況
図版14	東発掘区全景 (西方から)、東発掘区近景 (西方から)
図版15	井戸検出状況 (南方から)、同
図版16	1 第4号井戸 2 第10号井戸 3 第6号井戸 4 第8号井戸 5 第11号井戸 6 第11号井戸木製品出土状況
図版17	1 第6号井戸漆椀出土状況 2 第3号井戸断面 3 第7号井戸断面 4 石組検出状況 5・6 下層の石組検出状況
図版18	縄文式土器 (前期・中期土器)
図版19	縄文式土器 (上田式・堀ノ内式土器・加曾利B <sub>1</sub> 式土器)
図版20	縄文式土器 (加曾利B <sub>1</sub> 式土器)
図版21	縄文式土器 (酒見式土器)
図版22	縄文式土器 (酒見新堂遺跡注口形土器、井口II式土器、八日市新保式土器)
図版23	縄文式土器 (八日市新保、勝木原式土器、中屋式土器)
図版24	縄文式土器 (下野式土器、晩期・弥生式土器、注口形土器)
図版25	縄文式土器 (底部、自然遺物)
図版26	縄文時代石器 (石鏃、石錐、打製石斧、磨製石斧)
図版27	縄文時代石器 (磨製石斧、磨石)
図版28	縄文時代石器 (磨石、ハンマーストン)
図版29	土師器

- 図版 30 土師器、須恵器
- 図版 31 須恵器、灰釉陶器
- 図版 32 土師質土器
- 図版 33 瓦質土器、珠洲・甕
- 図版 34 珠洲・甕
- 図版 35 珠洲・壺
- 図版 36 珠洲・鉢
- 図版 37 珠洲・鉢
- 図版 38 珠洲・鉢
- 図版 39 越前・甕
- 図版 40 越前・壺、鉢
- 図版 41 瀬戸・美濃、李朝
- 図版 42 青磁、白磁
- 図版 43 石鉢、石臼
- 図版 44 土錘、鞆の羽口、石製品
- 図版 45 石製品、木製品
- 図版 46 箸状木器、銅・鉄製品
- 図版 47 第3号配石、ピット、溜柵、第2号配石
- 図版 48 第1号土壇、第2号土壇、第3号土壇
- 図版 49 第2号配石排水溝
- 図版 50 ピット、その他
- 図版 51 銅銭（実大）
- 図版 52 銅銭（実大）

## 第1章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

道下元町遺跡、道下元町B遺跡は、石川県の北部にあたる鳳至郡門前町道下地内に所存する。門前町は能登半島の西北部に位置し、面積157.91km<sup>2</sup>、人口約13,000人の農林漁業を主産業とする町である。門前町の北東部は輪島市と境界を接し、東隣りは七尾北湾をかかえる穴水町、南方はなだらかな丘陵地形と砂丘地形を持つ羽咋郡富来町と接している。西方は能登半島国定公園に含まれる外浦海岸である。能登半島の海岸線は日本海に面する外浦と富山湾、七尾湾に面する内浦と大きく二分されているが、内陸部は輪島市に所在する高州山（標高567m）、珠洲市の宝立山（標高469m）を最高標高となるような低平な丘陵地形が展開している。門前町内では、北部のサビヤ山（標高342m）、猿山（標高333m）、東部の大丸山（標高319m）、南部の桑塚山（標高403m）と能登半島では比較的高い山々が集中しており、門前町の地勢を特徴づけている。特に猿山は日本海に屹立するように位置していて、海上交通の重要な標識ともなっている。これらの丘陵から流れ出る中小河川は、蛇行しながら東西に細長い沖積平地を形成して、日本海に注ぐ。八ヶ川、阿岸川、仁岸川、南川の流域に現在の集落が形成されているが、古代の遺跡もこれらの河口周辺に集中するように発見されている。

門前町は国有鉄道が通過しない町で、富来町から北上してくる国道249号が、剣地から海岸に沿って走り、道下で八ヶ川の流程にのって門前町の中心部へ入る。町をぬけてから北上して輪島市へ入る。輪島市までは約17kmの距離をはかり、穴水町までは約15km、富来町までは約22kmである。

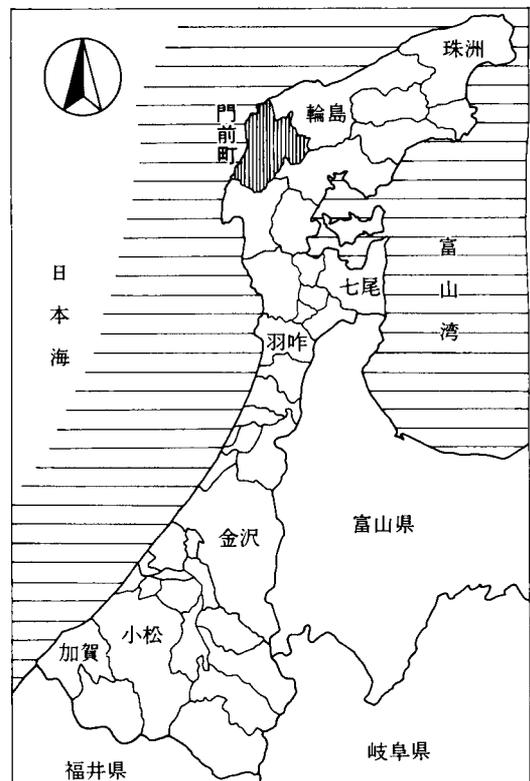
本遺跡は門前町では最も流域面積の広い八ヶ川の河口近くに位置し、八ヶ川に合流する小河川鉄川の左岸にあたる。八ヶ川と鉄川にはさまれた河岸段丘上に立地し、標高約8～10mラインにあたる。包含層の上層は厚い砂層が堆積し、小さな砂丘地形を呈している。中世段階においては八ヶ川、鉄川の洪水を幾度もこうむり、2回3回と復旧作業が行われているのが確認されたが、中世に生きた人々のエネルギーのたくましさと共に、幾度も復旧を行う地理的、経済的位置づけに興味もたれた。

本遺跡の現在での気候は、北陸型に含まれるが、冬期に関してみれば能登内浦地域と趣を異にしていると言える。日本海に面している事から積雪はそれほど多くないが、寒気団に直接さらされるところから北西風がきわめて強い。富来町を含めて季節風から生活を守るために、「まがき」と呼ばれる真竹を用いた高い垣囲をめぐらしている。

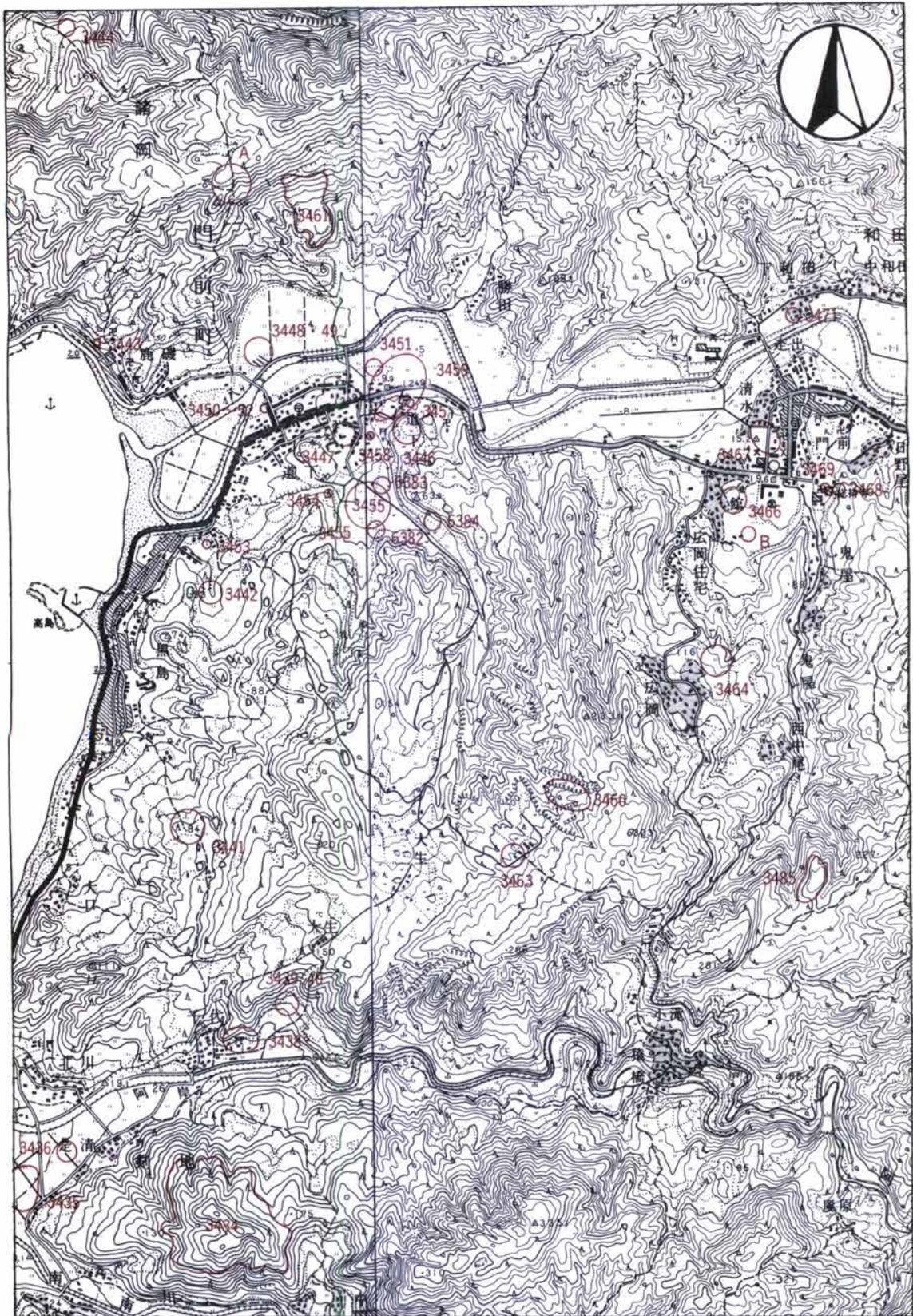
### 第2節 歴史的環境

#### (1) 縄文時代

門前町を東西に流れる各河川の中下流域には、各時代の遺跡が集中するような状況を呈するのであるが、門前町で最も広い流域面積を持つ八ヶ川の中下流域が特に著しい。これは、地元で活躍されている佃和雄氏の長年の成果であるという側面も見逃す事はできない。以下、記述するほとんど全ての遺跡が、佃和雄氏の発見にかかるものである。



第1図 門前町の位置



「能登黒島」「門前」分載

1 : 25,000

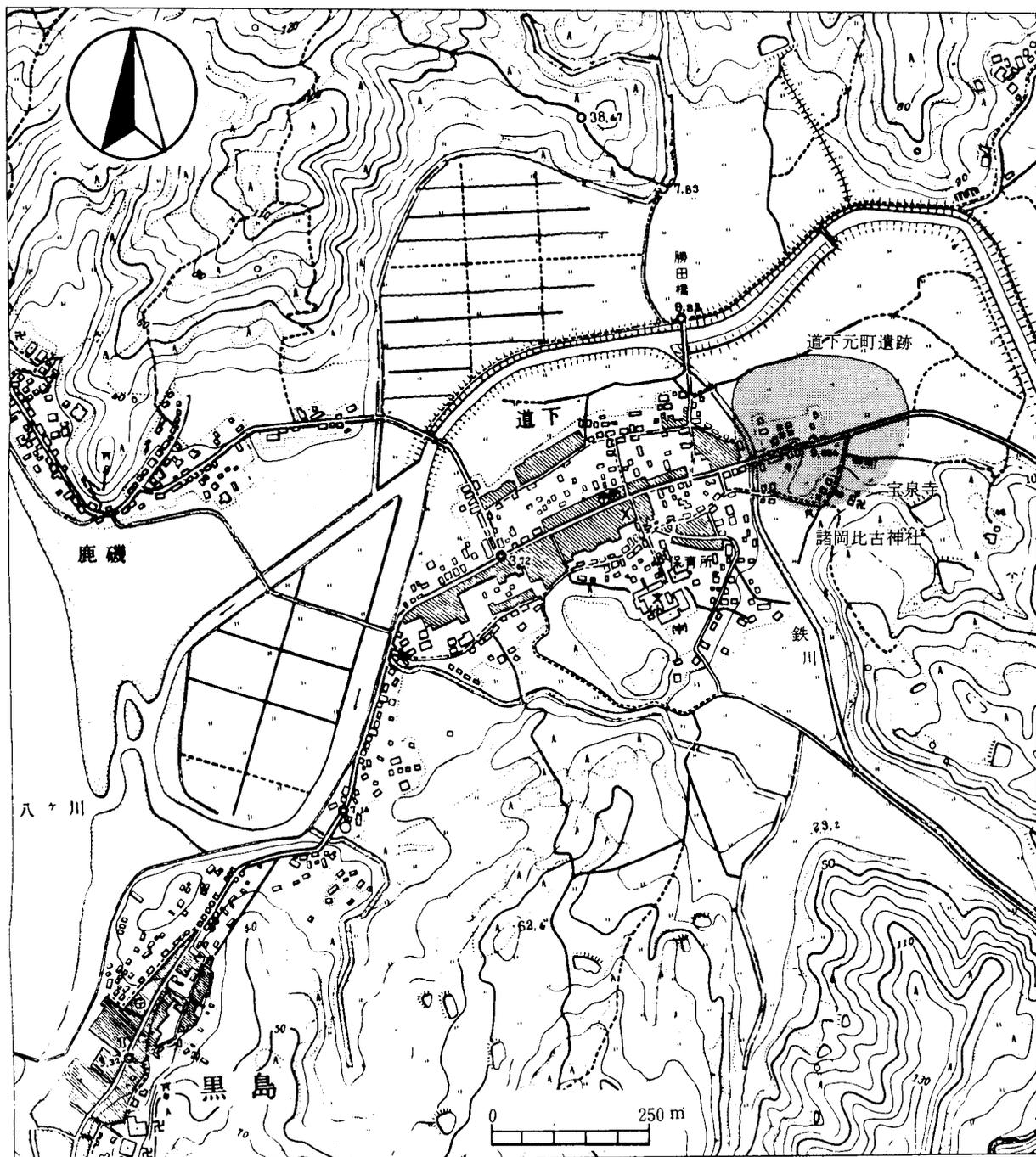
500m 0 500 1000m

第2図 周辺の遺跡

第1表 遺跡地名表「石川県遺跡地図」(昭和54年)から抜粋

## 第2節 歴史的環境

県No	町No	名 称	所 在 地	種 別	現 況	時 代	出 土 品
3434	18	是 清 城 跡	門前町是清	城 跡	丘陵・山地	不 詳	
3435	19	是 清 館 跡	" " タの部	館 跡	山麓・水田	中 世	珠洲焼
3436	20	是 清 遺 跡	" "	包 含 地	平地・"	古 墳	土師器、紡錘車
3437	21	中 田 遺 跡	" 中田	"	山腹・"	縄 文	磨製石斧
3438	22	千 体 寺 跡	" 千代	寺 院 跡	山麓・"	不 詳	五輪塔
3439	23	千 代 遺 跡	" " (観音坊)	包 含 地	"・畑地	縄 文	土 器
3440	24	千 代 遺 跡 (II)	" "	"	"・水田	不 詳	"
3441	25	光 徳 寺 跡	" 黒島	寺 院 跡	山地・山林	"	
3442	26	黒島釜上口遺跡	" " (釜上口)	包 含 地	山腹・水田	縄 文	土器、石鏃
3443	27	鹿 磯 遺 跡	" 鹿磯	"	丘陵・社地	"	磨製石斧
3444	28	深 見 十 三 塚	" 深見 (十三塚)	経 塚	山腹・山林	中 世	板碑
3445	29	深 見 遺 跡	" "	包 含 地	山麓・畑地	縄 文	土器、石鏃
3446	30	道 下 林 遺 跡	" 道下 (林)	"	台地・"	"	土器、磨製石斧
3447	31	道 下 鷹 塚 遺 跡	" " (鷹塚)	"	平地・宅地	"	土 器
3448	32	道 下 御 墓 遺 跡	" (御墓)	"	"・水田	"	石 鏃
3449	33	"	" " "	"	"・"	古 墳	土錘、土師器
3450	34	道 下 遺 跡	" "	"	"・宅地	不 詳	丸 石
3451	35	道 下 元 町 遺 跡	" " (元町)	"	台地・畑地	縄 文	土器、石鏃
3452	36	道 下 西 町 遺 跡	" "	"	平地・宅地	不 詳	
3453	37	道 下 栄 町 遺 跡	" "	"	"・"	弥 生	
3454	38	道 下 狐 塚 古 墳	" " (狐塚)	古 墳	台地・山林	古 墳	横穴式石室
3455	39	道 下 森 遺 跡	" (森)	包 含 地	"・畑地	中 世	珠洲焼
3456	40	道 下 経 塚	" "	経 塚	山腹・山林	"	一字一石経
3457	41	宝泉寺中世墓地	" " (ゴマンド)	墳 墓	山麓・墓地	"	五輪塔、板碑
3458	42	道 下 鏡 川 遺 跡	" " (カナガワ)	包 含 地	平地・宅地	縄 文	
3459	43	鉄 川 寺 跡	" "	寺 院 跡	"・水田	中 世	五輪塔、礎石
3460	44	道 下 城 跡	" 大生(ジョウダン)	城 跡	山地・山林	不 詳	
3461	45	道 下 修 験 者 遺 跡	" 道下 (向山)	信 仰	丘陵・山林	中 世	
3463	47	大 生 遺 跡	" 大生	包 含 地	台地・畑地	縄 文	土器、石斧、石鏃
3464	48	広 岡 遺 跡	" 広岡	"	"・"	"	磨製石斧
3465	49	高尾山立持寺跡	" 鬼屋	寺 院 跡	山頂・"	中 世	
3466	50	櫛 比 館 跡	" 館 (ナカグラ)	館 跡	平地・水田	不 詳	
3467	51	門 前 高 校 跡	" 清水	包 含 地	"・校地	平 安	須恵器、土師器
3468	52	諸 岡 寺 跡	" 門前	寺 院 跡	山麓・社地	不 詳	観音像
3469	53	総持寺白山社塚	" "	古 墳	平地・寺地	古 墳	
3471	55	和田高間殿屋敷跡	" 和田 (コマドノ)	館 跡	平地・荒地	室 町	石垣一部残存
6382	95	松 林 寺 跡	" 道下	寺 院 跡	"	中 世	
6383	96	宝 幢 寺 跡	" "	"	"	"	
6384	97	善 光 寺 跡	" "	"	"	"	
A		鹿磯タタラ遺跡	" 鹿磯	生 産 跡	山地	不 詳	鉦滓
B		館 遺 跡	" 館	包 含 地	平地・水田	中 世	珠洲焼



第3図 遺跡の位置 (1/10,000)

八ヶ川流域には縄文時代の町内遺跡数28ヶ所のうち15ヶ所が集中しているが、発掘調査が実施されている遺跡はなく、本遺跡調査が最初である。

本遺跡の南方約2 kmの距離にある大生遺跡おほいは、標高約200～220mの高所、山地形のなかにある縄文時代中期初頭の遺跡で、昭和25年に開拓団の家屋新築の際に発見された。中期初頭新保式土器を主とした土器類の他に、磨製石斧、石鏃、石匙が出土している。県下では高所に所在する遺跡の調査は、鹿島町福田原山遺跡(標高約320m)で実施されている程度で、今後の重要な研究課題である。

本遺跡に接する南方台地上(標高約40m)には、中期後半に位置づけられる道下林遺跡が所在している。台地上の畑地から石鏃2点、磨製石斧1点の他に土器数点が得られている。

道下林遺跡の西方、鉄川の谷をはさんだ低丘陵上には道下鷹塚遺跡が所在していた。昭和28年3月、佃和雄氏によって発見され、幾度かの表採資料をもとに「鳳至郡諸岡村鷹塚遺跡略報」として報告されているので、それによって概略を知る事ができる。その後、昭和28年8月、九学会の能登総合調査の一貫として一坪の発掘調査

が行われている。この調査で、相当量の遺物が得られて、現在、東京大学人類学教室にて保管されている。道下鷹塚遺跡はその後土取り工事によって壊滅状態となり、現在、その跡地には道下保育所が立てられている。佃 和雄氏の報告によれば、道下鷹塚遺跡は比高約10m、周囲約200mばかりの砂丘地で、周囲は諸岡小学校、本勝寺墓地、民家が立ち並んでいる状態で、独立丘的な地形にあったようだ。採集された土器片は約500片以上を数え、縄文施文のもの65%、施文のあるもの25%、無文のもの10%という割合で、中期中葉から後期前半までの時期幅が認められる。そのなかで、後期前半の気屋式土器の特色が目立っているようだ。

諸岡比古神社の前方、鉄川の右岸には、道下鏡川遺跡が発見され、中期前半から後期前半までの土器片が少量得られている。道下林、道下鷹塚、鏡川の各遺跡は、八ヶ川をのぞんで東西方向に約100~200mの間隔をおいて並んでいるのは注目される。海と山、川の接点にある地理的位置が重要な要因であろうか。

海岸地帯の狭小な谷平地には点々と遺跡が知られている。本遺跡の北西方向約1.2kmには鹿磯遺跡、さらに北方、猿山岬の谷あいには、深見遺跡が所在している。昭和36年の水田からの採土工事によってあらわれたもので、後期前半気屋式期を主体とする遺跡であった。外浦海岸をさらに北上すると、輪島市大沢遺跡が同じような地形のなかに立地している。西保中学校の敷地内にある為に若干の損壊はまぬがれ難いが、なお包含層は遺存しているようだ。中期前半の新保式から後期気屋式期に至るまでの各形式が数点ずつ採集されているなかで、気屋式期の土器量が最も多い。石器では磨製石斧、打製石斧、凹石、磨石、石鏃、石棒が出土しているが、長さ75cmを越える石棒は注目される。報告を執筆された杉島孝博氏は、断崖と絶壁にかこまれた陸の孤島の如き大沢遺跡が閉鎖的な文化でなく、能登地方全体と同じ文化をもって変遷している点に注目している。縄文人の行動範囲のダイナミズムを知らされる。

さて、本遺跡も佃 和雄氏によって発見された遺跡で、少量の石器、土器片が得られただけであったが、道下地内では最も低い地点にある縄文遺跡である事から、後期後葉から晩期の時期を推定されていたが、前期末から晩期後葉下野式までの土器が検出され、特に後期中葉の馬鉢式、酒見式期の良好な資料が得られたのは、外浦・内浦と分けられる能登半島沿岸部の海に向けた集落の側面を考える上で、重要な知見と言えよう。

以上の他には、後期の黒島釜上口遺跡、中期末から後期初頭の浦上大久保遺跡（I）、仁岸川流域の千代遺跡、長さ95cmの大石棒の出土した和田広和橋付近など数多くが上げられるが、その内容性格については今後の調査をまたねばならない。

## （2）弥生時代・古墳時代

縄文時代の遺跡数に比較して、知られている遺跡は格段に少い。八ヶ川中流に位置し、門前町では最も広い平地をもつ深田遺跡と河口近くの道下御墓遺跡、阿岸川流域の是清遺跡等を上げうるにすぎない。

道下御墓遺跡は昭和29年に、耕地整理中に発見されたものであるが、その後の耕地整理に先立つ分布調査が門前町教育委員会によって実施された。南北約100m、東西約70mの範囲に包含層が認められ、弥生時代中期から奈良時代までの長期の集落址で、八ヶ川の自然提防上に立地しているものと判断されている。中期の小松式、天王山式の系統を引くものが見られ注目できる。なお、耕地整理は包含層まで損壊しない方向で実施されている。

本遺跡の調査においても、中期初頭の土器片が得られている。

古墳として確認できたものは周辺には所在していないが、佃 和雄氏は道下地内に狐塚、天狗塚、蛇塚等の地名があり、畑地の耕作、開墾中に石室や副葬品が出土したとする伝承を記してはいるが確認はされていない。

## （3）奈良・平安時代、中世

奈良・平安時代の集落址は、弥生時代と複合している道下御墓遺跡、深田地内の通称前田と呼ばれている所から須恵器壇に入っていた和同開珎20数枚の出土が伝えられている。その他には、門前高校遺跡（現櫛比小学校グ

## 第1章 遺跡の環境

ラウンド)で昭和59年に分布調査が行われて一部包含層が確認されている程度で、門前町地域での把握には、さらに時間を要しよう。

本遺跡の調査によって、墨書土器10数点を含む土器類が得られ、今後の調査のたたき台となろう。

中世になると、道下地内に遺跡数が激増する。本遺跡の南方に接する諸岡比古神社は、明治15年に岩瀬比古神社を改称したものである。「延喜式」に記されている鳳至郡の九社の一つに、石瀬比古神社が上げられているが、輪島市町野郷に同名の神社があり、改称のうちに根拠とした羽咋郡内の式名社をあてているが、諸岡村が羽咋郡に含まれた事はないという指摘もあり、その根拠は弱いようである。現在の羽咋郡内には志賀町二所宮と富来町小室に諸岡比古神社が所在している。式内社のいずれにあてては今後の課題と言える。

「和名抄」には櫛師郷が見え、門前町の町域全体にあてられている。

中世の道下には鉄川宮、鉄川寺が勢力をほこっていた。櫛比郷八ヶ郷の総社として鉄川宮があり、鉄川寺は七坊をもって伽藍をなしていた。七坊の位置は佃和雄氏によって調査されている。現在も遺存している宝泉寺、善光寺は小字名で、松林寺は小字山崎に「ショウレイジダ」、宝幢寺は小字森村に「ホウトウジの池」、興建寺は宝泉寺に隣接する「コウケン屋敷」が比定され、「坊寺」「大盤若」「大日」「堂ヶ上」「中ン堂」の小字名が関連するものとして上げられている。本遺跡付近には、「棧敷場」「稚子舞殿」「上ノ御門」「下ノ御門」の地名が残されているが、発掘調査によってあきらかになった中世の集落址は、上記の鉄川宮、鉄川寺(七坊の総称が単独のものかは不明)に密接に結びつくものであり、また、現在は沖積平地となっているが、八ヶ川河口は石瀬湊と呼ばれ、櫛比郷の経済活動の拠点であり、道下(川尻と呼んでいた)付近に基盤を置いた地頭、長谷部範信等の館跡が存した可能性も考えられている。

元享元年(西暦1321年)には諸岡寺観音堂を定観律師から譲り受けて、瑩山紹瑾が開設したと伝えられる曹洞禅総持寺は、南北朝期から室町時代にかけて勢力をのび、江戸時代中期には1万7,549寺の末寺をようする総本山となるが、鉄川宮、鉄川寺の基盤を大きく変えたものとして想像されるが、南川流域に位置する阿岸本誓寺を中核とする一向宗の勢力拡大にかかわる民衆と武士団の流動化が引き金になったものであろう。

本遺跡周辺地域では、桃山時代の板碑を持つ深見十三塚遺跡、一字一石経や経筒の出土が伝えられる道下経塚や鹿磯経塚が上げられる。

明治31年4月、総持寺の堂塔が灰塵に帰し、貴重な資料が失われたのは、曹洞宗のみではなく門前町の中世史をとき明かす資料の不足として、まことに残念な事であった。今後の研究をすすめるにあたっては、小字名、通称名の記録、宝泉寺をはじめとする石造遺物の保存調査、埋蔵文化財の現状保存が主要な柱となる。特に本遺跡の調査によって、木造遺物をはじめとする良好な保存状態を示している点が指摘され、貴重な資料が遺存しているとの推定は周辺地形の在り方から容易に首肯できるであろう。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯と経過

道下元町遺跡は佃 和雄氏の発見にかかるもので、発見当時から調査を開始した昭和56年までの期間に大きく地勢を変更する事態は皆無と言っても過言ではない。鉄川にかかる護摩堂橋近くの畑地に散布している黒色頁岩、フリントの剥片は、雨上がりの日に行けば容易に見つける事ができる。しかし、土器片は小片になったものが散布している程度で、文様を分別できるものは皆無にちかいいと行って良いだろう。畑地の耕作による影響も大きいと推定されるが、砂丘地形による砂の堆積が厚く遺物包含層の露出が極めて小範囲にとどまっているとの見方がより大きな要因と行って良いだろう。道下地内で発見されている鷹塚・鉄川・林遺跡から段丘を下りた地点にあるところから後期末から晩期の集落址が推定されてきた。

昭和56年6月、土木部道路建設課から、延長約1,600m、幅約10~20mの調査依頼の協議が、埋蔵文化財センター（以下、本センターと略す）に行われた。年度内での調査は困難ではあるが、分布調査を実施して遺跡が道路にかかる範囲の把握につとめるとの合議に達した。

同年8月10日~13日にかけて、本センターから2名の職員で分布範囲確認調査を実施し、以下の結果を得た。砂丘地形西側斜面、道路敷約1,800m<sup>2</sup>では、縄文時代後・晩期と中世の複合遺跡が所在し、砂丘地形東側の水田下、約900m<sup>2</sup>には中世集落遺跡の包含層が広がっている由の回答を行っている。試掘調査前には、縄文時代集落址との認識であったが、中世包含層の広がりや複合している点から、中世遺跡を道下元町B遺跡として分割し、文化庁等への届けは2ヶ所併記とした。

昭和57年4月25日から、分布調査で限定した地区の本調査を開始した。包含層をおおっていた砂層約1mを重機で排土し、莫大な数の川原石を並べた上層位が最初にあらわれてきた。南北方向に走る石組の排水溝2条や、銅銭をとまなう配石址が7基、柱根の遺存するものがあらわれ、想像を越える遺存状況のよさにおどろかされた。配石址を除いて下層を掘り下げてゆくと、無数に近いピット、土壇があらわれ、都合4回の実測図作製に追われた。砂丘地形の東端部分では、河川の氾濫による砂利層があらわれ、遺構と遺物のつながりを十分に把握するには至らなかった。最下層には縄文後期の包含層が、砂丘地形の傾斜とは逆方向、すなわち南側に傾斜する状態で検出され、縄文時代においては砂丘地形は東側にさほど伸びてはいないとの見解が得られた。8月の後半から、畑地部分の調査と併行して、東側水田部分の発掘を開始した。東部分についても、幾度かの洪水にかかる土砂の堆積があり、石で組まれた井戸、道路、土塁が重複する状況であらわれ、中世の民衆のエネルギーの勢いにおどろかされた。現地作業は10月16日に終了した。

発掘調査にあたっては佃 和雄氏をはじめとして、四柳嘉章氏、高 一男氏に指導、助言を受けた。記して深く感謝しておきたい。

遺物の整理作業は昭和59年度に、石川県埋蔵文化財協会に委託して実施した。

#### 参考・引用文献

- 佃 和雄 1953 「鳳至郡諸岡村鷹塚遺跡略報」『石川考古学研究会会誌』第5号  
 佃 和雄 1966 「鳳至郡門前町深見遺跡」『石川考古学研究会会誌』第10号  
 佃 和雄 1977 「村の歴史」「神社・寺院・文化財・民俗」『石川県鳳至郡諸岡村史』  
 杉島孝博 1974 「大沢遺跡」『輪島市史』資料編第三巻

### 第2節 調査日誌

5月10日 晴 プレハブ設置と器材運搬。遺跡現状の遠景写真撮影。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

- 5月11・12日 晴・曇 重機による表土層除去作業。
- 5月13日 晴 ベルトコンベアの設置。砂層の除去作業。
- 5月14日 雨のち晴 東西方向に石列状遺構を検出するも、プランが明確にはつかめない。
- 5月17日 晴 砂層の除去作業。
- 5月18日 // 砂層中の石列の検出。砂層の除去作業。
- 5月19日 // 砂利層の立ち割りの結果、30cm 下位に黒褐色砂質遺物包含層を検出できたので、人為的な石列ではないと判断する。
- 5月20日 雨一時晴 砂利層の除去作業、包含層上面から中世遺物が顔を出す。
- 5月21・24日 晴 砂利層の除去作業。
- 5月25・26日 // 砂利層の除去作業。グリッド設定作業。一等水準点からレベル移動。
- 5月27日 晴 グリッド設定作業。I 27～30、J 27～30の砂層除去作業。
- 5月28日 // I 28～29グリッドの黒褐色粘質土層を掘り下げる。I 29では南北に走る石列を検出する。溝遺構で内部から漆剥片、骨片を検出。I 28では東西方向に主軸をおく土壇上面を検出、銅銭多数が得られた。
- 5月29日 晴 H28・29の砂層除去作業。昨日出土した銅銭の実測および取り上げ。
- 5月31日 晴のち雨 G22～27、H23～25、H28・29の砂層および黒褐色粘質土層の掘り下げ。H29で排水溝の続きを検出、さらに北側へ伸びているようだ。石組はI 29で検出したレベルより高い位置におかれ、両側へ3個の石を並べてひかえ積みとしている。
- 6月2日 曇時々小雨 G22～27、H23～28の掘り下げ。G列のグリッドは黒褐色粘質土層の堆積は薄く、約20cmで茶褐色粘質土に変化する。須恵器が出土していて、下層位に面を持つ可能性がある。
- 6月4日 晴 H・I・J 17の砂層除去作業。
- 6月5日 // H16、I 31・32の砂層除去作業。H16では方形プランで落ち込んでゆく。上面に磨製石斧、石器剥片を検出する。縄文遺跡の端部であろうか。
- 6月7日 晴 H・I 31・32、I 35の黒褐色粘質土層の掘り下げ。H32で新たに配石址を検出、一辺が約3m程度となろうか。内部から珠洲焼鉢が出土。I 31では南北に走る溝を検出、北端のH31では検出していないことからセクションベルト内に在るようだ。
- 6月8日 晴 H32で検出した配石遺構の精査とH31包含層の掘り下げ。H32の南側では人頭大から拳大の礫が多量に出土する。遺物の包含が少ない事や川砂を含む事から河跡ではないかと想定される。
- 6月9日 晴 発掘区東端部での掘り下げ。
- 6月10日 // I 31～33、H31～33での遺構検出作業。H33で柱列を検出する。南北主軸のもので2間×1間を確認できる。柱間はともに220cmをはかる。
- 6月11日 晴 H30～32、I 30の遺構検出作業。
- 6月12日 // H28～30、I 28・29の黒褐色粘質土除去および遺構検出作業。
- 6月14日 雨のち晴 H27～29、J 25の遺構検出作業。各グリッドともピット、土壇多数が見られるが、上層位の配石、溝との関連はつかみ難い。
- 6月15日 晴 I 25～28、J 25・26の遺構検出作業。I 28の配石址周囲を掘り下げる。配石内に敷きつめられた小砂利の上面から銅銭約10枚を検出する。柱穴覆土は黒褐色と茶褐色に色わけでき、暗灰色粘質土を切り込んでいるが、前者が古く後者が新しいようだ。
- 6月16日 晴 H27の配石址を中心にして遺構検出を続ける。セクションベルトの第2層上面に黒褐色粘質土を切り込むピットを確認する。本遺跡での最も新しい時期の遺構が、砂層直下に遺存していたのである。
- 6月17日 晴 H26～30、I 24のセクションベルトを取り除く。
- 6月18日 // 検出石組の清掃作業および20分の1による平面実測にとりかかる。
- 6月19日 // 清掃作業を行い、乾きすぎた表面に散水して全景および個別の写真撮影。

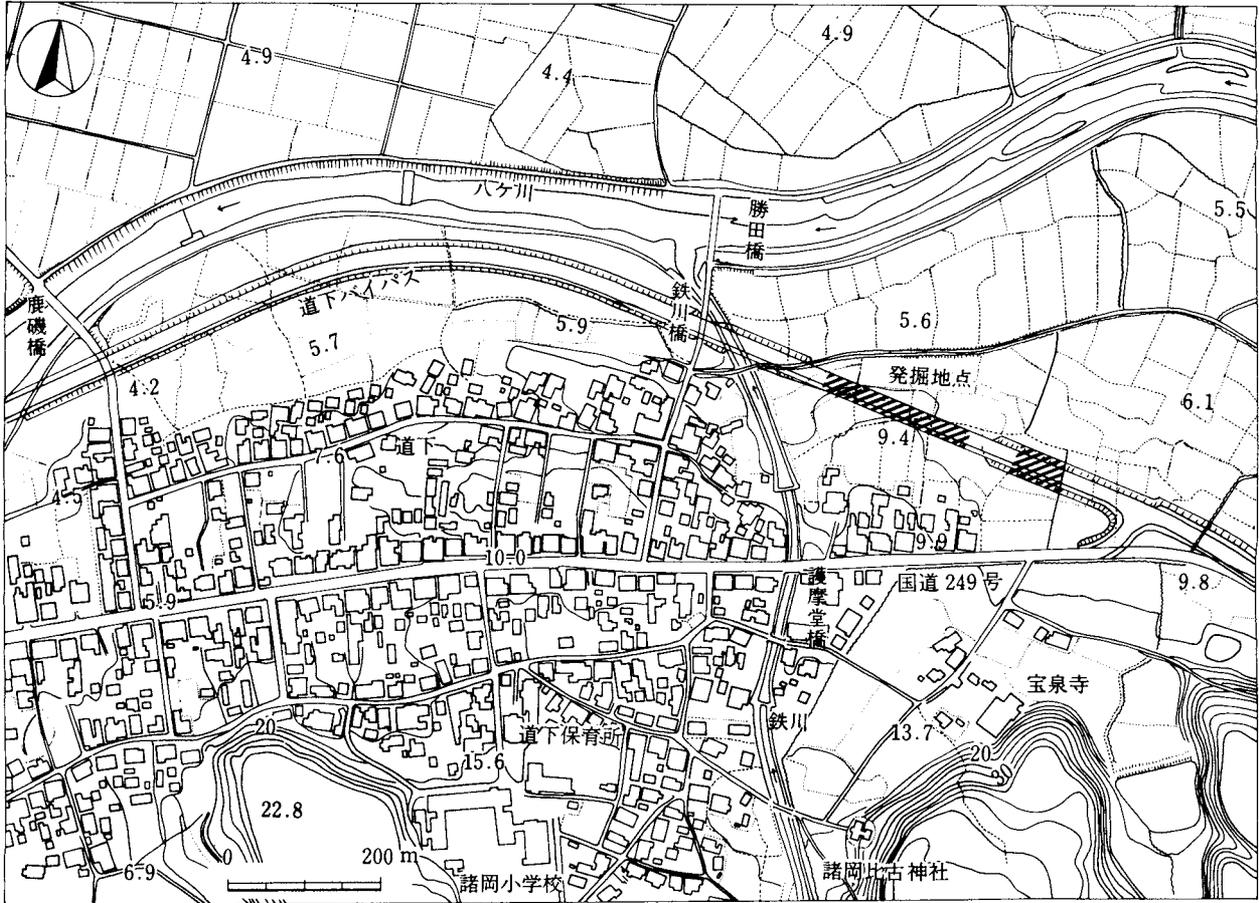
- 6月21日～26日 晴 配石址群の平面実測、レベル記入。
- 6月29日 晴 配石址群の平面実測と断面図作図。実測の終了した部分から石の除去と遺物の取り上げ。
- 6月30日 〃 配石址下の遺構検出作業。各土壇の覆土はほとんどが黒褐色粘質土の単層である。茶褐色粘質土は盛土であり、全てが中世期の所産と見られ、縄文期、平安期のものはないようだ。
- 7月1日 晴 柱穴の掘り下げ作業。配石溝の平面図作図。柱穴内からは柱根の残るもの2例を検出。土器類の出土は極めて少い。
- 7月2日 晴 配石溝の実測。柱穴検出及び掘り下げ作業。
- 7月3日 〃 配石溝の除去作業及び遺構検出。
- 7月5日 〃 遺構検出作業。柱穴および土壇は全て茶褐色粘質土に掘り込まれているが、南側にゆくにつれて薄くなり、茶灰色砂質土、砂層に変化する。
- 7月6日 晴 遺構検出作業。茶褐色粘質土の断ち割り。地山面と下層の状況を見るために、発掘区の北端に東西方向の小トレンチを設定する。茶褐色粘質土(約20cm)、黒褐色弱粘質土(砂層約30cm)で黄褐色砂質土(地山)にとどく。上位の層には須恵器、珠洲焼が含まれ、下層には縄文後期の土器を多量に包含しているが、西方へ行くにつれて各層は薄くなってゆく。
- 7月9日 晴 第1・2号土壇の検出。
- 7月10日 〃 遺構検出。土塁跡の配石址平面プラン実測。
- 7月13日 〃 調査区北東側の土壇を掘り下げる。土塁跡に接するものは20～30cm下げると方形区画の石室となった。木製品(ハシ)3点および木片が出土した。方形プランのものは、壁がほぼ垂直に落ち込み、珠洲焼、須恵器等が出土する。
- 7月14日 晴 土塁跡の実測終了。井戸状遺構2基の検出作業。
- 7月15日 〃 遺構検出作業。
- 7月16日 曇のち雨 遺構検出の再点検
- 7月19日 晴 清掃作業。航空撮影を行う。全景と個別写真撮影。
- 7月20日～21日 晴 平面実測およびレベル記入。
- 7月22日 晴 茶褐色弱粘質土の発掘を開始する。縄文土器が多量に出土する。
- 7月23日 〃 平面実測を継続する。茶褐色弱粘質土層の発掘。
- 7月24日 曇のち雨 茶褐色粘質土の発掘。
- 7月28日 曇 調査区の排水作業。東端の茶褐色粘質土層の発掘。須恵器片がまとまって出土。
- 7月29日 晴 G30・31、H30・31、I29・30までの茶褐色粘質土を掘り終える。須恵器が多く若干の土師器が混じる。
- 7月30日 晴 中世期のレベル記入を終える。
- 7月31日 〃 G・H・I30・31、J28・29の茶褐色粘質土層の発掘。I32の井戸検出作業。
- 8月3日 曇 発掘区の排水作業。午後から遺構検出にかかる。
- 8月4日・5日 曇・晴 遺構検出および掘り下げ。
- 8月6日 晴 遺構検出と掘り下げ。
- 8月7日 〃 門前高校生徒6名が応援。調査区南側の遺構検出。
- 8月9日 〃 柱穴の遺物取り上げ。
- 8月10日 〃 G～J34・35の黒褐色砂質土層の掘り下げ。
- 8月11日 〃 ベルトコンベアーの移動、全景写真のために清掃作業。
- 8月12日 〃 全景および個別写真撮影。東調査区の除草作業を開始する。
- 8月13日 〃 東調査区の発掘を開始する。
- 8月17日 曇 本田秀生君が今日から応援。東調査の排水と耕土除去作業。西調査区の排水と割りつけ作業。

## 第2章 調査に至る経緯と経過

- 8月18～21日 晴 西調査区の平面実測。東調査区の耕土除去作業。石組井戸検出。
- 8月23日 晴 西調査区の平面プラン実測は終了する。
- 8月24日 雨 西調査区のレベル記入作業。東調査区の井戸検出作業。
- 8月25日 晴 東調査区の井戸は2基を検出する。うち1基から漆椀を検出する。石組井戸周辺の礫層下には、中世の包含層が見られ地山面には容易に到達できないようだ。石組井戸周辺の写真撮影を行って、平面図の作製にかかる。
- 8月26～28日 晴 西調査区のレベル記入と遺物の取り上げ。東調査区の上層部分の発掘。
- 8月30日 晴 石組井戸の実測。
- 8月31日 〃 新たに石組井戸2基を検出、計4基となる。砂礫包含層の発掘。
- 9月1日 〃 石組井戸の平面、断面の実測。茶褐色砂礫層の発掘。
- 9月2・3日 晴 56・57グリッドの茶褐色砂礫層の発掘。
- 9月6日 晴 54・55グリッドの茶褐色砂礫層の掘り下げ。砂礫層は厚いところで約30cm、薄いところで約10～15cmで黒色砂質包含層に到達する。本日より垣田修児君の応援。
- 9月7・8日 晴 石組井戸の平面、断面図の作図。砂礫層の発掘。
- 9月11日 晴 石組井戸3基を新たに検出する。南北方向に走る路状遺構を検出する。
- 9月13日 曇のち雨 排水作業。さらに井戸1基を検出する。
- 9月14日 晴 石組井戸の発掘、計7基となる。黒褐色土包含層の発掘。
- 9月16日 〃 石組井戸の発掘。包含層の断ち割りを試みる。50～90cm掘り下げても安定した基盤に到達しない。出土する遺物は皆無であり、下層には中世の遺構はないものと判断された。
- 9月17・18日 晴 遺構検出作業。
- 9月21日 曇のち晴 排水作業を行ってから、石敷遺構の精査。
- 9月22日 晴 新たに小型の石組井戸を検出する。内部に桶状の木製品が遺存している。
- 9月23・24日 晴 黒褐色粘質土の発掘と遺構検出。全体、個別写真の撮影。
- 9月25日 曇 西調査区の暗茶褐色弱粘質土層の発掘および遺構検出作業。
- 9月27日 曇のち雨 西調査区の遺構検出作業。
- 9月28・29日 晴 東調査区に水糸を配り、平面実測作業にかかる。西調査区の遺構検出作業。
- 9月30～10月2日 晴 東調査区の平面実測作業。西調査区の遺構検出作業。
- 10月5・6日 晴 東調査区石組井戸の見通し断面実測。西調査区の遺構検出作業。
- 10月7・8日 〃 西調査区的全景写真撮影のあと4回目の平面実測にとりかかる。東調査区の遺物取り上げと石組井戸断面の写真撮影と器材の撤去。
- 10月9・12日 晴 西調査区の平面実測とレベル記入。東調査区の配石址断面実測。
- 10月13日 晴 配石をおこなった土塁状のものを検出する。西調査区の中央部北側の砂利層の地区を掘り下げる。縄文土器が出土する。
- 10月14～16日 晴 東調査区の配石址の平面実測と断面実測。発掘区の土層断面実測と遺物のとり上げ。西調査区の砂利層の断ち割りと遺物取り上げと全体土層図の作図。器材と遺物を整理して撤去。現地作業を終了する。

### 発掘協力者名簿（敬称略、順不同）

中村道子、奥村とき、松永はぎ、宮森かず子、前田せつ、中山せつ、表 伸子、東野なか、山崎よね、松下みつ、岡田良子、山下常代、宮丸美恵子、中山里子、橋本政江、大谷内ひで、綿木さつき、菅谷和美、高瀬清子、中山とし子、若松はな、宮本はな、輪田たか、中川ふみ、西町達也、三島なか、（門前町道下、池田、二又、本内、鑓川、原、山辺、白禿、館、荒谷）岡浦文三、中済もよ、西畑みさの、大高うめの、谷内つい、山下浩平、福島きよの、（輪島市三井町）



第4図 発掘地点位置 (1/10,000) (標高単位m)

## 第3章 遺跡の範囲と遺構

### 第1節 遺跡の範囲

道下元町遺跡の発見から調査に至る経緯は前章で記述したが、その範囲と平安時代、中世の遺跡とした道下元町B遺跡との重複状況については、調査終了後もいささか不明確である。発掘調査を実施したのは、将来的に発掘が不可能に近い状況となる道路敷に限定されている為であり、遺跡の内容・性格を主目的に発掘を実施していないからであるが、遺跡推定地の端部を広範囲に発掘している成果からの想定を、地形や遺物散布の状況を含めて記述してゆきたい。

道下元町遺跡（県 No. 3451）の遺物散布範囲は、鉄川の東岸で、国道249号に架かる護摩堂橋の北東約50～100mの距離にある畑地である。主要散布地の畑地は、北々西方向に向かって緩傾斜面を形づくっていて、薄く黒褐色を帯びた砂に混じってフレイクや土器小片が見られる。西調査区内の西端で、縄文時代のピット群（住居址を想定）と炉址状の土器集中地点を検出し、中央部分で後・晩期の包含層の調査ができた点から、遺跡の北端部分は現砂丘地形の端部と想定でき、東端部分は現砂丘地の内部へ大きく喰い込むものと想定される。地形的に見ると、八ヶ川に併行する状況でのびている現砂丘地は、縄文時代においては鉄川に併行してのびる低い舌状丘陵地と想定され、東方部分は砂丘後背湿地ではないかと思われる。国道を越えた南側の端については、現在のところ確定はむずかしいが、諸岡比古神社前の鉄川遺跡とは指呼の距離にあり、鉄川を中軸線とする兩岸の河岸段丘上の遺跡集中地区とする事も可能であろう。現時点では護摩堂橋の手前までを南端のラインとすると、南北方向約200m、東西方向約150mの平面三角形をなす範囲が想定される。発掘で得られた土器は、前期末の福浦上層II式から晩期後葉下野式までの広い幅を持つが、後期中葉の酒見式が主体となって出土している事から、時期ごとに集落をなした地点が異なるものと想像される。

分布範囲確認調査で新発見とした平安時代、中世の道下元町B遺跡の範囲は、調査前の想定から大きく拡大する成果が得られた。道下元町遺跡の立地する鉄川に併行する河岸段丘の傾斜面から東側で、砂丘地形を越えて低湿地の水田部分にまで大きくひろがっている。現諸岡比古神社を要とする扇状に広がる範囲が想定されるものの、中世に勢力を誇った鉄川宮、鉄川寺をとりまく集落を考えるとさらに拡大する可能性は極めて高いと言えよう。発掘地区での東西幅は約350mとする事ができ、南北方向では約650m以上と想定できる。

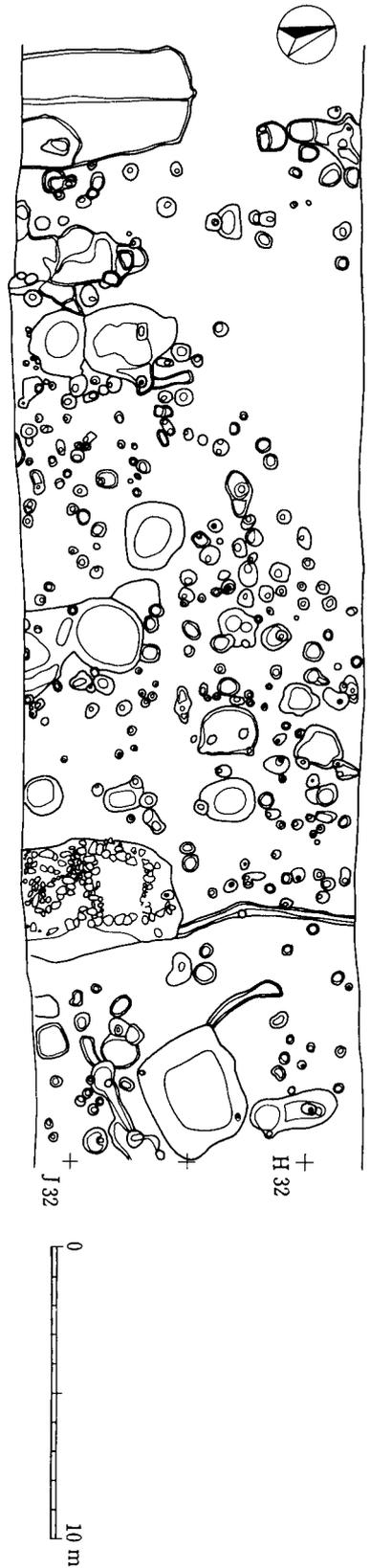
中世の包含層で見ると3面以上の層理面が認められ、短期間のうちに洪水を何度も受けている事実や、西調査区の東端部で流水の状況を明確にとどめている所見は、周辺の山林の開発と相まって惹起したものと考えられよう。

以上の想定から、道下元町遺跡、道下元町B遺跡での道路敷内の発掘は、北端部分に限定されたものと言え、中核部分は現状を保ち、保存状態の良好さを維持していると考えられる。

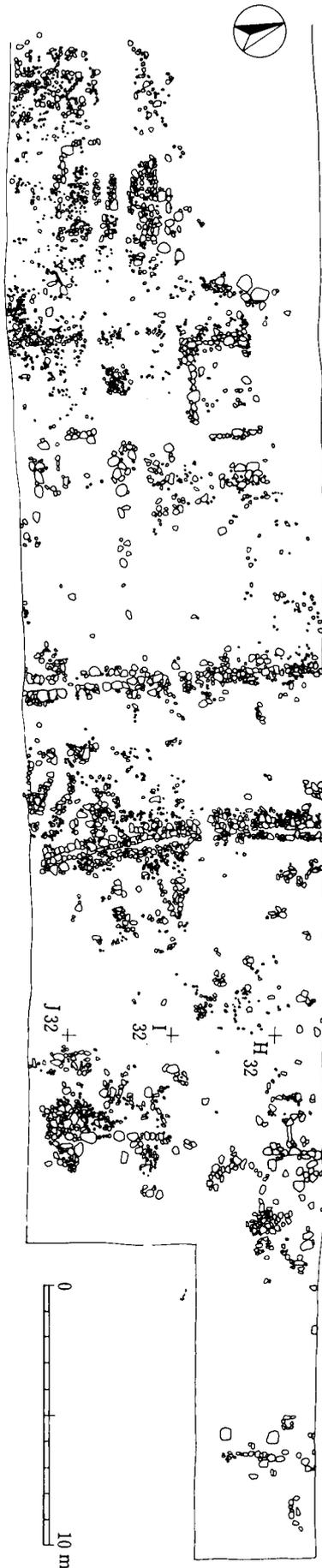
### 第2節 遺構の配置と層序

分布調査の結果から得られた包含層にかかる範囲の表土は、重機を導入して排除した。包含層があらわれた段階で、道路センター（No. 72）をI30として基準杭を設定し、4m区画のメッシュをかぶせた。グリッドの名称は北東隅の杭ナンバーで呼び、直線延長上にある東調査区へのグリッドも同じ扱いとした。

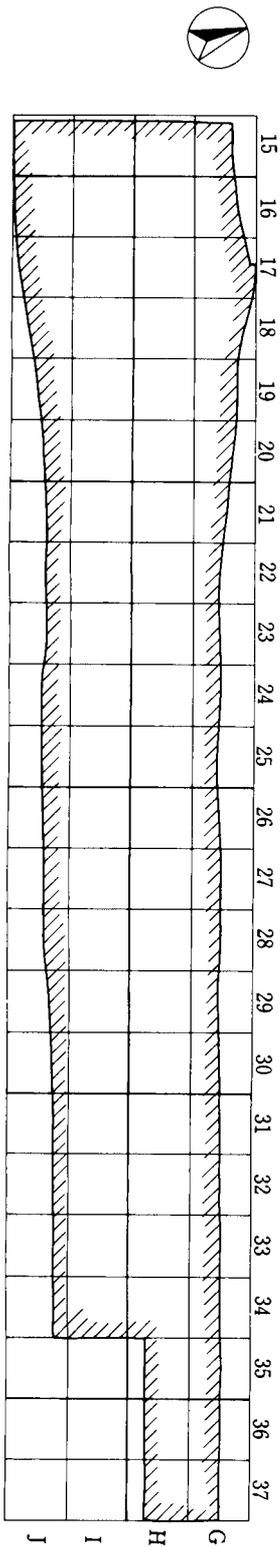
西調査区は約1mにもおよぶ砂層がかぶさり包含層を保存していた。幅12～16mで長さ92m、面積約1,100mをはかる。調査区の西寄り東西グリッド列23から東方向は比較的平坦で、包含層をも厚く遺存していたが西側方向へは緩傾斜面が形成され、縄文時代の包含層が薄層をもって見られる程度であった。調査区の東側の東西グリッ



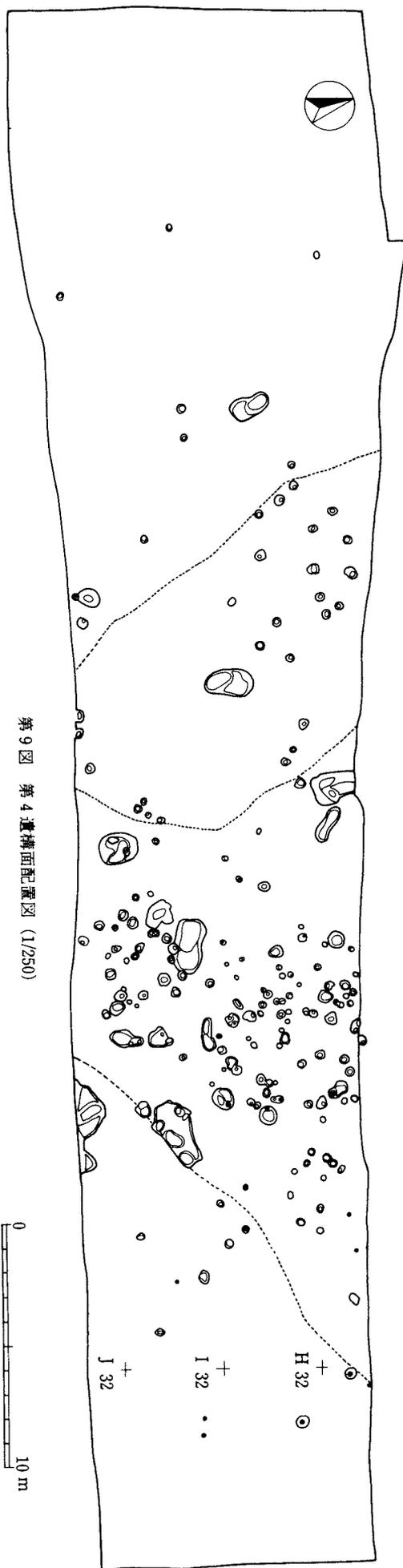
第7図 第2遺構面配置図 (1/250)



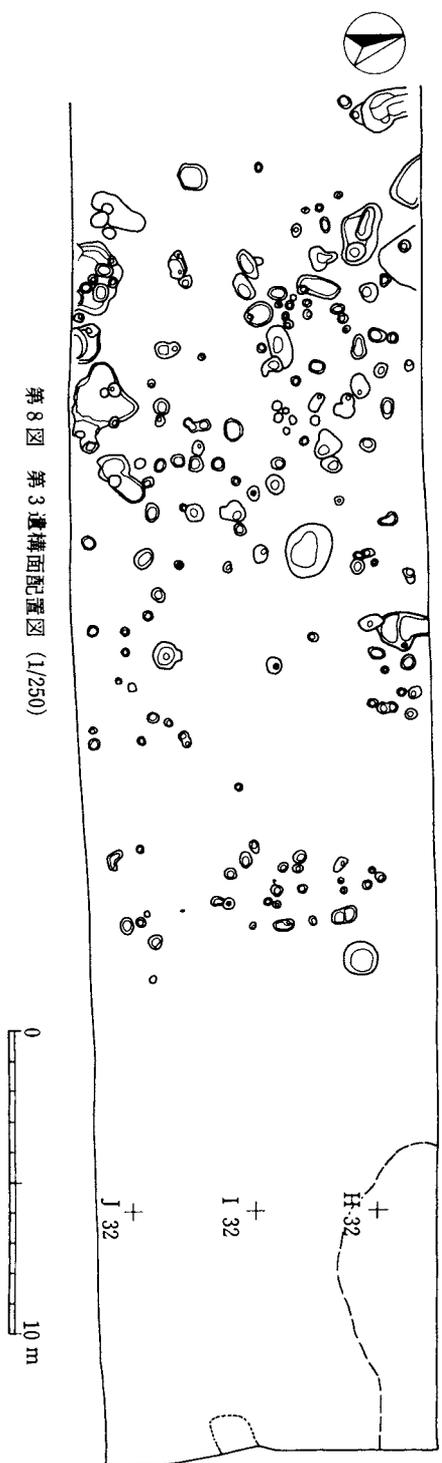
第6図 第1遺構面配置図 (1/250)



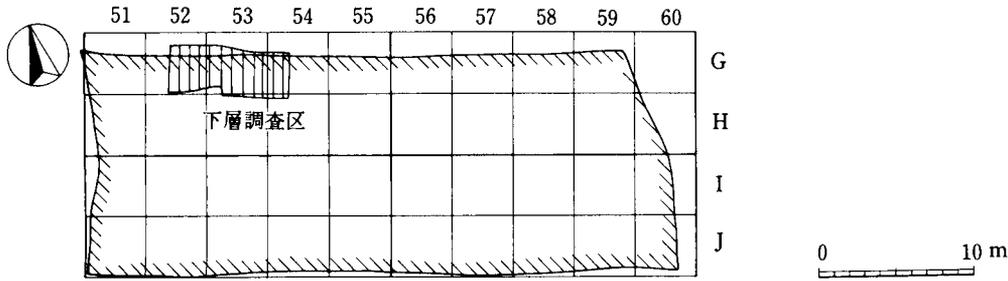
第5図 西調査区グリッド分割図 (1/500)



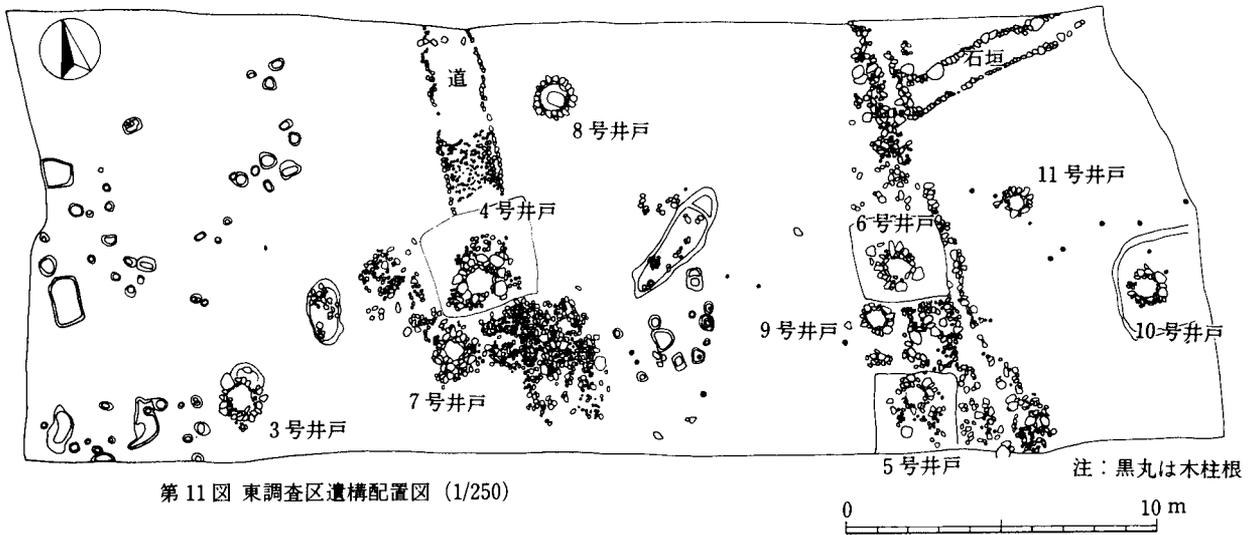
第9図 第4遺構面配置図 (1/250)



第8図 第3遺構面配置図 (1/250)



第10図 東調査区グリッド割図 (1/500)



第11図 東調査区遺構配置図 (1/250)

ド列34から以東は、北東方向に流れ出たと想定される人頭大からの礫を大量に含む河道が、砂丘下層から検出され本遺跡の東端部分かと当初は想定していた。発掘区の平坦地部分は東西グリッド列23から32まで、東西36mの範囲においては遺物包含層の層厚が約70～100cmを測り、5面の遺構面を確認する事ができたが、最も時期的に新しい面は次の遺構面発掘途中で気付いたもので、面としては記録をとる事ができなかった。西調査区内での累層的発掘面積の総計は約2,400m<sup>2</sup>を越える。

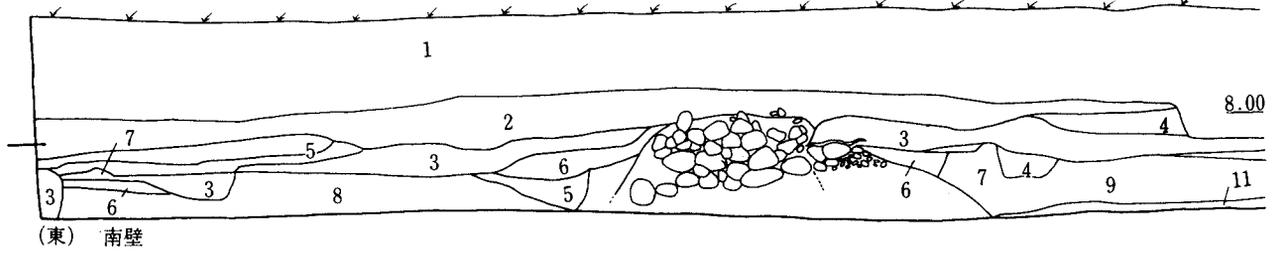
第1遺構面(第6図)は石を配置したもので、7基以上を数える配石址と2条の石組排水溝の検出であった。石組排水溝はほぼ南北方向に平行して走るもので、間隔は6～6.5mの距離をもつ。2条の石組排水溝に分けられた方形区画の配石址が、西側に3基、東側に4基が認められた。西側部分の3基は「コ」の字状に人頭大の石を配置して比較的整っているのに対して、東側部分の配石址が直線的で、区画性が弱いという側面が指摘できる。これらの石組に混って柱根列が検出された。石組排水溝の東側で、東西2間、南北1間のみの確認であるが、南北棟と推定される。柱間は220cmを測る。第2～4遺構面と掘り下げてゆくにつれて、柱根を遺存している柱穴多数が検出されたのであるが、確証が得られる建物としては、第1遺構面の1棟のみであった。

第2遺構面では井戸状遺構2基、石や木片が投入されている土壇6基以上、土塁1、柱穴多数の検出があった。柱穴には12本の柱根を認めたものの、関連性が窮えるのは3本のみで、建物を想定するまでには至らなかった。第1遺構面の石組排水溝と重複するような位置で、幅約250cm、高さ80cmの規模を持ち南北方向に走ると思われる土塁端部を検出した。

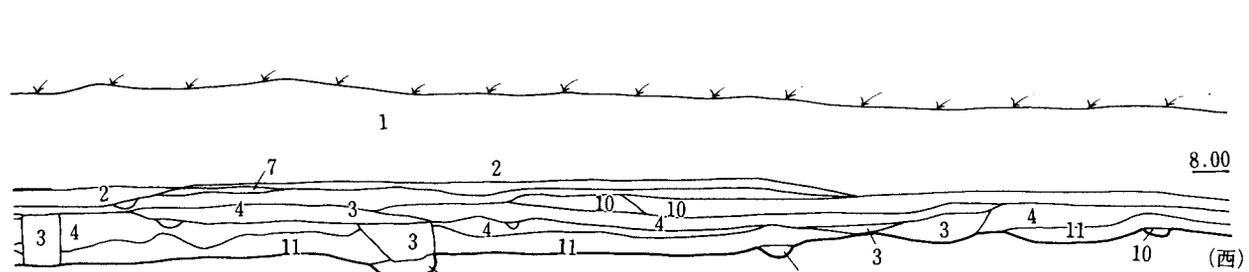
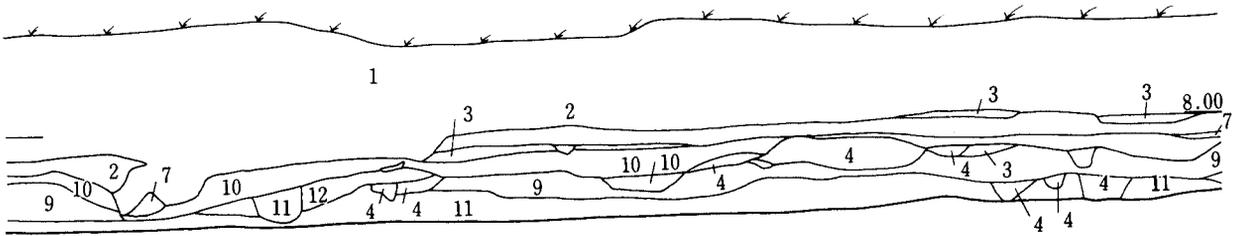
第3遺構面になると東端部で木組井戸1基の他、やはり多数の柱穴群を検出した。柱根の遺存していたものは5本を数えた。

第4遺構面は西地区が縄文時代後期のピット群があらわれ、東側地区は平安時代のピット群があらわれている。柱穴掘り方が不明のものを含めて、柱根の遺存していたのは15本であった。東側地区北側の下層には縄文時代後

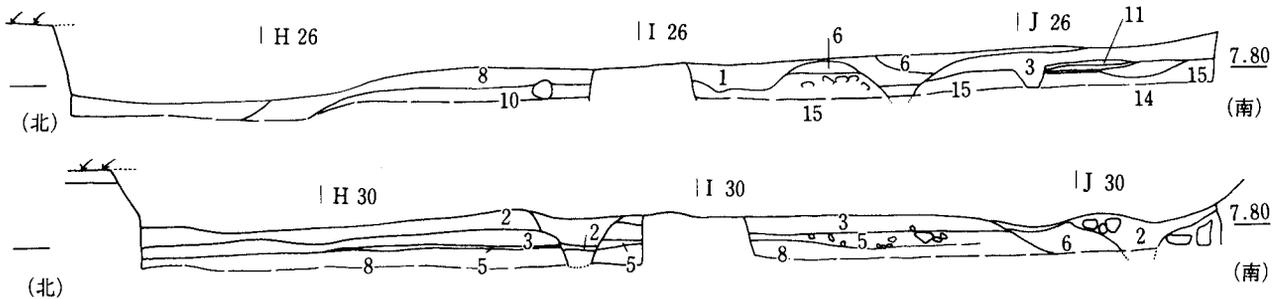
第3章 遺跡の範囲と遺構



(東) 南壁

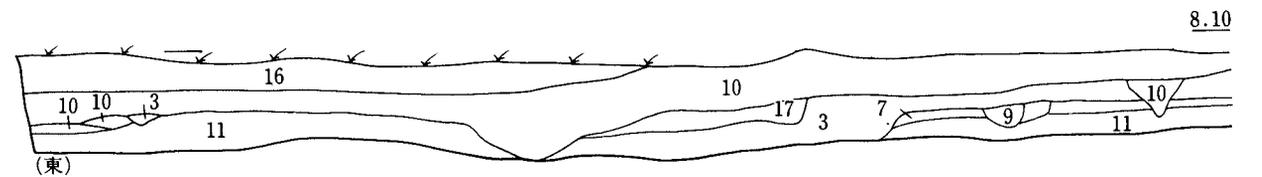
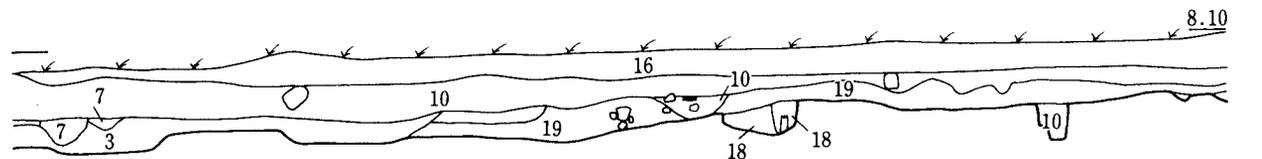
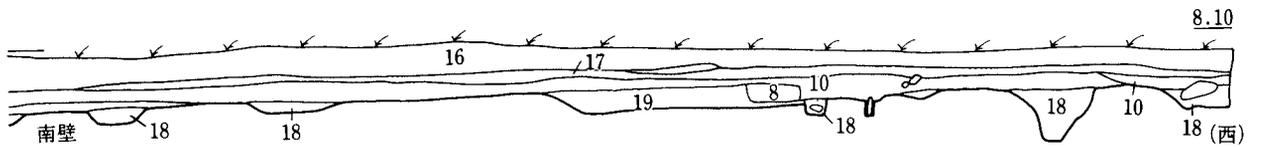


- |            |            |              |            |              |
|------------|------------|--------------|------------|--------------|
| 1. 黄灰色砂質土  | 5. 暗褐色小砂利土 | 9. 茶褐色弱粘質土   | 13. 暗灰色粘質土 | 17. 黄褐色砂礫土   |
| 2. 黒色砂質土   | 6. 暗灰色砂質土  | 10. 暗茶褐色粘質土  | 14. 灰      | 18. 暗茶灰色粘質土  |
| 3. 黒褐色弱粘質土 | 7. 黄褐色粘質土  | 11. 暗黄褐色弱粘質土 | 15. 黒褐色砂質土 | 19. 暗茶褐色弱粘質土 |
| 4. 暗褐色 "   |            |              |            |              |



第12図 西調査区土層断面図 (1/80)

0 2 m



第13図 東調査区土層断面図 (1/80)

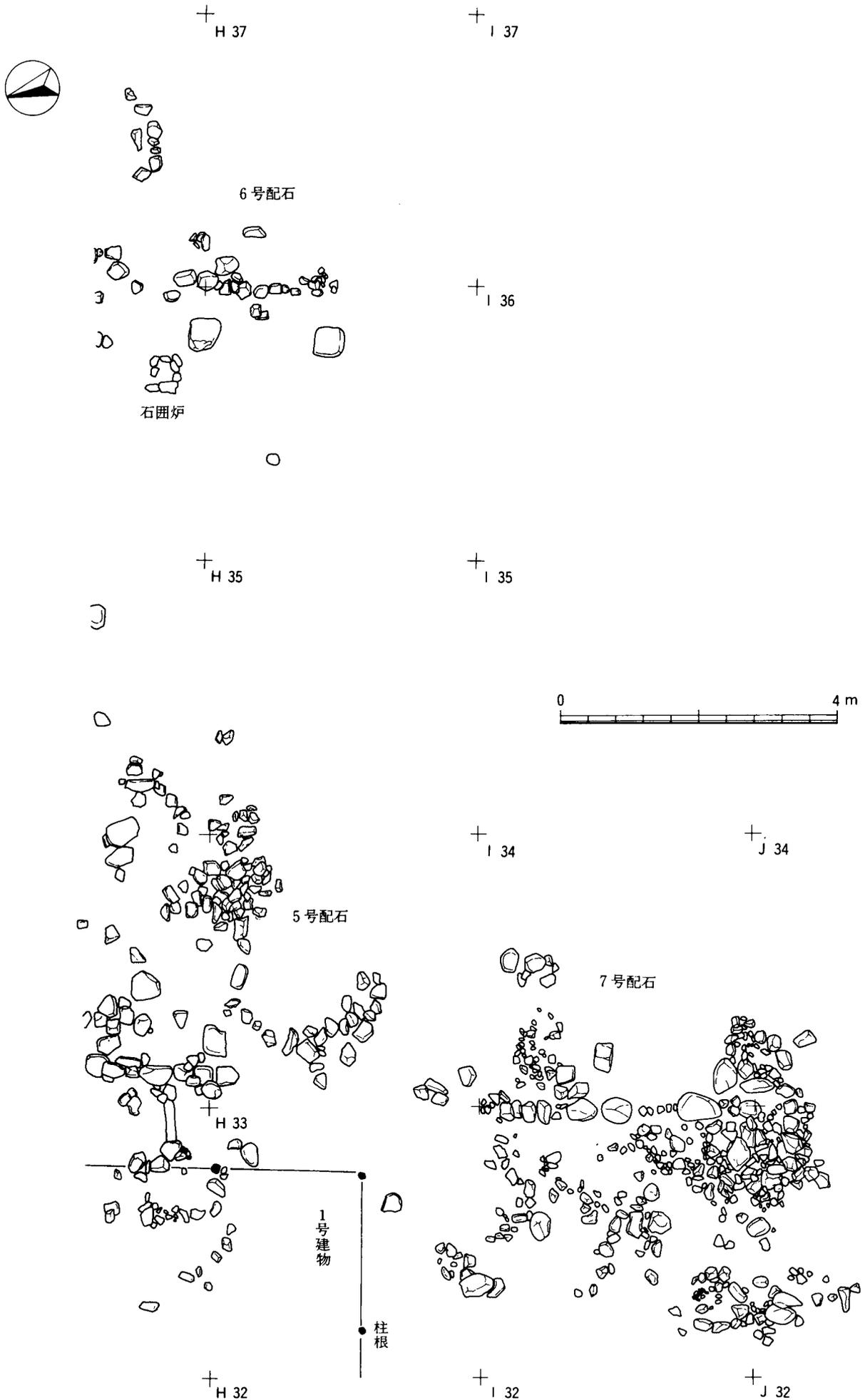


第14図 第1遺構面平面図(3-1)(1/80)

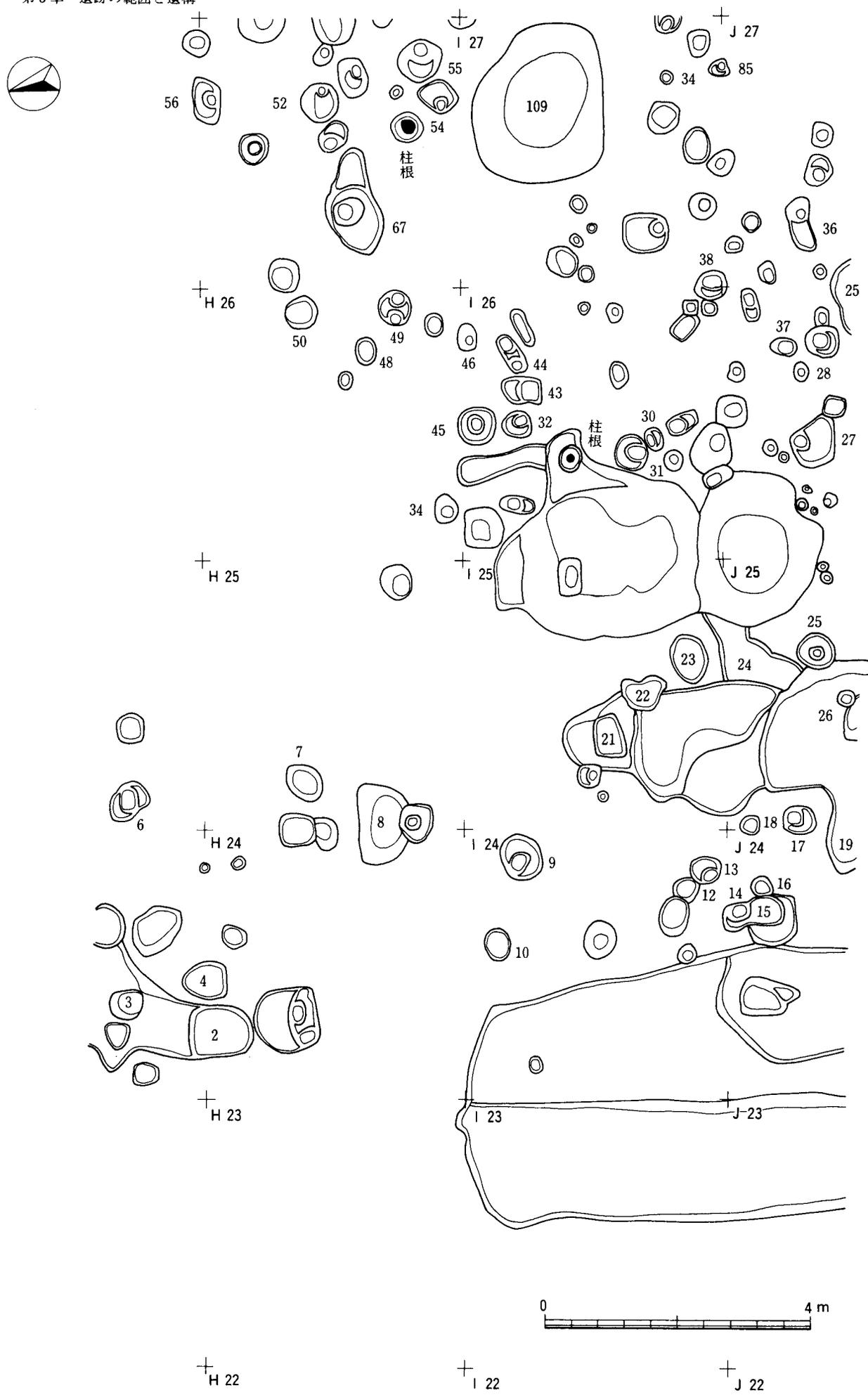
第3章 遺跡の範囲と遺構

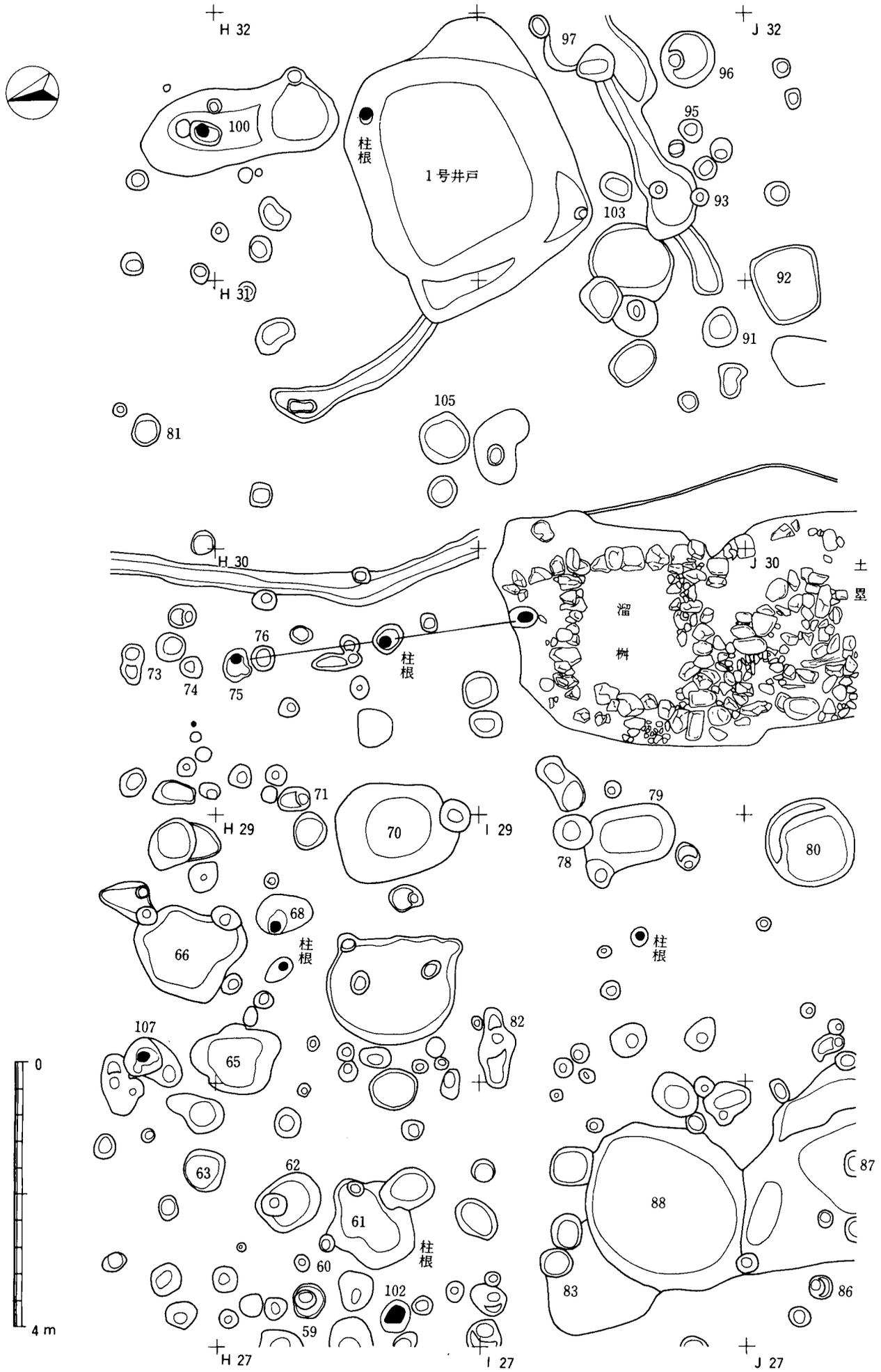


第15図 第1遺構面平面図(3-2)(1/80)



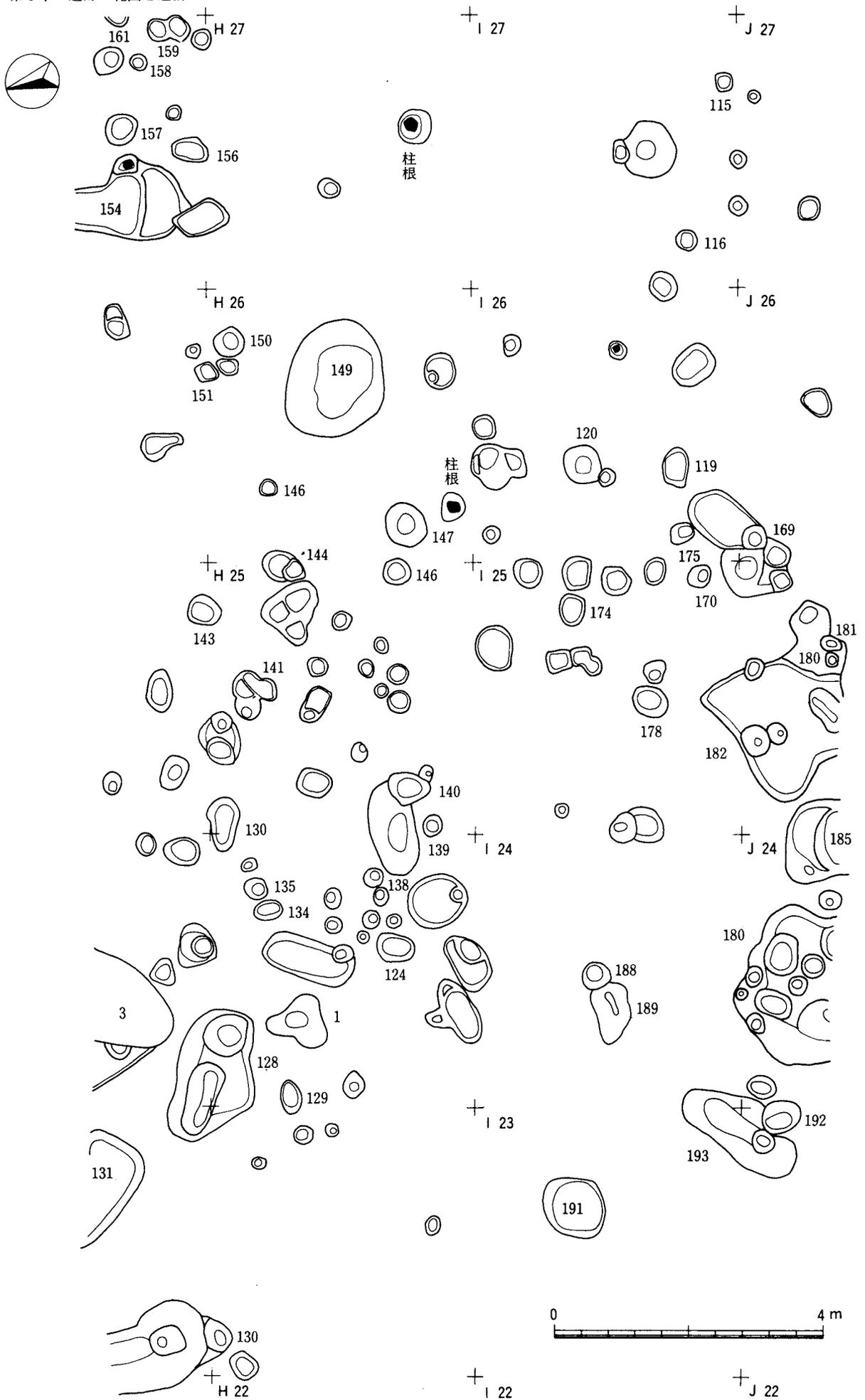
第16図 第1遺構面平面図(3-3)(1/80)





第18図 第2構面平面図(2-2)(1/80)

第3章 遺跡の範囲と遺構



第19図 第3遺構面平面図(2-1)(1/80)



+ H 32

+ I 32

+ J 32

+ H 31

+ I 31

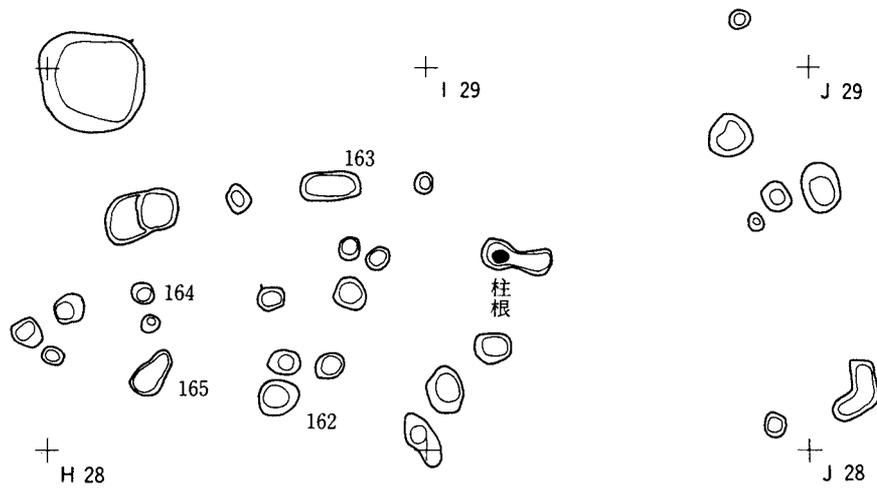
+ J 31

●  
柱根

+ H 30

+ I 30

+ J 30



+ H 28

+ I 29

+ J 29

+ J 28

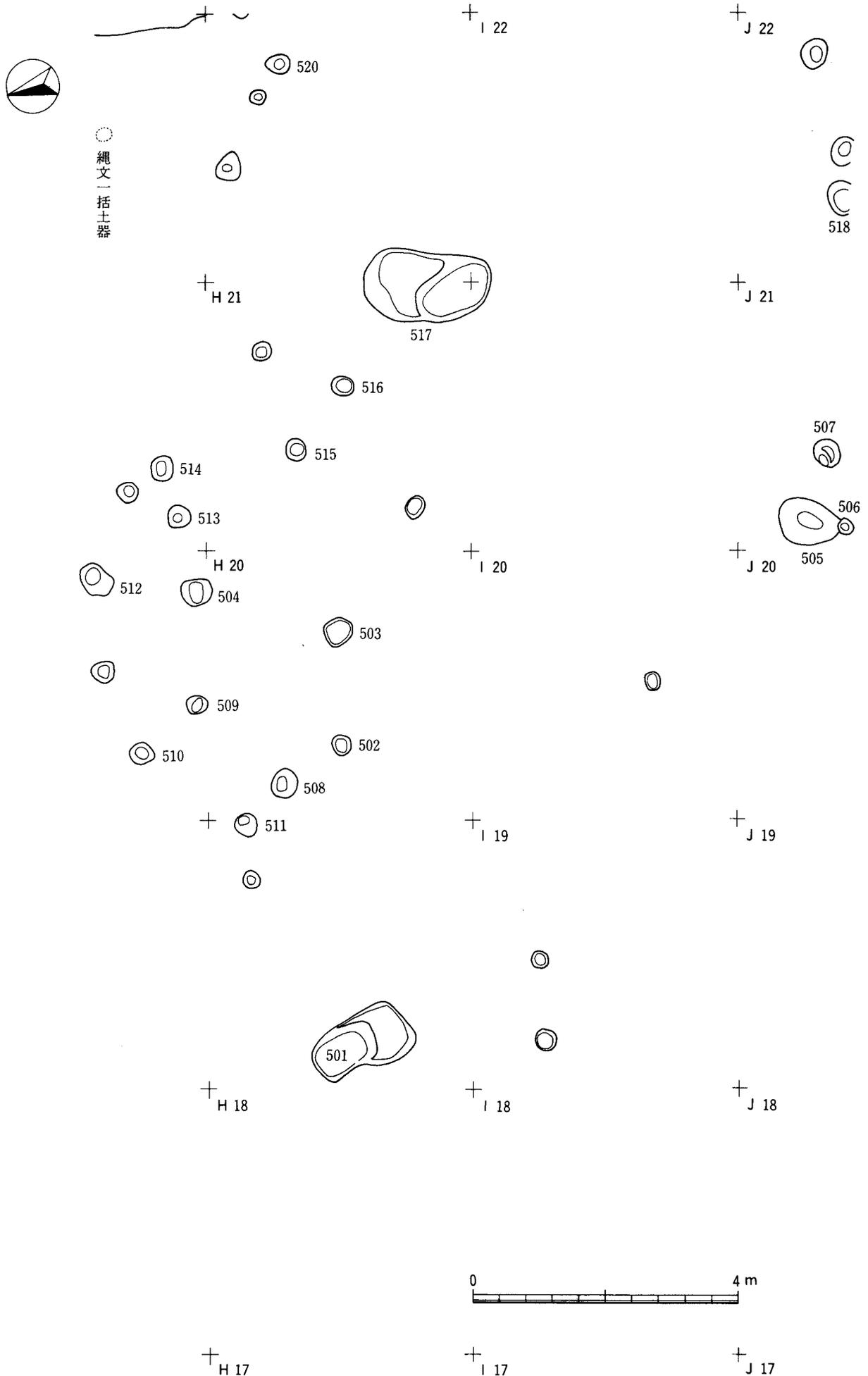
+ H 27

+ I 27

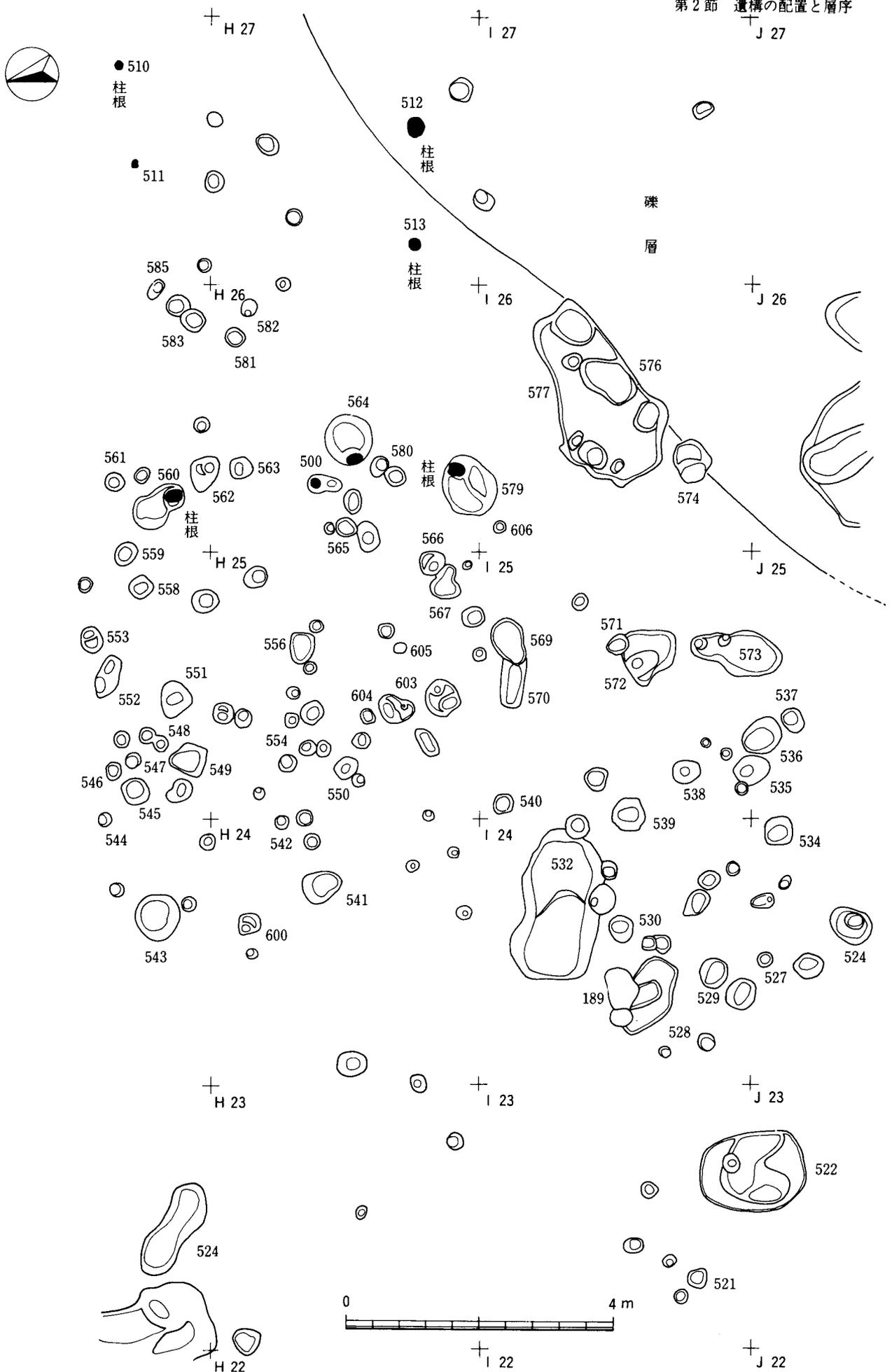
+ J 27

第20図 第3遺構面平面図(2-2)(1/80)

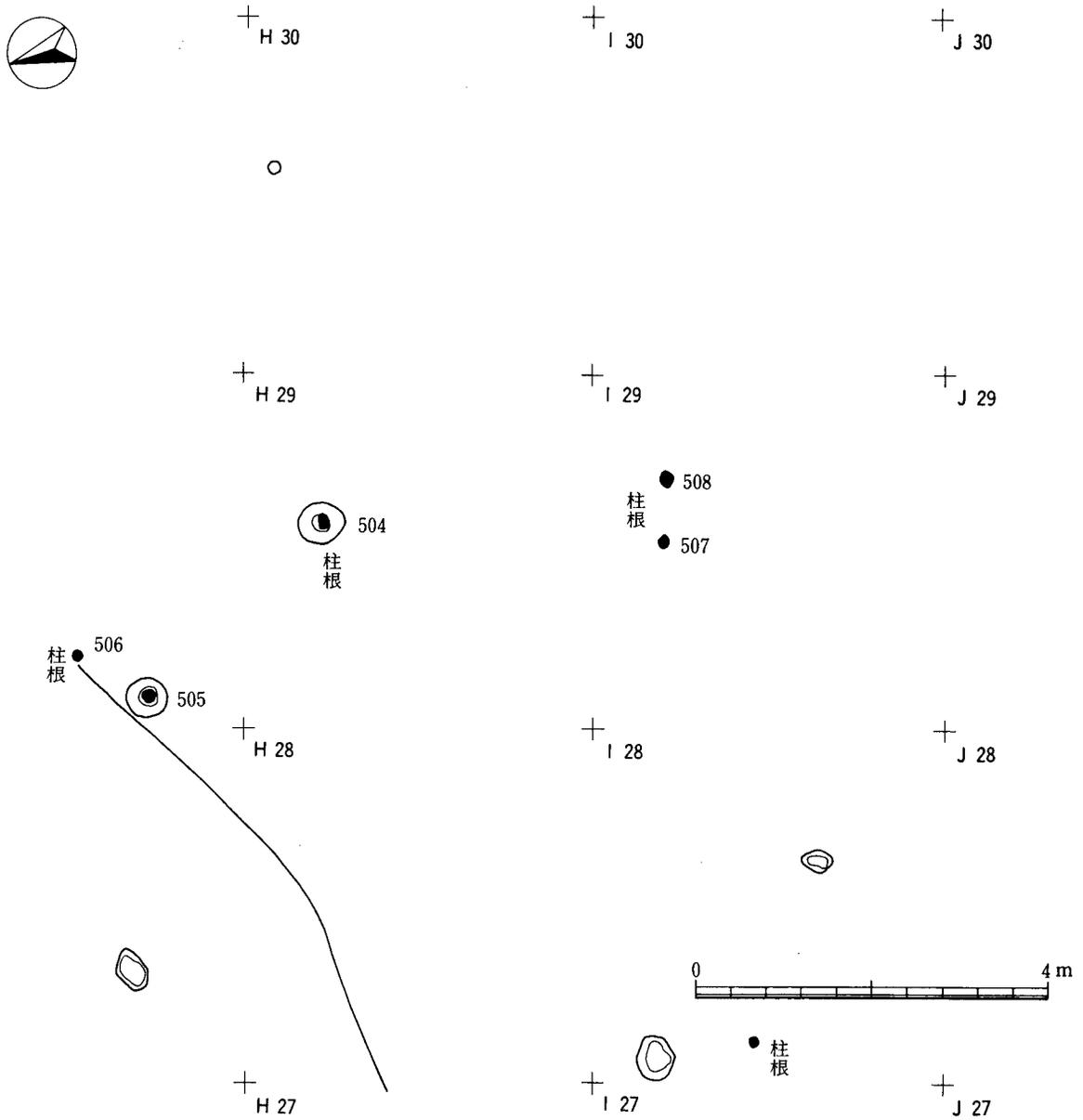
第3章 遺跡の範囲と遺構



第21図 第4遺構面平面図(3-1)(1/80)



第22図 第4遺構面平面図 (3-2) (1/80)



第23図 第4号遺構面平面図(3-3)(1/80)

期の包含層が小範囲に認められた。

西調査区の土層図は第12図として示しているが、基本的な層序を次に記しておく。

- I 灰白色砂層 100～130cm
- II 黒色砂層（粘性がなく、灰層をかむ） 10～40cm （中世～近世初頭）
- III 黒褐色弱粘質土（西方部ではなくなる） 10～20cm （中世、第1遺構面）
- IV 暗褐色粘質土（黄褐色ブロック含） 10～30cm （中世、第2遺構面）
- V 暗褐色弱粘質土（黄褐色ブロック含） 10～40cm （中世、第3遺構面）
- VI 暗黄褐色弱粘質土 10～40cm （平安時代、中世） 一部では縄文時代の包含層（黒褐色砂礫層）が下位に所在する。

東調査区は分布調査時において、暗褐色砂礫層中に数片の珠洲焼と漆器碗片を確認したのにはじまるが、礫の出土が多く層理面を把握しえなかった点で、西調査区の東端で見られた河川の氾濫原の広がりと推定していた。しかし、前段階のトレンチ調査を入れてみると石組井戸があらわれてきたので予定通りに道路敷いばいに調査を行った。幅約15m、長さ約38m、面積約570m<sup>2</sup>である。西側部分はピット群が見られ、比較的安定した地層のうちにあるが、東半部分は砂礫層で蹂躪されたような堆積層があるものの、柱根が遺存し石組井戸が幾重にも重なるように検出された。検出できた遺構は、石敷路1、土塁1、石組井戸9が主要なものである。包含層そのものが安定したものではないので、遺構間の関わりを十分にとらえきれていない点が反省される。標準的な土層は次の通りである。

- I 黄褐色粘質土（耕作土） 30～40cm
- II 暗茶褐色粘質土（礫を多量に包含する） 10～40cm
- III 黒褐色粘質土 10～40cm

### 第3節 遺構

#### (1) 配石址

##### 第1号配石址（第24図、図版4）

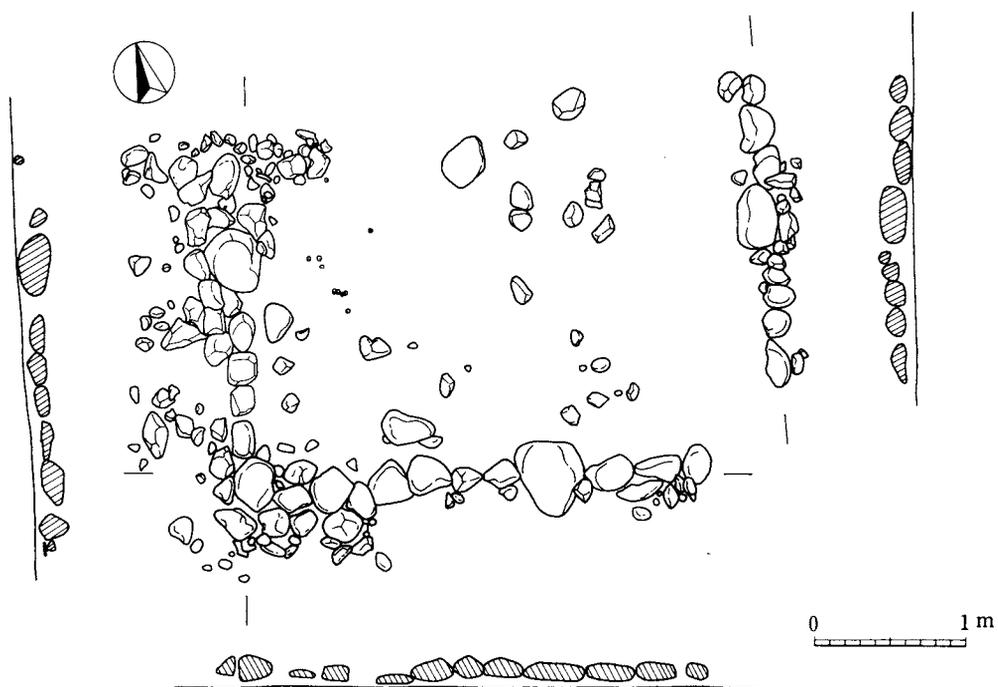
配石址群の西端、I 24・25、J 24・25のグリッドで検出されたもので、平面方形プランを呈す。プランの隅々の石が抜け落ちている事から、平面プランの規模は最大値を求めて、東西方向約420cm、南北方向約420cmをはかる。北辺と南辺には長軸をそろえ20～30cmの石が置かれ、内部にはやや小振りの石が平面を保つように敷かれている。特に南側部分には小砂利が敷きつめられている。中央部分の東西に石が抜けている部分は、後世溝が掘り込まれたため、黄灰色砂層がくい込んでいる。外周の北東隅には、比較的大きな石が長軸230cm、短軸50cmの範囲で突き出している。南東コーナーの小砂利の上面に銅銭75枚が集中的に出土している他、珠洲焼片が見られた。

##### 第2号配石址（第25図、図版5）

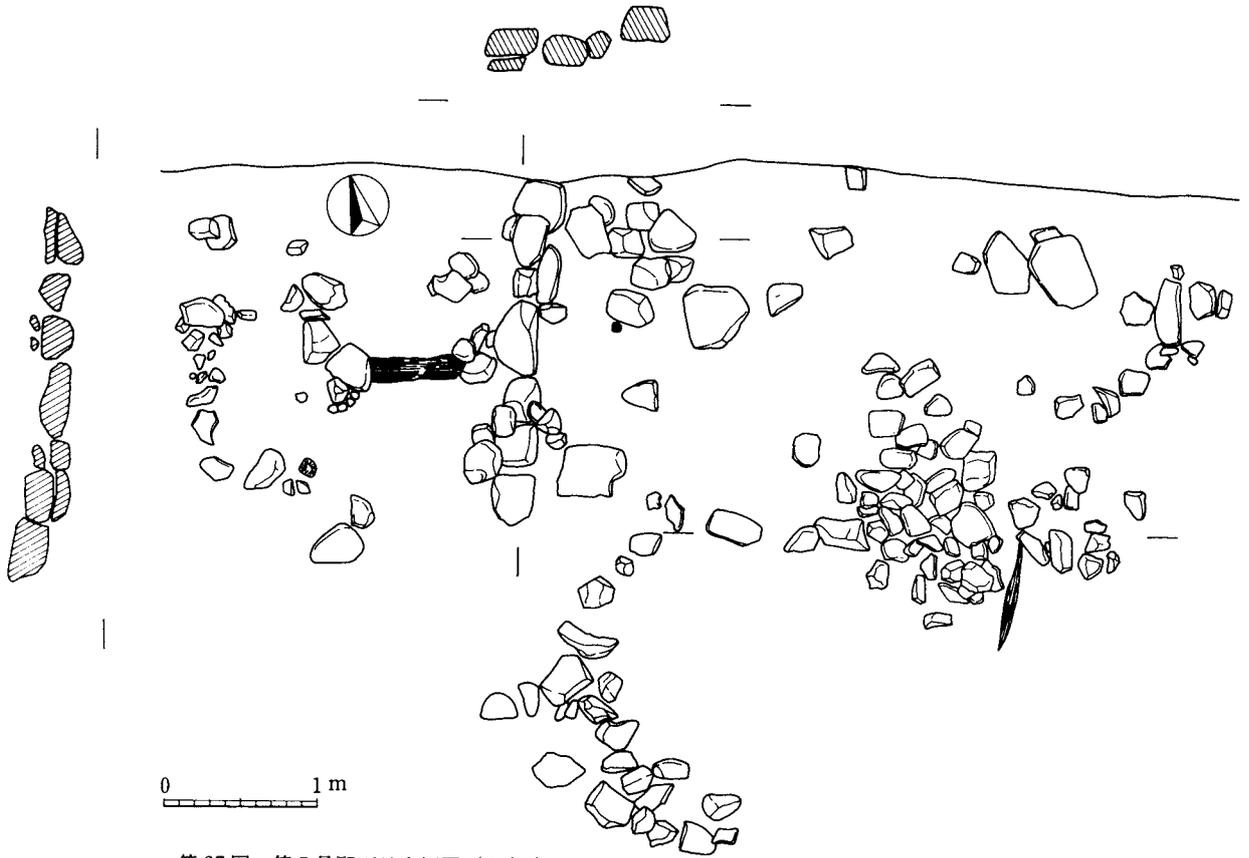
H26・27グリッドで検出されたもので、第1号配石址の東北東方向3.3mの位置にあたる。平面方形プランで、「コ」の字状に一辺の石列を失っている。使われている石は、20～40cmの比較的大振りの丸石で、外へむけて辺をそろえようとしている。石列のレベルは水平を保つように調整され、周辺に小振りの石でひかえをなしている。石列部分の外側で、東西の長さは380cm、南北の長さは350cmをはかる。区画された内面には石の出土は散発的であったが、北東隅に銅銭が数十枚出土している他、珠洲焼の破片が散発的に出土している。外周では2ヶ所の突出部が見られる。北西隅は長軸140cm、短軸60cmをはかり、南西隅は長軸60cm、短軸30cmをはかる。



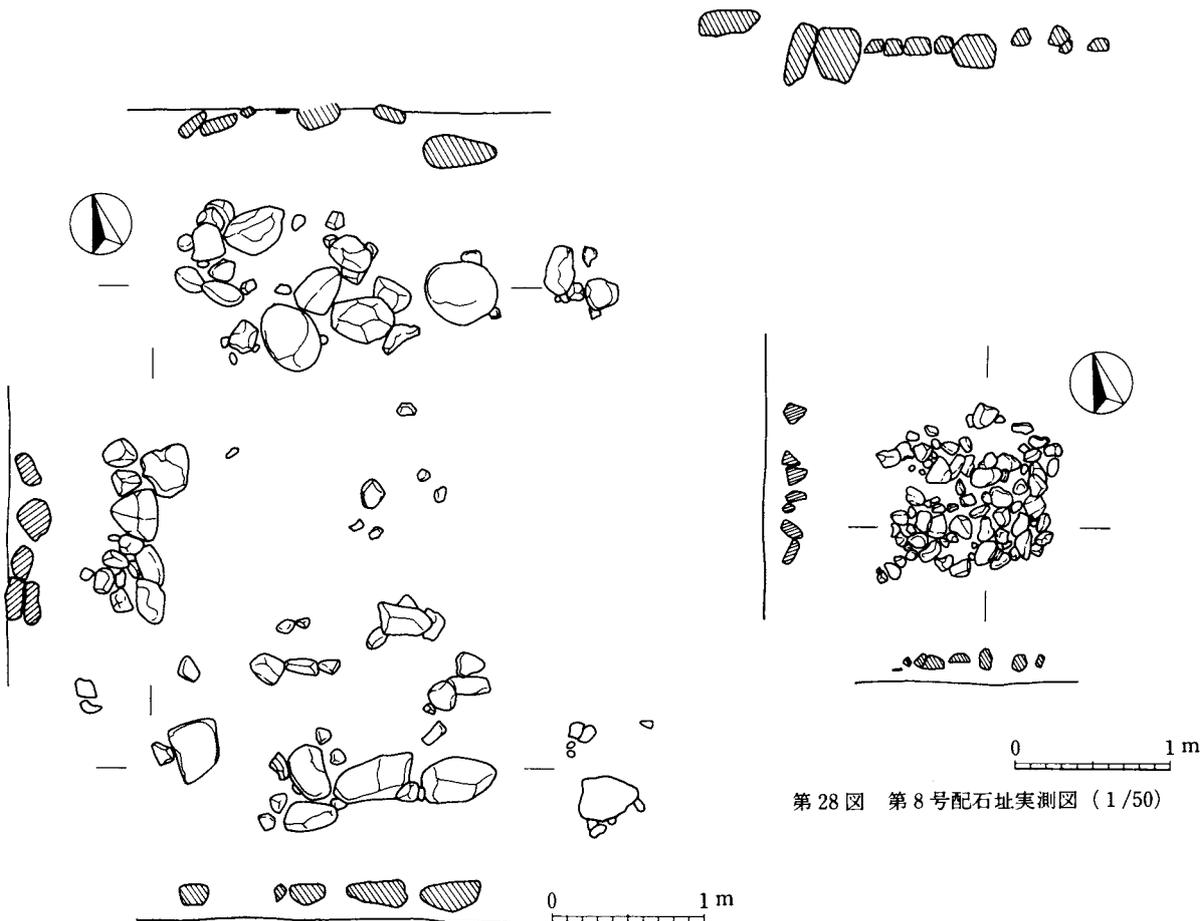
第24図 第1号配石址実測図(1/50)



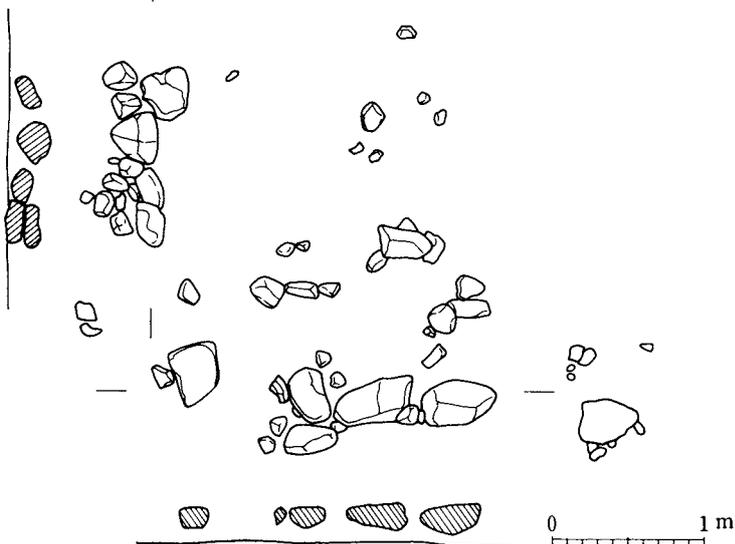
第25図 第2号配石址実測図(1/50)



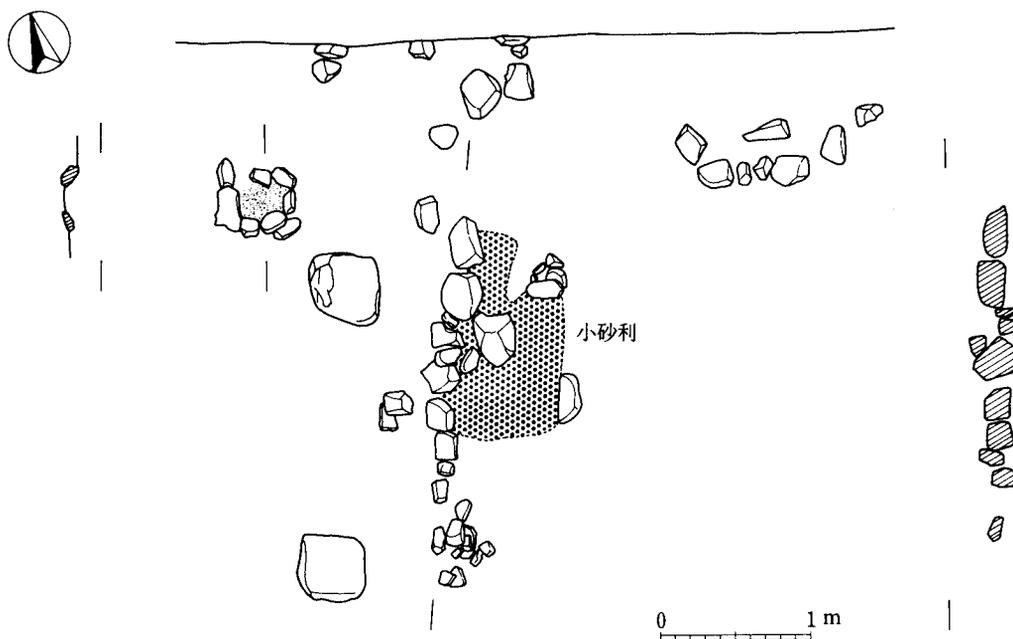
第27図 第5号配石址実測図 (1/50)



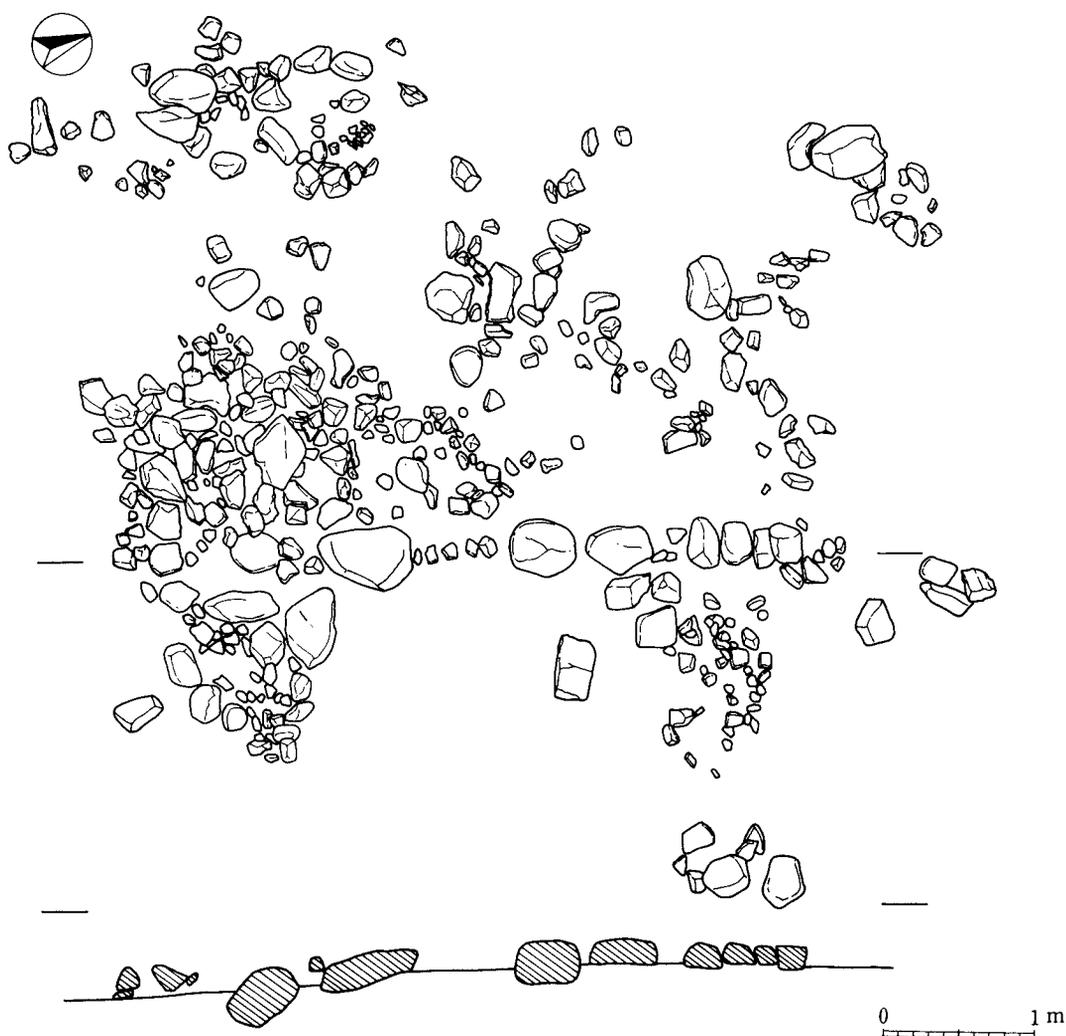
第28図 第8号配石址実測図 (1/50)



第26図 第3号配石址実測図 (1/50)



第29図 第6号配石址実測図(1/50)



第30図 第7号配石址実測図(1/50)

## 第3号配石址（第26図 図版5）

I 27・28、J 27・28の4個のグリッドにまたがっているが、大部分はJ 27、I 27で検出された。北西方向230cmで第2号配石址、西方650cmで第1号配石址に至る。「コ」の字状に配置された石列のコーナー部分を欠いて検出され、長径50～60cmにおよぶ丸石を使用しているが、遺存状態は良いとは言えない。しかし、配石址内より大量の銅銭が出土しているところから、後世の攪乱は少ないと判断され、当初から角石が抜かれていた可能性が考えられる。石列で区画された南北方向、東西方向はともに350cmをはかる。北辺の西隅には、先の配石址と同様の突出部分を見る事ができる。横130cm、縦40cmをはかる。

## 第4号配石址（第31図）

H 31・32、I 31・32グリッドで検出したもので、第2号配石溝の東に隣接している。第3号配石址から13.5mの距離をはかる。東西方向の2辺が遺存しているが、平行ではなく、東方向で幅を小さくしている。東西幅で200cm、南北方向で330cmをはかる。

## 第5号配石址（第27図）

西調査区の東側、北壁に大部分がかくれるような状況で検出された。G 33～35、H 33～35グリッドにまたがり、西辺と南辺の一部が遺存している。石列は周囲より一段高くなるが、石列の上端部分は水平位を保つように置かれている。現況での東西の長さは、約500cm、南北の長さは230cmを測り、南西隅に突出部が設けられていて、120×140cmの規模を持つ。配石址内部および周辺からは木柱根、木片、珠洲焼片が出土している。

## 第6号配石址（第29図）

西調査区の東端、G 36・37、H 36・37グリッドにまたがって検出された。第5号配石址の東方約5.5mの位置にあたる。調査区域全体から見ると東端は表土層である黄灰色砂層は比較的薄くなり約50～70cm程度となり、黒褐色土包含層もやはり薄くなり遺構面が重複するという事もなくなる。第2配石溝の東側で検出された河道跡が、北東方向に大きく蛇行して流れている。配石址の所在する面は、黄褐色砂層で基盤としては脆い面が認められる。列石は南北方向に走るもので、長さ330cmを測る。周辺には小砂利が敷き詰められている状況が見られ、西側には40～50cm平方の平らな石が置かれているのが注目される。また、北西脇には8個の礫をめぐらす石囲炉が検出された。石囲炉は平面長方形プランを呈し、外形で45×50cmをはかる。炉床には炭化物（藁状を呈す）が遺存していたが、炉石には火熱を受けて変色した部分は少なかった。

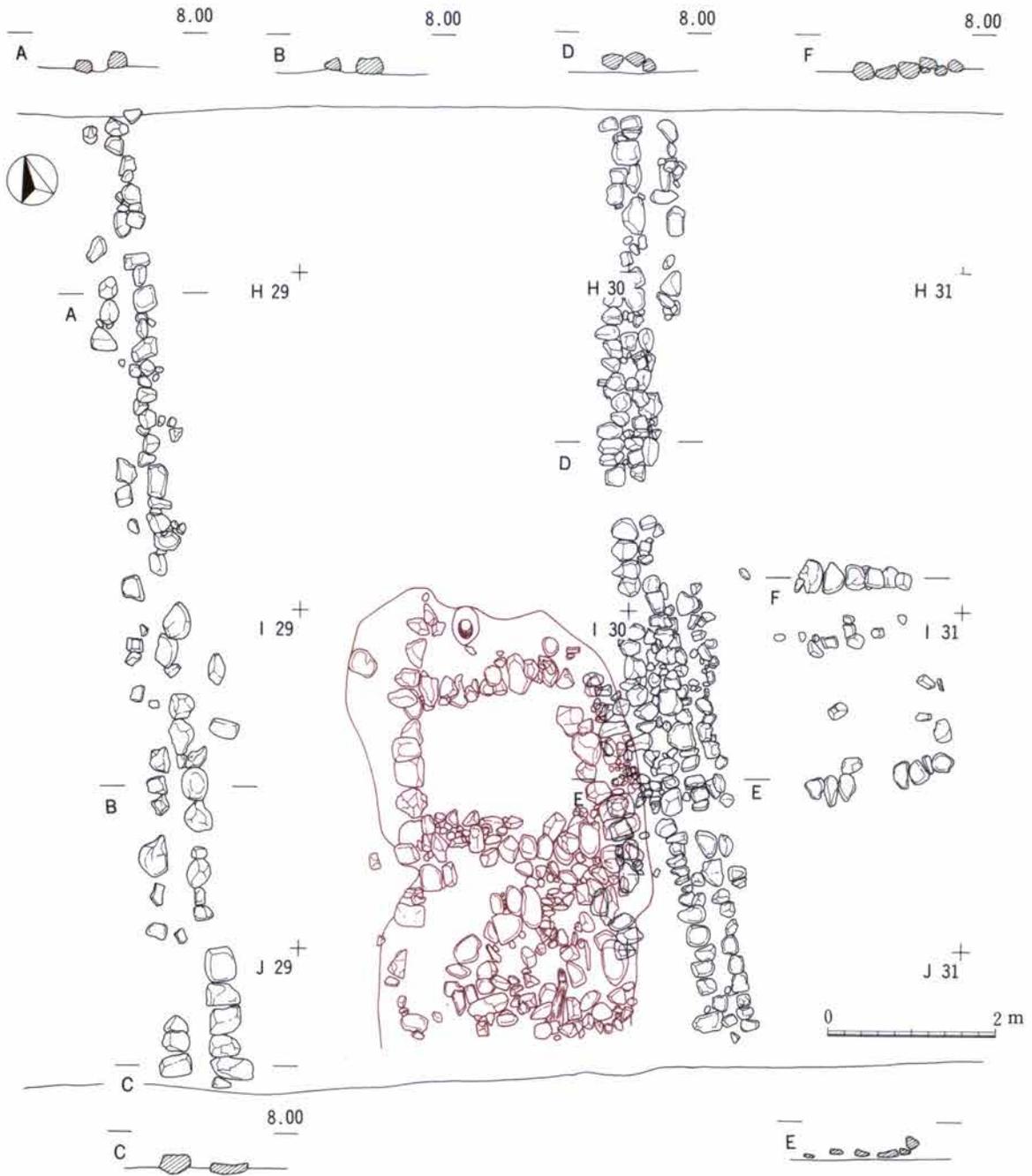
## 第7号配石址（第30図）

H 33・34、I 33・34、J 33・34の各グリッドにまたがって検出されたもので、第5号配石址の南方向350cmの位置にあたり、河道跡内部にとり込まれているため、川原内礫との判別がむずかしかったものである。南北方向に直線的にのびる長さ490cmの列石は、上端レベルがそろえられている点や、南東端に140×100cmの方形区画の突出部分を持つ点から配石址と判断した。

## 第8号配石址（第28図）

I 26グリッドで検出した円形プランの配石址で、第2号配石址の南200cm、第3号配石址の西方150cmに位置している。長径120cm、短径100cmの楕円形プランを呈し、最大径20cm程度の円礫、比較的小振りな礫で構成されている。

第1～7号配石址の概要を記したが、その性格については決定的な手がかりは得られていない。幾つの特徴を記してみると、各配石址は方形プランを呈し、隅近くに突出部分をつけ、方向が共通しており、重複関係にな



第31図 第1・2号配石溝実測図 (1/80)

るものがまったくないという共通点を持つ。第1・3号配石址には、多数の銅銭が検出されているのが注目される。当初方形プランの検出から墓址との想定に立ったが、埋納施設や遺物が認められない事で否定され、重複関係のない点や列石が水平位置を保つ点、隅近くで突出する部分を入口遺構としてとらえれば、住居址の平面プランではないかとの推定に至ったが、今後の類例の増加を待って検討を加えていきたい。

(2) 配石排水溝

第1号配石排水溝 (第31図、図版6)

西調査区の東寄りに2条平行して走る南北溝を検出している。西側を第1号とした。G~J 29のグリッドにま

たがり、長径50cmを最大とする石で、20～25cmの間隔をあけて構成する。西側列の遺存状態が比較的悪く、東西方向に走る後世の溝で石の一部が除去されていた。溝の内部には炭化物が推積していて、鉄製品1点が検出されている。配石の状況を細かく見ると、南端部分では長軸方向を溝に直行させる方法をとる他は、長軸を溝と平行させる。石の積み方で見ると、二段目（高さ約30cm）までは大きな石を使い、すき間を小振りな石でつめ込んでゆき、控え積みとして1～2列の礫を使う手法が読み取れる。現況での南北の長さは11.5mを測る。北端部分の溝中央での第1～2号溝の間隔は630cmを測る。

#### 第2号配石排水溝（第31図、図版6）

G～J30・31グリッドにまたがり南北に流れる配石排水溝で、排水溝幅10～20cmをはかる。H30グリッドの中央付近から北と南では溝幅、配石の状況が大きく変化する。北側部分の約4mは第1号排水溝と同様の状況を呈する一方、南側部分の約6.5mは東南方向に湾曲する形をとる。第4号配石址の位置と合うような方向の変え方である。配石は高さ約30cmで面がとられ、西側部分は2列の控え積みを持ち、小礫をそれらの周辺に置く。東側の石列に大きな石は見られず小振りのものだけが目立つのが注意される。I・J30グリッドで、下層位に土塁跡が検出されているが、排水溝の見られるレベルにおいても40～50cm程度の高まりが顔を出しているという状態であった。排水溝の流れが南北で異なるのは、このためではなかったかと想像される。

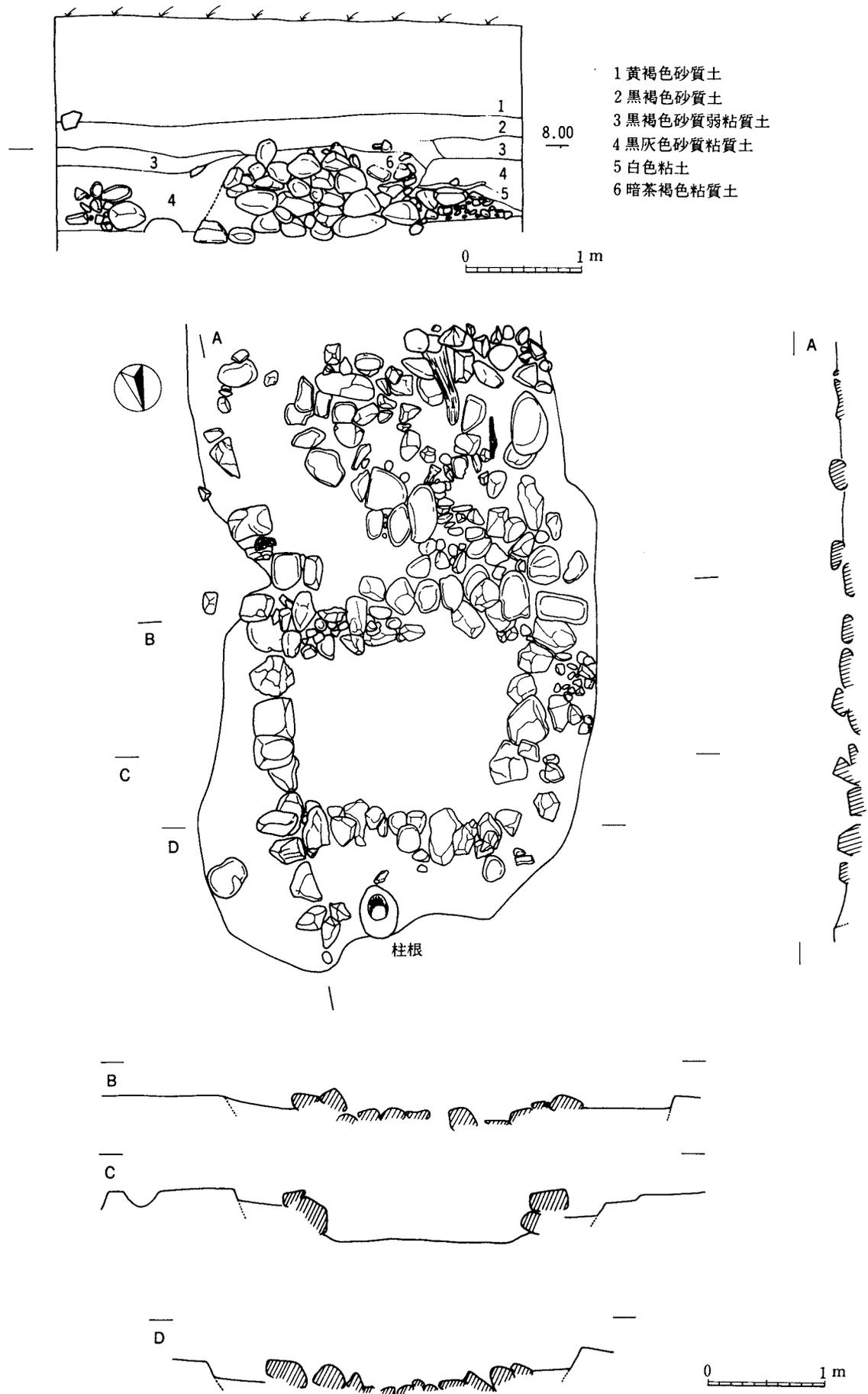
さて、2本の排水溝を側溝として見るのが妥当と考えられるが、北側部分での路幅は約6mをはかる事になる。東調査区で検出している路幅が1.8mであり3倍以上の格差が見られる点から、集落内において重要な幹線と考えられる。土塁の遺存している南半部分では約2m程の幅を持つ事になる。

#### (3) 土塁（第32図、図版7）

第1・2配石排水溝の間、東側溝に接し発掘区の南寄りで検出されたもので、第2遺構面の精査にともなうものである。I・J30グリッドに大部分が含まれる。

南北方向での現況の長さは5mを測り、東西方向での幅は2.8mを測る。南端部は溜柵が構築され、内部での規模は南北方向150cm、東西方向が180cmの方形プランを呈している。溜柵を構成させる石列は東辺が丁寧に置かれ、他の三辺はやや粗雑ではある。溜柵内部には多量の石、礫に混じって箸状木製品が出土した。溜柵の深さは約45cmであるが、石列は二段目までがかろうじて遺存している程度であるため、60cm程度までであったものと想定したい。

土塁の高さは現況で80cmを測るもので、溜柵を成している石よりひとまわり大きく、長径50cmを越える石が乱雑に組み込まれているように見えるが、土層断面図で見ると西側で規則的に積まれている部分があり、その外側では土層や礫の状態が乱れているのが注目できる。旧状を保っている位置での土塁の基底面での幅は170cmをはかり、石が露出する石垣を呈していたと判断する事ができる。石垣の下層位には南北方向に丸太が組み込まれ、溜柵へ水を引き入れる暗渠の役割りを果たしていたものであろうか。石垣に組み込まれている石と石のすき間には空間が随所にみられ、石のみで組み上げていったものと推定できる。

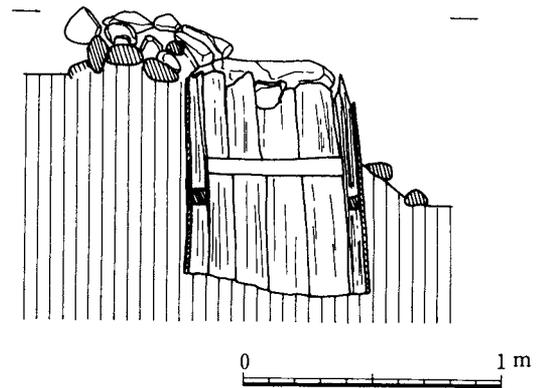
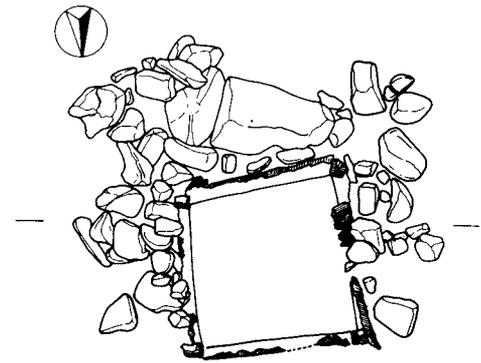


第32図 土塁実測図・断面図 (1/50)

## (4) 井戸 (第33図、図版11)

西調査区の東端部、I 34グリッドの第3遺構面で検出したもので、平安時代に位置づけされる。円径約180cmの掘り方の北西寄りに、一辺65~75cmをはかる方形隅柱横棧型の井側を据えている。横棧は一段のみでなり、東西方向、南北方向で約6cmの段差をもって平行している。縦板は幅約10~15cm、現況長さ80cmのもの4~5枚を使用している。井側の南側周辺には礫が置かれているものの、水平位を持たないところから、井戸の使用面はさらに上位になるのであろうか。

井戸の内部からの遺物の出土はなかった。



第33図 第2号井戸実測図(1/30)

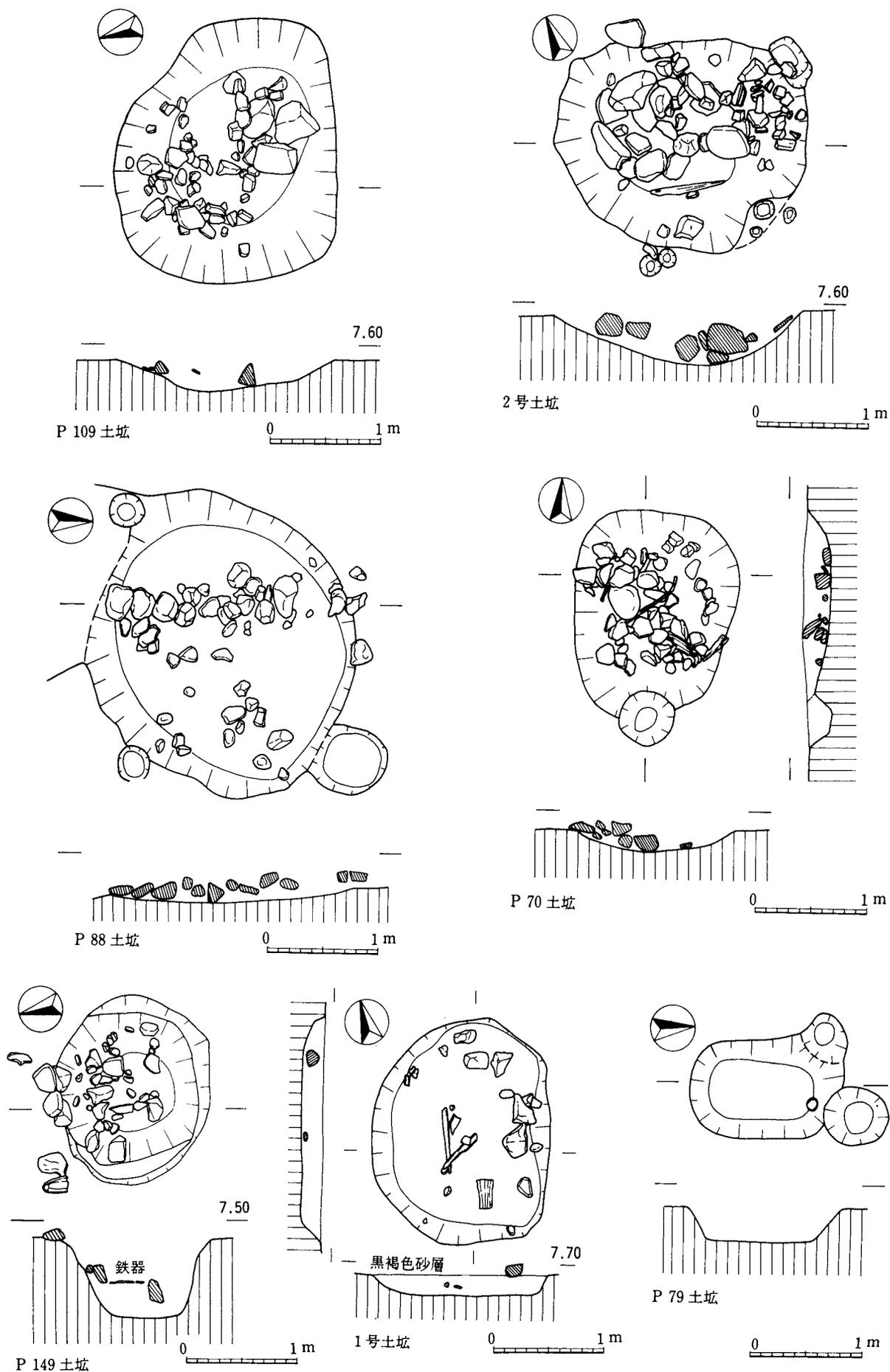
## (5) 土壇 (第34・35図)

P109土壇 I 27グリッドの第2遺構面で検出した。平面プラン楕円形を呈し、長径254cm、短径216cm、深さ28cmをはかる。覆土は黒褐色土砂層の単純層であった。長径40cmに近い石を混じえて礫が出土している。礫のなかに珠洲焼片が2片出土している。床面はなだらかな壁面から続き皿状を呈す。

2号土壇 J 25・26、I 25・26グリッドの第2遺構面で検出した。P109土壇の西南方向5mの位置にある。平面楕円形プランを呈し、長径235cm、短径184cm、深さ46cmを測る。周囲には土壇、柱穴が密集している。覆土は黒褐色土砂層の単純層で、床面は中央部分が最も深くなる断面鉢状を呈している。内部には長径40cmの石が多数含まれ、長さ65cmの木片が伴出している。

P88土壇 I 28グリッドの第2遺構面で検出した。1号土壇の南西3mの位置にあたる。平面楕円形プランを呈し、長径280cm、短径240cm、深さ25cmを測り、床面は浅い皿状をなす。土壇内の東寄りに礫が列状をなして出土している。

P70土壇 H29・30グリッドの第2遺構面で検出した。1号土壇の東に隣接し、P88土壇から北東方向約4.8mの距離に位置する。平面楕円形プランを呈し、長径185cm、短径145cm、深さ23cmを測り、覆土は黒褐色砂層の1層でなり、床面は浅い皿状を呈する。覆土には礫に混じって木片が含まれ、板状を呈しているものもある。



第34図 土坑実測図(2-1)(1/50)

P149土壇 H26グリッドの第3遺構面で検出した。平面プランは楕円形を呈し、長径167cm、短径137cm、深さ70cmを測る。掘り方の北辺には石を列状に組んでいるのが遺存していた。覆土は上位から、茶褐色土、黄褐色土、炭化物を多く含んだ黄褐色土、黒褐色弱粘質土、暗灰色土の順序で堆積し、最下層を除いて10~20cmの厚さを持ちレンズ状土層を呈している。覆土の中位に礫群に混じって板状の不明鉄器1点が出土している。

1号土壇 H29グリッドの第2遺構面で検出した。P70土壇の西に隣接している。平面楕円形を呈し、長径200cm、短径160cm、深さ18cmを測る。床面は平坦で、長軸方向の両端部に径30cmのピットが掘り込まれていた。覆土は黒褐色砂質土層で、土壇下場付近に角礫が、中央部に木片、板状片が出土している。

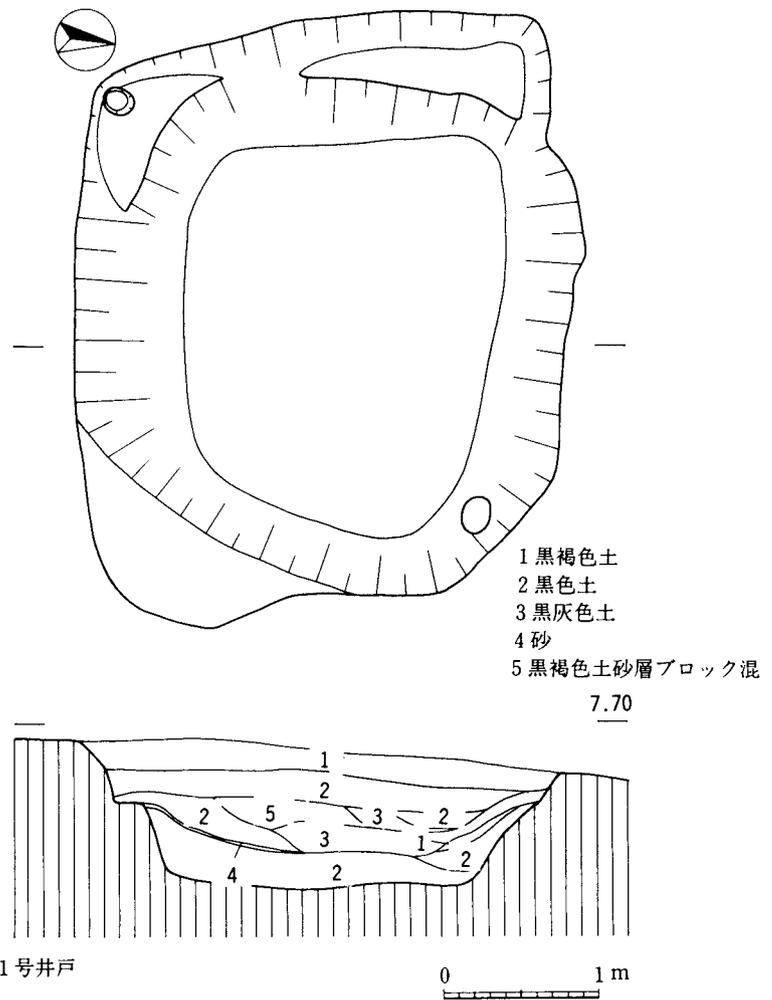
P79土壇 I29・30グリッドの第2遺構面で検出した。1号土壇の南方1.9

mに位置している。平面プランは楕円形を呈し、長軸方向を南北にとり、135cm、短径86cm、深さ28cmを測る。壁の落ち込みは他の土壇に比較して急角度で、床面はフラットにならされている。覆土は暗茶褐色土で埋められ、開口していたのではなく、すぐに埋め戻されたものと想定された。覆土からの出土遺物はなかった。

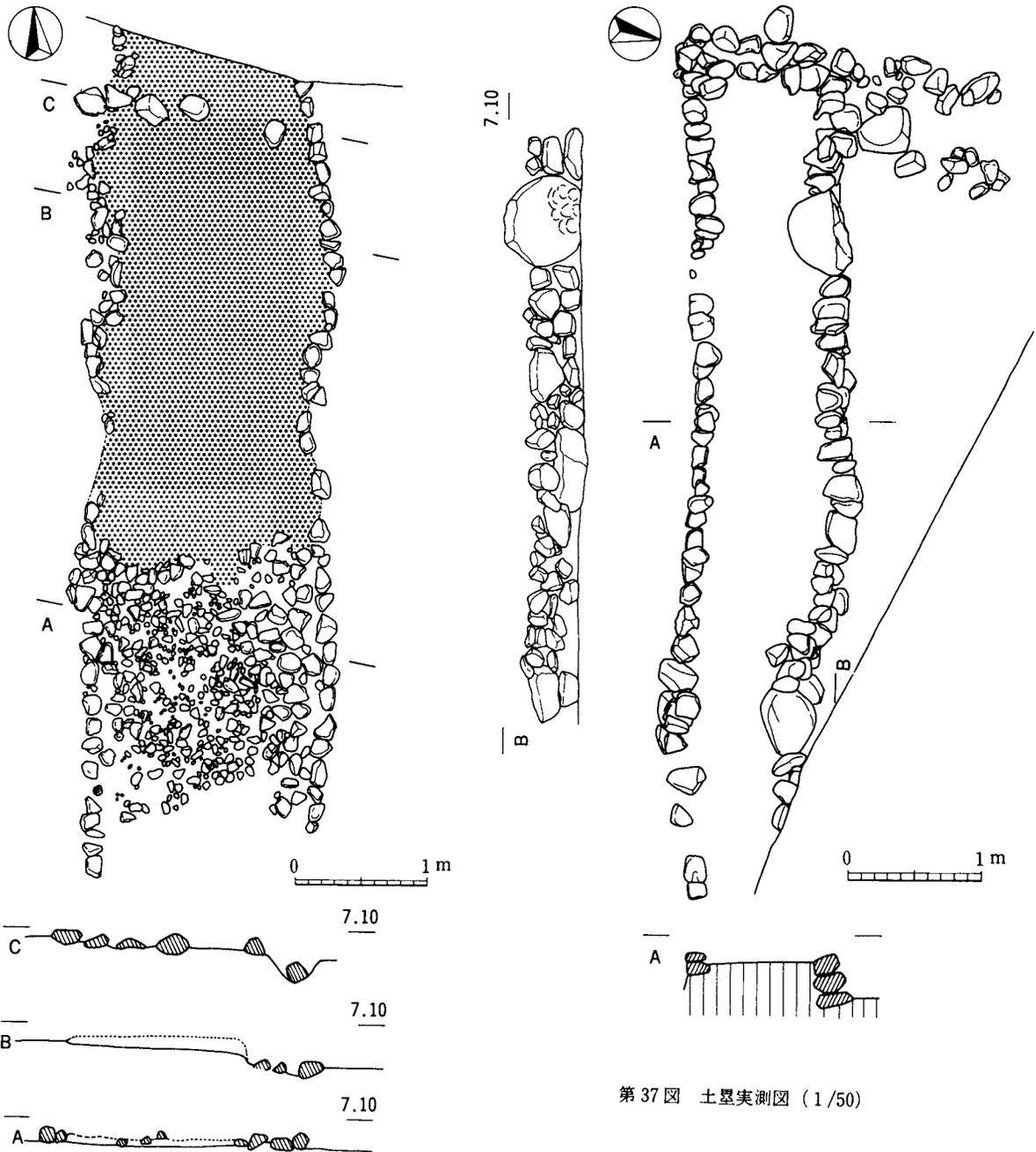
1号井戸 H31・32、I31・32グリッドの第2遺構面で検出した大型土壇で、当初は井戸跡と想定して掘り下げたが、確証が得られなかったので、土壇に含めて記述した。平面方形プランを呈し、長軸を東西方向に置く。長軸長さ375cm、短軸長さ330cm、深さ95cmを測る。東辺および南辺の掘り方は有段となるが、他の辺は比較的ゆるやかに落ち込む。覆土は砂の薄層を混じえて黒色土、黒褐色土が堆積し、上層位に木片等が出土している。掘り方肩部にはピット2個が見られる他、北西隅から溝遺構が1条北方へ走る。土塁溜槽に付属するように1条の溝も認められる点とともに水と深く関わる遺構と見て大過ないと思うが、性格は明快ではない。

(6) 建物跡

縄文時代(第21図) G20・21、H20・21グリッドで検出されたピット群、表土層下の黄褐色砂層(小礫層をかむ)に掘り込まれていた。P502~P516までの平面長楕円形をなし、東西方向約400cm、南北方向約270cmの範囲に16個のピットがあり、覆土は黒色土で土器片、フレイクを含んでいた。ピット群の北方約150cmに一括土器が出土している。



第35図 土壇実測図(2-2)(1/50)



第36図 道路実測図 (1/50)

第37図 土塁実測図 (1/50)

1号建物 (第15・16図) G32・33、H32・33グリッド、第1遺構面の礫群に含まれて検出しているが、時期的には第1遺構面より新しい時期のものである。南北棟で、東西2間(柱間220cm)、南北1間(220cmと240cm)分を検出、建物は北方の発掘区域外へのびてゆく。

第2～4遺構面から木柱根を遺存している柱穴を含めて多数を検出しているが、充分検討を加えてはいないので、さらに時間をかける必要がある。

(7) 道路 (第36図)

東調査区のG・H54グリッドの下層位で検出した道路で、ほぼ南北方位に置かれている。検出できた長さは630cmで、南側半分は井戸や攪乱層のために検出できなかった。路肩幅で150～195cmまでの間で小さく蛇行しな

から平均約180cm幅となる。路肩に無雑作に置かれた石の間は、小砂利がまかれ、厚さ5～10cmをはかる。東方150cmには下層位で検出した8号井戸がある。

#### (8) 石垣 (第37図)

東調査区の北東隅、H58、G58・59グリッドの下層位で検出された。西端部は南北方向に走る礫群と接続する形となり、礫群はG・H54グリッドの道路と約12mの距離をおいて1.8m幅の道路となる可能性が考えられる。下層位位置で検出された井戸との切り合いもさけられるようだ。石垣は幅120cm、現況長さ640cmを測り、北側での高さは三段積みの60cm、南側は二段積みで30cmを測る。

#### (9) 石組井戸 (第38・39図、図版15～17)

東調査区から9基の石組井戸を検出している。幾度かの出水によって壊滅したと想定され、発掘の結果少なくとも2面以上の生活面があったものとされた。層理面の把握が困難な暗褐色砂礫層が入り込んでいる為に、検出面で上下2層に便宜的に分層して記述する。石組井戸に付随する建物跡は幾本かの木柱根を東調査区東部下層で得ているものの、関係性をつかむまでには至らなかった。

上層位では4基、下層位では5基の検出である。上層位の4基は下層のそれらに比べて径が大きく深さもあるが、下層位のは出水によって上部が流出したものと考えられる。

3号井戸は径200cmの平面円形プランの掘り方を持ち、上端径100cm、深さ120cmの規模で、8段積みで組み上げている。最下段近くで30cmを越える大石を据えている。

4号井戸は3号井戸から東方へ約7mの位置にある。上端径110cm、底面径110cm、深さ180cmを測る10段積みの石組井戸である。最下段は40×35cmの大きさの石をめぐらしている。他の段の石も30×20cm程度の石が使われ、9基中で最も大振りの石が使われている井戸である。

5号井戸はJ58グリッドで検出されたもので、4号井戸の南東13mの距離にある。上端径90cm、底面径50cm、深さ110cmを測る。石積みは8段まで行われ、石組みは垂直からやや外傾する。

6号井戸はI57・58グリッドで検出された。5号井戸の北方約3mの位置にあたる。上端径85cm、底部径55cm、深さ183cmを測る最も深い井戸である。覆土上層約100cmは大きな石をかんだ礫層が入り、中層50cmは砂粒の大きな砂層が入り込んでいた。最下層約30cmはヘドロ状となった黒褐色細砂層がある。漆器椀(図版17)等の遺物は、中層と下層の境界付近が最も多く出土した。10段積みとなっており、壁の若干の凹凸が見られる。使われている石は上段から15×10cm、20×10cm、20×15cm、20×40cm、20×20cm、15×20cm、15×10cm、15×10cm、20×15cm、20×10cmという大きさのものが使われ、下段位では空間に礫をはさみ込んでいる。

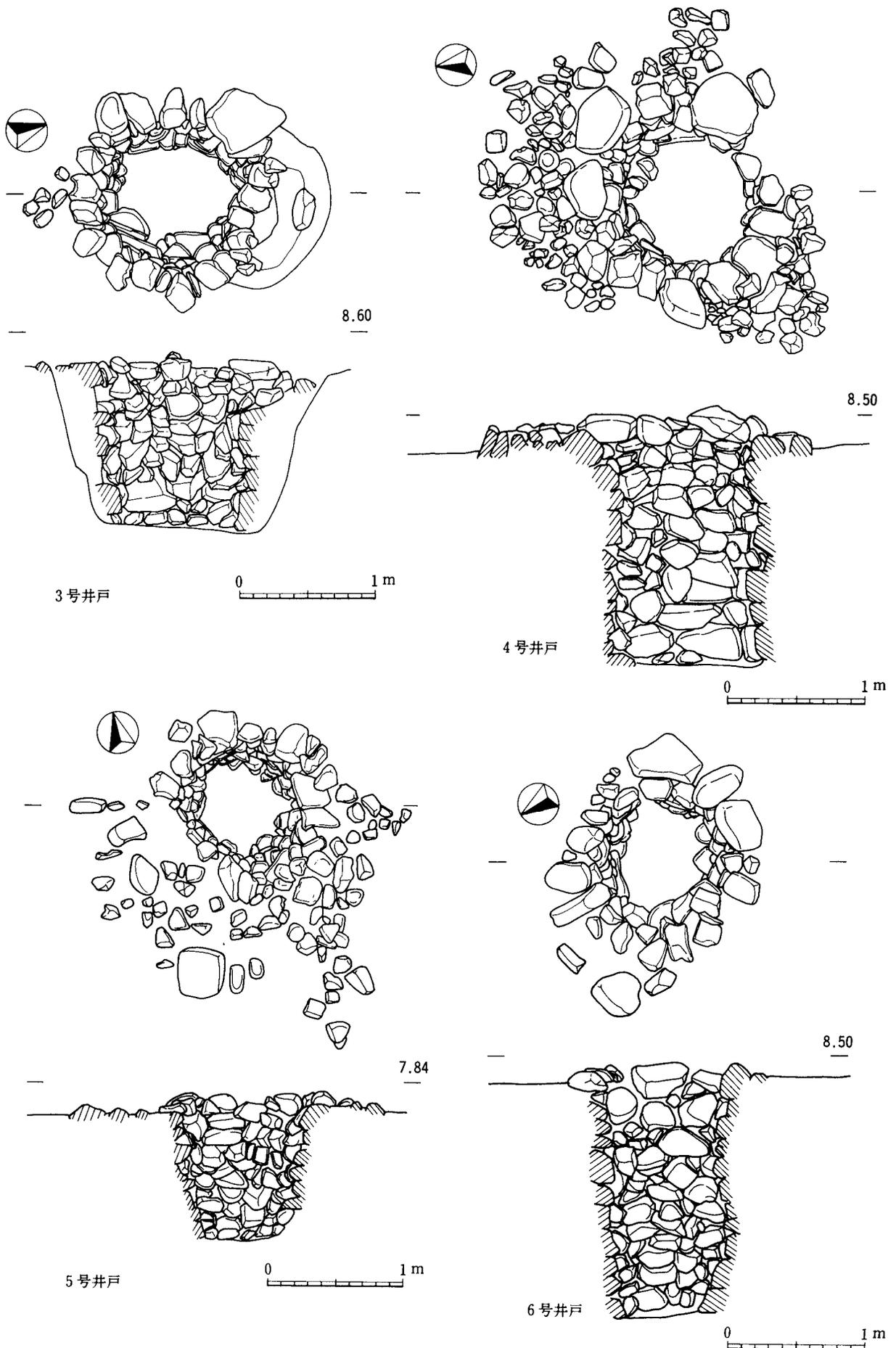
7号井戸は掘り方180cm×160cmの楕円形プランを持ち、上端内径90cm、底部径45cm、深さ55cmの規模を測る。5段積みで組み上げているが北西部分の崩壊が進んでいる。4号井戸の南西1.5mの位置にあり、検出レベル面の高さでは、格段の差があり100cm以上の距離をはかる。

8号井戸は発掘区の北端、4号井戸の5m北東方向に位置している。平面円形プランで径180cmの掘り方に、上端内径90cm、底面径80cm、深さ105cmの規模をはかり、端正な石組みとなっている。石組みは5段積みとなっている。

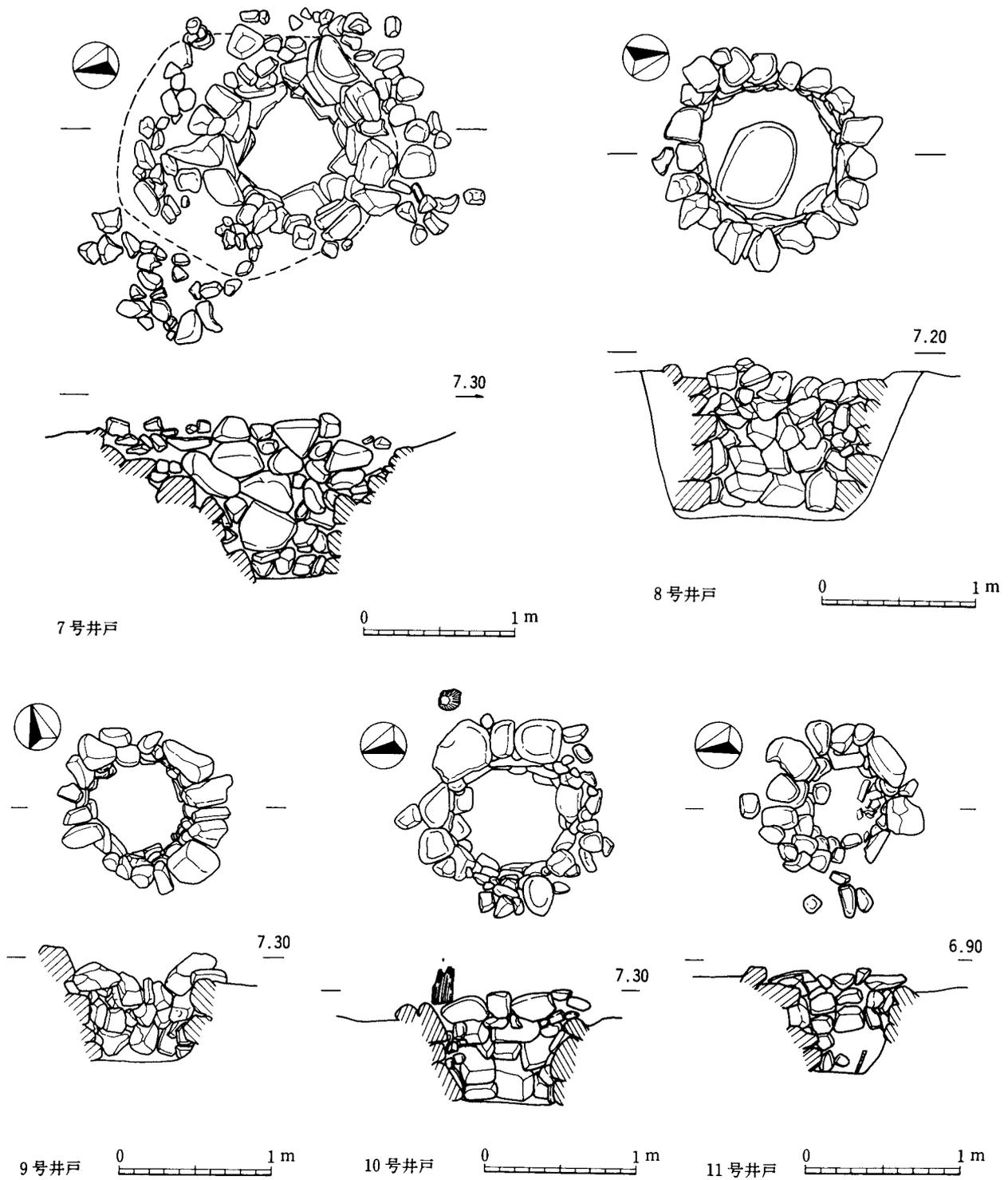
9号井戸はJ57グリッド、6・7号井戸の間に位置している。上端内径80cm、底面径55cm、深さ75cmを測る。石組みは3段までを数えるが、当初は数段高くなっていたものと想定できる。

10号井戸は東調査区の東端、I60グリッドに位置している。6号井戸の東方向約7mの距離に位置している。上端内径80cm、底面径55cm、深さ75cmの規模を測る4段積みの井戸である。

11号井戸はH59グリッド、10号井戸の北西方向約4mに位置している。9基の井戸のなかで最も深いレベルで



第38図 石組井戸実測図(2-1)(1/40)

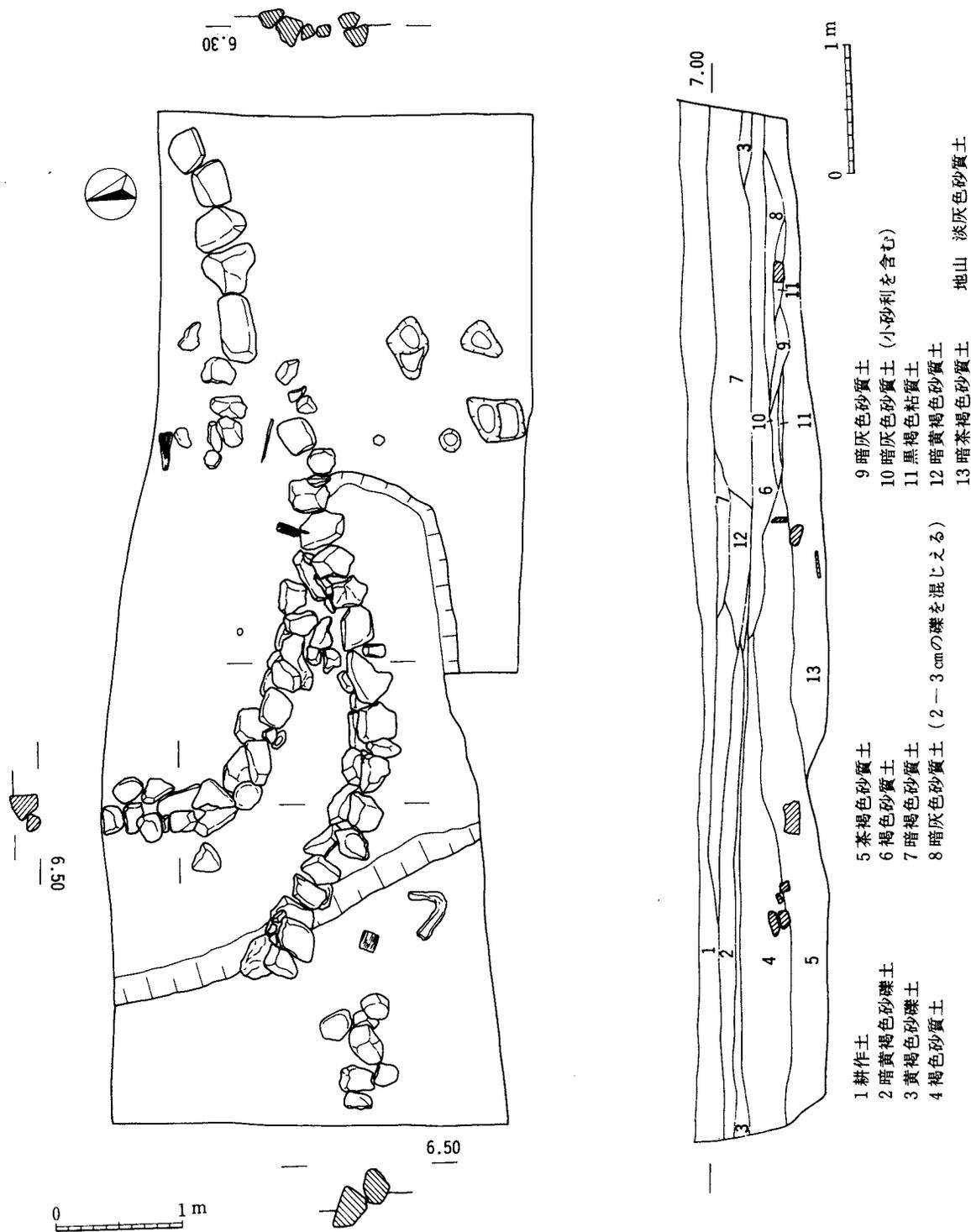


第39図 石組井戸実測図(2-2)(1/40)

検出した井戸である。上端内径60cm、底面径35cm、深さ65cmを測る規模の小さな井戸で、底面に幅10cm、厚さ2cmをはかる板で作られた桶が出土した。

(10) 東調査区最下層(第40図、図版17)

東調査区の西北隅、G52~54、H52~54グリッドで、列状になる礫の上端が見えていたので、試みに下層位の調査を実施した。層位での遺構面を観察すると4面までを見る事ができる。耕作土下層面で見られた4~6号井



第40図 東調査区最下層部実測図 (1/50)

戸の構築された面である。包含層はほとんどなく、暗黄褐色砂礫層、暗褐色砂礫層をベースとしている。木柱根等の遺物も少い。第2遺構面は上記の砂礫層が包含層となるものであるが遺物はほとんど含まれてはおらず、ベースの褐色砂質土（東地点では褐色砂礫層）で検出できた遺構は少い。木柱根や土器を包含している褐色砂質土層をとり除くと下層面の道路、石垣、7～11号井戸等の遺構面となる。層厚は約10～40cmを測る。本調査区で検出した弧状にめぐらした石列も同じ遺構にかかるものと考えられる。北西方向へベース面が10～20cm近く下位に位置し、微地形的な変化を含む傾斜変換線上にあるとみなされるからである。30～40cmの長軸を持つ石を弧状にめぐらし、一部は2重になる位置に若干の高低差を持たせて構築している。周辺部分には板状木片や杭などが検出された。段差のある地区の角付近になるのではと想定している。さらに30cm程の茶灰色砂質土、暗茶灰色砂質土を取り除くと、淡灰色砂質土となり今回の調査では9・10号井戸近くで見られた検出面である。

## 第4章 出土遺物

### 第1節 縄文時代の遺物

#### (1) 土 器

##### 1・前・中期 (第41図 1～18)

1群 (1～11) 粘土紐・渦隆帯・爪形文を施文するもの。1はW字状の浮上した波状帯を施したもので、波状帯は、上下から三角形の沈刻を施したものである。2～7は粘土紐を貼付したもので、2は半截竹管による連続爪形文を施した、浮隆爪形文、3は竹管文、6・7は、縄文地に細い粘土紐を貼付した、微隆起線（ソーメン貼り）で、平行線とひし形の区画文を施文している。8～11は、隆起線による平行線と、同心円状の渦隆帯を施文し、9の渦巻文中心には、ヘラ状工具によるケズリがみられる。

2群 (12～17) 木目状撚糸文と、Y字状の隆起線がみられるもの。12は口縁くの字状に屈折し、口辺部には、弧線・三角形区画、弧線・平行線の単位、胴部には、Y字状隆起線と平行線がみられる。16は口辺下部で、Y字状隆起線と平行線がみられる。13～15は木目状撚糸文を施すもので、13は、Y字状隆起線と平行線、16は平行隆起線区画内に、斜状文がみられる。

3群 (18) やや外反した胴部で、縄文地に、隆起線による平行線と渦文を施文するもの。

各群は、1群・福浦式、2群・朝日下層式、3群・赤浦第III期（古府式）に属する。

##### 2・後 期

1群 口縁部がゆるく外反するか、胴部から口縁部に直線的に開く深鉢形土器で、中期後葉、串田新式以来の胴部下半に、縦位の縄文を持ち、方形区画文、渦巻文、平行沈線を施文するものを一括した。(第42・43図・1～47)

1類 (1～21) 縦位の縄文を施文するもので、縄文帯が太く荒いもの (1～14)、細かいもの (15～21) がある。器形は、縄文帯が荒いものは、胴部から外反するもの (1～3)、直線状に開くもの (4～13)、やや内湾するもの (14) がある。細かいものは、外反するもの (15～18)、直線状に開くもの (19～21) がある。

2類 (22～32) 方形区画文、三角形区画文、渦巻文を施文するもので、無文地に施文するもの (22～25・28)、縄文地に施文し、区画内を磨消すもの (26・27、29～32) がある。22～24は、三角形区画文をもつもので、22・23は3～5mmの棒状工具で沈線をひいている。25～28は、方形区画文をもつもので、やや外反する器形をとる。29はくの字状の区画をもち、平行沈線内と区画内は、磨消されている。30～32は渦巻文と弧線文を施文し、区画内・外は、磨消されている。

3類 (33・34) 外反する器形で、33は、太い平行沈線と縦位の平行沈線区画内に、列点文と平行沈線を施文する。34は、平行沈線区画内に、ヘラによる幅広の楕円文が施される。

4類 (35～47) 磨消手法を用いないもので、平行沈線と渦巻文を施文するもの (35～37) と、平行沈線と斜方向の沈線を施文するもの (38～47) がある。47は、波状口縁のやや外反する深鉢形土器で、口辺部では平行沈線、胴部では縦方向の沈線と、斜方向の沈線がみられる。

第1群の2類・4類は堀ノ内II式、3類は前田式、4類は、志賀町火打谷大垣内遺跡第3群5類、七尾市赤浦遺跡第V期・第1群1・2類、押水町上田うまばち遺跡第1群に類似する。

##### 2群 (第44～46図 1～110)

胴部から口縁部に直線状に開く精製の土器で、器形は、深鉢形土器、浅鉢形土器、注口形土器がある。文様は



第41図 縄文式土器

条線による平行線、弧線、渦巻文、沈線によるS字状文がある。

1類(1~5)平行線と弧線を施文するもので、直口状に開く深鉢形土器。5は14条の条線で、連弧文を施す。

2類(6・7)渦巻文を施文するもの。

3類(8~12)蛇行状文を施すもの。

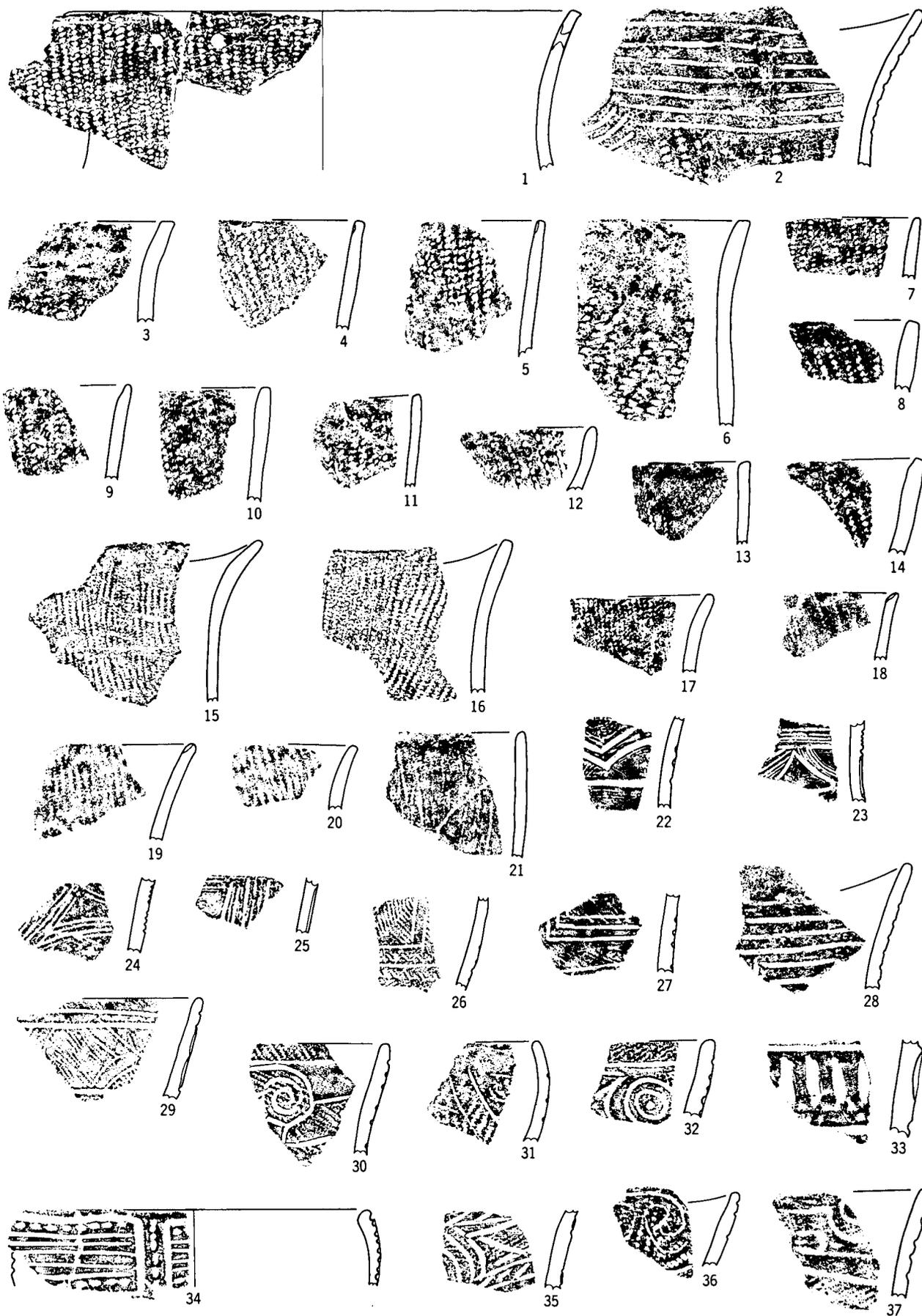
4類(14・15)条線を沈線の短線で連結するもので、14は平行沈線、15は平行沈線と弧線を連結する。

5類(16)平行沈線区画内の条線を、沈線の短線で切るもの。

6類(17・18)条線を円文で切るもので、17は縦縄文を施す。

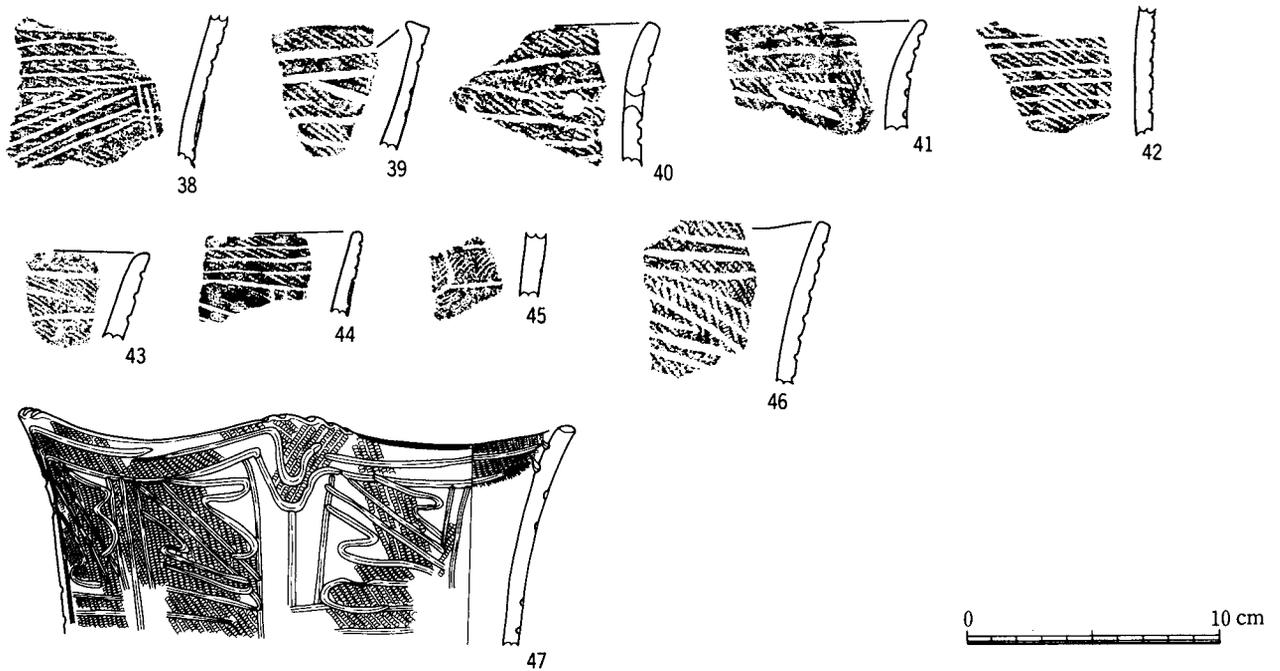
7類(19~44)条線文のみのもの(19~27)と、平行沈線間に条線を施すもの(28~43)で、器形は直口状に開く深鉢形土器。29は平行線を縦位の沈線で切る。39は内面に刻み目を施す。42は、平行沈線とコの字状沈線が連結している。

8類(45~59)S字状沈線を施すもの。45~48・59は縦縄文を施す。45は平行沈線を切るもの。46~48は平行沈線区画内に条線を施し、連結するもの。49・50は、沈線区画内の条線を切るもの。51・52は、帯縄文を切っている。54~57は波状口縁で、54・56・57は沈線を切り、55は条線を切っている。58は斜縄文に平行沈線を施し、沈線で切っている。沈線下部は羽状様としている。59は縦縄文に平行沈線を施す。



第42図 縄文式土器

0 10 cm



第43図 縄文式土器

9類 (60~62) 沈線による円文を施すもの。60は向かいあった「の」の字状文、62は縦位の円文で、帯縄文を切る。

10類 (63~73) 注口形土器。63・64は円文を施すもので、63は弧線文、64は3本の沈線を切っている。65~67は球形状の胴部で、弧線文による波状区画を、連結させた文様を施す。波状区画内には弧線文、連結部には小点をおす。68は内面で、直口状に開く。端部には刻み目文と列点文、胴部には、2本の沈線と条線を施す。69・70は条線による刻み目文を施すもので、69は弧線文、70は平行線を施す。71は球形状の胴部で、2列の蛇行状文を施す。72は沈線内に条線と、端部に細い沈線、細かい刻み目を施す。73は、沈線とS字状文を施す。

11類 (74~84) 刻み目文を施すもの。74~76は同一個体と思われるもので、口唇は内屈し、端部には刻み目を施す。75の内面には沈線が施される。77は平行沈線間に刻み目を施すもの。78・79は、平行沈線間に三角状の刻み目を施すもので、79の口唇は内屈し、内面には2列の沈線を施す。81~84は口唇部に刻み目を施すもので、82の口縁は、直角状に内屈する。83は口縁くの字状に内屈し、屈曲部には刻み目文、内面には、端部に刻み目文、胴部に太い沈線を施す。84は細かい刻み目を施す。

12類 (85~104) 内面に沈線・帯縄文を施すもの。85は内・外面に、帯縄文を施す。86は沈線間に縄文を施し、内面には2本の沈線を施す。87は、帯縄文に平行沈線を施すもの。88は波状口縁で、楕円区画文、内面に弧線文を施す。89は3本の弧線文を施す。91~104は無文土器で、91~96・103は口縁外反し、97~102は直口状に開く。94・96は細い沈線を2本施すもの。99・100は刻み目文を施すもので、99は沈線と条線間に刻み目を施す。100は沈線間に刻み目を施し、区画内に条線を施す。101は平行沈線と列点文、102は長楕円区画を施す。103は、2本の平行沈線をS字状沈線で切る。

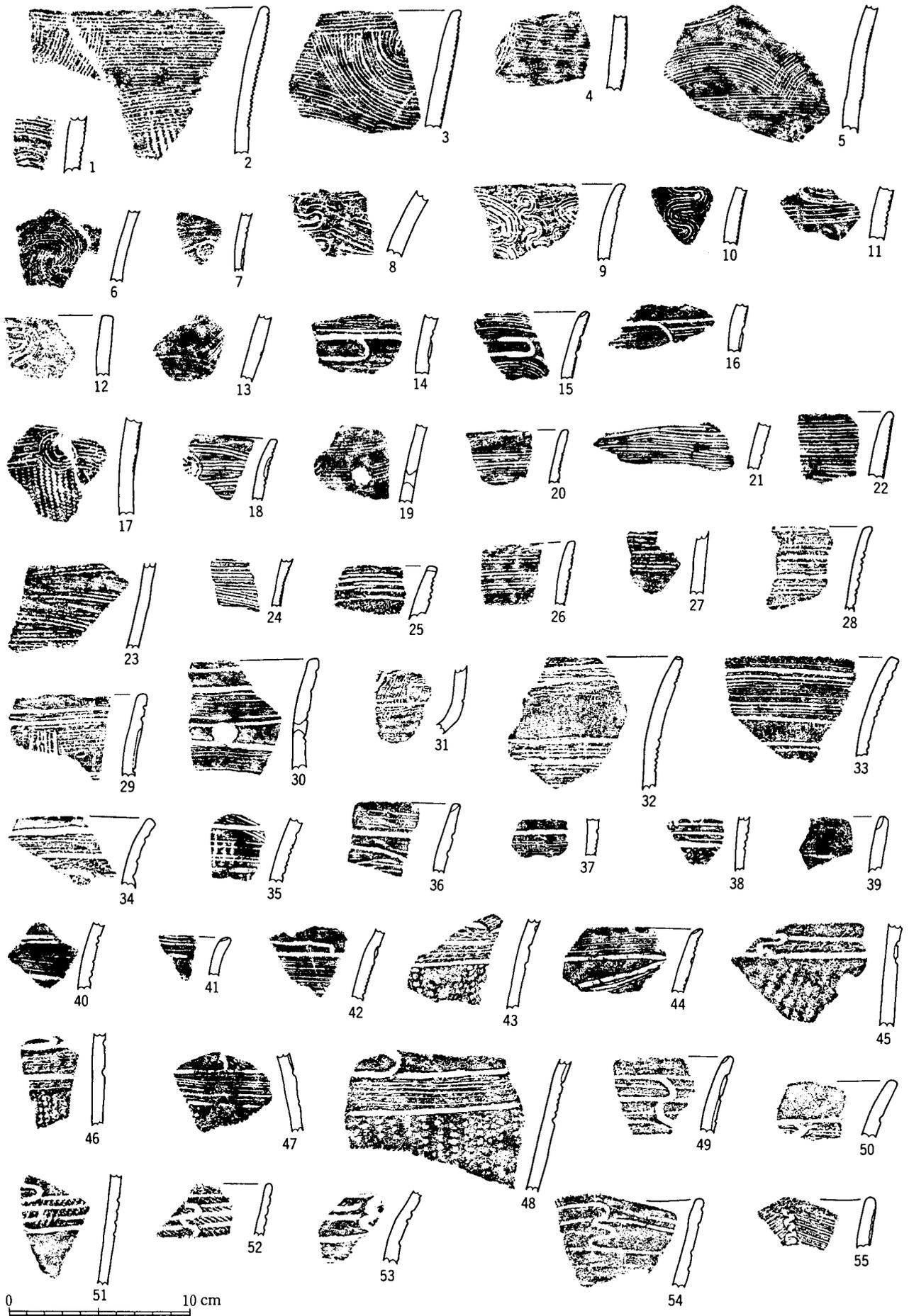
13類 (105・106) 波状沈線区画内に、条線を施すもの。

14類 (110) 椀形土器で、正面には沈線によるS字状文、側面には三角形区画文と、弧線文を施す。

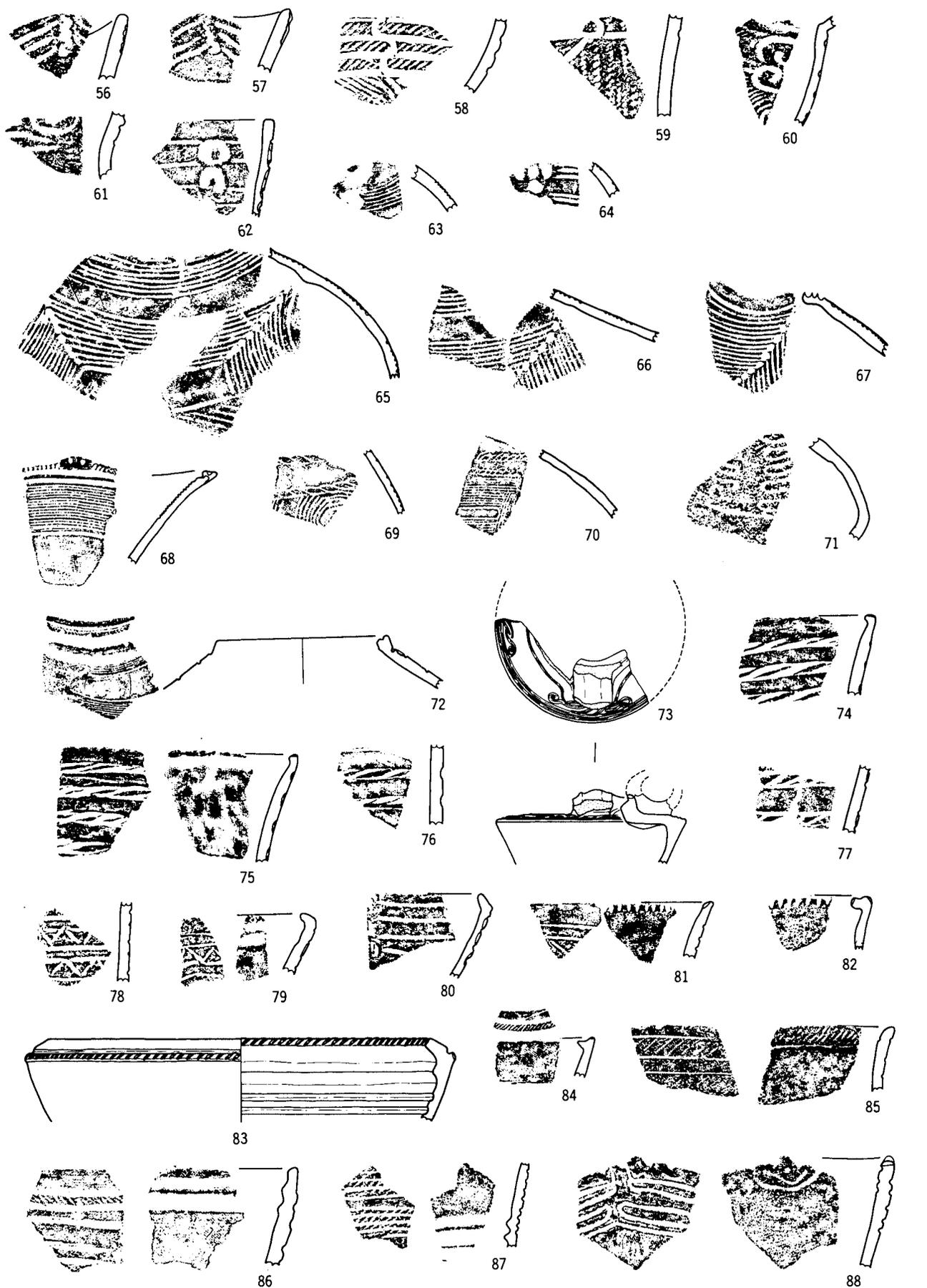
本群の条線文系土器は、本江遺跡加曽利 B<sub>1</sub> 様式第4型、三仏生遺跡第三類土器、第七類土器、8類のS字状沈線、10類の注口型土器は、横北遺跡 I 群、11類は本江遺跡加曽利 B<sub>1</sub> 様式第2型、10類の71や、14類椀形土器のS字状沈線は、桑飼下式に類似する。

3群 酒見式土器 (第47~50図 1~115)

1類 (1・2) 波状沈線を施し、沈線区画外を磨消すもの。深鉢形土器で、1は口縁外反するもの。内面には



第44図 縄文式土器

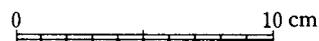


0 10 cm

第45図 縄文式土器



第46図 縄文式土器



縄文が施される。

2類（3～6）帯縄文に平行沈線を施すもの。3は内湾する鉢形土器で、2本の平行沈線がひかれる。4～6は直口型の深鉢形土器で、4・6は、帯縄文に1本の平行沈線を施す区画を、2列施す。

3類（7～20）口縁部に帯縄文を施すもの。7は口縁くの字状に内屈する。9～14は内湾するもので、13の口縁端部は、断面コの字状である。15は強く外反するもの。

4類（21～32）帯縄文を施すもの。口縁くの字状となるもの（28）、やや湾曲するもの（32）がある。

5類（33・34）口縁部に帯縄文を施し、胴部に弧線を施すもの。

6類（35～37）帯縄文を沈線の短線で切るもの。36は細かい縄文を施文し、37は2本の短線の単位がある。

7類（38・39）帯縄文に平行沈線を施し、短線で切るもの。

8類（40）やや外反し、帯縄文を弧線で切るもの。

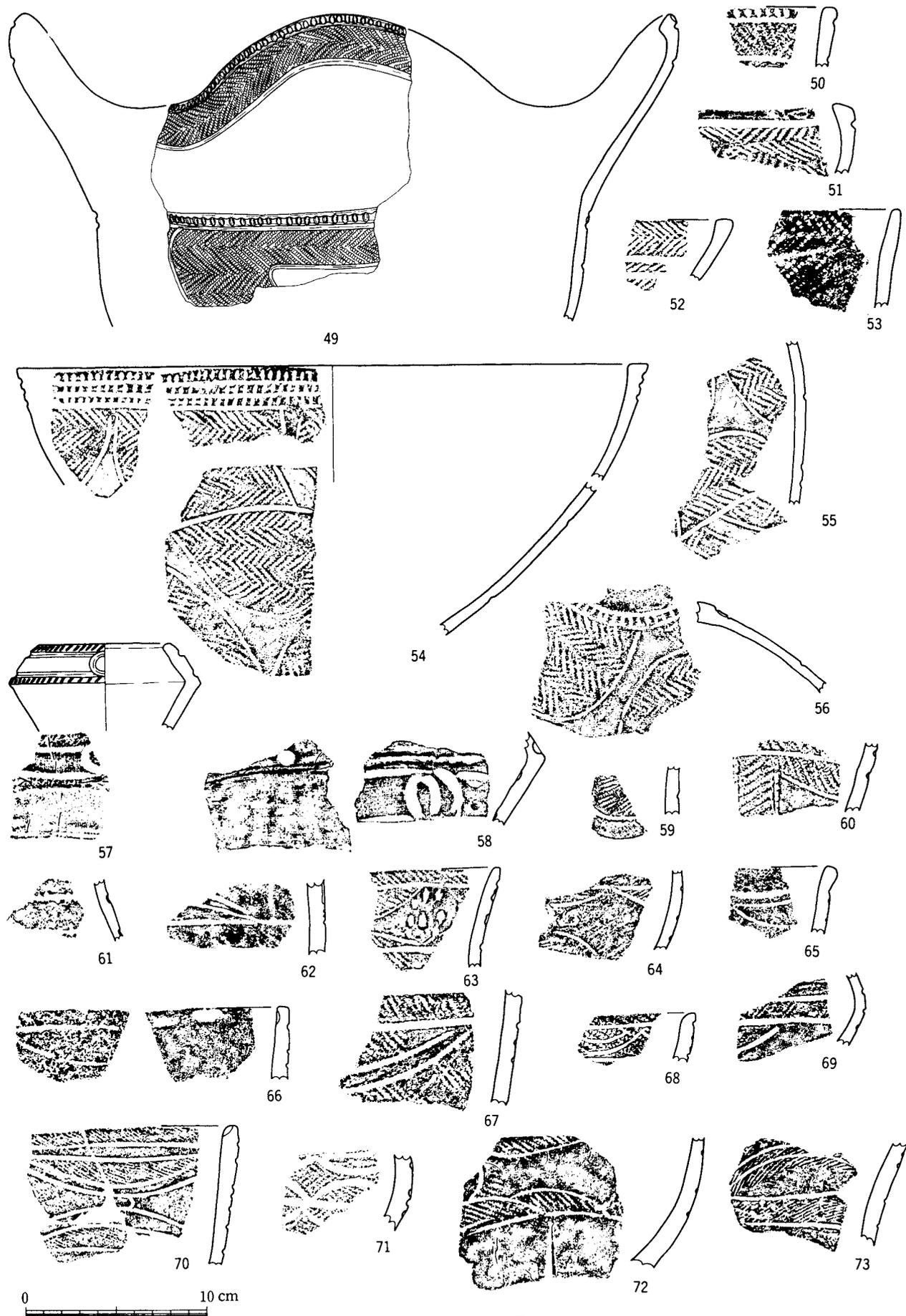
9類（41・42）帯縄文を短線で連結するもの。42は弧線で連結する。

10類（43・44）43は帯縄文と弧線文を連結するもの。44は沈線の短線が施される。

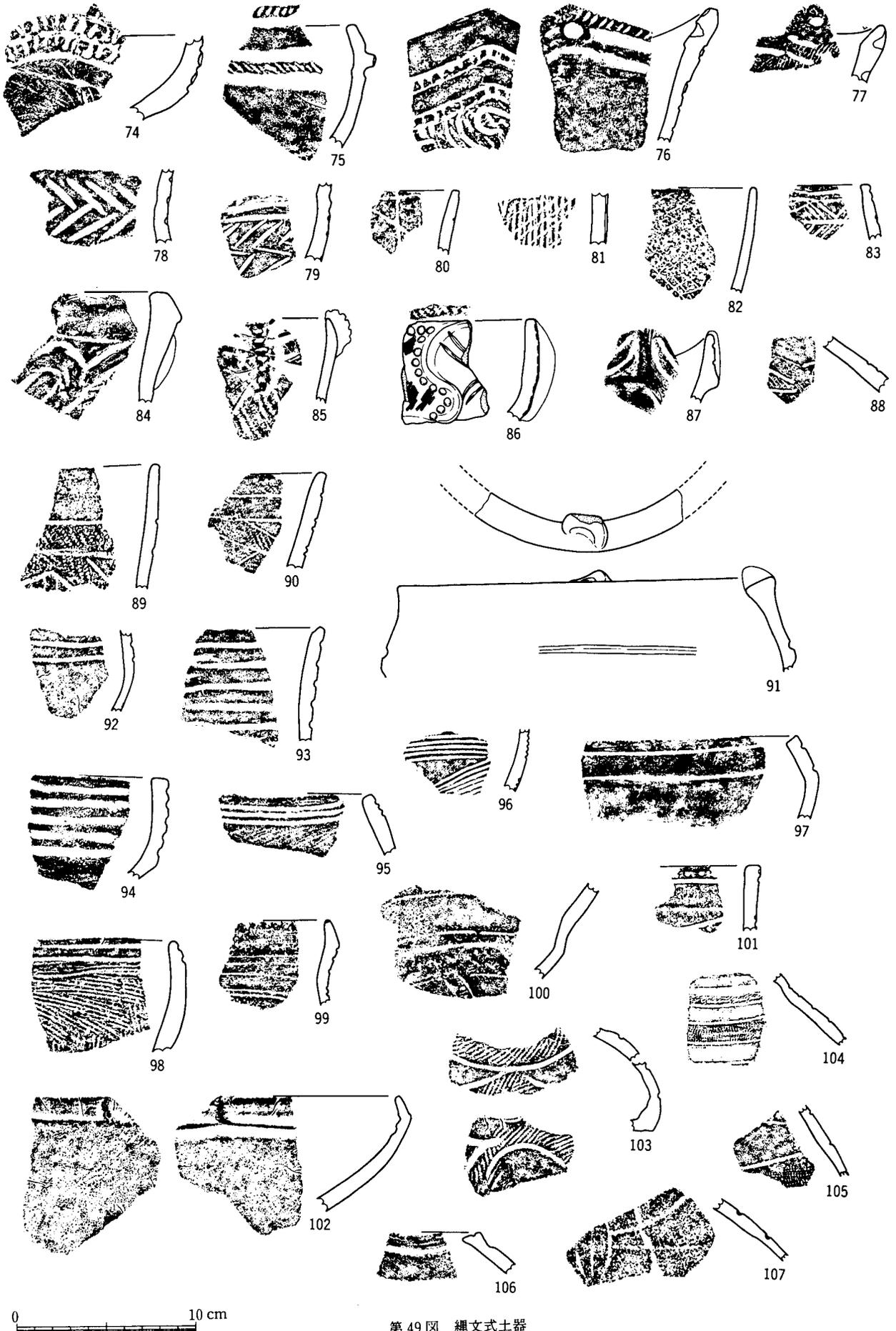
11類（45～48）刻み目文を施すもの。45は外反し、口縁部に帯縄文と刻み目を施す。46は湾曲し、平行沈線と刻み目を施す。47はくの字状に屈折し、弧線文と平行沈線に画された刻み目を施す。48は口縁部に2本の太い沈線と、屈折部に太い刻み目を施す。



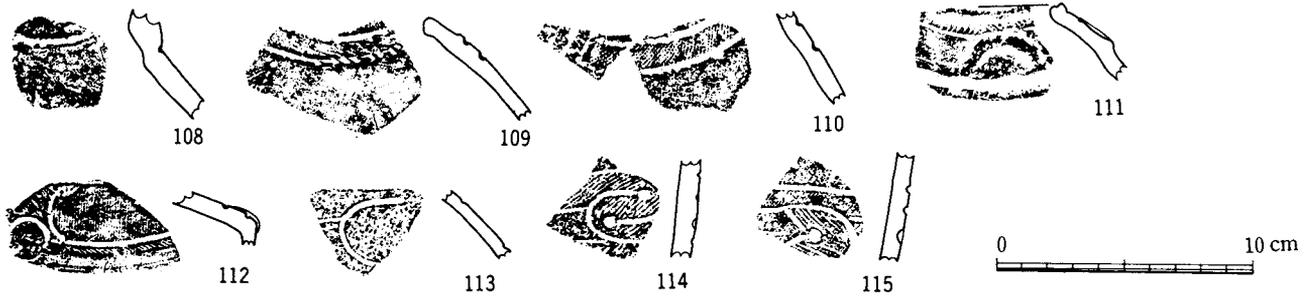
第47図 縄文式土器



第48図 縄文式土器



第49圖 繩文式土器



第50図 縄文式土器

12類(49~56)羽状縄文を施すもの。施文は縦位のもの(50)と横位のもの(49・51~56)、刻み目を施すもの(49・50・56)がある。49はキャリパー状の深鉢形土器で、口縁部とくびれ部には、沈線で画された刻み目文、沈線区画内には羽状縄文を施文する。50は縦位のもので、口縁部には刻み目を施す。52は口縁部に羽状縄文、胴部は斜縄文に沈線を施す。54~56は弧線区画内に横位の羽状を施すもの。54は球形状の胴部で、口縁部には3段の刻み目文、56は1段の刻み目文を施す。49・50・54~56は、加曽利B<sub>2</sub>並行期のものである。

13類(57・58)口縁くの字状に内湾するもの。57は刻み目文と沈線による円文を施す。58は外面に円形刺突文と、内面に『の』の字状沈線を施す。

14類(60・61)沈線内に刺突文を施すもの。60は、縦位の沈線と斜位の沈線区画内に縄文を施す。61は平行沈線を、刺突文で切るもの。

15類(62~73)弧線文を施すもの。63・64は沈線区画内に、向かいあった連弧文を施すもの。63は磨消し部に、列点文を施す。66は内面に列点文を施す。68は斜縄文に平行沈線と、2段の連弧文を施すもの。70は直口する深鉢形土器で、平行沈線区画内には、短線で連結する向かいあった弧線文を施す。71・72は球形状の胴部で、71は斜位の縄文地に、平行沈線と向かいあった連弧文を施す。72は平行沈線と、切り合う弧線文を施す。73はやや外反し、平行沈線と弧線区画内の一部を磨消す。

16類(74~83)刻み目を施すもの。74・75は球形状の深鉢形土器で、74は平行沈線間に太い刻み目文、75は突起部に刻み目文、口縁端部に縄文を施す。76は、外反する波状口縁の深鉢形土器で、外面には2段の刻み目文、内面には太い沈線と刺突文、口縁部には刻み目を施す。77は波状口縁で、波頂部には円形刺突文、口辺部には、沈線の短線を施す。78・79は、矢羽状沈線を施すもの。80~82は格子目文を施すもの。83は沈線内に三角形区画を施す。

17類(84~87)隆帯を施すもの。85は縦長の隆帯に刻み目を施す。86は隆帯際に列点文、口唇部に縄文を施す。87は波状口縁で、隆帯際に楕円文を施す。

18類(88)沈線末端に、刺突文を施すもの。

19類(89・90)帯縄文と斜位の帯縄文を施すもの。

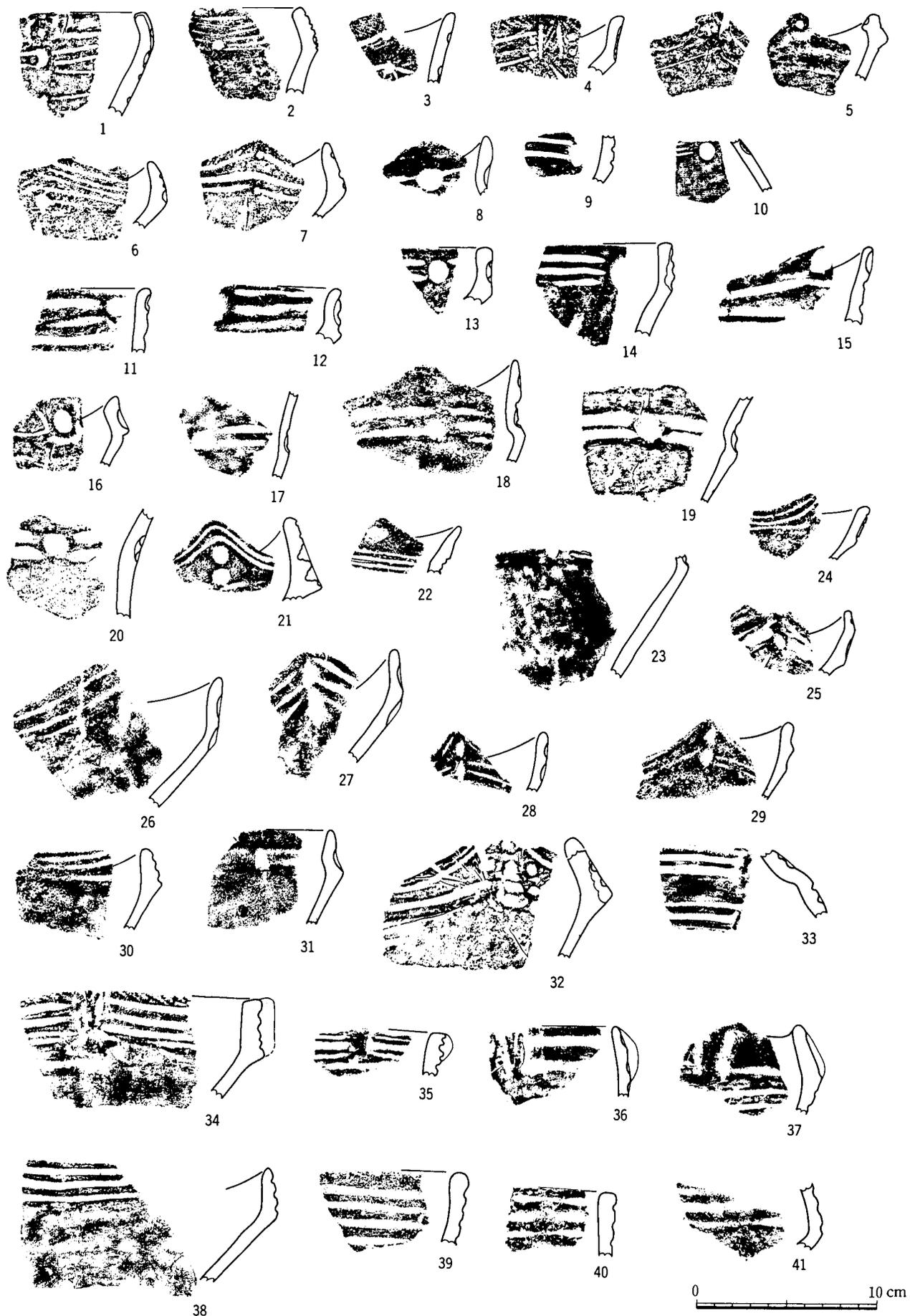
20類(91~100)平行沈線を施すもの。91はくの字状に内屈し、口唇部に円形の隆帯を施す。93・94は、口縁部に5本の平行沈線を施す。96は平行沈線と斜位の平行沈線を施す。97は口縁くの字状で、2本の平行沈線を施す。92・95・98は、口縁部に幅の狭い沈線を施すもの。99は口縁くの字状に内湾し、端部に刻み目を施す。100は鉢形土器で、くびれ部に平行沈線と弧線を施す。

21類(101)平行沈線と、口縁部に列点文を施すもの。

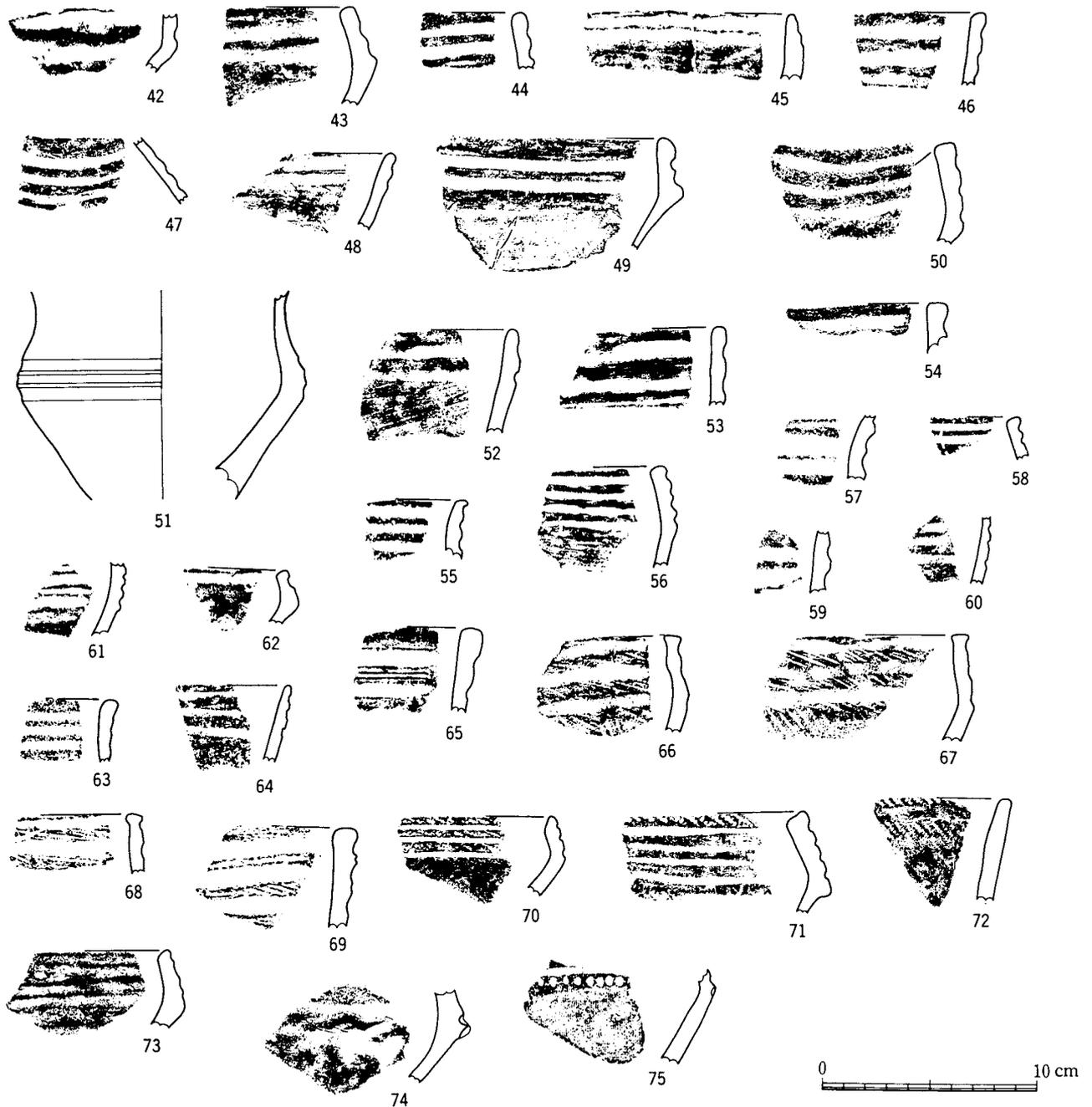
22類(102)口縁くの字状に内湾する鉢形土器。内面には太い沈線と隆帯を施す。

23類(103~113)注口形土器。103は球形状の胴部で、平行沈線と弧線文を施す。104・105は貝殻擬縄文を施すもの。106は口縁端部に沈線を施す。107~110は沈線内に連続刺突文を施すもの。107は弧線と平行沈線内に施し、縦位の弧線文で切る。110は縦位の沈線を施す。111は半円形の隆帯と、細かい刻み目文を施す。112・113は末端刺突文を施すもの。112は円形の隆帯と、細かい刻み目を施す。104~112は、一乗寺K式に類似する。

24類(114・115)末端刺突文を施す深鉢形土器。114は平行沈線を丸め、先端部におす。115は、平行沈線と斜



第51図 縄文式土器



第52図 縄文式土器

位の沈線の交点におす。

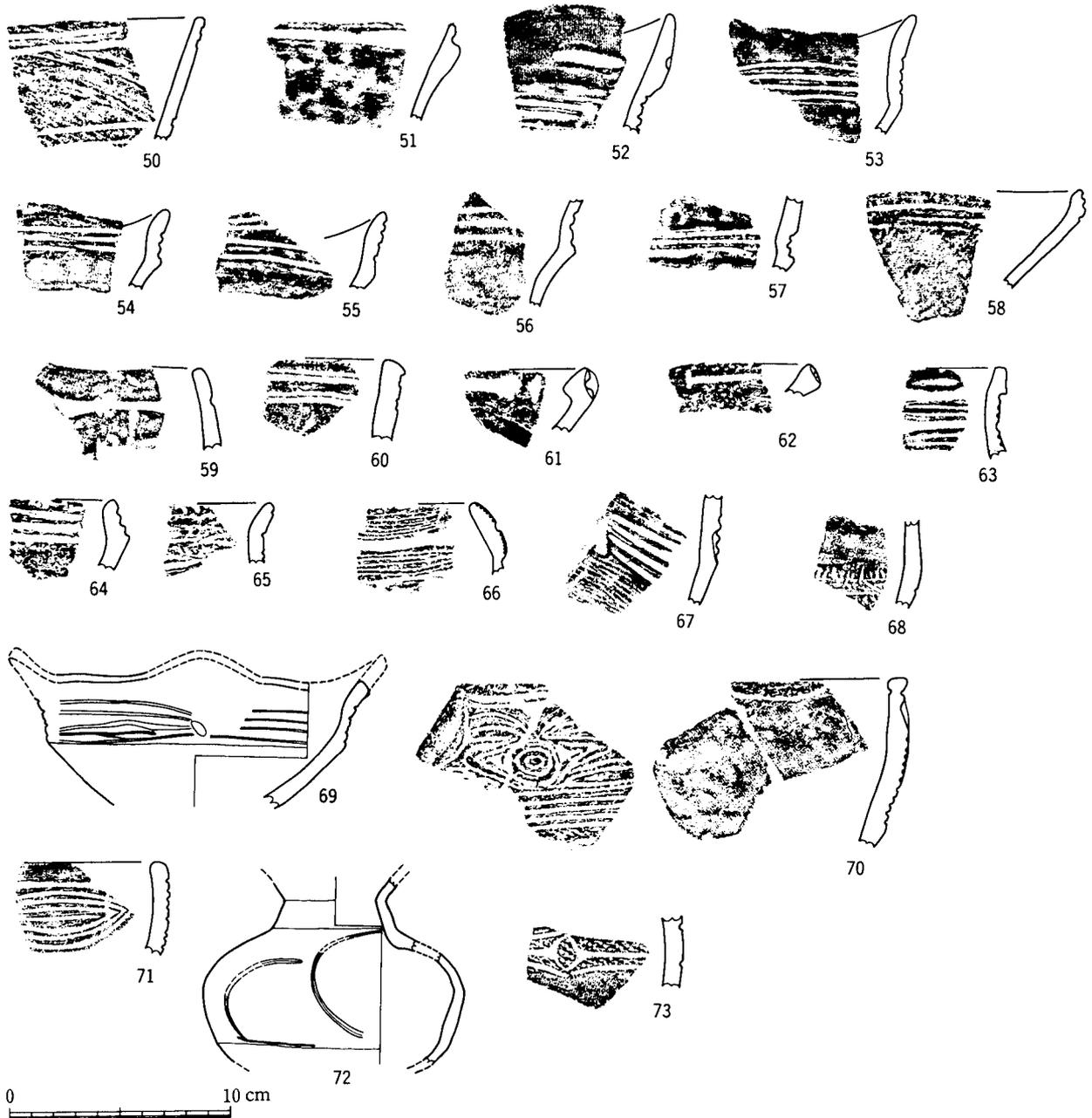
4群 井口式土器 (第51・52図 1~75)

1類 (1~32) 貝殻による圧痕を口辺部に施すもの。小円形 (1~7)、円形 (8~23)、長楕円形 (26~30)、貝殻文 (32) がある。1~7は口縁くの字状のものと、外反するもの (3) があり、細沈線を施すものである。5は2本の細い沈線と、波頂部内面に刺突文を施す。8~23は口縁くの字状のもの (13~16・21・23)、外反するもの (10・17~20・22) がある。施文は、口辺部に施し、太い沈線のもの (11・12)、波頂部に施すもの (15・16)、胴部屈折部に施すもの (17~19) がある。21は波状口縁で波頂部には、2本の沈線と2個の円形圧痕を施す。24~30は波状口縁で、波頂部におす。32は波状口縁で、口縁部には2本の沈線、波頂部には貝殻文と、4個の刺突文を施す。

2類 (34~37) 縦長の隆帯を施すもの。34~36は平口縁、37は波状口縁で、34は口縁部に縄文を施す。37はくの字状口縁で、屈折部には平行沈線がひかれる。



第53図 縄文式土器



第54図 縄文式土器

3類 (38~40) 平行沈線を施すもの。38は波状口縁である。

4類 (41~64) 太く浅い沈線を施すもの。口縁形態はくの字状のもの (41~43、49・50・56) と、内傾・外反する鉢形土器 (47・48) がある。51は胴部でくびれる深鉢形土器で、くびれ部には、3条の平行沈線を施す。

5類 (65~69) 縄痕文地に、平行沈線を施すもの。65は平行の条痕文、66~69は斜状の条痕文を施す。

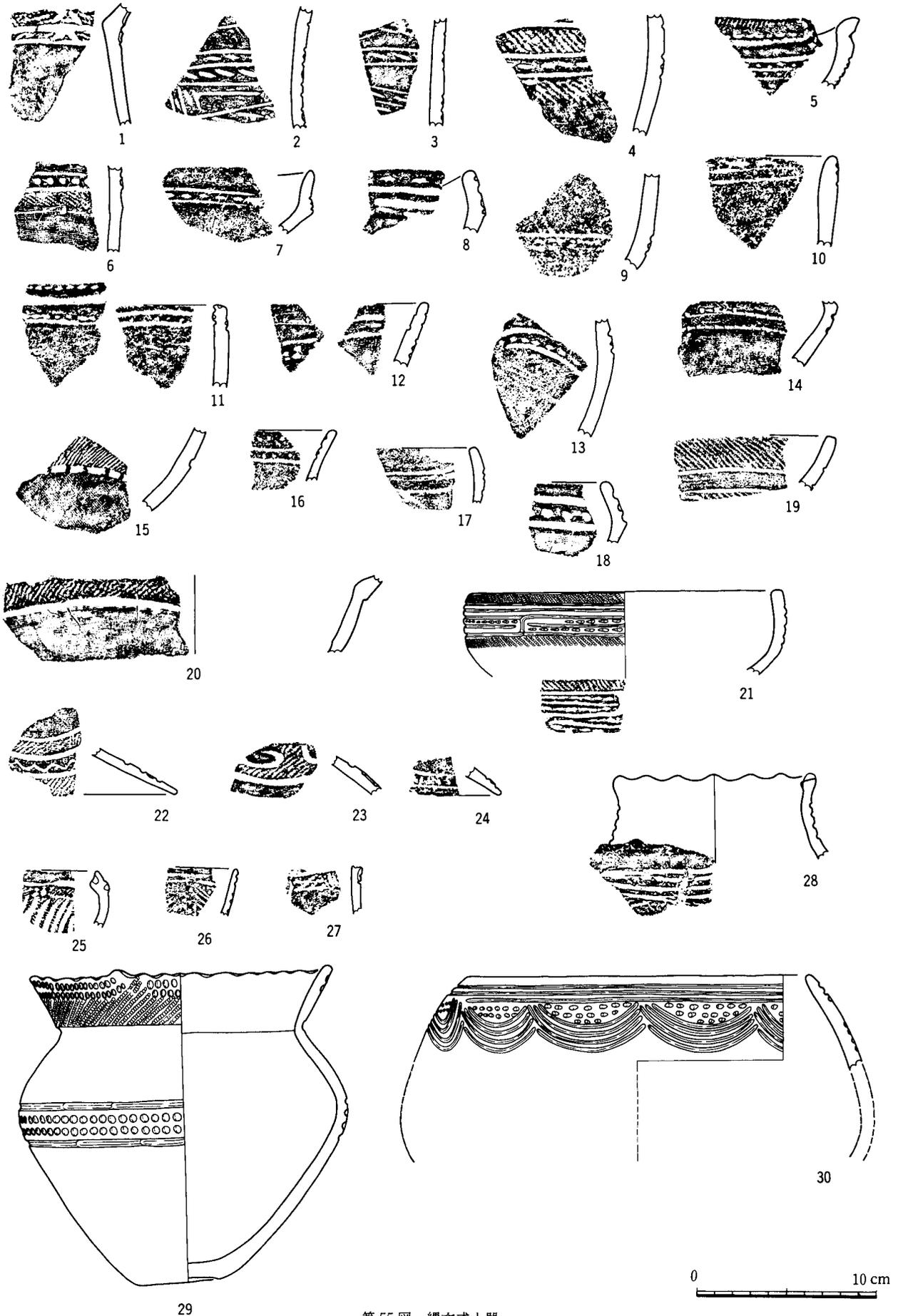
6類 (70・71) 縄文を施すもの。くの字状口縁のもので、70は3本の平行沈線、71は口縁部に縄文と、4本の平行沈線を施す。

その他 (72~75) 72はやや外反する深鉢形土器。73はくの字状口縁で、口縁部には4本の浅い沈線を施す。74はくの字状に屈折し、刻み目を施す。75は列点文を施す。

### 3・後・晩期

#### 1群 八日市新保・勝木原式 (第53・54図 1~73)

口縁部がやや内湾・外反する鉢形土器と、やや内湾・外反する深鉢形土器、注口形土器 (72) があり、沈線は



第55図 縄文式土器

細目のものである。文様は、平行沈線を細い短線・弧線・楔形文で切るもの、三叉文・工字文がある。

1類(1~6)弧線の短線を施文するもの。波状口縁で内湾するもの(1)、胴部から外反し、屈曲部に施文するもの(4)、波頂部に山形三叉文を施文するもの(1・6)がある。

2類(7・8)沈線を細目の楔形文で切るもの。平口縁で、くの字状に屈折する。

3類(9・10)沈線を1本の短線で切るもの。平口縁で、9の口縁部は屈折し、10はゆるく外反する。

4類(11・12)沈線を3本の短線で切るもの。波状口縁で、口縁部に弧線文を施す。13は平行沈線を弧線で切っている。

5類(14~18)楕円形・長楕円形区画を施すもの。14は外反し、区画内に平行沈線を施す。15はややくびれ、区画内には平行沈線を施す。16は区画内に2本の平行沈線と、沈線間に列点文を施す。17は区画内に楕円文、18は3本の平行沈線を施す。

6類(19~21)楕円形区画を施すもの。19・20は口縁くの字状の鉢形土器で、3本の沈線を施す。

7類(22~24)工字文を施すもの。

8類(25~47)口縁部に細い沈線と縄文を施すもの。26~28は波状口縁で、くびれ部に平行沈線、口縁部に縄文を施すもの。30・31はやや外反する波状口縁のもの。32~35は平口縁で、口縁部に縄文を施すもの。37~39、41~44はくの字状に屈折し、縄文を施すもの。45は外反するもの。46・47は鉢形土器。

9類(48・49)やや内湾する深鉢形土器。口縁部に縄文を施す。

10類(50~69)平行沈線を施すもの。50は、縄痕文で、口縁部と胴部に平行沈線を施す。52~55は波状口縁の深鉢形土器。61・62は鉢形土器で、平行沈線を短線で切るもの。66は内湾し、細い沈線を施す。67は波状口縁で、4本の平行沈線を、縦位の短線で切る。69は波状口縁の鉢形土器。4本の沈線と列点を施す。

その他(70~73)70は平行沈線と玉抱き三叉文、口縁内面には、沈線を施す。71は楕円区画をもつ鉢形土器。72は注口形土器で、胴部にC字状の弧線を施す。73は縄文地に三叉文を施すもので、勝木原式である。

## 2群 中屋式(第55・56図 1~31)

1類(1~3)沈線間に刻み目を施すもの。1は内面くの字状に屈折し、平行沈線とハ状の刻みを施す。2・3は沈線間に、右下がりの刻みを施す。

2類(4~18)列点文を施すもの。4~6は縄文を施すもので、5は波状口縁である。7・8は波状口縁で、7は平行沈線間に列点文、8は口縁部とくびれ部に、列点を施す。9~12・14・16は刺突文を施すもの。11は外面の平行沈線間と、口縁端部、内面に施す。12は内面に2本の平行沈線を施す。14は平行沈線内に連続刺突文、16は内面に平行沈線と刺突文を施す。13は内湾し、弧線の沈線間に施す。15は湾曲する鉢形土器で、縄文と列点文を施す。

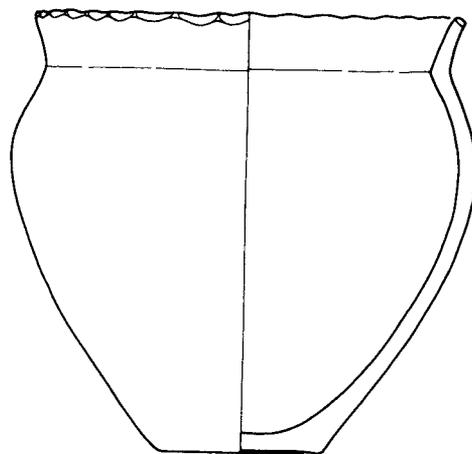
3類(19・20)縄文を施すもの。19は内湾し、20は施文部から外反する。

4類(21)鉢形土器で、楕円区画内に平行沈線と列点文を施すもの。

5類(22~24)蓋形土器。22は帯縄文と波状文、23は入組文、24は平行沈線間に列点文を施す。

6類(25~27)鉢形土器。25は球形状で、胴部に縦位の刻み目文、口唇には刺突文を施す。26は外反し、平行沈線と細い弧線文、刺突文を施す。27は斜縄文に平行沈線を施すもの。

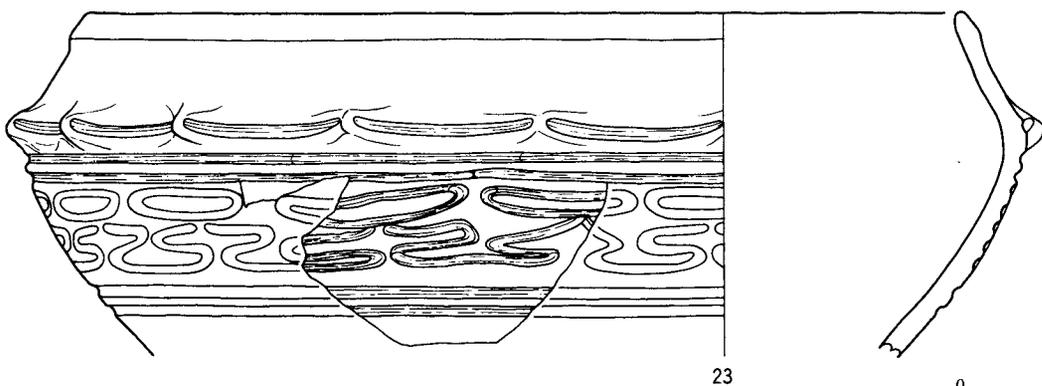
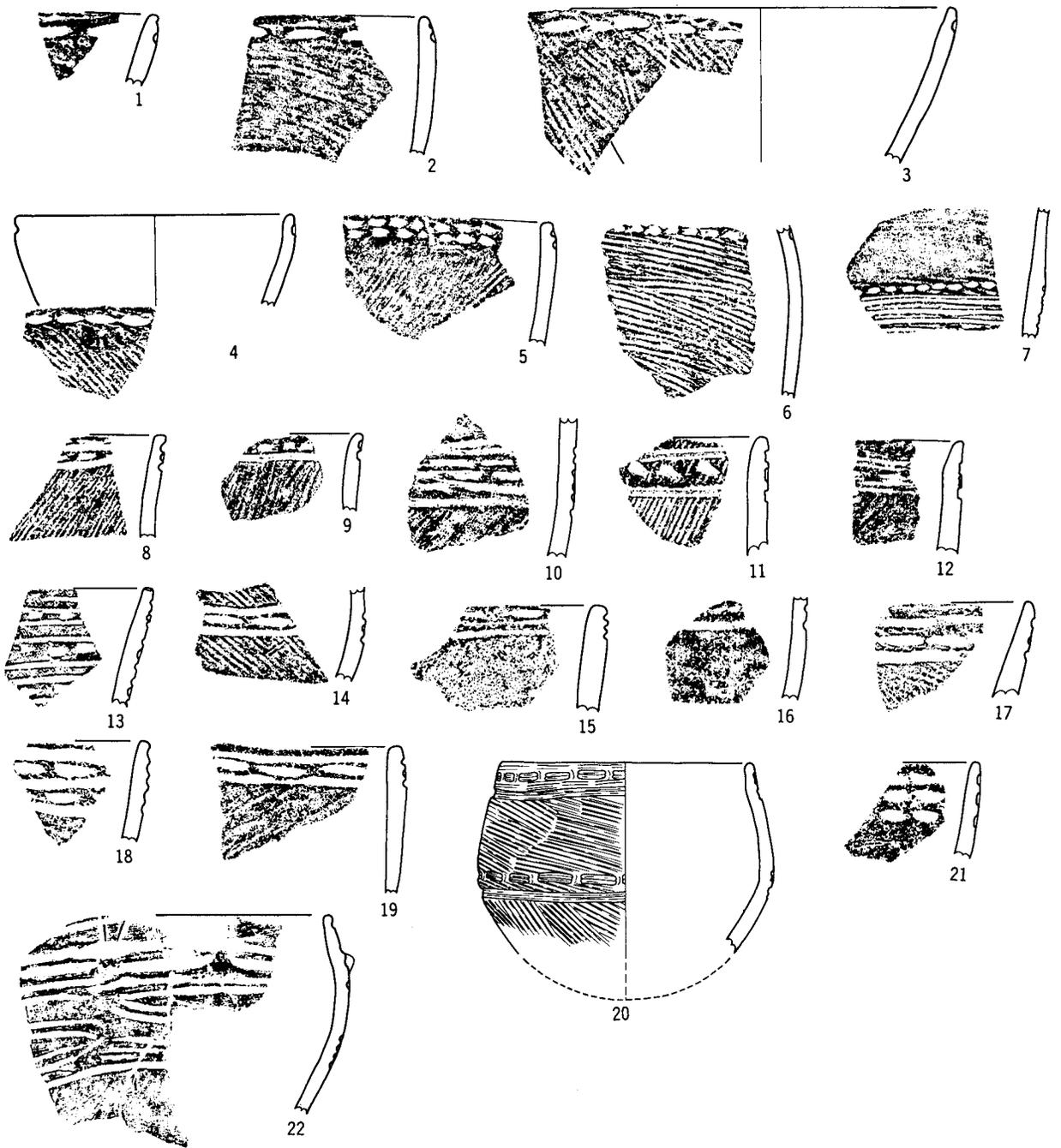
7類(28~31)深鉢形土器。28・29・31は波状口縁、31は平口縁である。28は口縁部の屈曲が弱いもので、胴部に5条の平



31

0 10 cm

第56図 縄文式土器



0 10 cm

第57図 繩文式土器

行沈線を施す。29は口縁くの字状にくびれるもので、口縁部には斜縄文と2列の列点文、胴部には平行沈線と、沈線区画内に2列の列点文を施す。30は球形状の胴部で、口縁部に3本の平行沈線、弧線文、区画内には2列の列点文を施す。

3群 下野式 (第57図 1~23)

無文地・縄痕文地に、列点文を施す深鉢形土器、鉢形土器。

1類(1~4)口縁部に、楕円形の押引状列点文を施すもの。外反する1・3・4、内湾する2がある。4は、中型の浅鉢形土器である。

2類(5・6)口縁部に列点文を施すもの。5は口縁部に2列の列点文と、斜位の細縄痕文、6は1列の列点文と、横位の縄痕文を施す。

3類(7)直口する器形で、胴部に列点文と、5本の平行沈線を施す。

4類(8~13)斜位の縄痕文地に、平行沈線と列点文を施すもの。9・11・12の沈線は、断面コの字状で、11は荒い左下がりの縄痕文地に、平行沈線と列点文を施す。13は口縁端部に刻み目文、胴部に平行沈線と列点文を施す。

5類(14~19)平行沈線間に、長楕円形の列点文を施すもの。18は3本の平行沈線と、列点文を施す。

6類(20)半球形の鉢形土器。斜位の縄痕文地で、口縁部と胴部中央に断面コの字状の太い沈線と、列点文を施す。

7類(21)口縁部に3列の列点文を施すもの。

8類(22・23)瘤状突起を施すもの。22は球形状胴部で、口縁部に押引状列点文、胴部に平行沈線を施し、沈線区画内には長楕円形区画を施す。23は口径35cmを測る大形の鉢形土器で、口縁部が頸基部で屈折するもの。頸基部では、瘤状突起と押引状列点文、2条の平行沈線で画された胴部では、長楕円形の区画文と、S字状の太い沈線を施している。

4・晩期末および弥生式土器 (第58図 1~10)

1群(1~4)晩期末に属するもの。1は椀形土器で、外面に弧線文、口縁内面に2条の平行沈線を施す。2は、沈線による不定形なひし形区画文に、縦位・横位の沈線を施し、列点文を施文する。3は縄痕文に細沈線で三角状区画を施し、列点文を施文する。4は段をもち、3列の列点文を施す。

2群(5~10)弥生式土器を一括した。

1類(5)バケツ状の深鉢形土器で、口縁部・底部に平行沈線を施し、胴部全面に、連結させた長方形区画文を交互に施す。区画内には逆T字状文を施す。

2類(6)ナデによる幅広の沈線、口唇部にはナデによる圧痕を施す。

3類(7・8)ヘラによる沈線文を施すもの。8は甕形土器で、口縁部はナデによる沈線を施す。

4類(9・10)クシ状工具による平行線、波状文を施すもの。いずれも甕形土器で、平行線と波状文は4条のクシでひかれる。

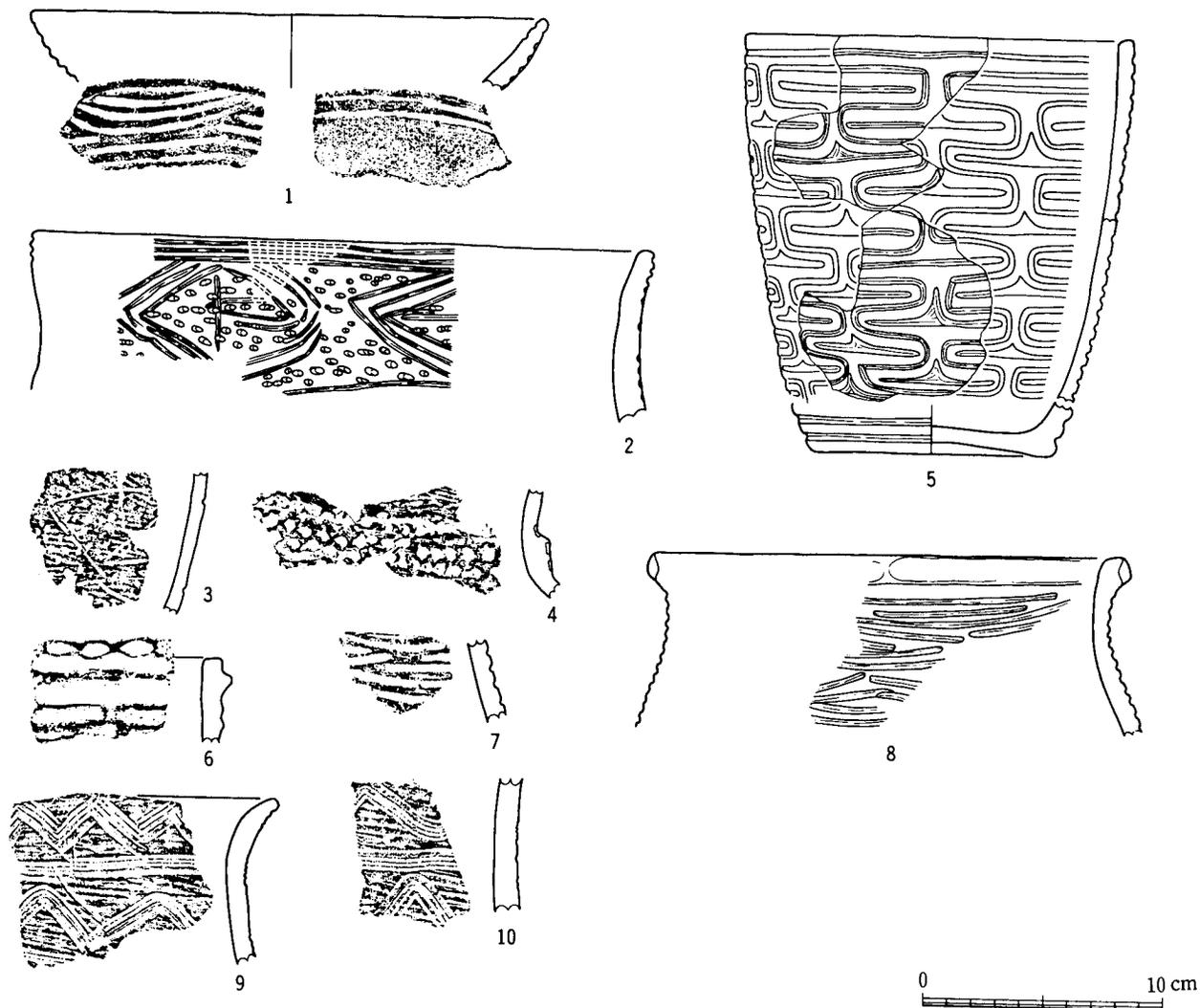
5・斜縄文および縄痕文土器 (第59図 1~41)

1群(1~18)斜縄文を施す深鉢形土器。縄文は斜位のもの(1~15・18)と、一定しないもの(16・17)がある。形態は内湾するもの(2・10・11・18)、直口状となるもの(1・3~5・16・17)、外反するもの(6~9・13・14)がある。口縁端部は、断面コの字状のもの、丸いもの、尖頭状のもの(16)がある。

2群(19~41)縄痕文を施す深鉢形土器。縄痕文は斜位のもの(19~23)、横位のもの(24~40)、縦位のもの(41)がある。

1類(19~23)斜位の縄痕を施すもので、内湾する器形をとる。

2類(24~40)横位の縄痕を施すもので、直口状のもの(25~29)、内湾するもの(30・31・37~40)、外反す



第58図 縄文式土器・弥生式土器

るもの (34・36) がある。

3類 (41) 縦位の縄痕を施すもので、外反する器形をとる。

#### 6・無文土器 (第60図 1~20)

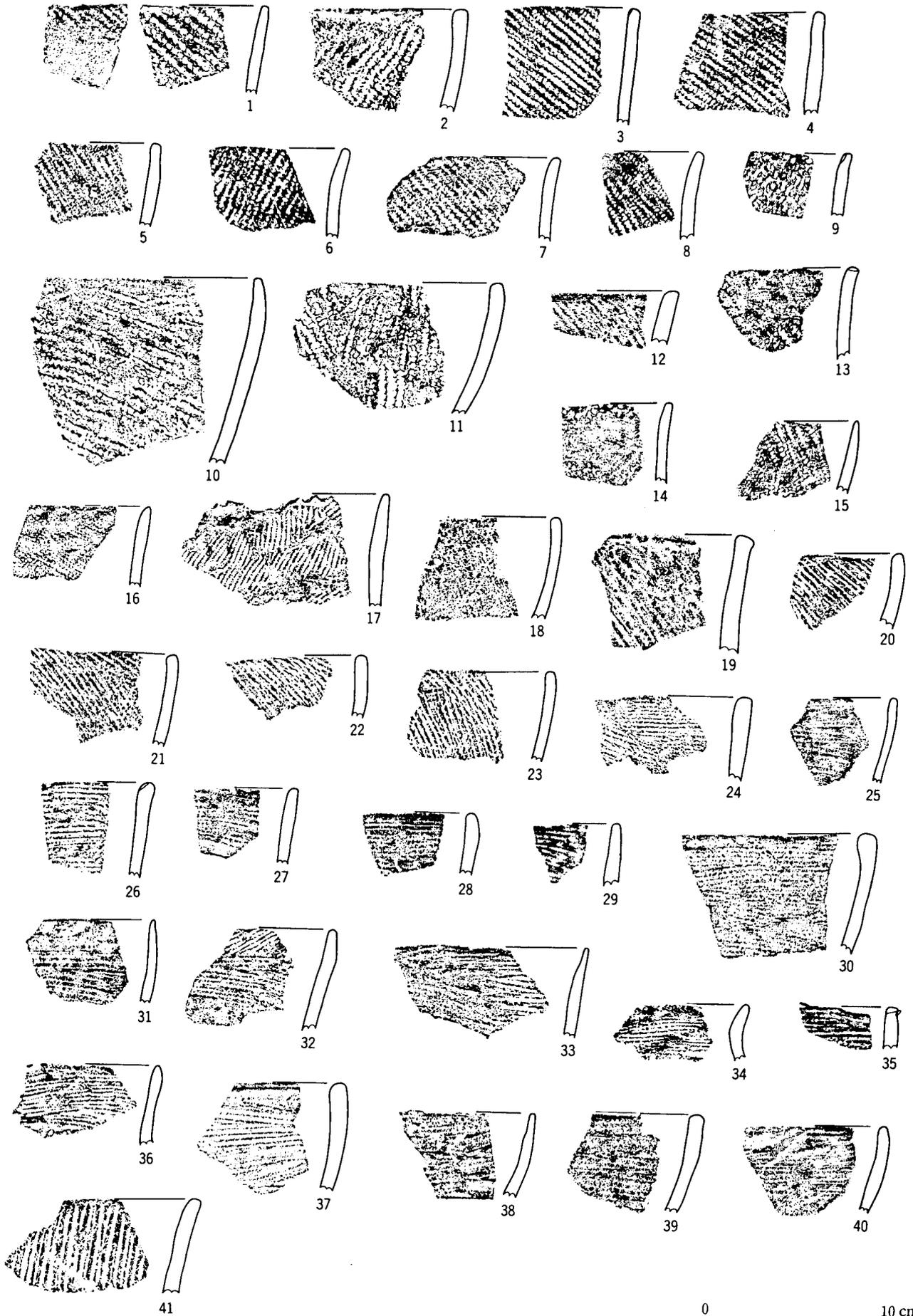
深鉢形土器、鉢形土器がある。形態は平口縁で内湾するもの (1~4・10・15)、波状口縁のもの (8)、やや外反ぎみのもの (6・11)、直口状に開くもの (5・9・16)、直口状で、内面くの字状となるもの (20)、口縁部は外反し、胴部はくびれるもの (17・18)、外反し、波状口縁のもの (19) がある。口縁端部は、段をもつもの (11)、尖頭状のもの (19) がある。

#### 7・注口形土器・突起部・土製品 (第61図 1~15)

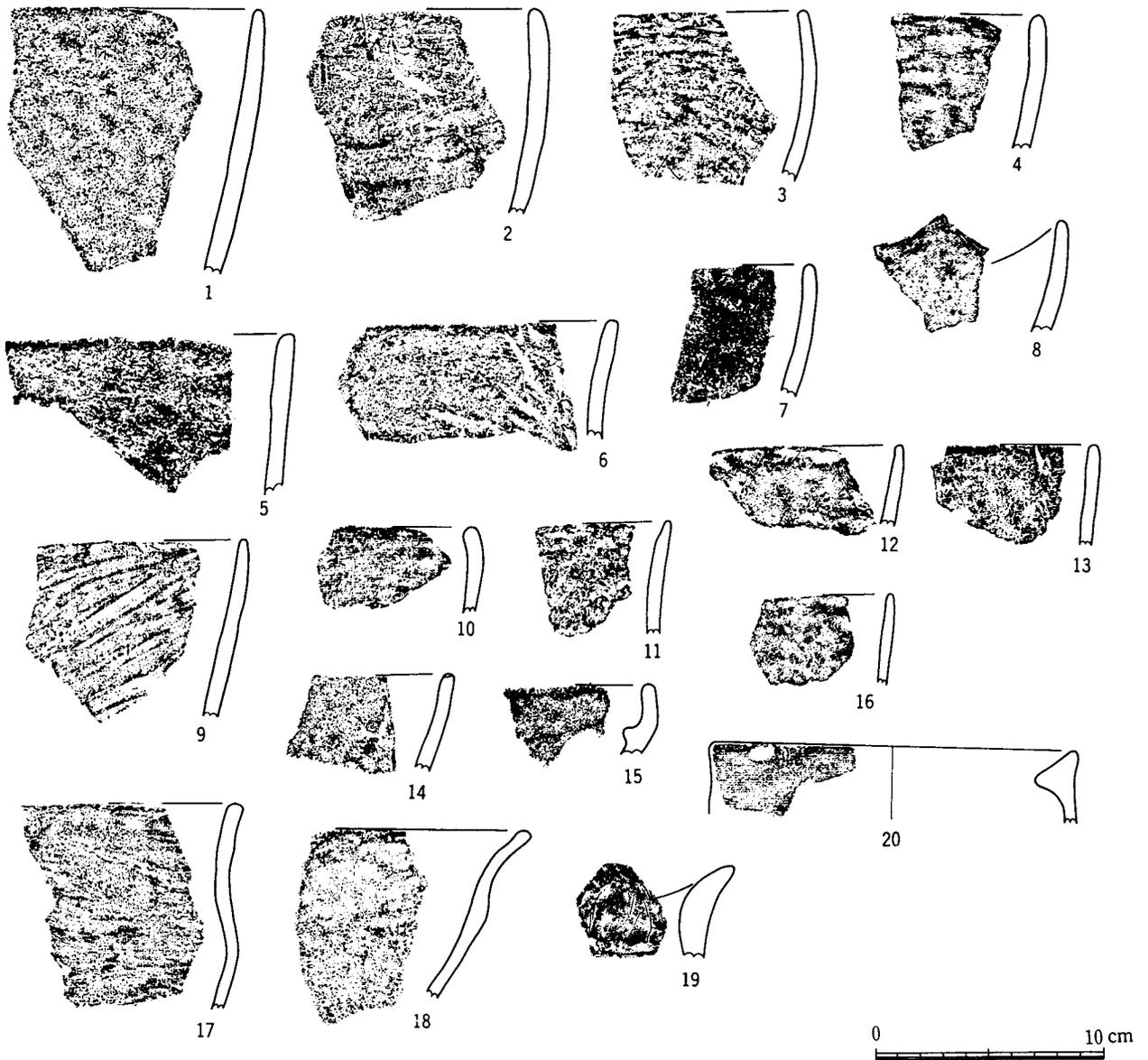
1類 (1~5) 注口形土器の注縁部を一括した。1・3は直線状で、2は中央でくびれる。4・5は注縁部が短かいもので、5は貼り付け部に刺突を施す。

2類 (6~14) 深鉢形土器の突起部を一括した。いずれもスカシを施すものである。

3類 (15) 土偶の頭部で、一部欠損しているがほぼ完形品である。縦・横5×4cm、厚さ2cmを測る。表面には刺突文による不整円形・半円形区画を施し、ヘラによる2本の短線、ナデによる楕円形のくぼみで、顔を表現する。側面では、2個の隆帯を施して耳を表現する。裏面では半円形区画と、2列の平行刺突文を施す。頸部にはナデによる太い沈線を施す。



第59図 縄文土器



第60図 無文土器

8・底部（第62～65図 1～68）

底部圧痕 圧痕を施すものは51点で、綱代・スグレ状圧痕・木葉痕・縄文を施す。

スグレ状圧痕（1～11）1～5は幅2mmの原材を使用するもので、5はタテ糸とヨコ糸の幅が3mmのもの、12は幅3mmを測る。

縄文圧痕（12～18）縦縄文で、原体が小さいもの（12）と大きいものがある。

木葉痕（19～23）幅約3mmを測り、20は縄文地に施文する。23は幅1mmで細い。

綱代底（24～45）綱代底は22点と最も多い。形態は、(1)1本超え・2本潜り・1本送り、(2)1本超え・3本潜り・1本送り、(3)2本超え・2本潜り・1本送り、(4)2本超え・3本潜り・1本送り、(5)2本超え・4本潜り・1本送りの5形態がある。

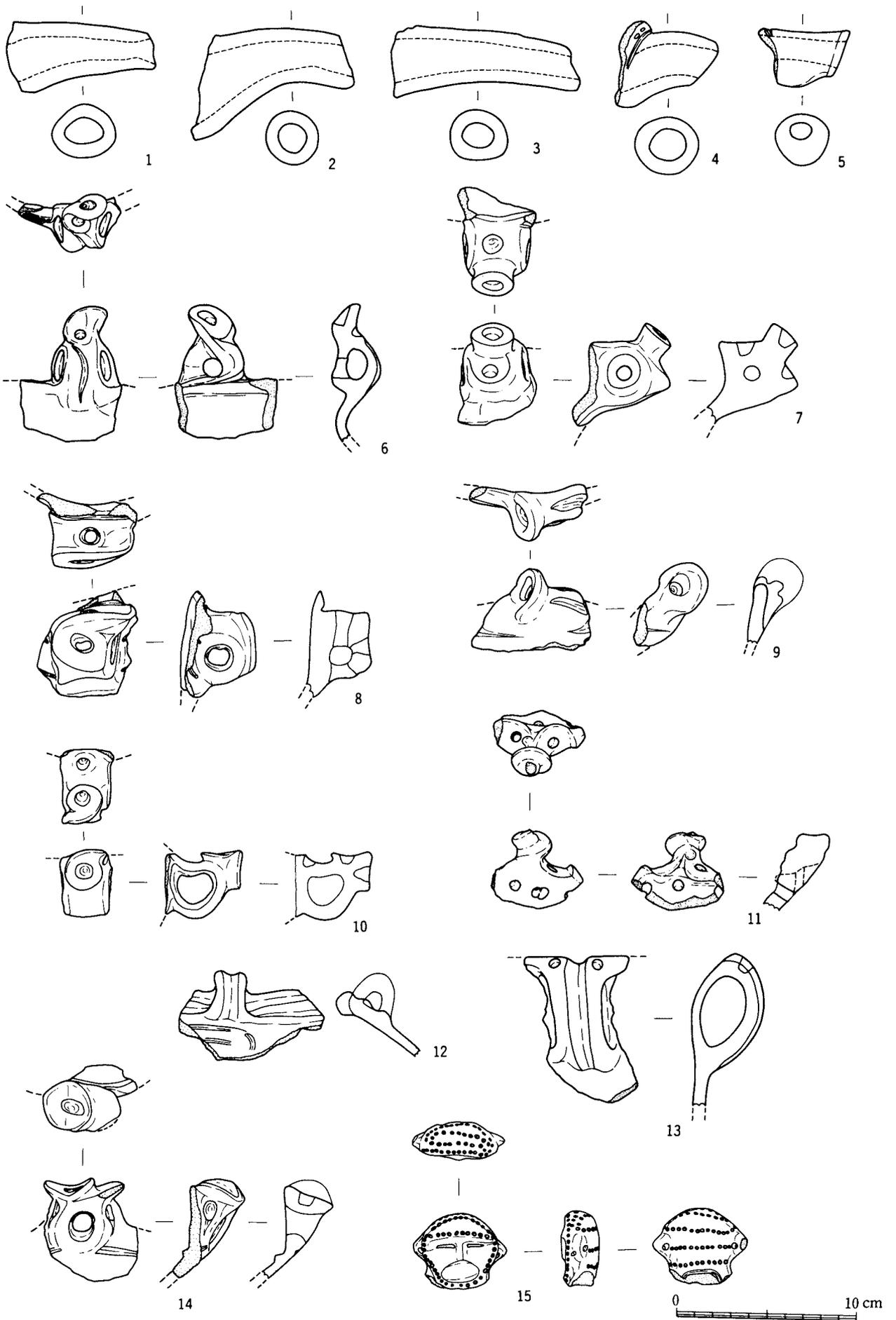
(1)1本超え・2本潜り・1本送り（24～34）11点で、24・25・27～34は幅4mm、26は幅2mmのもので、ヨコ糸は約5mmを測る。

(2)1本超え・3本潜り・1本送り（35・36）タテ糸・ヨコ糸とも、幅3mmを測る。

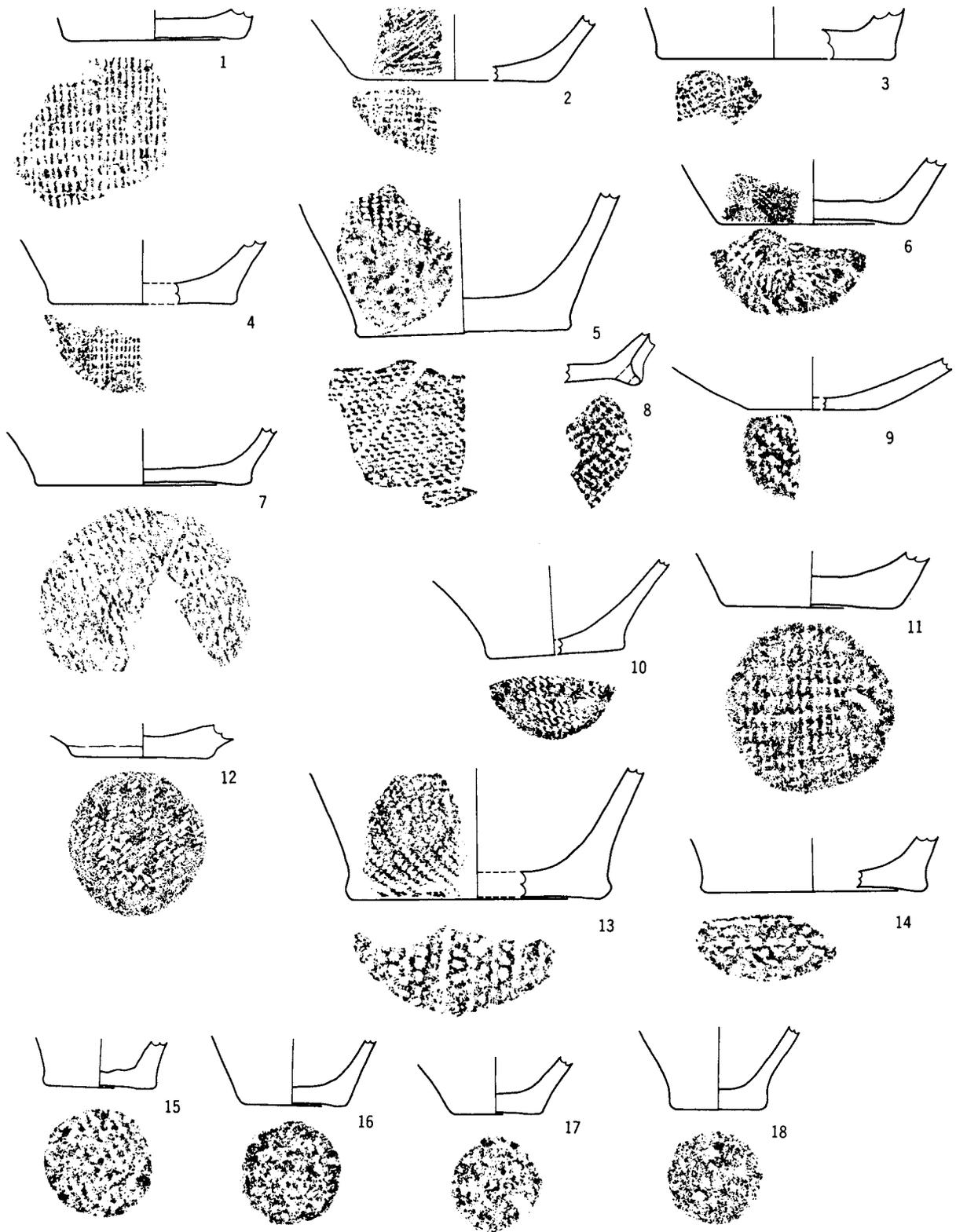
(3)2本超え・2本潜り・1本送り（37）幅5mmを測る。

(4)2本超え・3本潜り・1本送り（38・39）幅4mmを測るもの。

(5)2本超え・4本潜り・1本送り（40～45）原材は幅4mmを測るもの（41）、2～3mmのもの（40・42～45）がある。

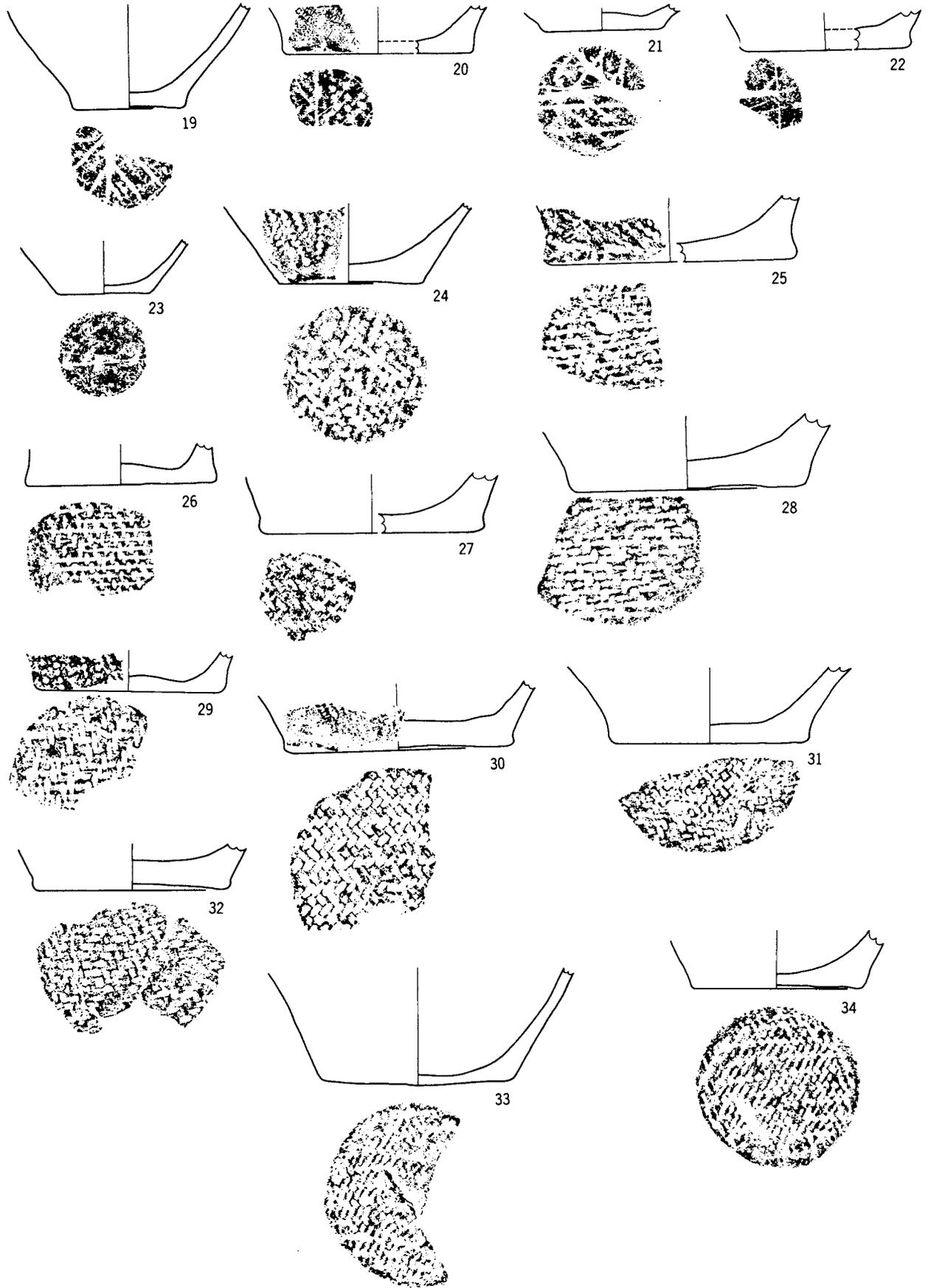


第61図 注口型土器・突起部・土製品



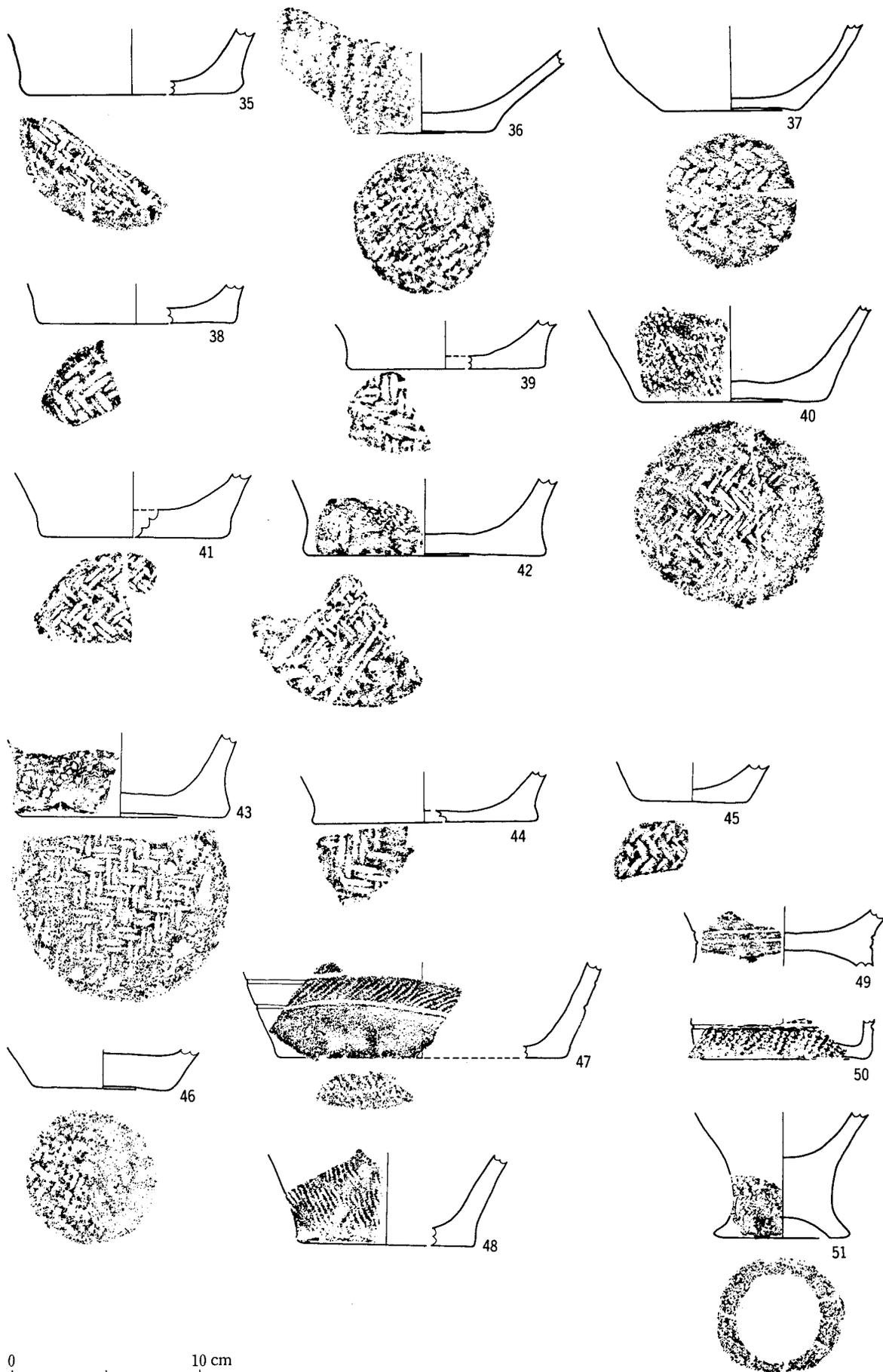
0 10 cm

第 62 图 土器底部

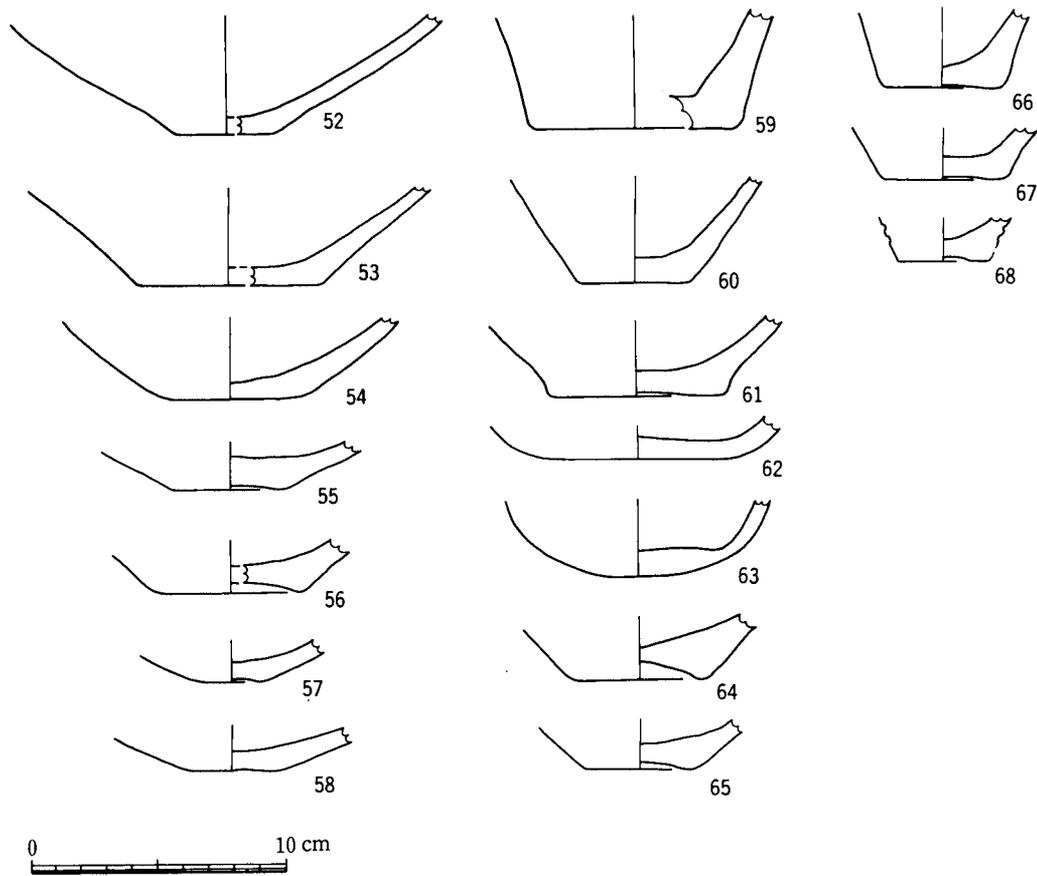


0 10 cm

第63図 土器底部



第64図 土器底部



第65図 土器底部

9・酒見シンドウ（新堂）遺跡の遺物の紹介（第66～70図 1～229）

酒見シンドウ遺跡は、昭和33年石谷文夫が発見した遺跡で、35・36年に、坂田氏の畑より出土したものを、市堀藤夫が整理したことが契機となり、37年、高堀勝喜・石谷文夫・安村律義・金山顕光・佃和雄・長谷進・西とよ・小島俊彰ら石川考古学研究会会員と、富来高校松村教諭・酒見小学校藤沢教諭らが参加し、調査が行なわれた。（敬称 略）

本項では、富来町教育委員会保管の一部（229点）について、分類作業を行ないたい。

第1群（1・2）縦縄文の施文をし、やや内湾する深鉢形土器。2は縄文地に、平行沈線と波状沈線を2列施す。

第2群（3～15）弧線を施すもの。深鉢形土器と鉢形土器（13）がある。

1類（3・4）縦縄文に平行沈線区画を施すもの。3は平行沈線間に弧線を施し、弧線内を斜状沈線で区画する。4は連弧文を施す。

2類（5・6）細かい縄文を施すもの。5は沈線間の隆帯に刻み目文、平行沈線と弧線の交点に、小点をおす。

3類（7～9）縄文施文のもの。7は交点に小点をおし、8・9は、平行沈線と弧線区画内を磨消す。

4類（10）無文地に、やや太目の沈線で、平行沈線と小単位の弧線文を施すもの。

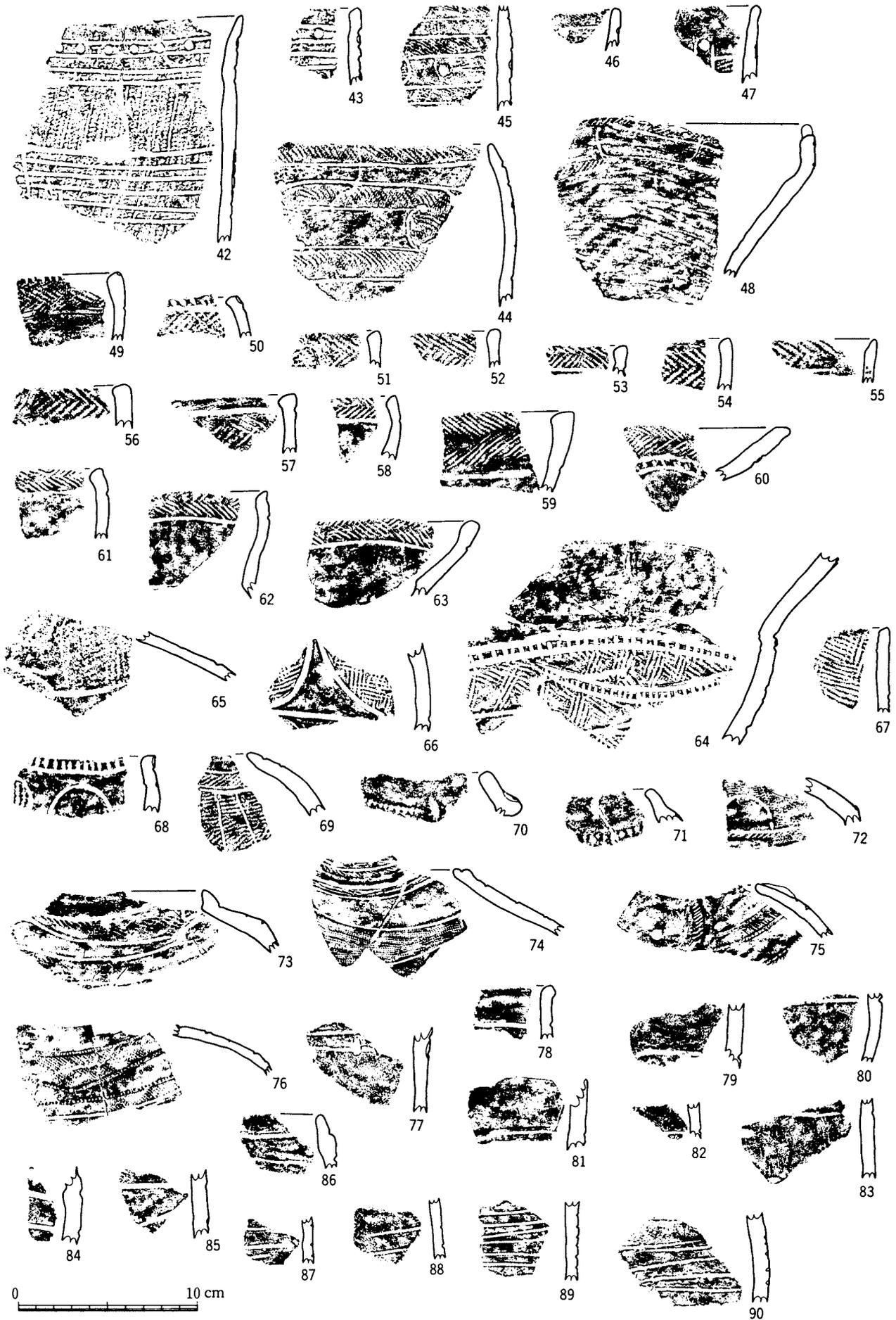
5類（11～13）小単位の弧線文を施し、平行沈線区画外を磨消すもの。11は口縁部の帯縄文間に平行沈線をひき、弧線の短線で切る。胴部のくびれ部は、帯縄文を平行沈線で区画し、向かいあう連弧文を施す。13はくの字状に屈折する。

6類（15）弧線内を磨消し、縄文部に縦・横の列点文を施す。

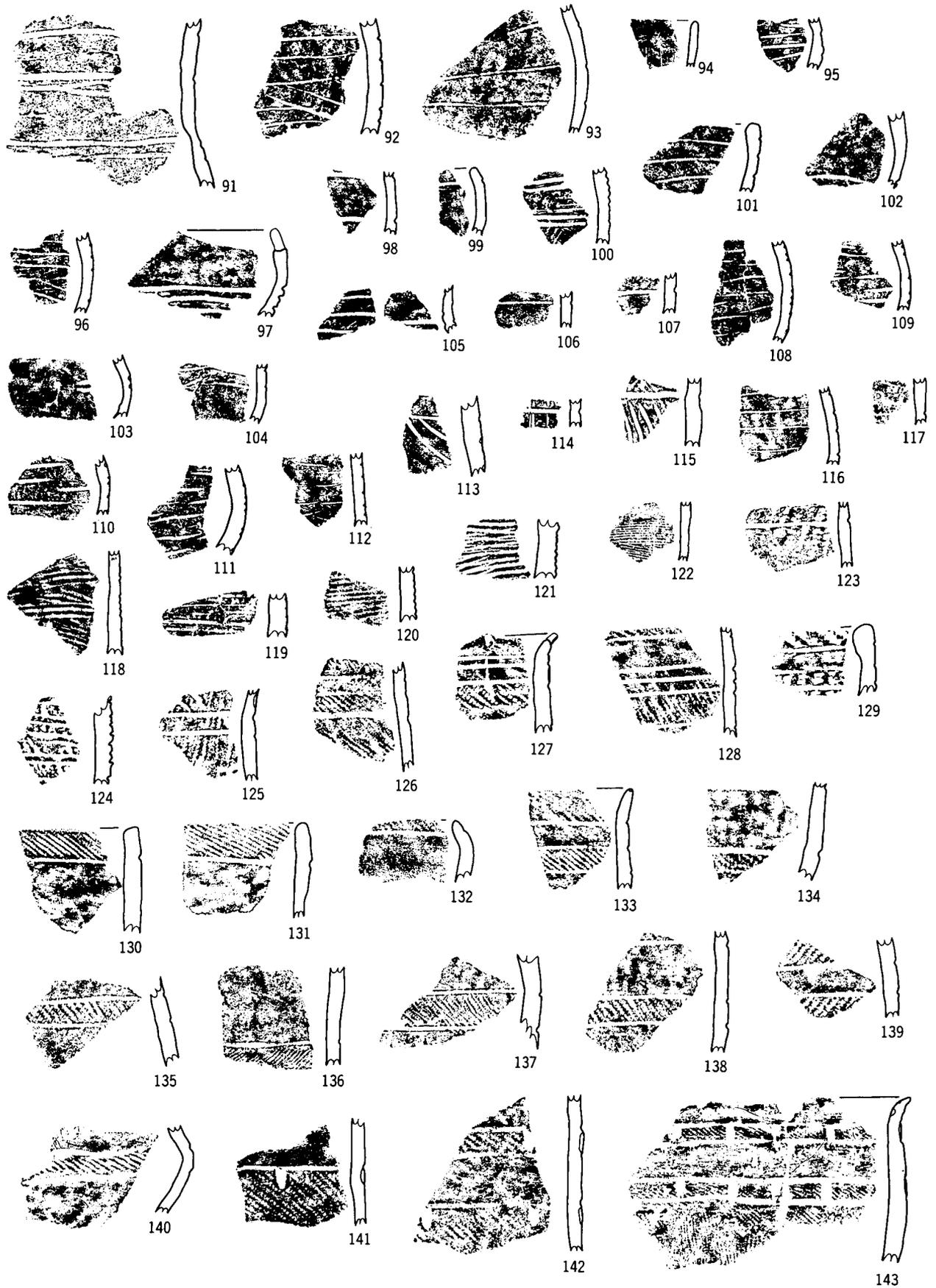
第3群（16～29）刻み目文を施すもの。刻み目は荒いもの（16～19）、細かいもの（20～29）がある。16は平行沈線間に施文し、やや内湾する。17は平行沈線を刻み、18・19は平行沈線間に施す。20～28は口縁部に刻むもの



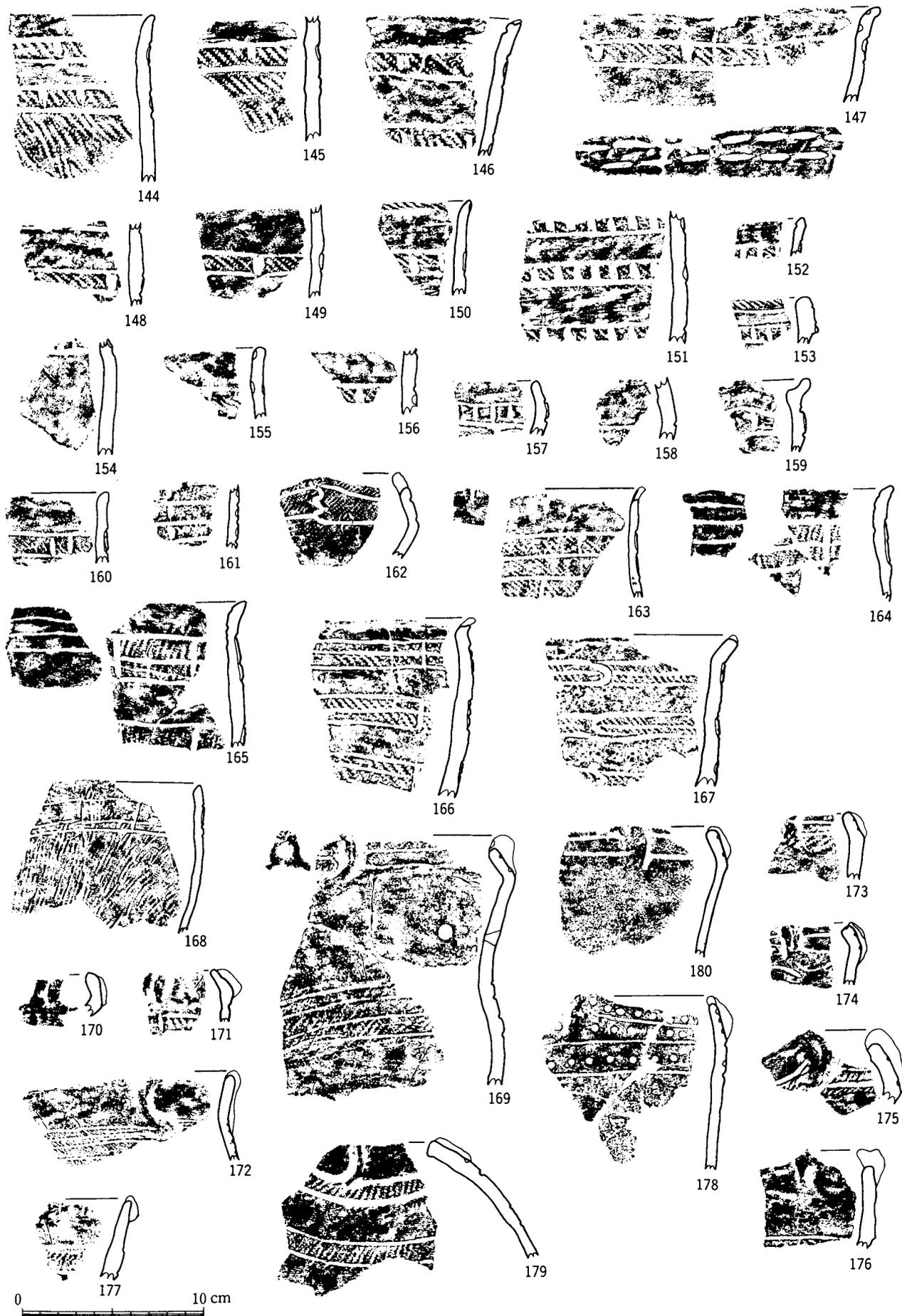
第66図 酒見シンドウ遺跡の土器



第67図 酒見シンドウ遺跡の土器



第68図 酒見シンドウ遺跡の土器



第69図 酒見シンドウ遺跡の土器



第70図 酒見シンドウ遺跡の土器

で、27は太い沈線と細かい刻み目を施す。27は井口Ⅱ式である。

第4群(30~43)列点文を施すもの。

1類(30~41)やや外反するか、ほぼ直口状となるものと、胴部から外反するもの(35・36)がある。38は口縁内面が肥厚する。

2類(42・43)直口状となる深鉢形土器で、縦縄文に平行沈線を施し、口縁下部の平行沈線間に、列点文を施す。

第5群(44~48)深鉢形土器で、直口状となるもの(45~47)、やや内湾するもの(44)、くの字状に内屈するもの(48)がある。44は帯縄文を弧線の短線で連結し、連結部には小点がおされる。45・46は、平行沈線先端部におされる。48は口縁部に2本の沈線を施し、弧線の短線で連結する。連結部には小点がおされる。

第6群(49~67)羽状縄文土器。深鉢形土器と鉢形土器(60・63)があり、深鉢形土器は、やや外反するもの、やや内湾ぎみのもの、球形状のものがある。施文は、右方向(49~60)、左方向(61~63)、縦方向(64~67)の3種があり、49・50は、口縁部に刻み目文と列点文、60は沈線間に列点文を施す。64は沈線間に刻み目文を施す。

第7群(68~76)注口形土器。68は、口縁部に平行沈線と列点文、胴部に弧線文を施す。69は口辺部に帯縄文を施し、胴部の縄文地を縦位の短線で切っている。70・71は、刺突文を施す。72・74は貝殻擬縄文を施すもので、72は、平行沈線と弧線、刻み目文を施し、弧線連結部には小点がおされる。74は胴部に弧線文と幅2cm単位の擬縄文を施し、口縁部には沈線と、細かい刻み目文が施される。73は細かい縄文を施すもので、くびれ部に平行沈線と刻み目文、上部に弧線文を施し、連結部に小点がおされる。75・76は沈線内に刺突文が施されるもので、75は赤彩された隆帯部に、刻み目文を施す。76は帯状区画と三角形状区画を施す。73は元住吉山Ⅰ式、貝殻擬縄文の72・74と、沈線内刺突文系の75・76は、一乗寺K式に類似する。

第8群(77~122)無文地に平行沈線と、沈線の短線を施すもの。内・外湾する深鉢形土器で、105は内面に平行沈線、108~112は、沈線の短線を施す。113~117は、平行沈線と縦位の沈線、弧線を施す。118は内面に縦位の沈線を施す。119~122は、密な平行沈線を施す。

第9群(123~125)縦位の縄文地に平行沈線を施すもの。123・124は荒い縄文、125は細かい縄文を施す。

第10群(126~129)帯縄文に平行沈線を施し、磨削しているもの。127は平行沈線を縦位の短線で切っている。

第11群(130~140)帯縄文を施すもの。やや外反するもの、内湾するもの(132)、胴部がくの字状に内湾するもの(139)がある。

第12群(141)縄文地と磨削し部を平行沈線で区画し、縦位の短線を連結するもの。

第13群(142~167)帯縄文を縦位の短線で切っているもの。

1類(142~149)胴部の縄文地に平行沈線を施し、縦位の短線による区画が広いもの。やや外反する深鉢形土器で、口唇部が外反するもの(147)がある。内面には2列の短線を施す。

2類(150~159)帯縄文で、縦位の短線による区画がせまいもの。器形は、やや外反ぎみのもの、やや内湾ぎみで、内面に沈線を施すもの(155)、口縁内面がくの字状となるもの(159)口縁部に縄文を施すもの(150・153)がある。

3類(160・161)縄文地に平行沈線を施し、2列の縦位の短線で切っているもの。

4類(162)波状口縁で、くの字状に湾曲する鉢形土器。口辺部の縄文地に波状の沈線を施し、平行沈線を接続して、S字状沈線としているもの。

5類(163)やや外反する深鉢形土器で、縄文地に平行沈線を施し、縦位の短線で切っている。

6類(164~167)帯縄文に平行沈線を施し、縦位の短線で切るもの(164~166)、弧線で切るもの(167)がある。164・165は同一個体と思われ、内面に3本の沈線を施す。

7類(168)直口する深鉢形土器で、口縁端部は尖頭状となる。沈線で画された口縁部と胴部には、細かい縄文を施す。磨削し部には、2本の縦位の短線を施す。

第14群(169~202)隆帯を施すものを一括した。

#### 第4章 出土遺物

1類 (169~180) 弧状の隆帯を施すもので、口縁くの字状に屈折するもの、外反するもの (172)、球形状の胴部に帯縄文を施すもの (179) がある。文様は、胴部に帯縄文を施すもの (169)、隆帯下部に、縄文や帯縄文を施すもの (173・175~177)、弧線の短線を施すもの (174)、沈線間に列点文を施すもの (178)、平行沈線を施すもの (180) がある。

2類 (181~187) 隆帯に刻み目文、縄文を施すもの。181~183は波状口縁で、波頂部で丸くなるL字状隆帯。184は弧状の隆帯を施す。185・186は縦位の隆帯に、刻み目文と列点文を施す。187は平行沈線間に列点文を施す。

3類 (188~191) 縦位の隆帯を連続して施すもの。やや内湾する鉢形土器で、189は口縁くの字状に湾曲する。

4類 (192) 隆帯際に縦位の沈線を施すもので、内面に円形のくぼみを施す。

5類 (193~202) 隆帯にくぼみを施す鉢形土器で、口縁くの字状となるもの、やや内湾するもの (197) がある。197は平行沈線間に刻み目文、端部にはくぼみを施す。201は平行沈線間に列点文を施す。井口II式である。

6類 (203~207) 無文地で、内面に円形のくぼみを施すもの (203~206) と、内・外面に、弧状の沈線を施すもの (207) がある。

第15群 (210~213) 球形状の深鉢形土器の胴部 (210・211) と、直口状のもの (212) で、平行沈線と弧状の沈線区画を施し、区画内は磨消す。

第16群 (214・215) 214は口縁くの字状に内屈し、平行沈線と縦位の沈線を施す。屈折部には縄文を施す。215は平行沈線と方形区画を施し、区画外は磨消す。

第17群 (216・217) 斜位の縄文地をもつもの。216は球形状の波状口縁の深鉢形土器で、口縁部に2本の沈線を施す。217は口縁くの字状に内屈し、平行沈線を弧線の短線で切るもの。

その他(218~229) 218~221は列点文を施すもの。219は口唇に列点文を施す。221は口縁部に縄文を施す。224は平行沈線と斜位の沈線を施し、沈線内に列点を施す。225は波状口縁の深鉢形土器で、口辺部に2本の平行沈線と、縄文および弧線の短線を施す。226は端部が尖頭状で、縄文地に渦状沈線を施す。227はやや外反し、平行沈線を2列の縦位の短線で切る。228は3本の平行隆起線と、区画内に斜状隆起線を施す。229はくの字状の内湾する鉢形土器。太い沈線と口縁部に刻み目を施す。228は朝日下層式、229は井口II式である。

#### まとめ

酒見シンドウ遺跡の遺物を、文様から17群に分類した。朝日下層式、井口II式、第8群とした、平行沈線を施す土器以外の一部は、富来町史史料編記載のものである。土器群は加曾利B<sub>2</sub>並行期のものが大部分を占め、一部関西系の土器が含まれる。第2群の弧線文系土器、第5群の末端刺突文系土器、第7群の注口形土器で、元住吉山I式、一乗寺K式期に比定される。富来町史記載の酒見シンドウ遺跡第6類46も、半円形の隆帯に刻み目を施し、一乗寺K式に類似する。羽状縄文系土器は、刻みを伴うものや、縦位のものの、加曾利B<sub>2</sub>並行期、横位のものの加曾利B<sub>3</sub>並行期のものがあり、東北地方との関連が指摘されている。

#### 10・石器 (第71~78図 1~126)

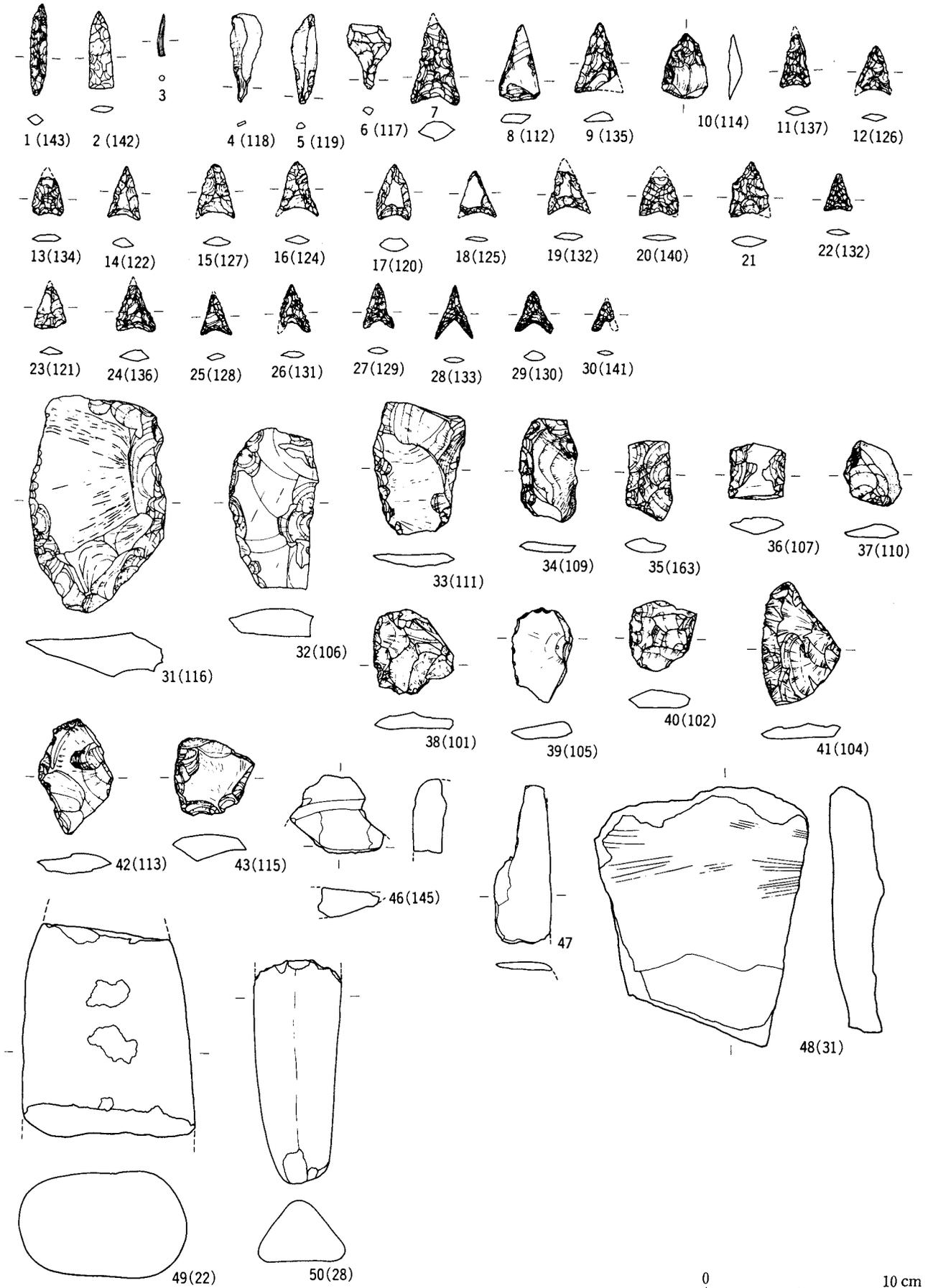
本遺跡から出土した石器は、石槍、石鏃、打製石斧、磨製石斧、凹み石、磨石等127点と、片面自然面のものがある。

##### 1・石 槍 (1・2)

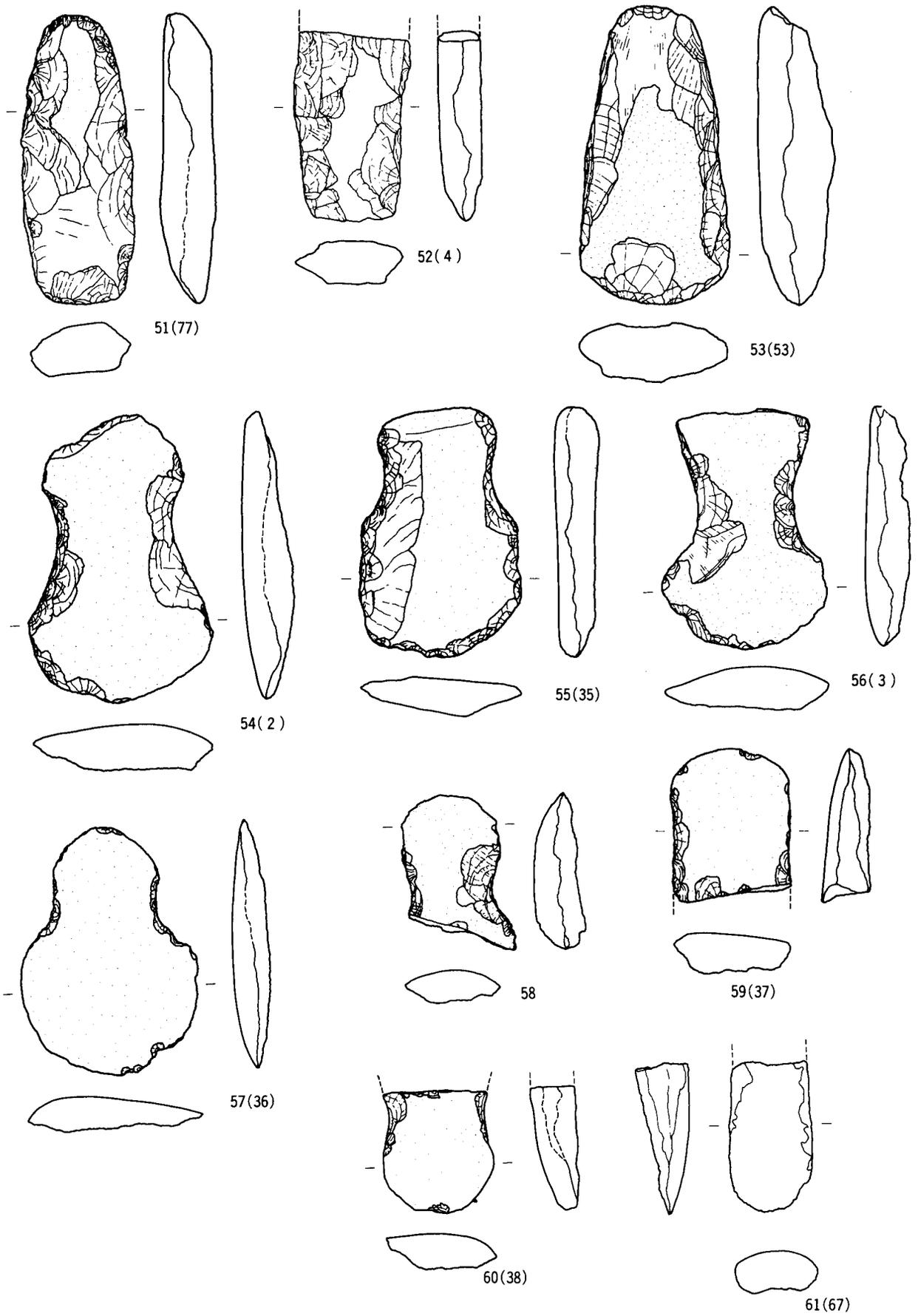
1は断面四角形で尖頭器に近く、先端部は尖くとがらせている。2は縦長の二等辺三角形を呈し、全面に丁寧な調整痕を施す。

##### 2・石 鏃 (4~6)

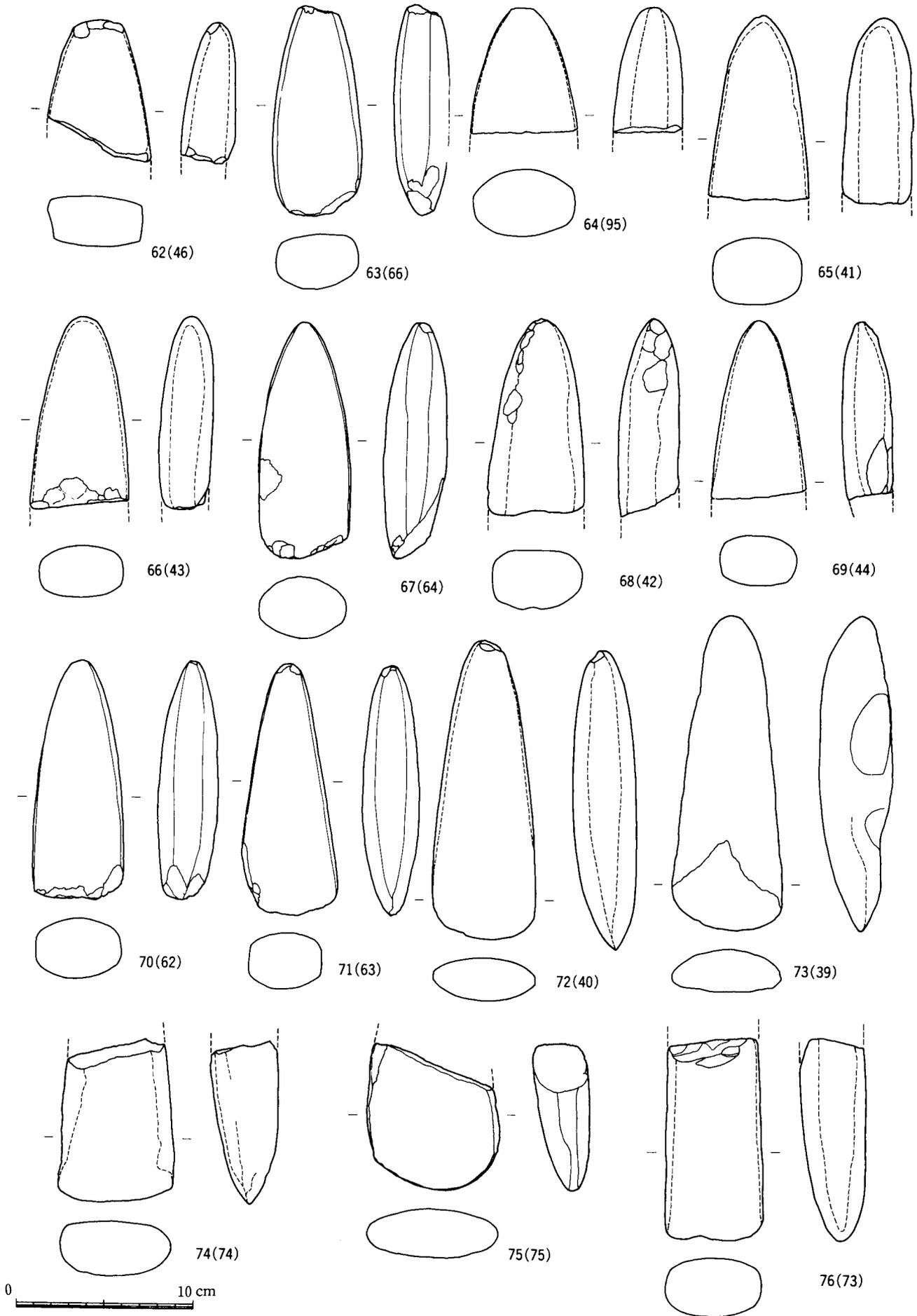
4・5は自然面を残しているもの、6は三角形を呈する。4は縦長の三角形を呈し、先端部から打ち欠いている。先端部では3面の剝離面がある。5は尖頭器状を呈し、先端部では7面の剝離面がある。6は全面に打撃痕を施すもの。



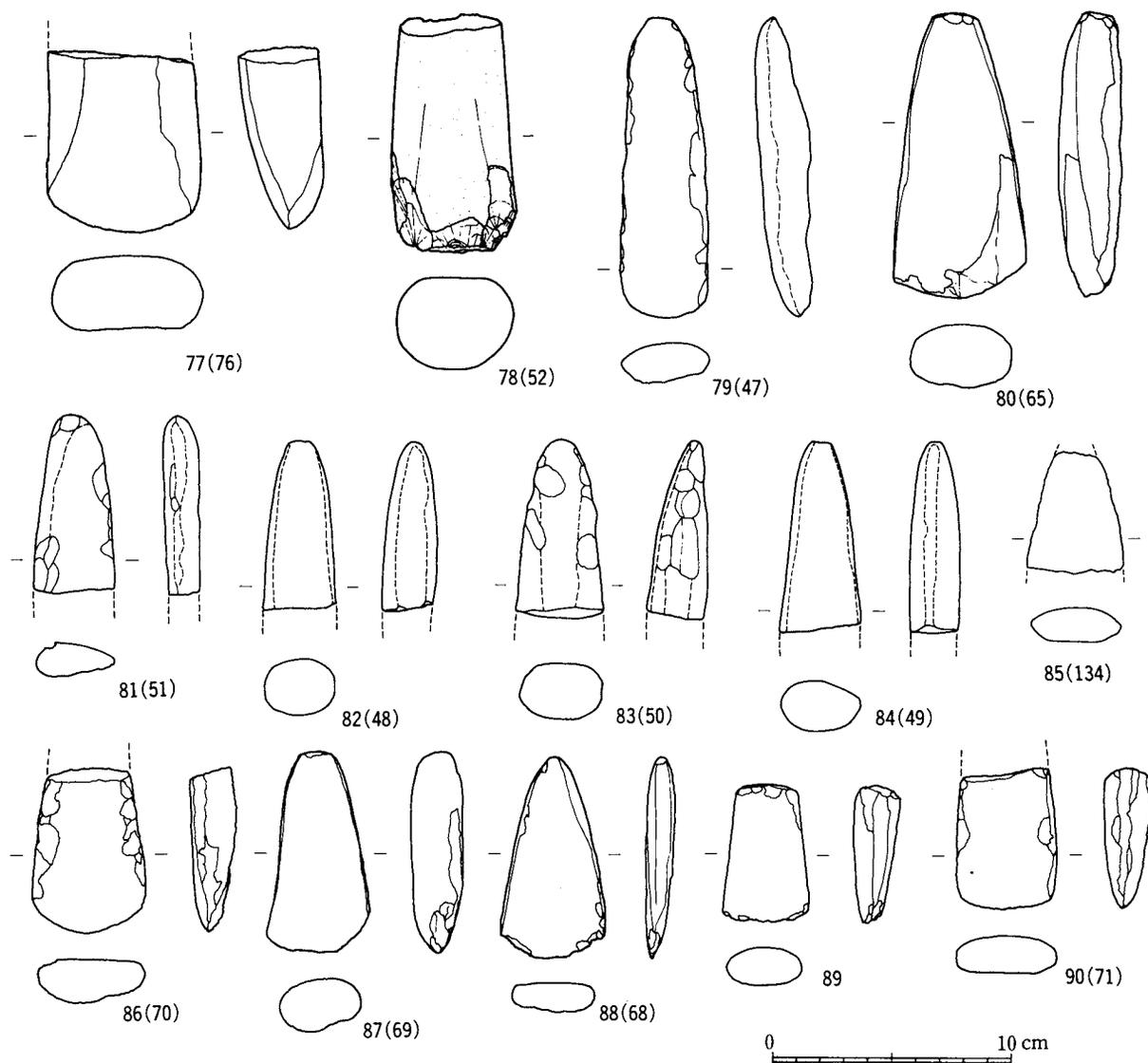
第71図 石器



第72圖 石器



第73図 石器



第74図 石器

3・石 鏃 (7~30)

1類 (7~9) 二等辺三角形を呈し、大型のもの。7・9は基部のわたくりが弱いもので、7は先端部、9は基部を欠損している。

2類 (11~25) 基部のわたくりが弱いもの。11は縦長の二等辺三角形を呈し、先端部と基部が欠損している。16・19は、基部がやや広がるもの。21は先端部が鈍角なものである。

3類 (26~30) 基部のわたくりが強いもの (26・27)、鋭角的なもの (28~30) で、28は二等辺三角形を呈し、基部および先端部は鋭い。30の基部は鈍角なもの。

4・スクレイパー (31~45)

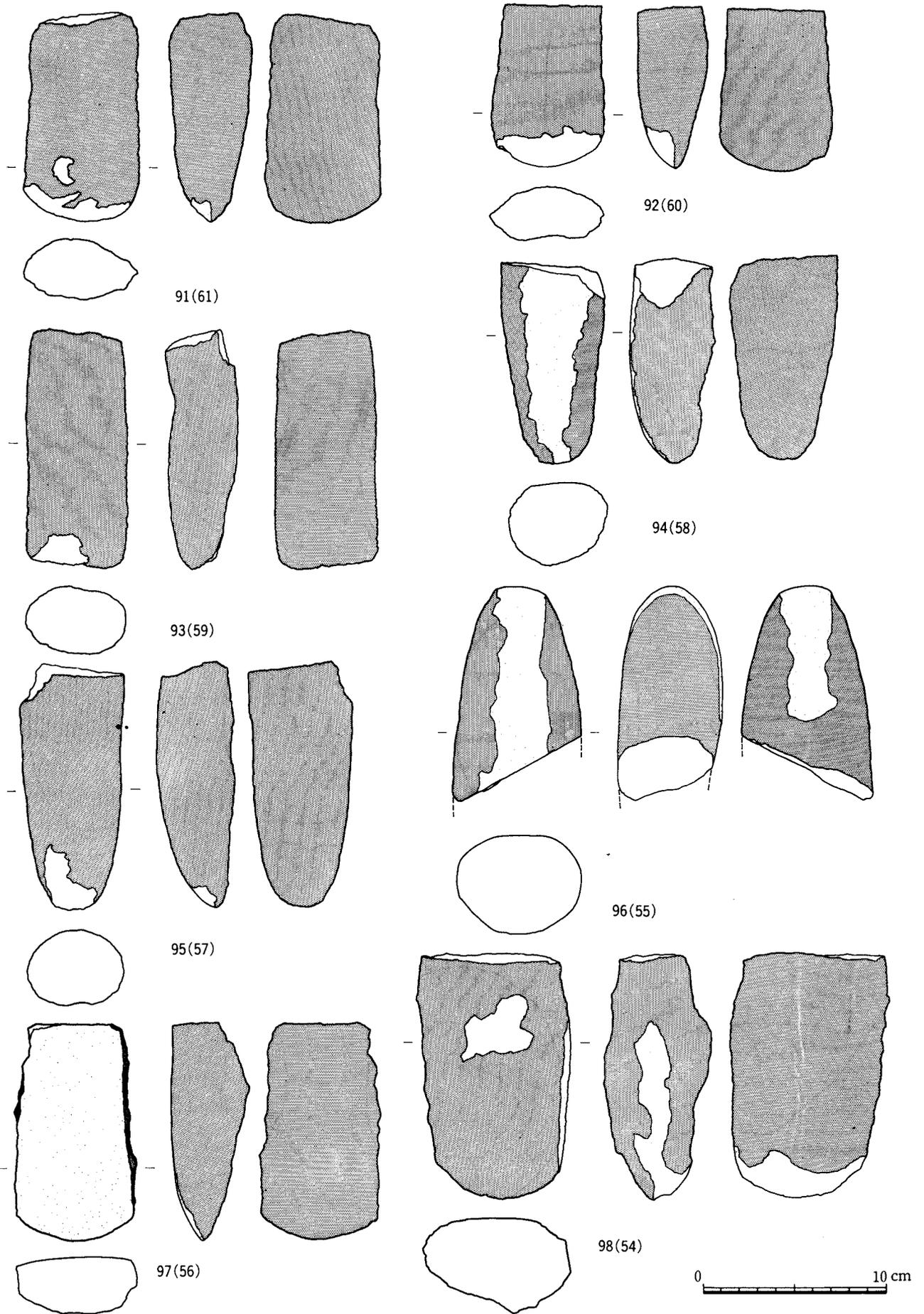
1類 (31) 大型品で、側面・先端部に打撃痕を残し、片面は鋭角的である。

2類 (32~45) 中型・小型品で、32~36は長方形を呈する。37~45は不整形な剥片である。

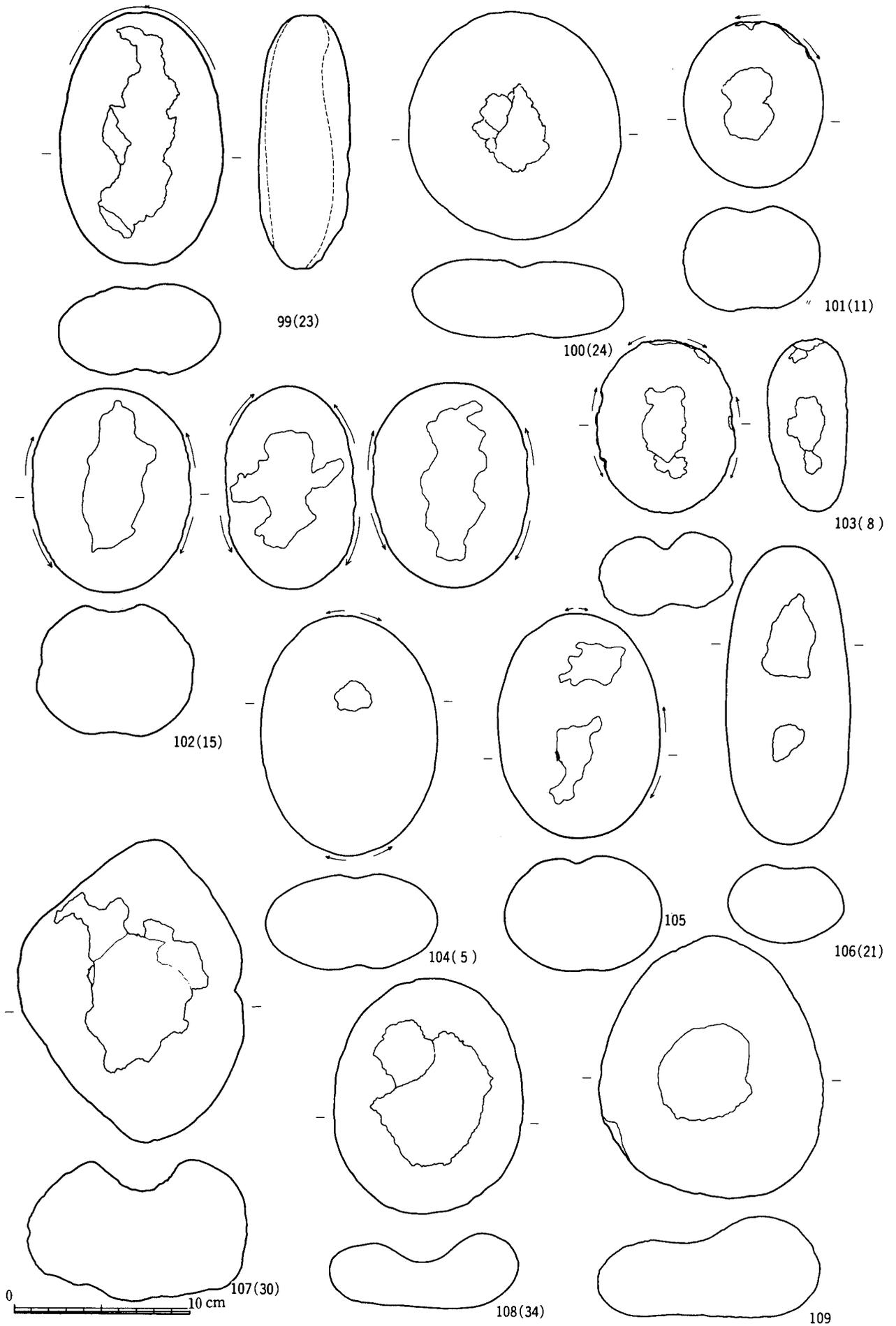
5・石製品 (46~50)

46は頭部・側面を欠損するが岩偶の一部と思われるもの。47はスズリ片。48は砥石で、長方形を呈し、片面自然面のもの。49・50は叩き石で、49は長方形を呈し、片面に打撃痕を残すもの。50は長方形で断面三角形を呈し、先端部に打撃痕を残す。

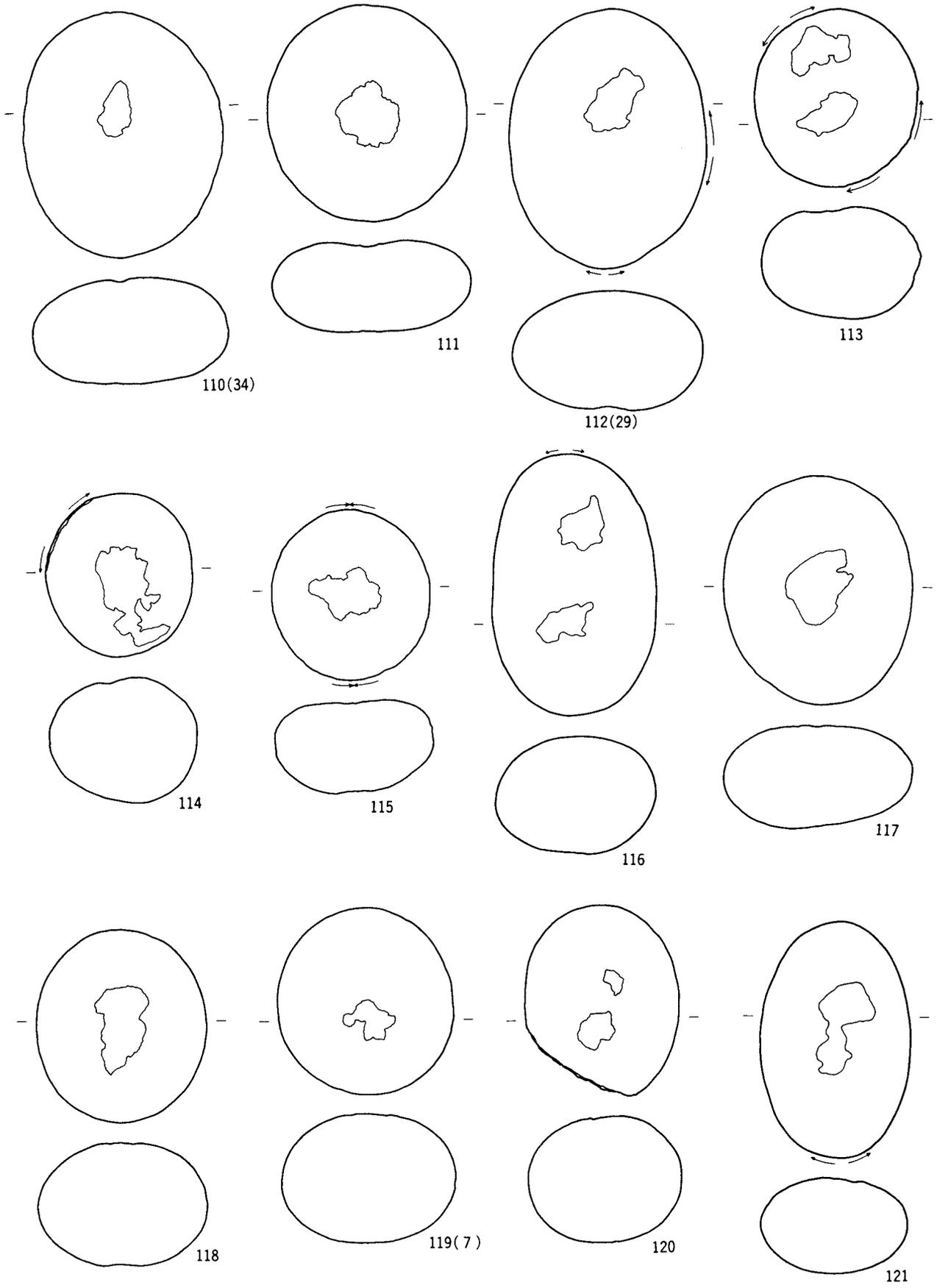
6・石 斧



第75図 石器

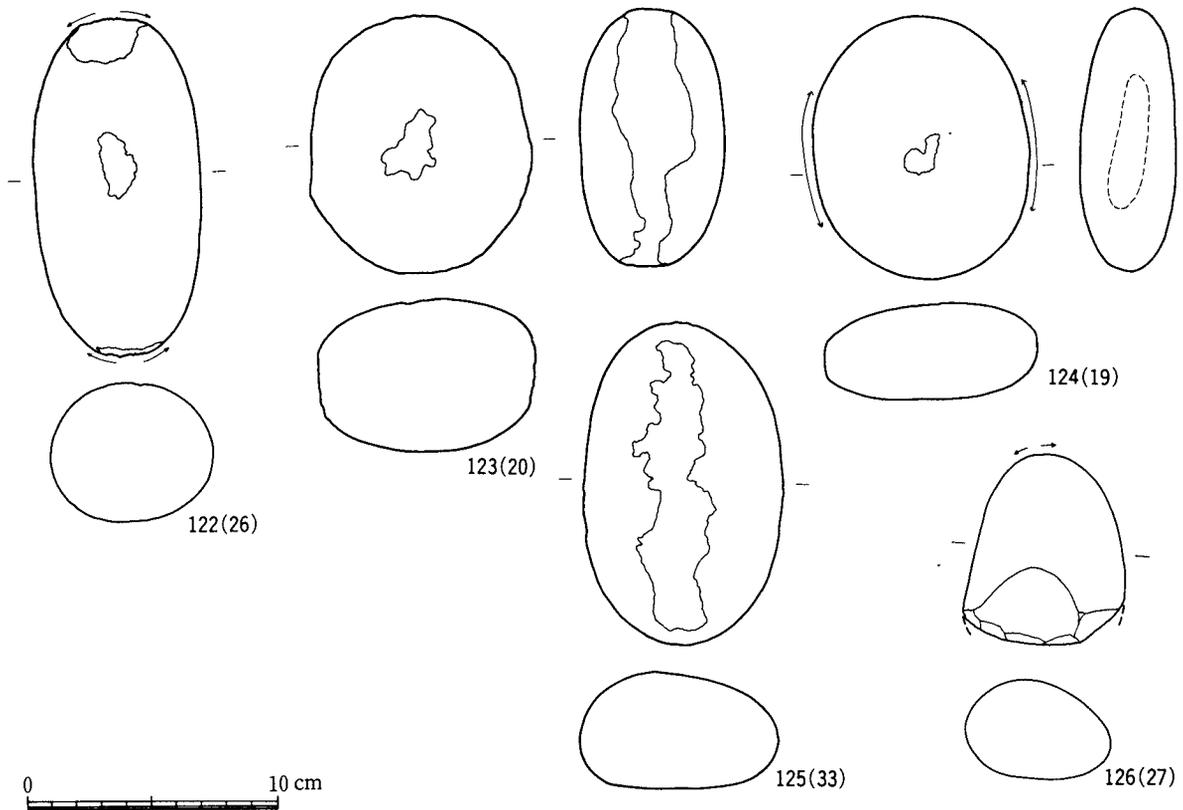


第76図 石器



0 10 cm

第77図 石器



第78図 石器

打製石斧 (第72図 51~61)

短冊形 (51~53・59・61)、分銅形 (54~58・60) の2形態に分けられ、54~61は、片面自然面を残すものである。

短冊形 51・53は完形品で、51は刃部・側面からの打撃痕を残す。53は刃部がやや広がり、側面および刃部に打撃痕を残す。

分銅形 54~57は完形品で、54は中央部両側に抉りを施し、上・下の両刃とするもの。55・56は片刃で、基部が水平なもの。55は基部近くに抉りを施し、片面に広い剝離面を残す。56は中央部両側に抉りを施し、刃部は広がりをもつ。57は片面自然面で両刃とするもので、全長の $\frac{1}{3}$ に抉りを施し、下部は広がりをもつ。58は欠損しているもので、両面に弱い抉りを施し、刃部と抉りの幅が、ほぼ同一のもの。

自然面を残すもの (59~61) 59は刃部が欠損した短冊形打製石斧。側面に打撃痕を残す。60は中央部両側に弱い抉りを施し、基部先端は欠損している。61は短冊形で、側面・刃部は荒い調整痕が残る。

磨製石斧

1類 (第73・74図 62~72、74~77) 大形・中形品を一括した。62は断面長方形を呈するもの。63~72は定角式で、63は断面長方形で、片面ふくらみをもつもの。64~71は断面楕円形のもの。64~66・68・69は刃部を欠損するもの。67は刃部を斜めに打ち欠き、細かい調整痕を施す。72~75・77は断面扁平で、75・77の刃部は円形、74は水平なもの。

2類 (第74図 78~90) 小形品を一括した。78は乳棒状で断面楕円形を呈し、刃部は打撃痕を残す。79は片面自然面のもの。80は定角式で、刃部が円形のもの。81~84は乳棒状で、刃部を欠損しているもの。86は基部が欠損しているもの。87~90はノミ状製品。87・88は定角式で、刃部が円形のもの。90は刃部と基部の幅が、ほぼ同じもの。

## 石斧未製品 (第75図 91~98)

短冊形で断面楕円形を呈し、刃部が円形のもの (91・92)、水平なもの (93)、断面円形で、側面に磨痕が残るが、刃部を形成していないもの (94・96・98)、刃部の一部に磨痕が残るもの (93・95)、片面自然面で刃部が鋭角的なもの (97) がある。いずれも土掘り程度の使用は可能であるが、石器製作過程のものと思われる。

## 凹み石 (第76・77図 99~115)

形態は長楕円形、円形、不定形 (107) の3形態で、両面くぼむもの (100~106)、片面のもの (107~115) がある。

1類 (99~105) 両面にくぼみをもつもの。円形・楕円形の2形態があり、103以外は浅めのものである。断面は長楕円形のもの (99・100・103・104)、円形のもの (101・102・105) がある。また磨痕の残るものがあり、102は側面、103・105は側面と端部、104は両端にみられる。

2類 (106~114) 片面にくぼみをもつもの。深さからa類、b類とした。

a類 (107~109) 深いもの。107は不定形、108・109は円形、楕円形を呈する。

b類 (110~115) 浅いもの。円形 (112~114)、楕円形 (110・111) を呈する。112~115は磨痕の残るもので、112は側面、113~115は端部にみられる。

## 敲き石・磨石・ハンマーストーン (第77・78図 116~126)

長楕円形・円形を呈する。

1類 (116~119) 円形を呈し、表面に1・2カ所の敲打痕を残すもの。

2類 (120・121) 楕円形を呈し、表面に敲打痕、端部に磨痕を残すもの。

3類 (122) 表面、両端に敲打痕を残すもの。

4類 (123・124) 側面に面取りした磨痕を残すもの。表面には敲打痕を残す。

5類 (125) 表面に磨痕を残すもの。長楕円形を呈する。

6類 (126) ハンマーストーン。円礫を打ち欠いて刃部を成形し、基部には磨痕を残す。

第2表 石器一覧表

遺物No	出土地点	層位	石器	石質	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	遺存状態	挿図No	備考
1	J 27	黒粘	打製石斧	石英安山岩	8.3	5.4	2.6	132			
2	H 26		打製 "	花崗岩	14.9	9.7	2.75	417	完形	54	
3	H 26	黒褐粘	打製 "	輝石角閃石 安山岩	12.5	8.8	2.35	3.8	"	53	
4	I 24		打製 "	角閃石 安山岩	10.0	6.25	2.3	220		52	
5	H 27	黒褐粘	凹石	輝石角閃石 安山岩	13.5	10.2	5.45	1,175	完形	104	
6	H 33	砂層	"	花崗岩	9.1	8.5	5.0	548	"		
7	P 603	覆土内	"	"	8.7	7.9	6.65	620	"	119	
8	H 27	"	"	砂質凝灰岩	9.7	7.9	4.15	425	"	103	
9	I 22	茶褐粘	"	花崗岩	10.2	8.2	6.9	790			
10	I 33	砂礫層	"	"	10.0	9.5	7.1	920	完形		
11	H 30	暗褐砂	"	"	9.3	7.9	5.9	610	"	101	
12	H 25	暗茶褐粘	"	"	9.5	8.7	6.1	692	"		
13	G 27		"	白色凝灰岩	12.2	9.9	5.5	950	"		
14	I 26	茶褐粘	"	花崗岩	13.22	10.77	5.65	1,140	"		
15	J 24	暗茶褐粘	"	"	11.5	9.0	7.4	1,100	"	102	
16	H 25	暗茶褐粘	"	角閃石黒雲母 花崗岩	12.6	7.9	5.25	738	"		
17	H 26	暗褐砂	"	花崗岩	12.6	9.25	1,080	"			

第4章 出土遺物

遺物 No.	出土地点	層 位	石 器	石 質	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	遺存状態	挿図No	備 考
18	G 27		"	"	14.0	8.8	6.3	1,088	完形		
19	石室		磨 石	"	10.2	8.6	3.7	482	"	124	
20	G 27		"	"	10.1	8.9	5.8	780	"	123	
21	P 503		凹 み 石	"	16.6	7.0	4.7	857	"	106	
22	I 26	暗茶褐粘	叩 き 石	"	11.65	9.45	6.4	1,120		49	
23	G 30	黒褐粘	凹 石	砂質凝灰岩	14.1	9.3	5.1	898	完形	99	
24	J 26	暗茶褐粘	"	花崗岩	12.88	12.25	4.5	1,070	"	100	
25	H 26	暗褐砂	"	"	11.6	10.7	4.9	905	"		
26	H 30	暗褐砂	"	"	13.35	6.6	5.6	710	"	122	
27	H 26	黒褐砂	ハ ス ト マ ン	石英安山岩	7.5	6.2	3.9	250	"	126	
28	(P 179)	覆土内	叩 き 石	輝石角閃石 安山岩	12.25	4.8	3.2	278		50	
29	配石 No.11		凹 石	角閃石 安山岩	14.8	12.8	5.8	1,340	完形	112	
30	I 27	黒褐粘	"	石英安山岩質 凝灰岩	17.0	12.99	7.9	1,858	"	107	
31	H 26	暗褐砂	砥 石	"	11.6	14.2	3.0	460		48	
32	G 27	暗黄褐色 粘質土	凹 石	輝石角閃石 安山岩	10.3	9.1	6.7	852	完形		
33	G 27		磨 石	花崗岩	12.6	8.1	4.7	690	"	125	
34	H 59	黒褐粘	凹 石	凝灰質砂岩	13.35	10.9	4.2	750	完形	110	
35	H 30	茶褐粘	打製石斧	輝石角閃石 安山岩	13.1	8.8	3.37	"	"	55	
36		黒褐粘	打製 "	輝石安山岩	13.0	9.5	2.0	232	"	57	
37	H 25	茶褐粘	打製 "	輝石角閃石 安山岩	7.7	6.22	2.4	174		59	
38	土壇2	覆土内	打製 "	花崗岩	6.65	6.05	2.45	128		60	
39	H 24	黒褐粘	磨製 "	安山岩	17.6	6.0	4.1	525	完形	73	
40	I 28	暗褐砂	磨製 "	角閃石 安山岩	16.7	5.8	3.5	470	"	72	
41	P 87		磨製 "	閃線岩	10.4	5.6	3.88	330	刃部欠損	65	
42	H 27	暗茶褐粘	磨製 "	変朽安山岩	11.1	5.45	3.3	280	基部欠損	68	
43	I 26	"	磨製 "	角閃石 安山岩	10.8	5.6	2.9	260	"	66	
44	H 28		磨製 "	角閃石 安山岩	10.0	5.2	2.75	200	"	69	
45	I 24 方形窪込SE区		磨製 "	石英安山岩	7.0	6.0	3.85	202			
46	I 27	暗褐砂	磨製 "	玢岩	7.8	5.75	3.0	175	基部欠損	62	
47	H 27 P 532	茶褐粘	打製 "	角閃石 安山岩	12.4	3.75	2.15	130	完形	79	
48			磨製 "	輝石安山岩	7.0	3.1	2.25	78	刃部欠損	82	
49	I 21	黒褐粘	磨製 "	安山岩	7.9	3.4	2.1	80	"	84	
50	I 24	暗茶褐粘	磨製 "	変朽安山岩	7.4	3.8	2.3	90	"	83	
51	J 25	暗褐砂	" "	緑色凝灰岩	7.5	3.4	1.45	60	"	81	
52	H 26	暗茶褐粘	磨製石斧	角閃石 安山岩	9.9	5.2	3.9	330	基部欠損	78	
53	H 58	黒褐粘	打製石斧	片麻岩 (優白部)	15.7	7.9	4.1	658	"	53	
54	G 24	暗黄褐色 粘質土	未製品	輝石角閃石 安山岩	13.7	8.2	5.35	898	"	98	
55	P 604	覆土内	"	熔結凝灰岩	11.8	7.1	5.6	630	"	96	
56	H 26	暗褐砂	"	石英安山岩	10.1	6.6	4.1	480	"	97	
57	H 25	茶褐粘	"	緑色凝灰岩	13.6	5.7	4.3	510	"	95	
58	H 26	黒褐砂	"	砂質凝灰岩	11.2	5.77	4.7	440	"	94	
59			"	緑色凝灰岩	13.3	5.6	3.75	470	"		
60	H 27		"	角閃石 凝灰岩	7.9	6.2	3.85	320	"	92	
61	P 576		"	角閃石 安山岩	11.55	6.4	4.7	460	"	91	

## 第1節 縄文時代の遺物

遺物 No	出土地点	層 位	石 器	石 質	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	遺存状態	挿図No	備 考
62	I 28		磨製 "	閃緑岩	13.4	5.2	3.35	340	完形	70	
63	H 27	暗茶褐粘	磨製 "	緑色凝灰岩	14.1	5.1	3.2	305	"	71	
64	I 23	黒褐砂	磨製 "	輝石安山岩	13.2	5.1	3.55	328			
65	I 25	暗茶褐粘	磨製 "	輝石角閃石 安山岩	11.8	5.5	2.6	240	"	80	
66	I 26	暗褐砂	打製 "	変朽安山岩	11.8	5.0	3.0	270	"	61	
67	H 27	黒褐砂	磨製 "	角閃石 安山岩	8.2	4.45	2.7	126	刃部・基部 一部欠損	63	
68	H 26		磨製 "	変朽安山岩	8.3	4.5	1.1	65	完形	88	
69	H 27	暗茶褐粘	磨製 "	緑色凝灰岩	8.3	4.2	2.0	110	"	87	
70	G 23	砂 層	磨製 "	変朽安山岩	6.8	4.8	1.9	98	基部欠損	86	
71	H 21	暗茶褐色 砂	磨製 "	変朽安山岩	5.8	4.15	1.9	78	完形	90	
72	H 16	砂 層	磨製 "	変朽安山岩	5.7	3.6	1.7	55			
73	J 35	"	磨製 "	緑色凝灰岩	11.35	5.5	3.5	375	基部欠損	76	
74	J 25	暗茶褐粘	磨製 "	石英安山岩	9.2	6.5	3.6	318	"	74	
75	H 24	暗褐砂	磨製 "	緑色凝灰岩	8.33	2.4	2.9	250	"	75	
76	H 27	茶褐粘	磨製 "	角閃石 安山岩	7.2	6.4	3.2	265	"	77	
77	(G 24) H 23)		打製 "	変朽安山岩	15.2	5.9	3.0	385	"	51	
78	I 26	暗茶褐粘	凹 石	花崗岩	13.8	10.5	6.3	1,290			
101	H 27	暗茶褐粘	スクレイパー	輝石安山岩	4.39	4.98	1.05	22.0		38	
102	I 26	"	"	"	3.60	3.80	1.20	13.9		40	
103	H 28	"	"	"	2.50	4.32	0.79	9.4			
104	"	"	"	"	4.20	6.66	1.19	25.1		41	
105	J 26	茶褐粘	"	"	3.27	5.15	1.03	15.6		39	
106	I 28		"	珪化凝灰岩	4.78	8.77	1.52	78.9		32	
107	H 27	暗茶褐粘	"	輝石安山岩	3.03	3.08	1.01	11.0		36	
108	H 22	茶褐粘	"	黒色頁岩 (古生代)	8.58	3.10	0.45	14.6			
109	方形落込	SE区覆土内	"	輝石安山岩	5.60	3.20	0.60	15.5			
110	I・J 59		"	"	3.15	3.60	0.75	8.7		37	
111	H 27	暗褐砂	"	"	5.0	7.1	0.8	32.0		33	
112	"	暗茶褐粘	石 鎌	"	2.225	4.15	0.73	2.15	完形	8	
113	I 25	黒褐砂礫	スクレイパー	"	4.1	6.3	1.0	21.5		42	
114	P 576	覆土内	石 鎌	メノウ質 フリント	3.55	2.45	0.78	5.9	完形	10	
115	H 28	暗褐砂	スクレイパー	珪化白色 凝灰岩	4.40	4.25	1.42	20.5		43	
116	I 28	"	"	珪化凝灰岩	7.60	11.9	2.57	200.5		31	
117		暗褐粘	石 錐	黒色頁岩	3.52	2.38	1.30	7.3	完形	6	
118	H 27	暗褐砂	"	輝石安山岩	4.80	1.68	0.90	5.2	"	4	
119	H 28	暗褐砂	"	珪化凝灰岩	4.86	1.45	0.90	5.1	"	5	
120	H 27	暗茶褐粘	石 鎌	赤フリント	3.0	2.0	0.770	3.6	"	17	
121	H 17	砂 層	"	輝石安山岩	(2.3)	1.75	0.50	(1.45)	先端欠損	23	
122	H 27	暗茶褐粘	"	玉髓、メノウ 質フリント	2.35	2.20	0.40	1.60	"	14	
123	H 28	暗褐砂	"	輝石安山岩	2.89	1.78	0.54	1.95	完形		
124	P 541	覆土内	"	"	(2.97)	(2.15)	0.51	(1.85)	基部先端 欠損	16	
125		"	"	"	2.50	(1.95)	0.32	(1.15)	"	18	
126	I 28	暗褐砂	"	"	2.70	(1.90)	0.41	(1.30)	"	12	
127	H 30	"	"	"	2.89	(2.0)	0.47	(2.10)	"	15	

第4章 出土遺物

遺物 No	出土地点	層 位	石 器	石 質	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	遺存状態	挿図No	備 考
128	H 28	暗 褐 砂	"	"	2.64	(1.57)	0.35	(0.95)	"	25	
129	H 31		"	"	2.45	1.65	0.33	0.70	完形		
130	P 575		"	玉 髓	2.24	2.05	0.55	1.20	"	29	
131	J 26		"	フリント	2.12	1.67	0.32	0.75	"	26	
132			"	"	2.01	(1.53)	0.31	(0.70)	基部先端 欠損	22	
133	H 26		"	輝石安山岩	2.95	2.08	0.26	0.65	完形	28	
134	G 27	茶 褐 粘	"	風化フリント	(4.41)	2.71	1.06	(7.40)	刃部・基部欠 損	85	
135	H 27	黒 褐 粘	"	輝石安山岩	3.80	(2.24)	0.51	(2.75)	基部の一 部欠損	9	
136	H 23		"	"	(2.46)	2.13	0.62	(2.4)	基部先端・ 基部欠損	24	
137	H 26	黒 褐 粘	"	"	(2.86)	(1.65)	0.45	(1.55)	"	11	
138	I 23	黒 褐 砂	"	"	3.00	(2.11)	0.59	(2.90)	基部先端 欠損		
139			"	フリント	(2.05)	1.70	0.42	(1.40)	基部先端・ 先端部欠 損		
140	I 26	暗 褐 砂	"	輝石安山岩	(2.02)	(2.10)	0.332	(1.50)	"	20	
141	H 26	"	"	風化フリント	(1.57)	(1.12)	0.25	(0.25)	"	30	
142	I 33		石 槍	アプライト	4.20	1.36	0.36	2.15	完形	2	
143	H 25		"	輝石安山岩	4.94	0.87	0.59	2.80	"	1	
144	H 26	暗 褐 砂	不 石 製	明 品 凝灰質砂岩	(4.97)	(3.96)	1.44	(32.8)	先端部・ 胸部欠損		
145	J 25		不 石 製	明 品 中 粧 砂 岩 (中世代)	(4.27)	(5.10)	2.00	(37.5)	頂部・側面 部・下半部 欠損	46	岩偶か？
146	H 26 P 147	覆 土 内	打 製 石 斧	変朽安山岩	4.9	5.2	2.7	87.00			
147	H 27	黒 褐 粘	打 製 "	変朽安山岩質 凝灰岩	4.5	4.4	1.6	43.9			
148	H 25	黒 褐 砂	磨 製 "	緑色凝灰岩	5.8	3.1	1.6	36.0			
149	I 26	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	変朽安山岩	10.5	5.33	3.4	293.0			
150		第 2 層	磨 製 "	石 英	7.4	5.5	3.0	183.5			
151	I 24	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	角閃石安山岩質 凝灰岩	6.2	3.5	2.3	76.2			
152	H 25	暗 褐 砂	磨 製 "	輝石角閃石 安山岩質凝灰岩	11.0	5.0	3.5	289.4			
153	3号井	掘 り 方	磨 製 "	変朽安山岩	7.4	4.0	1.8	69.5			
154	H 25	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	緑色凝灰岩	7.33	4.0	1.8	355.0			
155	土 壇 1	覆 土 内	磨 製 "	"	10.4	6.0	3.1	153.5			
156	H 22	茶 褐 粘	磨 製 "	"	6.6	4.5	2.3	91.1			
157	I 24	暗 茶 褐 粘	打 製 "	角閃石安山岩質 凝灰岩	7.88	4.4	2.7	134.2			
158	I 31	黒 褐 粘	磨 製 "	緑色凝灰岩	5.4	4.7	1.9	78.6			
159	H 27	茶 褐 粘	磨 製 "	石英安山岩	8.8	7.0	3.1	270.5			
160		砂 層	打 製 "	"	8.8	4.7	2.0	111.4			
161	I 24	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	変朽安山岩	6.2	4.5	2.0	70.7			
162	G 27 P 158	覆 土 内	磨 製 "	"	4.9	4.3	2.9	75.0			
163	H 22	茶 褐 粘	磨 製 "	角閃石輝石 安山岩	4.2	5.2	4.0	191.0			
164	I 27	茶 褐 粘	磨 製 "	石英安山岩	7.3	5.5	3.4	207.4			
165	I 26	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	変朽安山岩	5.7	3.2	2.4	59.4			
166	I 22	砂 層	磨 製 "	"	13.3	5.6	3.4	391.5			
167	J 26	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	緑色凝灰岩	4.1	5.4	2.7	84.5			
168	I 19	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	"	6.9	5.6	3.1	190.5			
169	I 23	黒 褐 砂	打 製 "	角閃石安山岩質 凝灰岩	11.8	5.6	3.9	424.0			
170	H 28	暗 褐 砂	打 製 "	凝灰岩	8.9	4.4	2.1	104.2			
171	I 24	暗 茶 褐 粘	磨 製 "	白色凝灰岩	12.8	6.8	3.3	379.0			

## 第1節 縄文時代の遺物

遺物 No	出土地点	層 位	石 器	石 質	長 cm	幅 cm	厚 cm	重 g	遺存状態	挿図No.	備 考
172	H 25	暗茶褐粘	磨製石斧	角閃石安山岩質 凝灰岩	6.6	5.7	2.9	127.5			
173	I 25	暗茶褐粘	磨製 "	緑色凝灰岩	9.0	6.1	4.5	371.4			
174	G 27	砂 層	磨製 "	砂質凝灰岩	10.8	6.6	4.0	395.5			
175	J 25	暗茶褐粘	磨製 "	変朽安山岩	11.4	5.5	2.9	249.1			
176	I 24 方形落込	覆土内	磨製 "	変朽安山岩質 凝灰岩	6.5	5.6	3.4	207.2			
177	H 26	暗褐砂	磨製 "	砂質凝灰岩	7.4	3.7	2.5	130.9			
178		砂 層	磨製 "	輝石安山岩	10.3	4.9	3.4	248.4			
179	I 29	暗茶褐粘	磨製 "	砂質凝灰岩	8.0	5.1	3.4	219.5			
180	H 27	覆土内	不明	白色凝灰岩	12.4	5.6	1.8	149.5			
181	I 23	暗茶褐粘	磨製石斧	緑色凝灰岩	10.8	5.4	3.8	371.5			
182	I 22	茶褐粘	磨製 "	"	11.6	4.7	3.7	304.0			
183	H 28	暗茶褐粘	磨製 "	凝灰岩	6.0	4.4	2.0	75.6			
184	H 24	暗茶褐粘	打製 "	緑色凝灰岩	8.1	4.5	2.8	153.6			
185	I 31	黒褐粘	磨製 "	"	8.0	4.2	2.9	142.0			
186	I 25	暗茶褐粘	磨製 "	"	10.5	6.3	3.4	282.0			
187	不明	不明	磨製 "	安山岩	5.8	5.3	3.5	147.0			
188	I 24	暗茶褐粘	磨製 "	輝石角閃石 安山岩	9.3	7.3	3.2	348.1	未製品 半面・磨製		
189	I 25	暗褐砂	磨製 "	変朽安山岩	5.8	5.5	3.5	164.0			
190	G 27	"	磨製 "	輝石角閃石 安山岩	10.0	5.8	3.7	302.0			
191	H 26	暗茶褐粘	磨製 "	角閃石安山岩	8.8	5.9	4.3	320.5			
192	H 26	黒褐砂	磨製 "	変朽安山岩	8.8	4.2	2.3	132.0			
193	石列No.4		磨製 "	"	10.7	4.3	2.8	191.1			
194	H 25	茶褐粘	磨製 "	緑色凝灰岩	6.4	4.9	3.2	160.9			
195	G 24	下 層	磨製 "	変朽安山岩	5.4	3.2	1.7	42.5			
196	H 27	覆土内	磨製 "	緑色凝灰岩	12.9	4.0	2.5	108.5	刃部半存		
197	H 27	黒褐粘	磨製 "	砂質泥岩	7.0	3.9	1.5	88.0			
198	H 23	砂 層	磨製 "	変朽安山岩	9.0	5.6	3.1	295.0			
199	H 28	暗褐砂	磨製 "	変朽安山岩質 凝灰岩	7.2	4.3	2.0	101.5	刃部半存		
200	不明	不明	磨製 "	砂質泥岩	5.1	3.2	1.8	52.0			
201	G 24	下 層	磨製 "	緑色凝灰岩	10.3	6.1	3.4	375.0			
202	不明	不明	磨製 "	変朽安山岩	7.0	5.0	2.4	132.1			
203	P 265	覆土内	磨製 "	緑色凝灰岩	9.1	5.9	2.6	305.0	刃部半存		
204	H 26	暗茶褐粘	磨製 "	角閃石安山岩	6.4	4.8	2.6	113.5			

第2節 平安時代以前の遺物

(1) 土師器（第79、80図）

坏（第79図1～14）第79図5、7、8、10、14を除く9点は、すべて内面黒色研磨土器である。1は、口径11.2cmを測るもので、外底体部では粗い削りを施し、口縁帯では横ナデを施す。内面については、風化のため不明であるが、黒色研磨されたものと見られる。3、4、6を除けば、内面の仕上げ調整（黒色研磨）については、風化、磨耗のために判然とはしない。6、7は、口径7cm、器高約4cm以上に復元できる大形品である。5については、内外面ともに、良く研磨され、口径6cm、器高4.5cmを測るものである。底部の調整は、粗い削りで平面を造り出している。内外面ともに赤色顔料の塗布の痕跡が認められる。10は、口径11.5cm、器高4cm以上に復元できるものであるが、他よりはやや深い碗形を呈するものとなろう。外面では、所々に粗いハケ状具による調整痕が認められる。胎土には多くの長石粒が含まれ、他の精選された坏類とは区別される。胎土、色調のうえからみれば、次項以降に説明する甕類のそれに類似する。他には、実測、図示し得なかったが、口縁部破片で約40点を数えることができる。その内でも95%以上は内面黒色土器で占められる。これについては、体部片についても同様のことが言える。

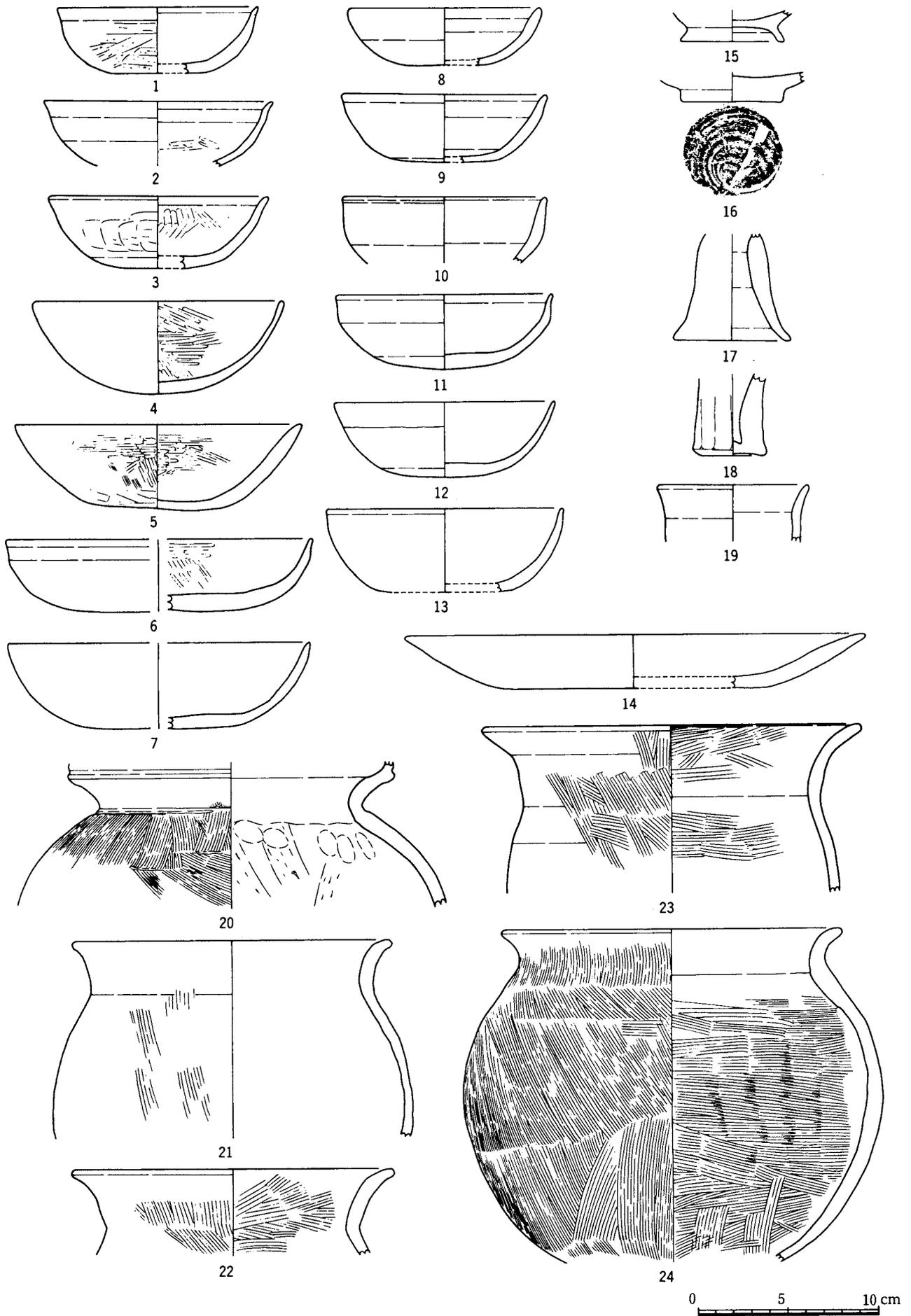
坏（第79図15、16）

15は、高台付坏で台径5.5cm、残存器高1.8cmを測るものである。内面黒色土器の痕跡を有する坏部に、外方に踏ばる器肉の薄い高台を貼付したものである。高台を有するものは、他には一点もみられなかった。16は、底部のみの破片であるが、底面に糸切り痕を明瞭に残している。台部と坏部を明瞭に区別し、高台様に見せる。この類についても、他にはない。

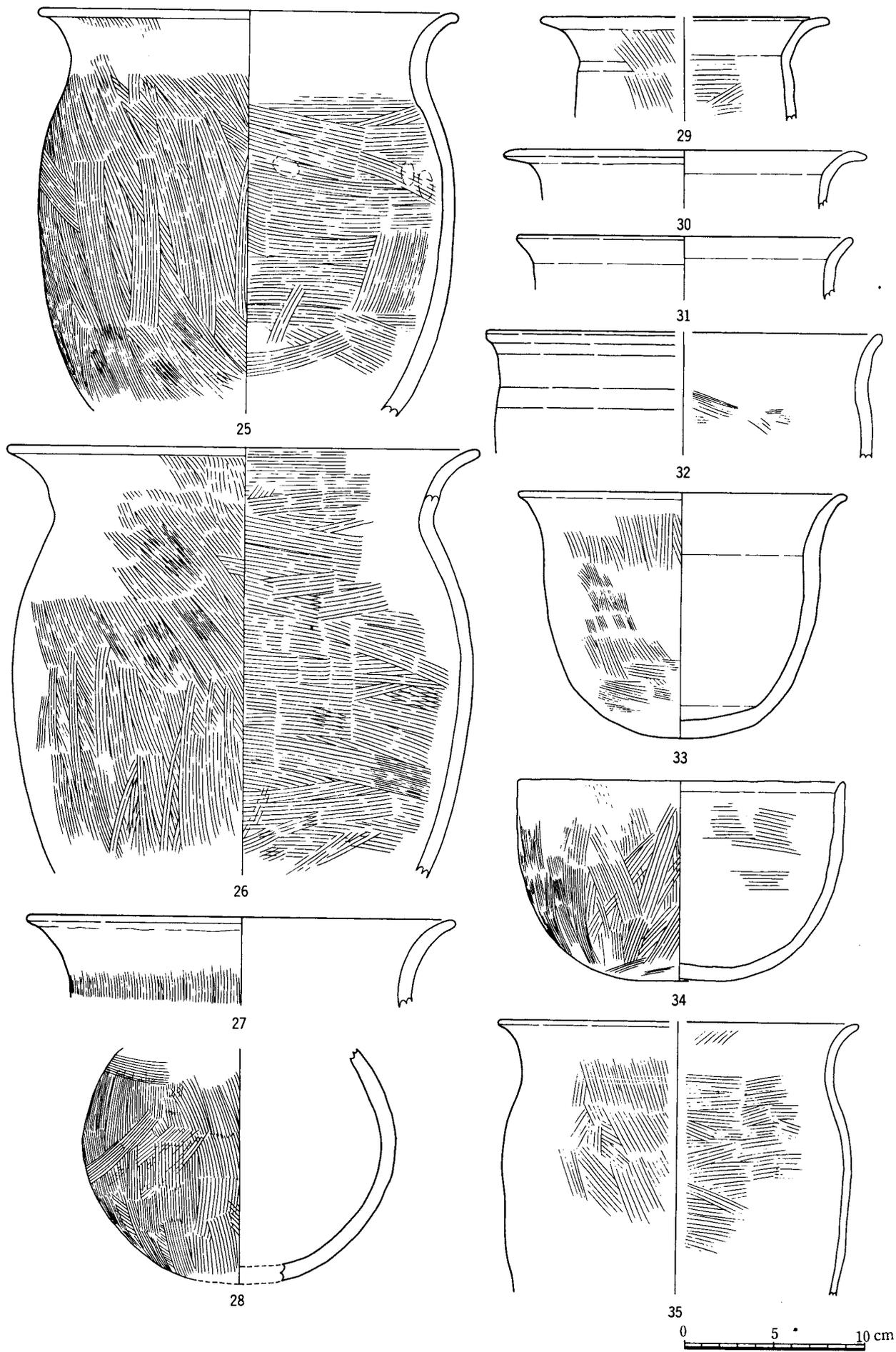
高坏（第79図17）脚部のみ破片であるが、残存器高6.3cmを測る。内面中位以下では、削りによりまたその上位については、しばり目が明瞭に観察できる。18については、支脚状のものとして扱ったが、脚部片の可能性も考えられる。高坏脚については、もう一点存する。

甕（第79図20）有段くの字口縁を有するもので、口縁帯に凹線を施すものと考えられる。胴部は、丸く球胴形に張るタイプのものである。外面ではハケにより、内面胴部ではヨコナデに近い削りを施している。他の甕は、すべてくの字状を呈するか、直口するかのものである。内外面の器面には、二次的な加熱によるものか、単なる風化によるものかは判然としませんが、膚荒れとともに長石粒の吹き出しが目立つ。22、23にみられるように、口縁帯をくの字状に屈曲させ、さらに口縁端部をつまみ出すために二段の屈曲が認められる。24は、口径18.6cm、残存器高18.7cmを測るもので、球胴形の丸底を呈するものとなろう。口縁帯内面を除くすべては、ハケにより調整されている。内面のハケの方が外面よりやや粗く、また力強く掻き取りに近い感じを与える。内面では赤褐色を呈し元の色調を呈しているものと推定されるが、外面は、灰褐色を呈し膚荒れが認められる。やはり外面に、二次的な加熱が加わったものと思われる。第80図25、26の甕も、口縁帯にかすかな二段の屈曲がみられる。他より、やや長胴の大形をなす器形とみられる。外面では、おおむね右下り、内面では水平方向のハケナデが観察される。33は、くびれ部が少なく、そのまま外方に開くタイプの小形のものである。外面では、粗いハケが上下方向に施されるが、内面については不明である。これについても外面に二次加熱が認められる。34は無頸のものである。口径18.0cm、器高11.0cmを測りほぼ半球形をなすものである。口縁帯外面には、二条のハケ消去部分が認められる。29、35は器壁も薄く、やや長胴形のタイプとなろう。ともに、やや長石を多く含み灰白色に近い色調を呈している。内外面のハケ状具による調整は他と同様である。5には部分的にボタン状（径約4cm）の二次加熱を受けた痕跡が、内外各一ヶ所に残存している。

以上、土師器甕について観てきたのであるが、そのうちの約80%については、煮沸などに伴って生じる熱変化とは違う、二次的な加熱の痕跡が随所に見られる。これらについては、遺構内の遺物として扱われるものではないが、何らかの同時的な現象に起因するものと思われる。また、遺物の出土状況の項にも詳しく述べられているが、甕についてはI-31グリットの範囲に納まり、該期の特殊な遺構が存在した可能性が極めて高い。それらは、



第79図 出土遺物土師器(1/3)



第80図 出土遺物土師器 (1/3)

一括廃棄後に火災に遭ったか、または、火を伴った祭祀的行為により生じたかなどが考えられる。

## (2) 須恵器

蓋(第81図36~42)36は、坏蓋で扁平なボタン状のつまみを有する。頂部平坦部では粗いへラケズリを施す。38は、口径16.0cm、器高3.5cmを測る本遺跡出土品中では最大のものである。頂部にはほとんどへラケズリは施されない。口縁部も薄く引きのぼし、端部は丸く屈曲するものである。内面には、墨痕がかすかに残り転用硯として使用されたものである。39は、鋭角に屈曲する端部をもち、調整も丁寧である。坏蓋では他にも、口縁部片で72点が出土している。概ね図化した時期のものであり、確実に古墳時代に所属すると思われるものはない。ただ一点だけであるが、内面に低平な返しを有するものがあるだけである。40~42は壺(薬壺)の蓋である。40は小形のもので、口径9.5cm前後のものとなる。頂部端面近くでは、轆轤を使用した浅く細い沈線が一ないし二条巡る。41も全形を知り得るものでないが、差して大きくはない。頂部端面では丁寧なへラ削りを施す。42は、口径7.5cmを測るものであるがつまみの部分を欠失する。頂部端面近くとほぼ中位の二ヶ所に轆轤の回転を利用した二条の沈線が巡る。口縁部は、やや内屈して端部は平らに仕上げられる。

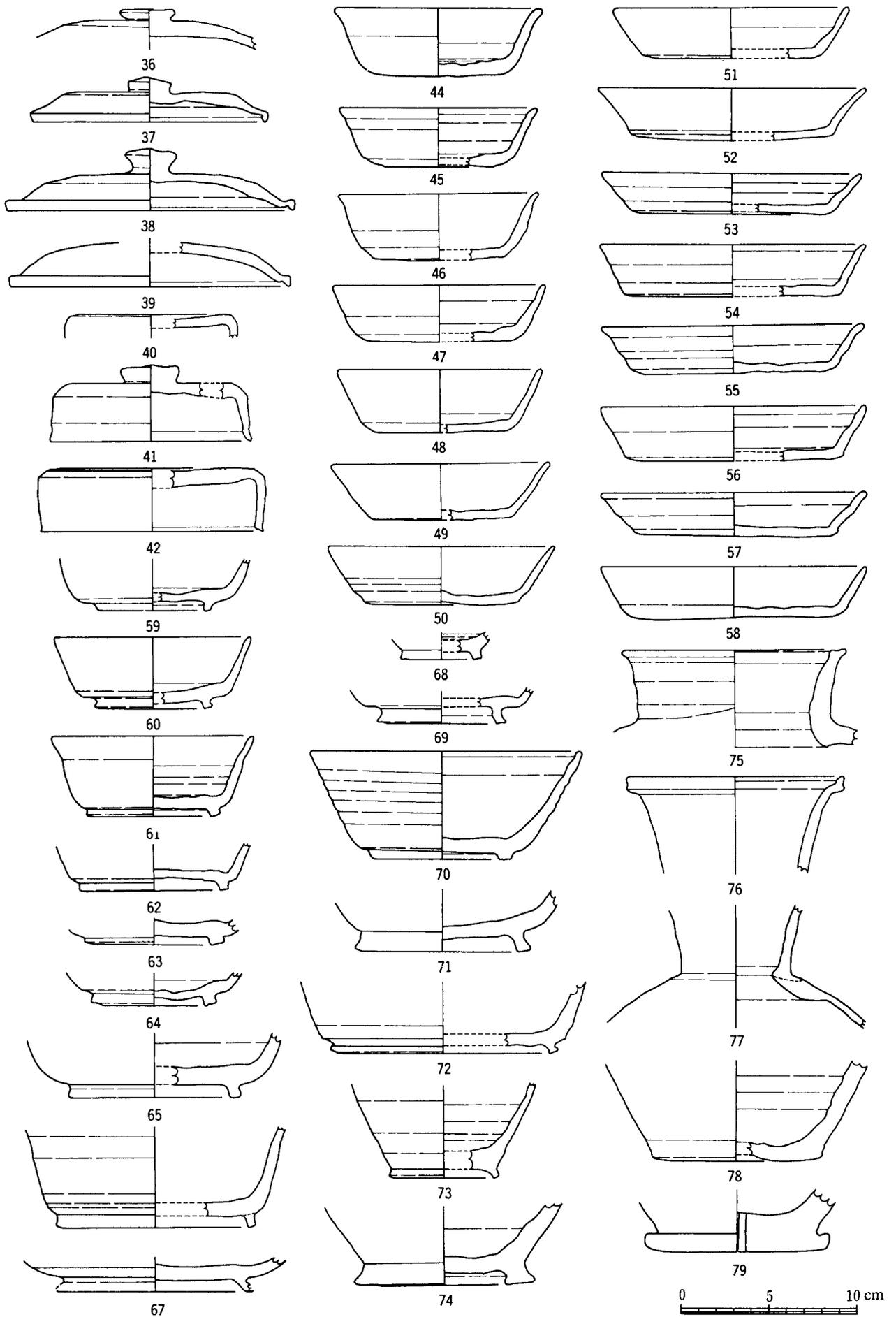
坏(第81図44~50)坏類の中では、無台のものが圧倒的に多いのであるが、図示可能なものは少ない。口縁部片で数えると66点ある。44~46は、器高も3.8cmと深く造りもしっかりとしている。内傾の強い体部から、先端部で外反するタイプである。特に45、46では、体部と底部の境界を、45では一度、46では二度のへラケズリにより調整される。47~50は、体部が直に開くタイプである。47、48は腰部から底部にかけては、やや丸くまた、49、50は底部との境に明瞭な稜をなすものである。また、体部外面には重ね焼の痕跡が見られる。とくに49、50においては、明瞭である。

盤(第81図51~58)51は、口径13.1cm、器高2.8cmを測るもので、出土品中では小振りに属する。他は、すべて口径15cm前後を測る通有のものである。底部についても51を除けば平底に近い。51は器壁もやや厚く、底部も丸底に近い。平底を呈するものは、器壁もほぼ均一化される。口縁部部の外傾により二種類が判別できる。一は、52、55のように、口縁端部で外反するものと、一は、53、54、56、57のように体部が直に外傾するものである。いずれも、口縁端近くの外面に重ね焼の痕跡が認められる。

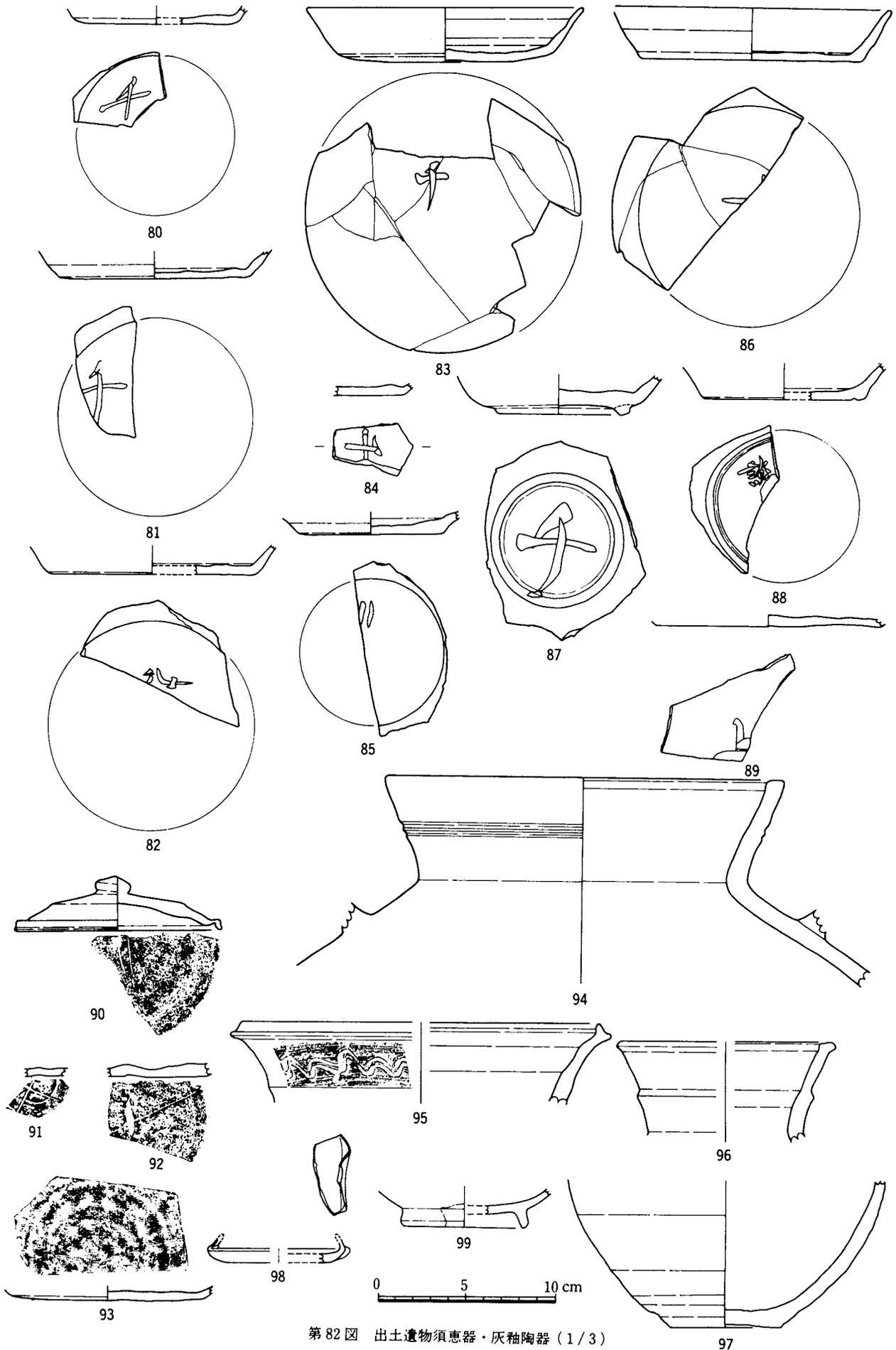
有台坏(第81図59~72)底部片で数えて46点ある。そのうち図示できたのは14点である。口径の大小等から三類がある。一は、口径11.0cm前後、一は、口径15cm前後、一は、口径10cm以下の三類である。59~64は、口径11.0cmを測るタイプのものであるが、さらに坏部の形態により二のタイプが見れる。坏体部が直に外傾する59、60のようなものと、坏部口縁端が上位で外反する61、62のようなものである。また、61、62は、坏の調整の際にも述べたように、体部と底部の境に、ケズリを施すタイプであり、造りも割あい丁寧である。61の底部外面には、整形の際に生じたと思われる爪跡痕が観察される。また、中央部に漆痕か漆書文字(因か)かは判然としなが認められる。口径15cm前後のもので全形を知り得るものは少ないが、口径15.5cm、器高6.1cmを測る。高台は、厚さ0.3cm程度の断面方形のものを貼付したものである。体部では、特に外面に轆轤目の凹凸が甚しい。内面では、墨痕が認められ、また磨耗がみられることから硯として使用された可能性が高い。67は、残存する外底面および、腰部は粗いケズリを施す。高台も外方へ強く踏張っている。整形、調整などからみて、坏部中位に稜(段)を有する稜碗(佐波理碗)の可能性が強く考えられる。68は、底径4.6cmを測る小形の台部片であるが、全形を知り得ないので、小形の壺等の底部の可能性もある。

壺、瓶、甕(第81図73~79、第82図)73は、底径6.0cmを測り、矮小な台部を貼付した壺か瓶の類である。胎土、焼成ともに良好である。75は、横瓶の口頸部と見れる破片である。76は、双耳瓶の口頸部が考えられる。43は、鉢の底部底である。底部中央部に、口径2mm前後の円孔が穿たれている。底面には、ケズリが施こされる。94は、肩に2ないし4ヶの耳をもつ壺である。肩部では、焼成の際の降灰、自然釉のため融着が甚しい。この四耳壺は、ほぼI-32グリットを中心にはほぼ一個体が出土したのであるが、接着することができなかった。95、96は、甕口縁部片である。95には、二条の粗いクシ状具で波状文を施す。

墨書土器(第82図80~89)何らかの墨書痕を有するものは、総数22点ある。器種別の内訳をみてみると、坏



第81図 出土遺物須恵器(1/3)



第82図 出土遺物須恵器・灰釉陶器(1/3)

#### 第4章 出土遺物

が10点、盤が10点、有台坏1点、蓋1点である。蓋の内面を除けば、すべて底部外面への墨書である。判読可能なものでは「𠄎」の一字がほとんどである。また、一点であるが、88の「𠄎」と読めるものがある。図化しなかったが、蓋の内面に見える墨痕は、坏蓋硯と使用された時点に生じたものである。「𠄎」の筆についても同一のものではなく、複数の筆者によるものと思われる。

刻書土器(第82図90~93)総数では、17点ある。その内訳は、坏12点、坏蓋1点、盤1点、有台坏3点である。そのうち図示したのは、4点である。「|」、「||」、「×」のうち「|」が多い。が、14の盤底部内面のは単純な記号などとは見れない。ヘラ先により浅く、スピード感をもって刻書されている。

(3) 灰釉陶器(第82図98、99)破片数で9点ある。図示できた2点を除くとすべて瓶類の胴部片である。98は、耳皿の細片である。内面にのみ黄緑色の灰釉がかかる。99は、有台碗の底部片で、ほぼ、外底面を除いた部分に灰釉がみられる。釉は、降灰物のために黒ずんだ淡緑色釉を呈する。内面見込の部分に重ね焼の痕跡が残る。

### 第3節 中世の遺物

#### 1 国産陶磁器

出土した陶磁器類では、珠洲、越前、美濃・瀬戸、土師質土器、瓦質土器などがある。細かい分類は別として珠洲が圧倒的に多く、全体の約70%を占め次いで越前約15%、美濃・瀬戸約8%、土師質土器約5%、瓦質土器約2%の値を呈し、一般集落の中で普通には多い占有率を示す土師質土器が意外に少ない。表に示した分類は、個体数までの分類はできなかったので破片数の数字であることを最初に断わっておきたい。が一応の傾向性が伺えるものと思われる。

(1) 土師質土器(第83図)ほとんどが小皿であるが綿密な分類はできていない。成形技法から大摺みに3大別できる。底部に糸切り痕を留めるもの、粗いヘラ削りを有するもの、粗いナデにより消去するものがある。底部に糸切り痕を有するものは、10点存する。図示した100~105で見ると、100、103のように比較的厚手で器高の低いタイプ、104のようにゆるく外反するタイプ、101、102のように白磁小皿を連想させるようなタイプなどがみられる。燈心油痕と見られる油脂状のものの付着があるのは、101、102のみである。

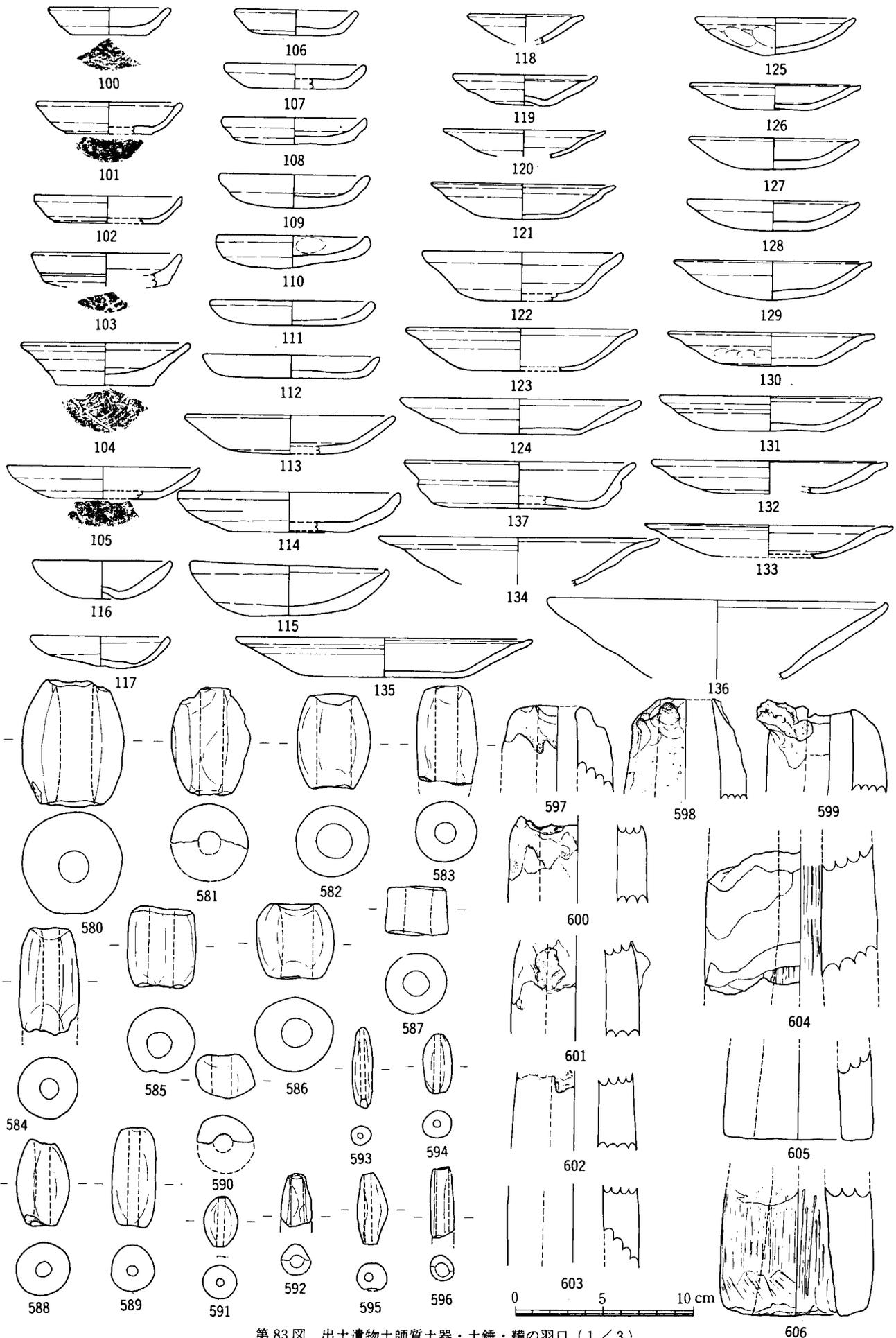
次いで多いのは、口径9cm前後、器高1.5cm前後で底面に手持ち(?)の粗いヘラ削りを施し、平底風に仕上げられる一群である。破片で65点ある。さらに、口径、器高の大小により二群に分けられるものと思われる。先の糸切り痕を有するものは、ほとんど正円に近いものであるが、本類は不整形なもので、比較的均質の厚手のものが多い。底部は、面取り風のヘラ削りによるほかは、すべて水挽きによる横ナデである。赤褐色を呈し、比較的砂粒を含むものが多い。油脂状の付着の見られるのは、65点中4点である。

最も多いのは、手捏成形ののち轆轤による横ナデを口縁部から内面にかけて施すものである。口縁部を横ナデ調整するため、その強弱によって外反する度合、また端部が内湾する度合が異なる。比較的薄手均一なものが多いようである。口径により13cm前後のもの、9cm前後のもの、とさらに小さいものと三群ぐらいに分類可能である。また、成形上から本類に含めたものなかでも、113のように口縁部横ナデののち、ヘラかなにかで端部に鋭い面を有するものがある。また、117、119のように底部にヘソ状の穴を有するものがある。また、137のように口縁部のナデが極端に強く段を有するものなどがある。これらは差して多くはない。153片中、油脂状の付着の認められるものは約30片ある。

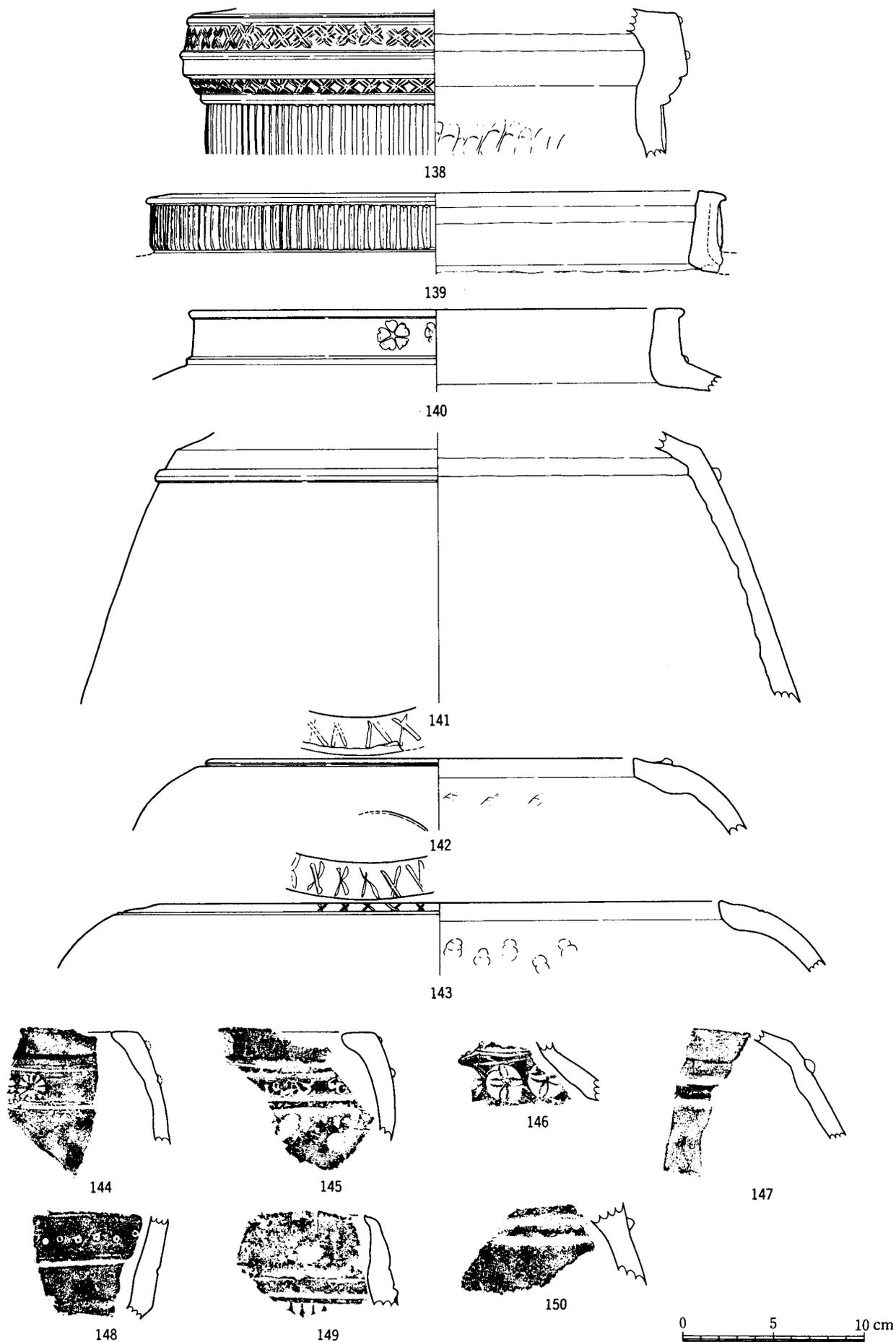
以上であるが、三類のうちいずれにも分類できなかったものが、78片ある。(うちタール付着3片)これらは、糸切り痕を有しない二類の中間的な形態を示すが、どちらかと言えば、厚手でヘラ削りを施すものの方が多いようである。

#### (2) 瓦質土器(第84図)

全部で22点ある。いわゆる火鉢、風炉類があるものと思われるが、いずれも細片が多い。図示し得たものについて若干説明をする。内外面ともに黒褐色を呈し、瓦質のものとの赤褐色を呈し、土師質のものとの二者が見られ



第83図 出土遺物土師質土器・土錘・織の羽口 (1/3)



第84図 出土遺物瓦質土器 (1/3)

る。口縁形態についても、139、140のように、高さ3cm前後に直立し肩の張るタイプがある。139には、竹管文、140には花文の刻文がある。139は、黒褐色、140は、赤褐色を呈する。口縁部が内湾し、端部をへら切りし、ほぼ垂直な面をなす142、143がある。口縁外面には、一条の突帯が巡る。へら先により「×」の連続刻文を施す。142の肩部には透し窓が認められる。いずれも赤褐色を呈し、外面はへら磨、内面はナデ仕上げである。口縁部は、内湾し端部を内側につまみ出し、上面が水平な面をなすタイプに144、145がある。外面の二条の突帯間に花文の刻文がある。ともに、黒褐色を呈するものである。138は、口縁部上端に水平な面をなし、内側に端部をつまみ出すもので、筒状をなすものと考えられる。竹管による竹管文、突帯を多用し、さらに突帯間に、櫛掛の連続文を施し、装飾性に富んだものである。砂粒を含み赤褐色を呈する。141は、口縁部を欠失するが、屈曲してそのまま端部に至るものであろう。長胴形になると思われる。赤褐色を呈する。他にも、器形は不明であるが、148のように竹管を刺突するものがある。

### (3) 珠洲（第85図～第99図）

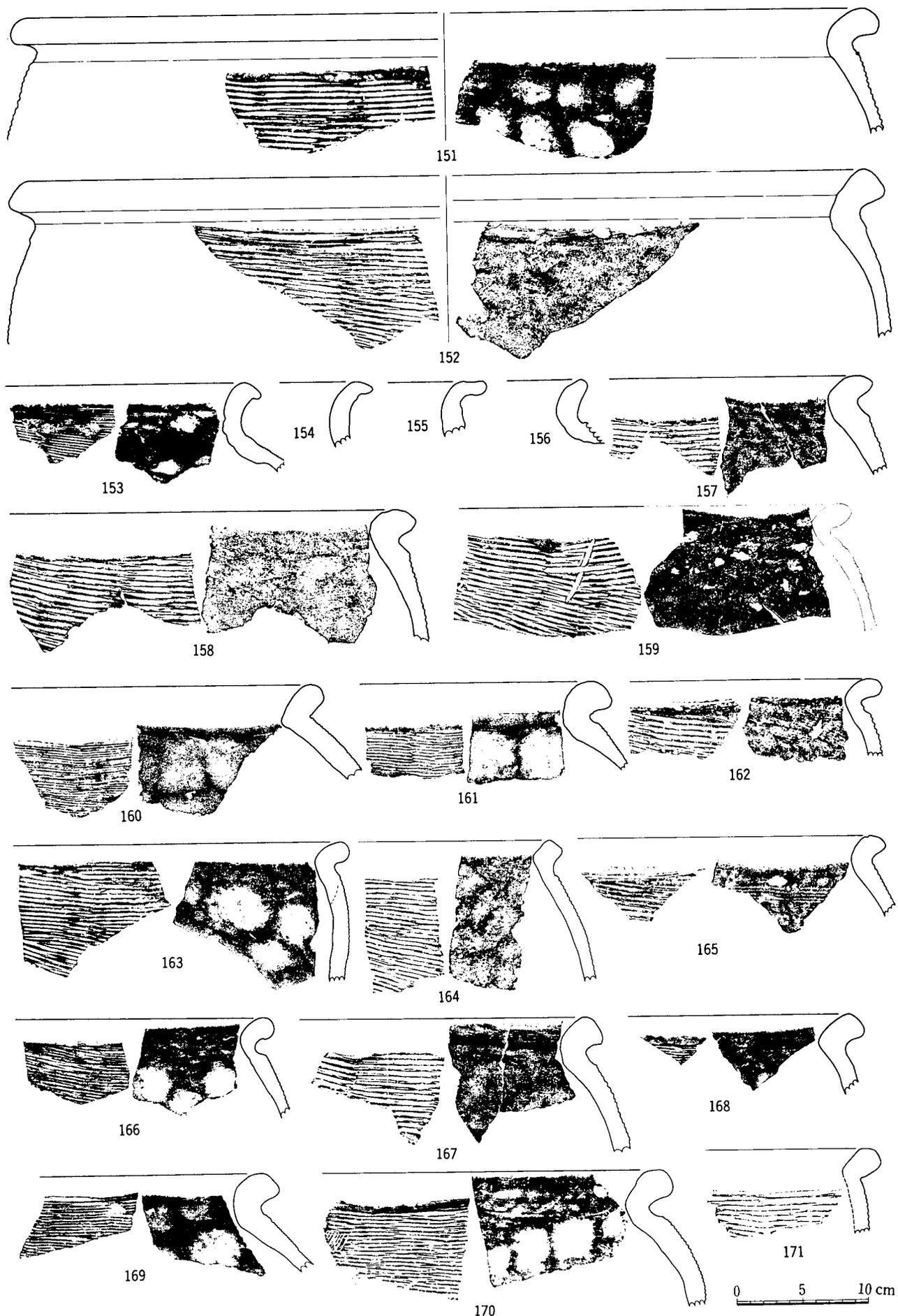
出土陶磁器類のなかでは、総数約10,000点を数え最も多い。生産地に近い（直線距離で約45km）と言う地理的条件もあるが、消費遺跡の発掘調査では類例がない。「珠洲法住寺3号窯」の報告をなされた吉岡康暢氏の成果に基づいて記述を進めていく。器種では、甕、壺、鉢の三種があり鉢が圧倒的に多く約6,000点、60%、次いで甕約3,500点で壺は意外に少なく約500点、5%である。

甕第Ⅰ、Ⅱ期（第85図153～156）7点分類されるが、非常に少数である。そのうち図示したのは4点である。155は、ほぼ直口するやや長目の頸部に、口縁部を屈曲さらに嘴状に引きのばし拡張する。寺社カメワリ坂窯の特徴である。割れ目に漆接合痕跡が見られる。胎土、焼成ともに良く黒灰色を呈する。153は、やや長目の頸部に少しつまみ出した口縁となり、胴部では細かい条線状のタタキを施す。内面では接合痕をナデにより消去し凹線が三条見られる。153、154、156は法住寺3号窯式のうちに類例が見られるものと思われる。

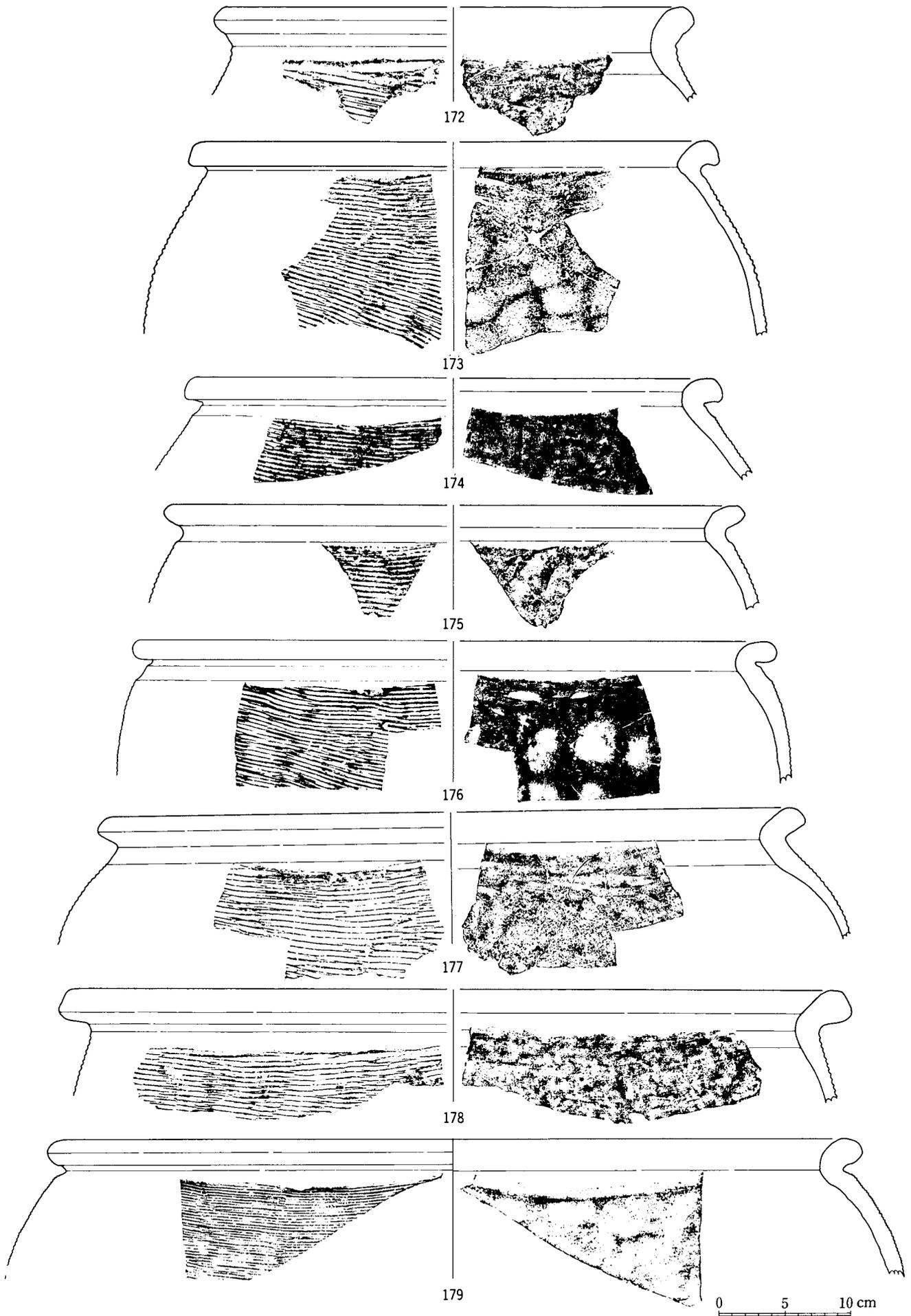
甕第Ⅲ期（第85図157～159、161、162、第86図173～175、178など）馬縹窯に代表されるもので、口縁部が鋭角的に張り出し、前期法住寺3号窯の特徴をわずかながら継承しているものである。158は、頸部で鋭角的にくびれ、口縁端部を若干引き伸ばす。ために、端部上面にその際に生じた浅い凹線が巡る。外面では、3cmあたり7本とやや粗いタタキを施す。内面では、押圧具による痕跡が認められる。割れ目に漆接合痕が見られる。159も頸部で屈曲し、口縁端部をややつまみ出すタイプのものである。器壁は全体に薄い。外面では、158と同様やや粗いタタキを施す。頸部と口頸部の接合痕は、ナデにより消去されている。色調は、灰褐色を呈するが、内外面ともに油脂状の付着、とくに内面で甚しく黒褐色を呈する。肩部に、へらによる「×」の刻文がある。第86図178は、口径59cm前後に復元推定できるもので、甕の中では通有のものであるが、大きいものの部類に属する。甕の口縁部は、鋭く屈曲しやや端部をつまみ出す手法が若干残っており、前期法住寺3号窯式期の残影が伺える。外面のタタキも3cmあたり8本と細かくこの点からも前述の事が言える。また、甕胴部径についても、口径よりもひとまわり大きい。第86図のうちでⅢ期馬縹窯式期に属すると思われるものは、173～175である。

甕第Ⅳ期（第86図176・177、第85図151・152・164・167など）口縁形態は、「く」の字状に屈曲しその端部は短かく角ばったものが多くなり、まま玉縁状をなすものもみられる。第86図176は、口径50cm以上になるもので、厚さ長さともに2cm程度の口縁部が付く。口頸部と胴部の接合部は、入念なナデで消去される。胴部内面では、7×5cm大の押圧痕がなめらかに残る。外面では、3cmあたり7本とやや粗めのタタキが施される。胴部器壁は、口径部に比して0.7cmと薄い。177も、口径60cm近くに推定復元されるもので甕類では大形の部類に属する。成形、調整手法については、176と同様であるが、口縁端部が2.5cm程度と肥厚する。外面タタキは、3cmあたり7.5本と粗くなる。177に比して焼成もややあまく、本期のなかでも若干新しい類に属するものであろう。本期に属する176のように前期の窯式を継承するものでは、焼成は割り合いと良く灰青色を呈するものが多いのに比べて、6のように新しい部類に属するものについては、焼成もやや甘くなり、胎土にも砂粒、小石を含むようになる傾向性が認められる。

甕第Ⅴ期（第86図172、第87図182・192・195など）西方寺窯跡を本期の標式とするが、焼成室末端から出土



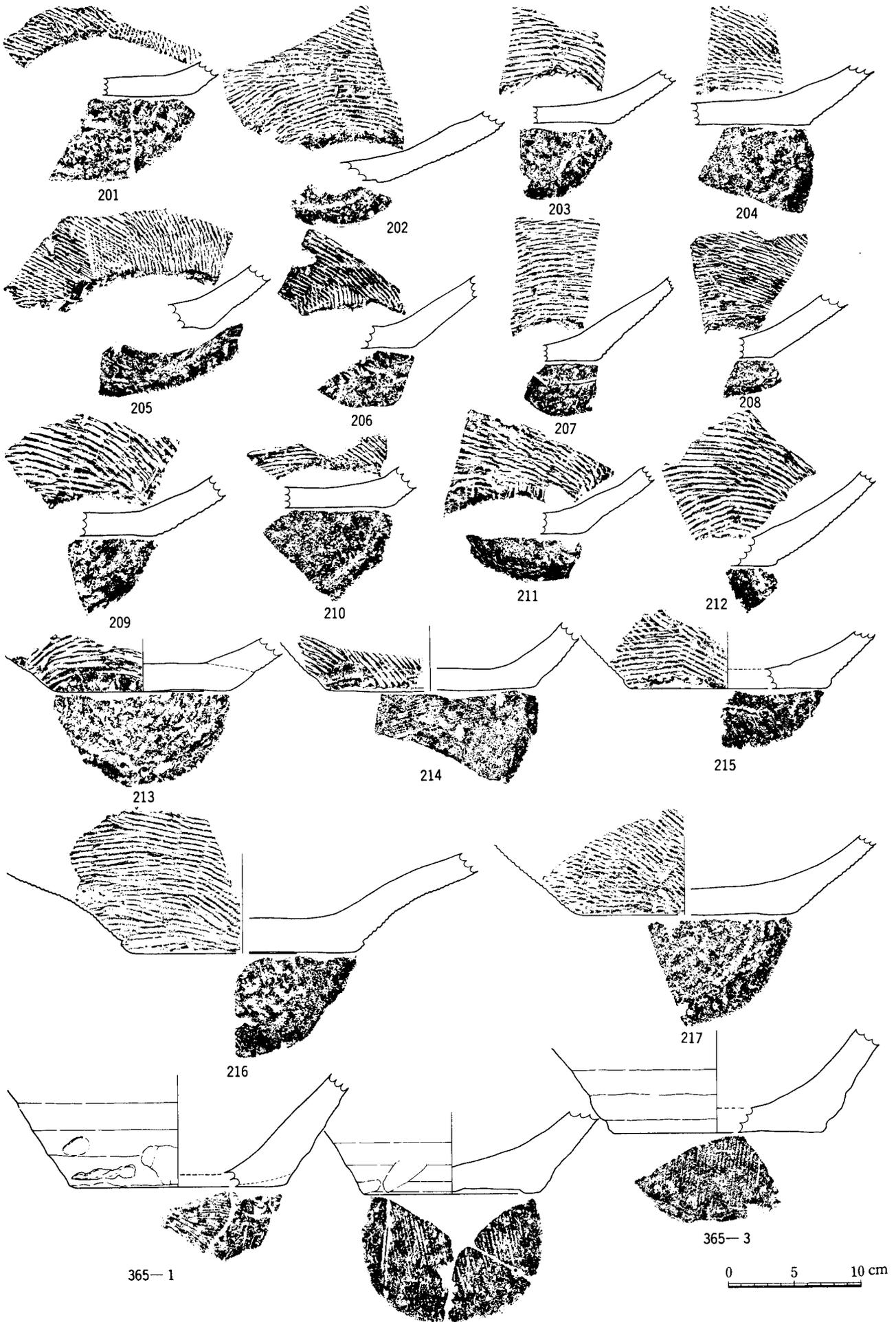
第85図 出土遺物珠洲・甕 (1/4)



第86図 出土遺物珠洲・壺（1/4）



第87図 出土遺物珠洲・甕 (1/4)



365-2  
第88図 出土遺物珠洲・甕(1/4)

した窯内の一括資料であるが、甕・壺類がほとんど検出されていない。ために本期に属する甕類と前段階の大島窯跡式期の峻別は非常に困難である。第86図172は、口径34cm以上に推定復元できる中型の甕であるが、口縁部は丸く、頸部より「く」の字状にのびる。焼成は甘く灰白色を呈する。外面のタタキも3cmあたり7本と粗い。内面の頸部は、ナデにより消去され、胴部では押圧痕が見られる。胴部径は、口径を超えない程度のやや長胴のものとなろう。第87図192、195が本期の典型的なものと思われる。192では、第86図172と同様に口縁端部の丸い「く」の字状の口頸部となる。頸部と胴部の接合部は、カキ取りにより消去するが、雑で内外面に接合痕が残る。172と同様に焼成も甘く灰白色を呈する。胴部径も、ほぼ口径に等しいかわずかに上回る程度である。

本期のものは、口縁部の屈曲も弱く、先端部は丸味をおびるものが多く、整形、調整ともに粗雑化が進み、焼成も甘く、胎土にも長石および小石を含むようになる。IV期のものとの区別は難しいが、量的にはさして多くはないと思われる。

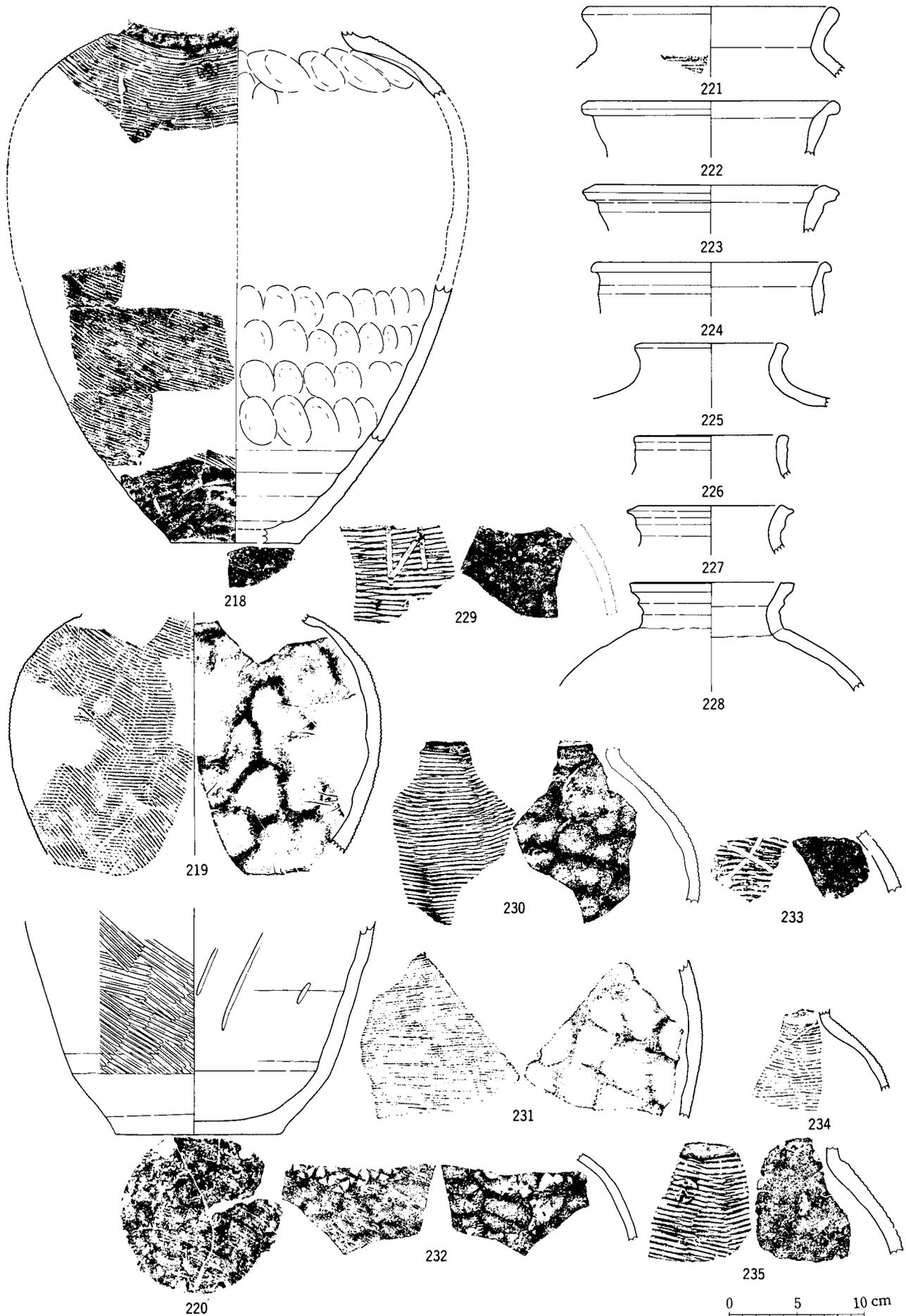
甕底部（第87図、第88図）底径14～18cmを測るものが多く、砂底である。これは成作工程の中で、底部の円板状のものが砂をまいた台上で作られたことを示しているものと思われる。乾燥ののち砂の台上から取り上げ、それに粘土紐を巻き上げ、下胴部の鉢形を成形するものと思われる。底部外面の周囲幅約1～2.5cmにかけて砂の付着の見られないこと、また、砂底の部分が周辺部よりやや上げ底風に作られることから伺える。実測点数22点の半数以上の13点の底内面には、使用によるものと思われる摩滅痕が認められる。これは、甕破損後の下胴部を鉢（搦鉢）として二次使用したためと考えられる。内面の押圧具痕および巻き上げ痕が、ほとんど判別できないまでに、摩滅しているものが多い。

甕胴部（第87図196）タタキを有する関係から細片であるとほとんど壺との区別がつかない。径を復元できる程度の破片からようやくその区別がつく。ここでは、図示した196について少しく説明を加える。外面では、3cmあたり7本の条線状のタタキを施し、胴部では右傾し下位（鉢部）に従って平行に近くなる。内面の押圧痕も、か弱いナデにより消去する。内外面に、下胴部（鉢部）と胴部の接合痕がわずかに認められるが他は消去する。焼成は良く灰青色を呈する。II期の後葉か、III期の前葉の所産と考えられる。内面の破損部に布状のものを漆により接着している。これは、ヒビ割れ部分の水もれを防ぐための補修痕と思われる。普通の割れ目の接合場合とは違い、布状のものが見られるのは本例のみである。

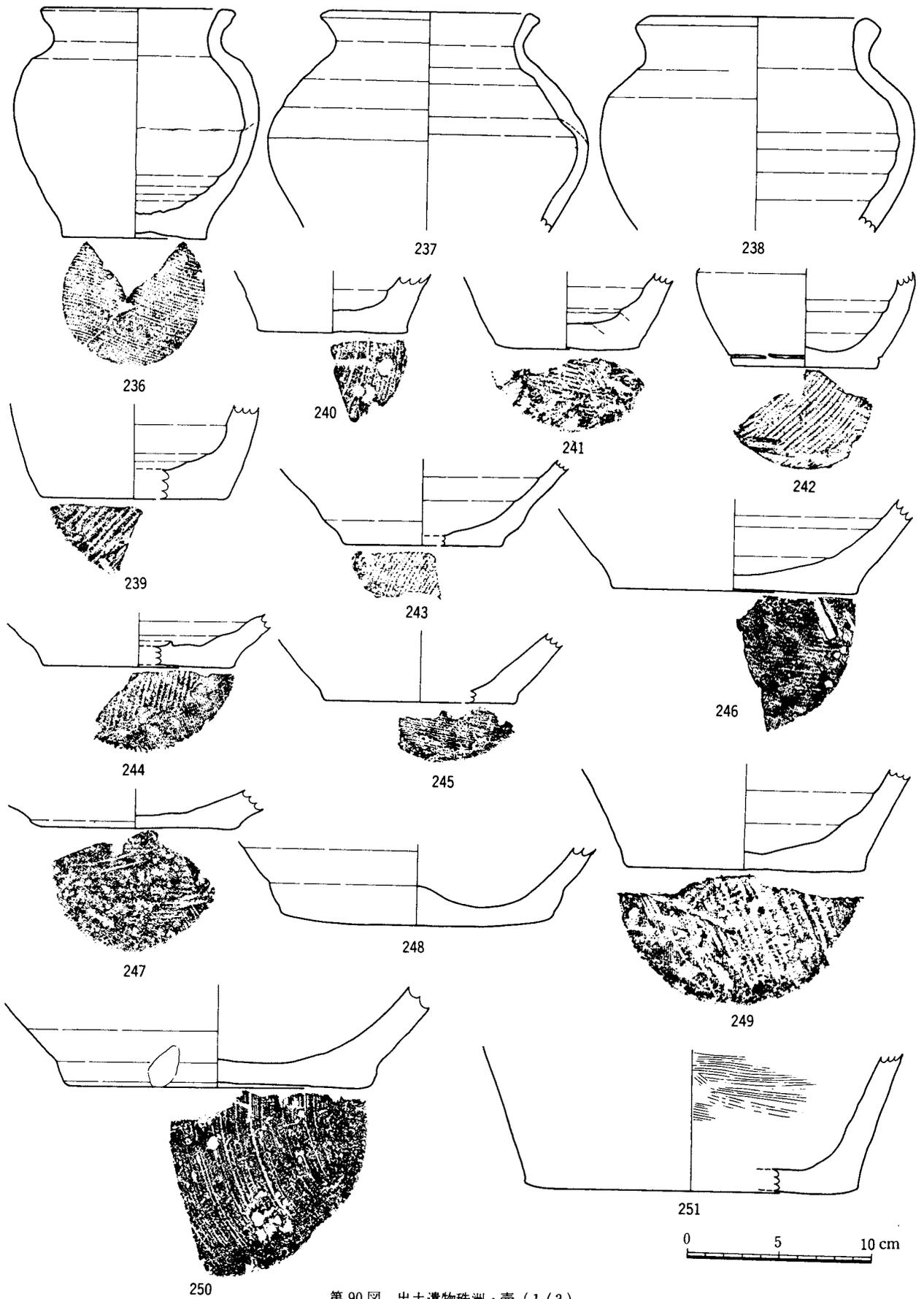
壺（第89図、第90図）壺は、先述した甕類、後述する鉢類に比して非常に少ない。底部を轆轤成形し鉢部をつくり、さらに粘土紐を巻き上げ、外面では条線状のタタキ、内面では押圧具により、敲打を繰り返し胴部を成形しのちに口頸部を接合する。また、法量では口径15～20cm、器高35cm前後を測るのが通例である。また、小形の壺で、口径9cm前後、器高20cm前後を測るものがある。粘土紐を巻き上げて成形したのち水挽き調整を施すものと思われる。径10cm前後を測る底部には、必ず糸切り痕（静止）を留める。今、吉岡氏の分類に従い前者をA種、後者をB種として、本遺跡出土のものをみてみよう。

壺A種（第89図、第90図）全形を伺える資料はないが、比較的遺存のよい第89図218でみると底径9.6cm、器高38.4cm以上に推定復元されるもので、標準的な中型品である。外面では、3cmあたり13本のタタキを右傾で施し、内面では押圧具による凹凸が顕著である。肩部には、菊花状の刻印がある。外面のタタキを消去し入念なへら磨きを施すものとしては、口縁部のみであるが、第89図223、227、228が考えられる。比較的、胴部の伺える228では、口径11.2cmを測る。外面では、丁寧にタタキを消去するが、頸部に若干タタキ目を残す。焼成は堅緻で灰青色を呈する。肩部に押印、刻文を有するものがある。刻文では「N」、「×」が存在する。押印では、232のようにタタキ消去の肩部に菊花文（十字形）を連続するこの器種では珍しいタイプのものがある。また、235のように、珠洲では珍しい「木」のスタンプが存する。

壺A種底部（第90図243～251）下胴部（鉢部）外面では、タタキは施されず内外面ともに、粘土紐巻き上げ後の水挽き調整痕が渦状に認められる。底径は15cm前後を測るものが多く、甕同様に破損後の二次的使用の痕跡が伺える244、249、250などがある。すべて底面には糸切り痕（静止）を留める。また、251の特に内面において漆状のものの付着が甚しい。



第89図 出土遺物珠洲・壺(1/3)



第90図 出土遺物珠洲・壺(1/3)

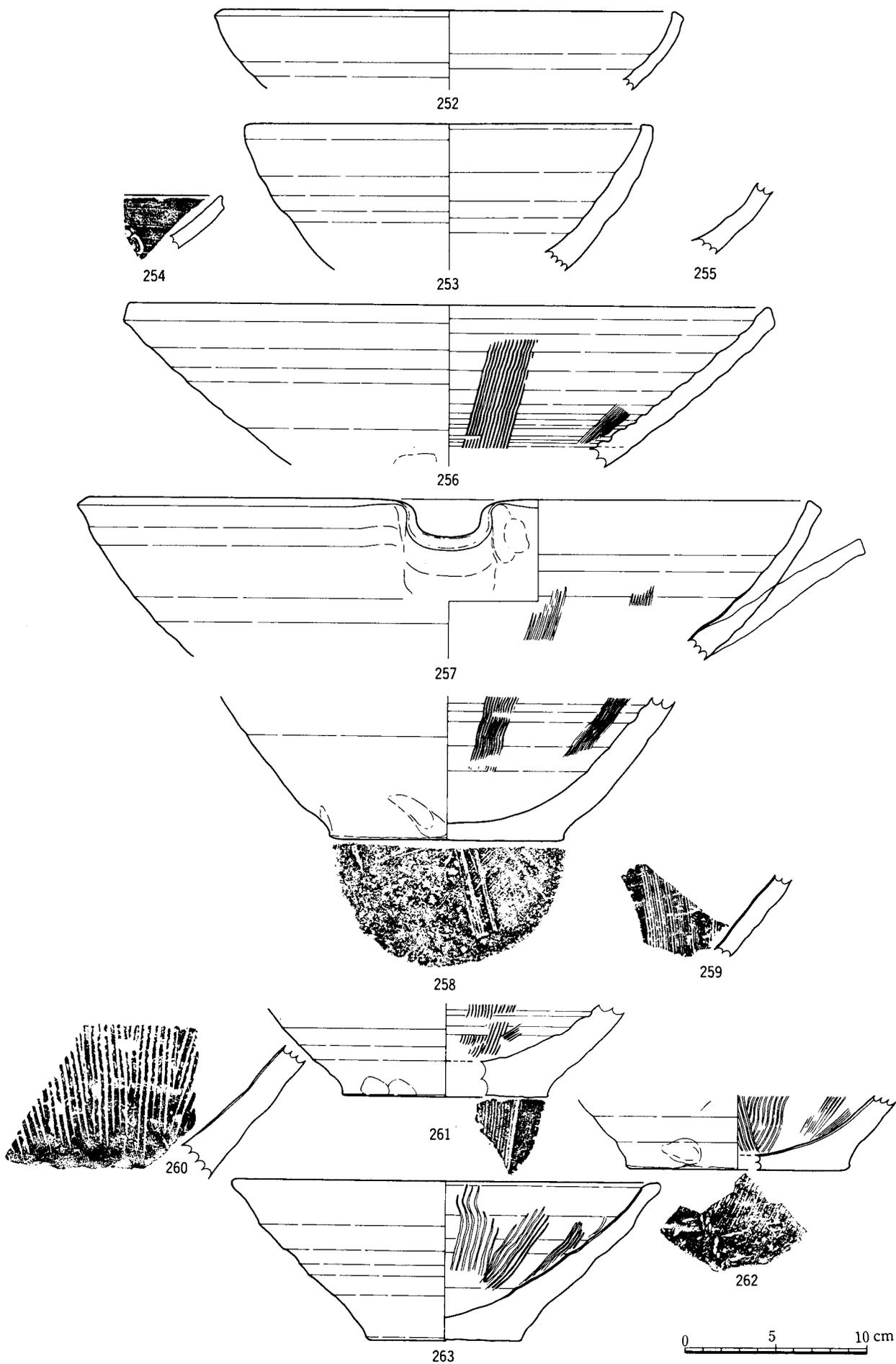
壺B種(第90図236~242)236は、口径11.0cm、器高16.4cm、底径7.7cmを測り通例のものより一まわり、小形品である。内面では逆「の」字形の水挽きの凹凸が明瞭に認められ、外面でも同様に認められる。口縁部は、「く」の字形にゆるく屈曲し端部はほぼ水平をなす。底部と胴部境では一条のヘラ削りを施している。底面では弓状の糸切り痕(静止)を留める。焼成良く灰青色を呈する。III期の所産であろうか。237、238は236に比してやや大振りであるが、なで肩に作られる点、焼成が甘く灰白色を呈するなどの点からIV期でも後葉の部類に属するであろう。

壺B種底部(第90図239~242)底径ほぼ10cm前後を測るもので、必らず底面に糸切り痕(静止)を留める。242のように球胴状になると思われるもの、239のように長胴形になると思われる両者が存する。238の内面には油脂状の付着物(漆か)がある。

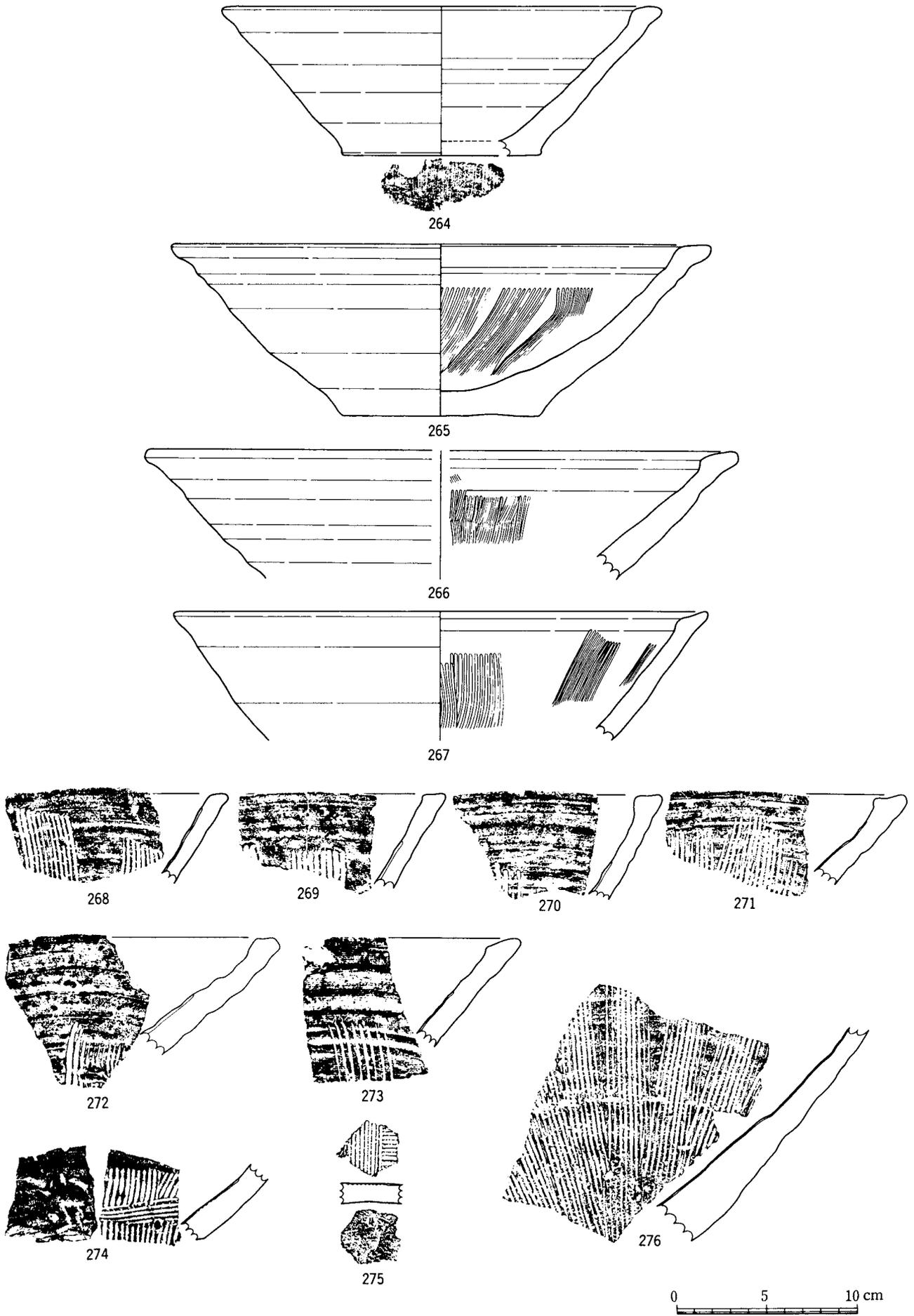
鉢(第91図~第99図)片口鉢、播鉢とも用途により呼称される一群で、本遺跡出土資料中では、最も多い。甕、鉢などの下胴部の成形手法と同様に水挽きの痕跡が内外面ともに認められる。甕の下胴部では、先述したように砂底となるのに対して本鉢類では必ず糸切り痕を留める点から言って壺のそれに近い。初期のものについては、特に小形品に回転糸切り痕を留めるものが間々ある。初期のものは、比較的薄手の小形品が多く、おろし目もほとんど施されない。口径32cm前後、器高14cm前後のものが標準的なもので必ずおろし目、片口をもつと言ってよい。後半期には、口径40cmを超える大形品が多くなる。本遺跡でも、そのことが言えるが、口径40cmを超える大形品で粗雑な一群が目立つようである。

鉢第I、II期(第91図252~259)252が、口径24.9cm、253が21.9cmに推定復元されるもので、薄手造りの小形品に属する。ふくらみをもつ器体から、口縁部近くでやや内屈するこんもりとした腰高のタイプとなるものと思われる。端部は、やや内屈気味かやや外削ぎするものが多い。これらには、おそらく内面にはおろし目は施されない。252、253は、寺社カメワリ坂窯期の所産と考えられる。256は、口径35.1cm、257は39.6cm、258は、底径12.9cmを推定できるものである。256は、器体にふくらみを失い、直接的にのびて端部は外削ぎとなる。内外面に水挽きに伴う凹凸が顕著である。内面には14本を単位とする中太の櫛歯によりおろし目が8条施されるものと思われる。257は、ややふくらみを残す器体から外削ぎの端面となり片口を有するものである。内面では細密な櫛歯状具8本を一単位として8条施されると推定される。258も257と同様に先端部の鋭った細密な櫛歯14本により8条施される底部である。いずれも、胎土、焼成も良く、淡灰青色を呈する。256は、法住寺3号窯期の新しい方に、また257は法住寺3号窯期の代表的なものである。内面に木瓜文を押印する254がある。器壁も薄く、やや内屈気味の口縁部を有するなどから本期に分類される。木瓜文を有するものでは、郷窯出土品中の壺類にみられる。

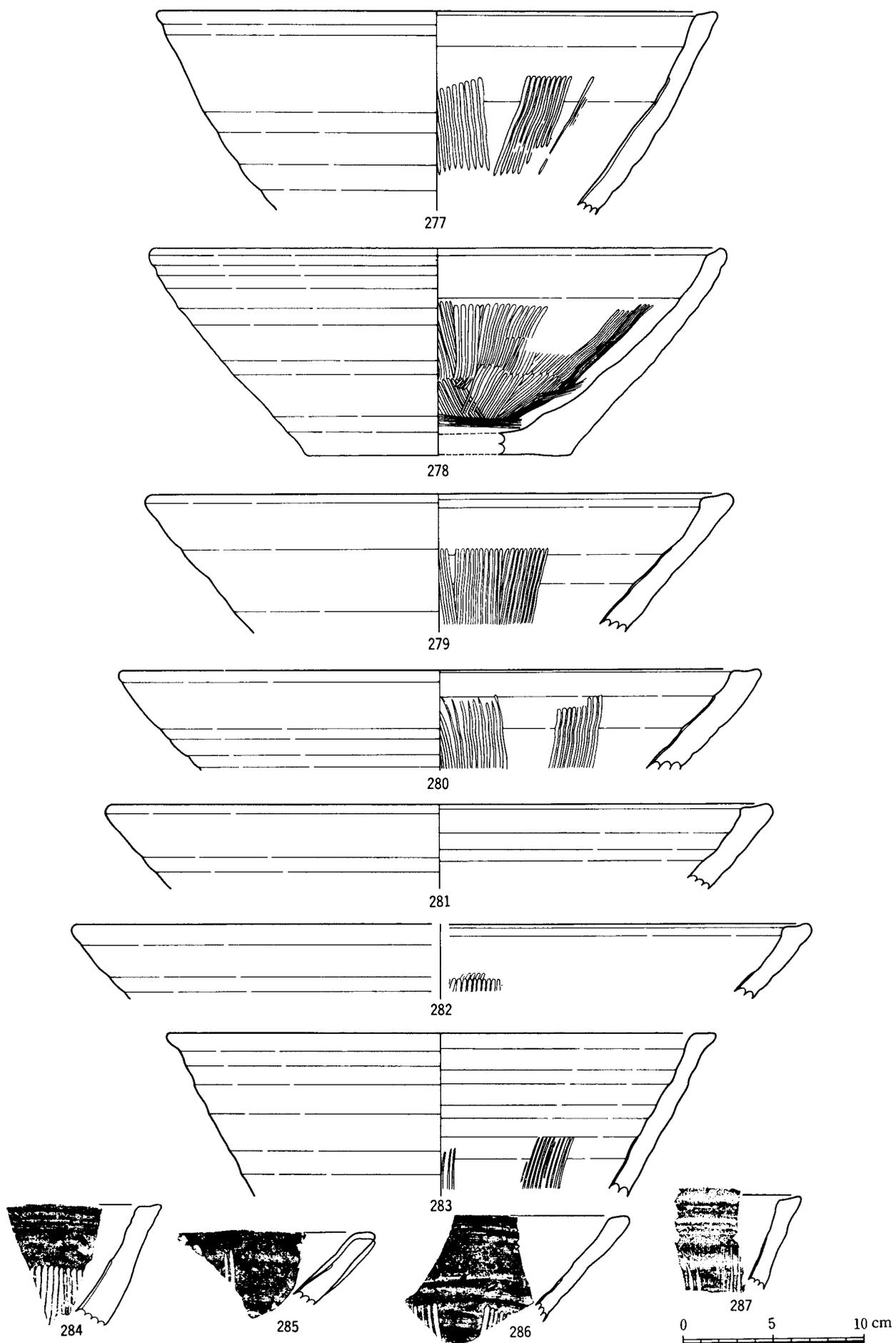
鉢第III期(第92図、第93図、第94図288~295、第95図319など)器壁が前期窯式に比して厚みを増し、直線的に開く器体になり端面幅広な面をもつようになる。おろし目も太くなり8~12本単位でやや密に施すようになるが器内面全部に施文するものは、まだ少ないようである。また、端部に波状文を施す一群も見られるようになる。櫛歯によると思われるが、中細で深くしっかりと施文される。口唇部に波状文を装飾する手法は、第II期の法住寺3号窯式より認められるものであるが、口縁形態などから本類に含めた。第92図264は、口径22.5cm、器高8.4cm、底径11.1cmを測る小形品である。直線的に開く器体から端部では水平に面をなしやや外方に張り出す。他は、口径32cm前後、器高14cm前後、底径13cm前後を測る標準的なものが多い。量産化が進みその反面規格化も進んだ時期と思われる。胎土、焼成ともに均一化が進み珠洲特有の灰青色を呈するものが、ほとんどとなる。口唇部がほぼ水平をなし波状文を装飾するものでも同様なことが言える。波状文の波頭間距離は、後続するものよりは短い。また、施文についてもおろし目と同様にしっかりと施文される。破損部に漆により布張りを施している痕跡のもの(第95図315)、漆による接合痕が認められる(第95図319)ものがある。また、第97図342のように口縁近くで、「く」の字状に内屈し、やや内傾する幅広な端面を有する、珠洲では特異な形態のものがある。内面では、11本1単位のおろし目が、隙間なく充填される。また、幅広な口唇部には流麗な波状文を施す。(櫛歯単位不読)成形、調整ともに入念になされており、特注品と考えられる。この一点も、おろし



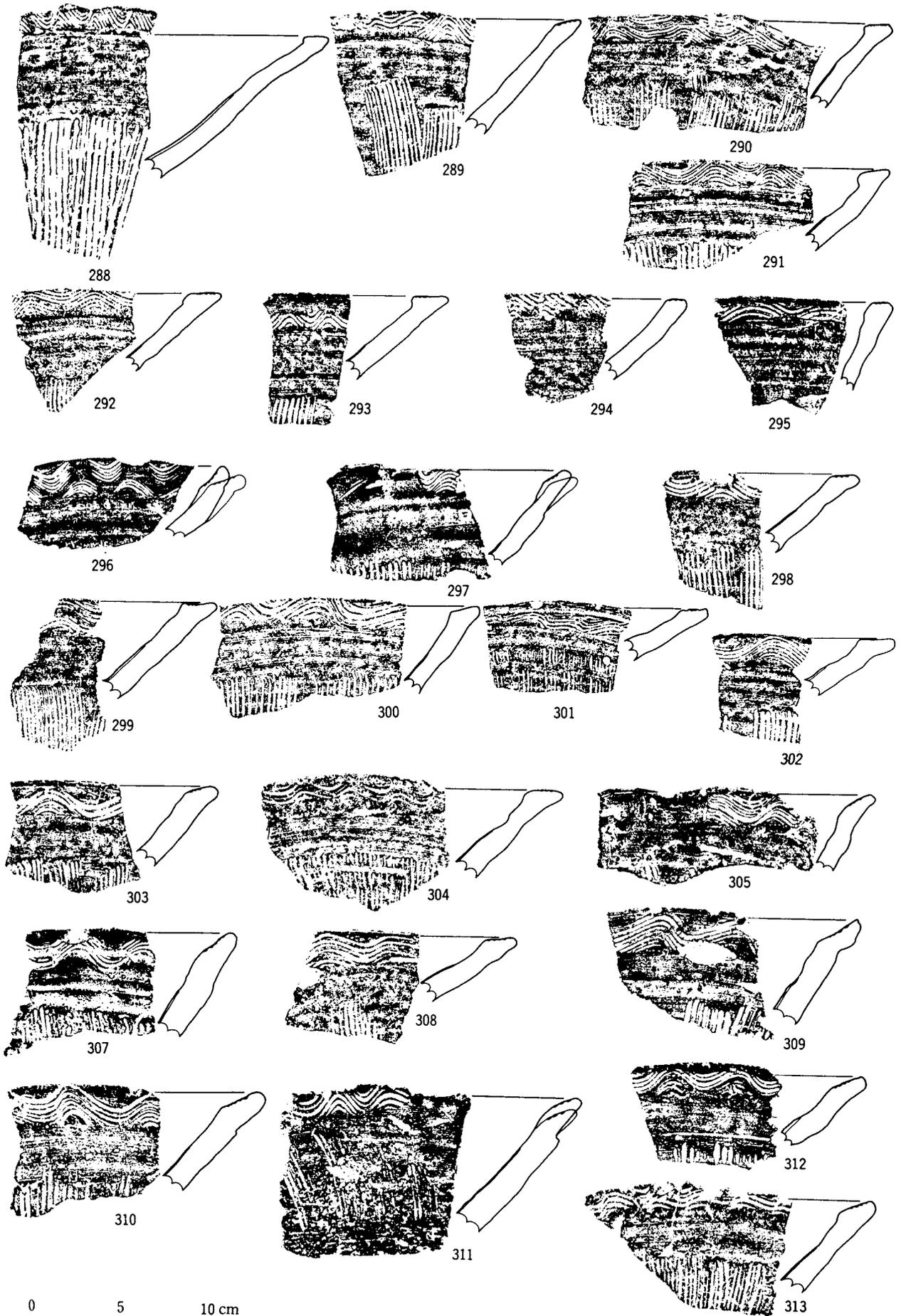
第91図 出土遺物珠洲・鉢 (1/3)



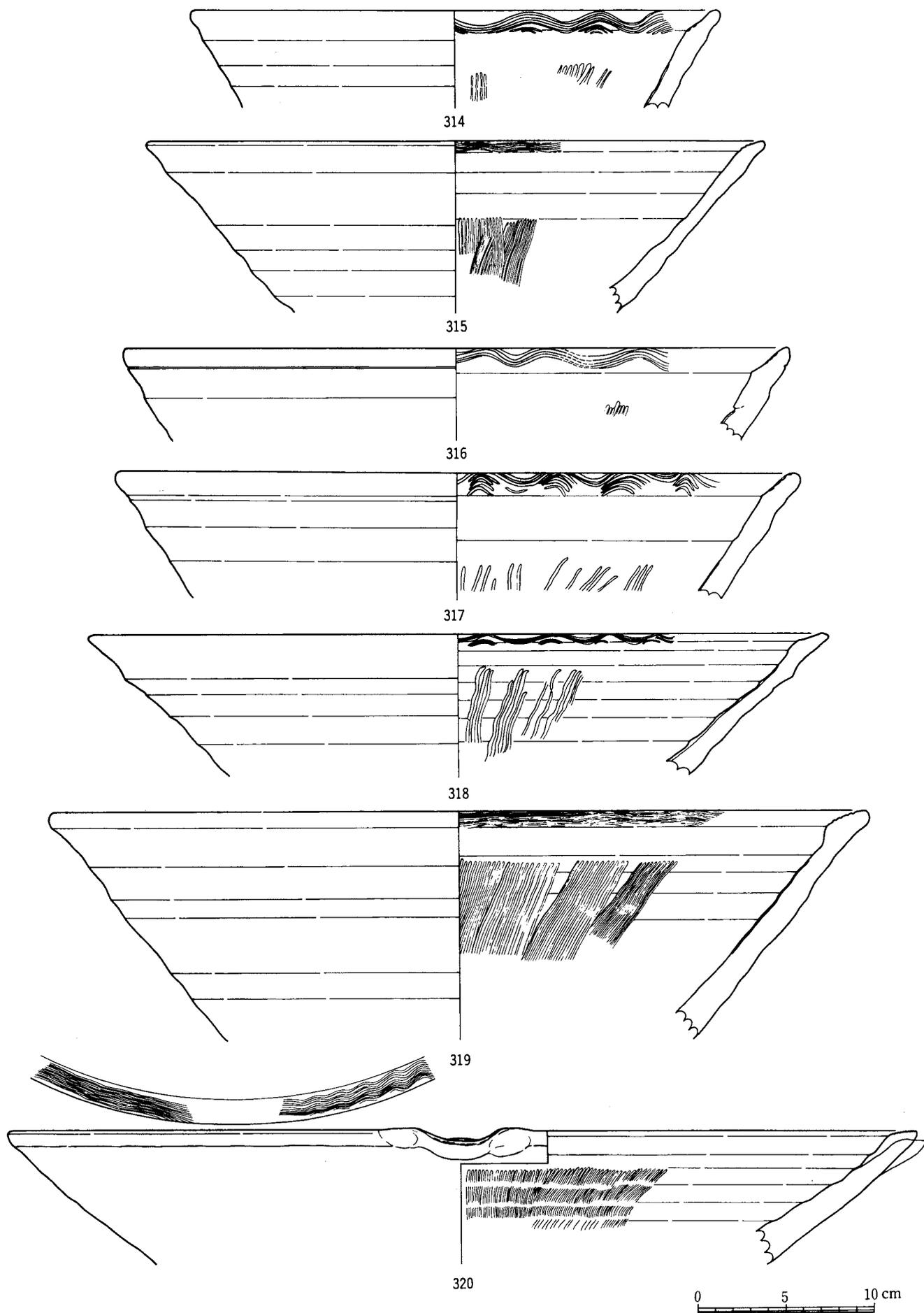
第92図 出土遺物珠洲・鉢 (1/3)



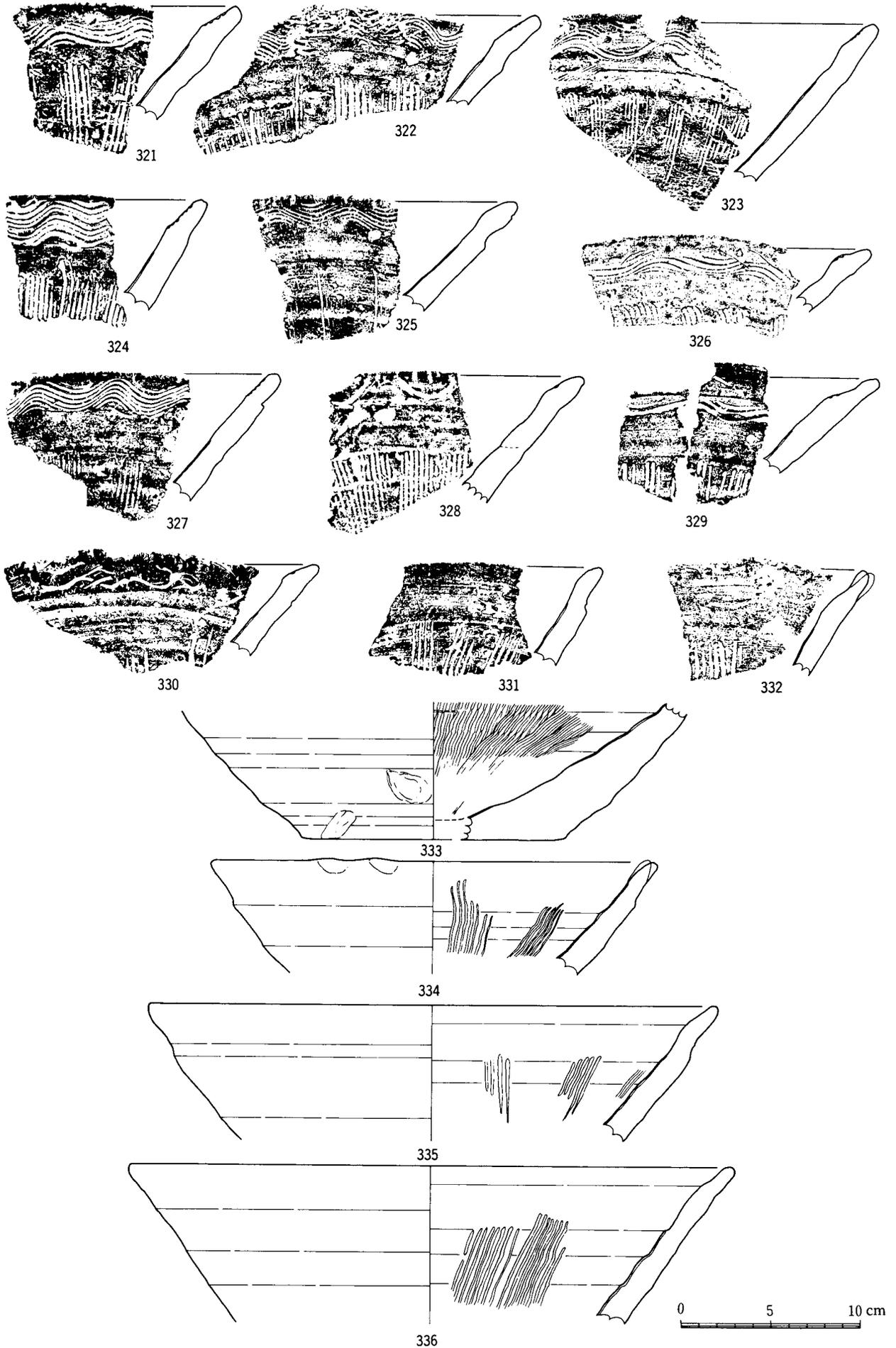
第93図 出土遺物珠洲・鉢(1/3)



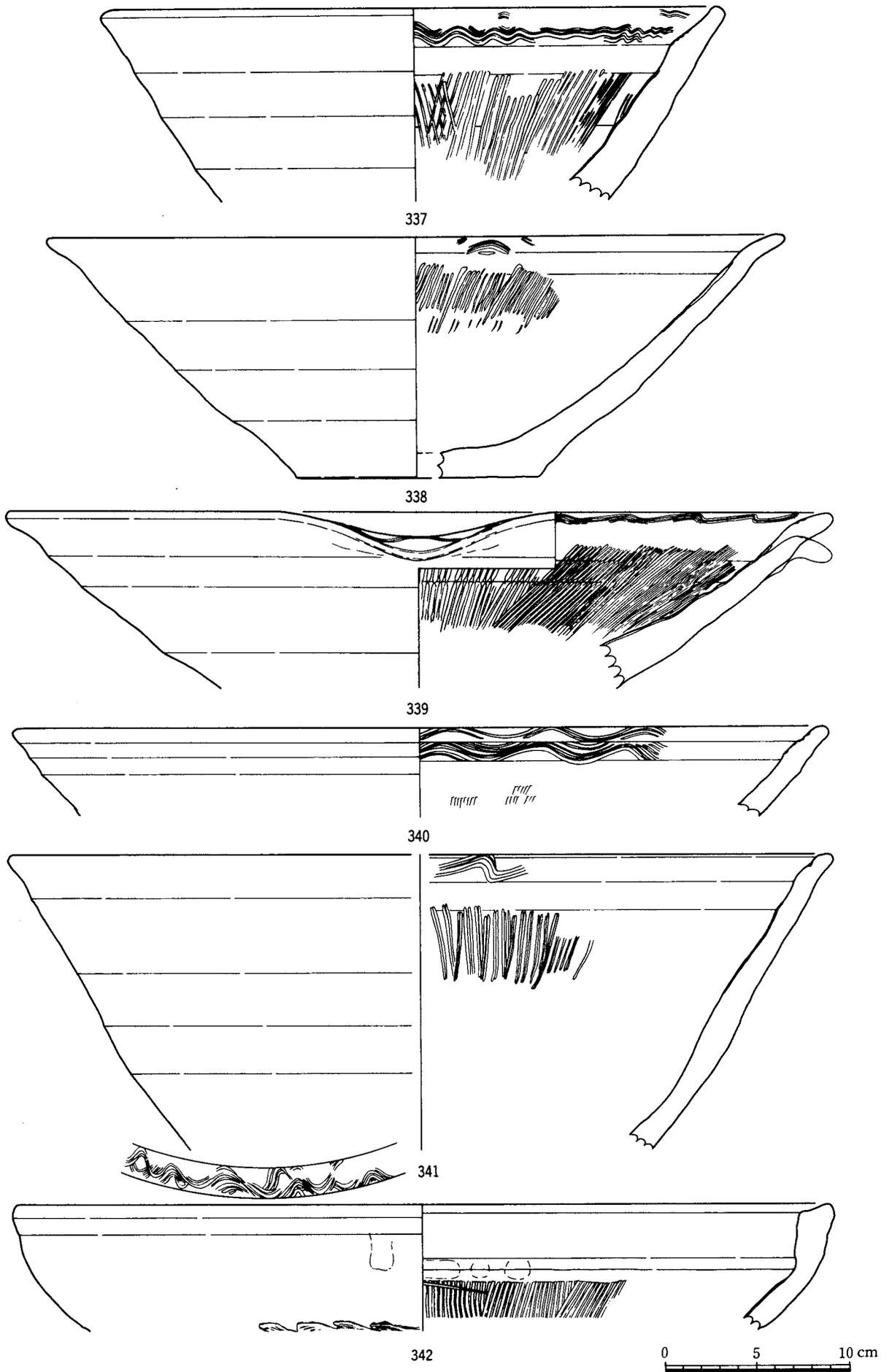
第94図 出土遺物珠洲・鉢 (1/3)



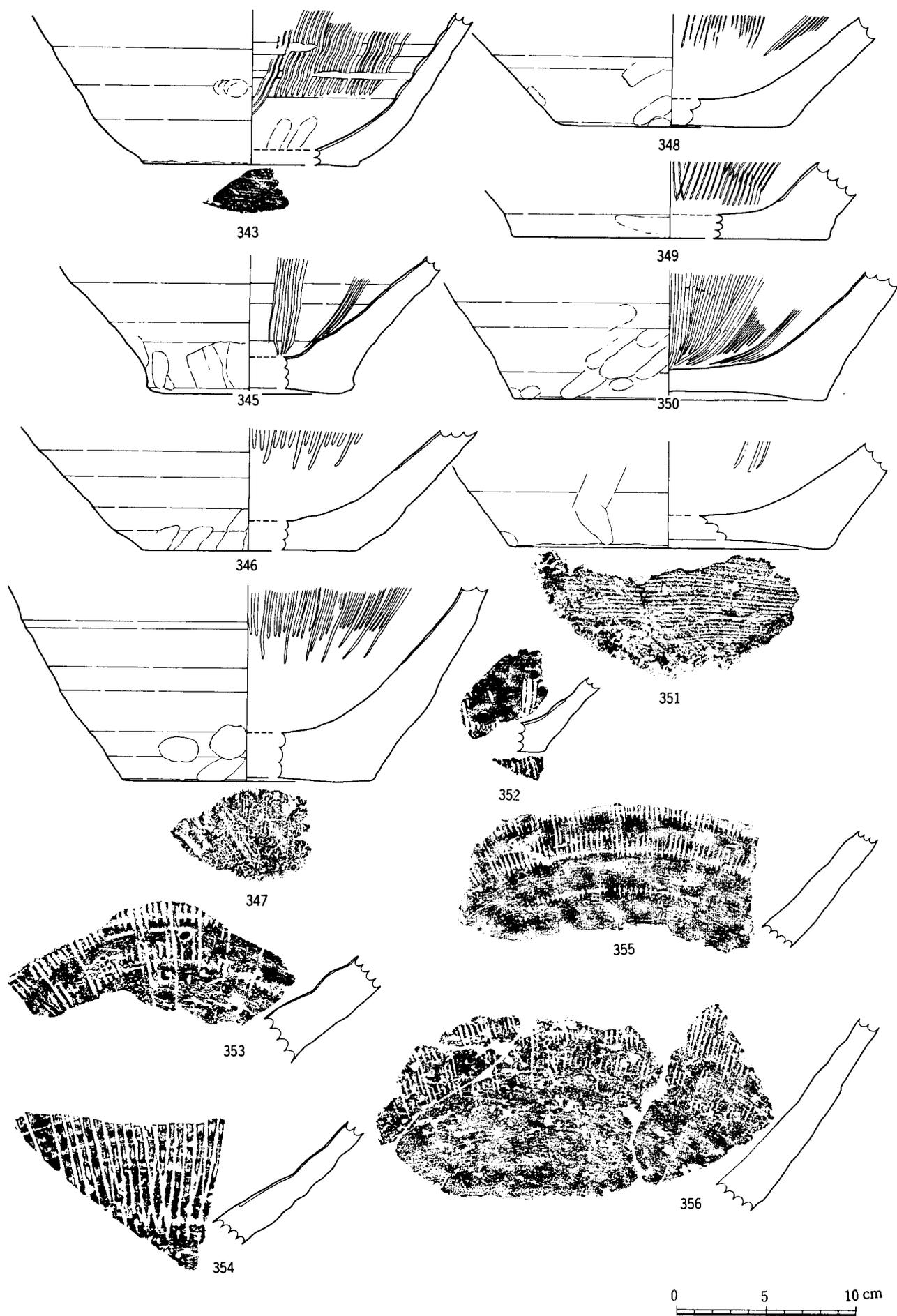
第95図 出土遺物珠洲・鉢(1/3)



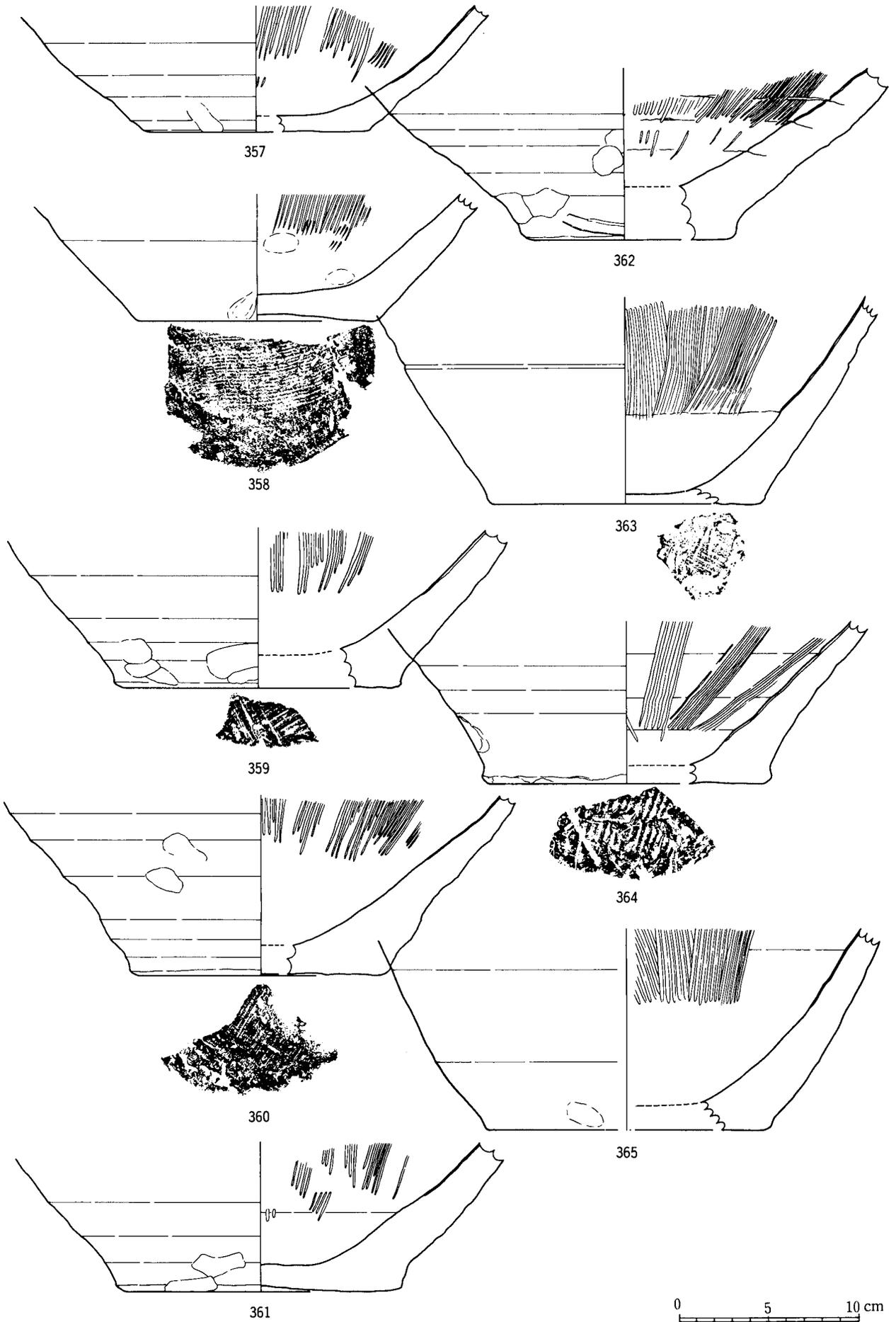
第96図 出土遺物珠洲・鉢（1/3）



第97図 出土遺物珠洲・鉢 (1/3)



第98図 出土遺物珠洲・鉢 (1/3)



第99図 出土遺物珠洲・鉢 (1/3)

目、波状文の施文方法、成形手法などから本類に帰属するものとした。灰青色を呈する

鉢第Ⅳ期(第94図296~313、第95、96図など)大島窯に代表される一群であるが、底部から直線的に開く器体で体部は強く押え、さらに先端部を拡張して嘴状とするものである。口唇部に波状文を施文するものとし、ないものが見られるが、施文しないものは、わずかである。端部では、かろうじて面を保つが、かなり内傾化が進んでくる。口縁端部幅も広くなり粗い波状文となる。内面のおろし目も、全体に充填される。成形、調整手法においても粗略化が進み、内外面ともに、轆轤ヒダの凹凸が顕著となる。胎土についても、2~3mm程度の小石を嚙むようになり、また砂粒の多い土が多くなるようである。焼成についても、粗略化が進み前の段階では、ほとんど見られなかった灰白色を呈する多孔質の甘い、焼きのものが見られるようになる。暗灰青色を呈する焼成堅緻なものも一部認められる。また、器形でも大形化が進み、腰高の直に開き、口径40cm前後のものが主体を占めるようになる。(第95図317、318など)

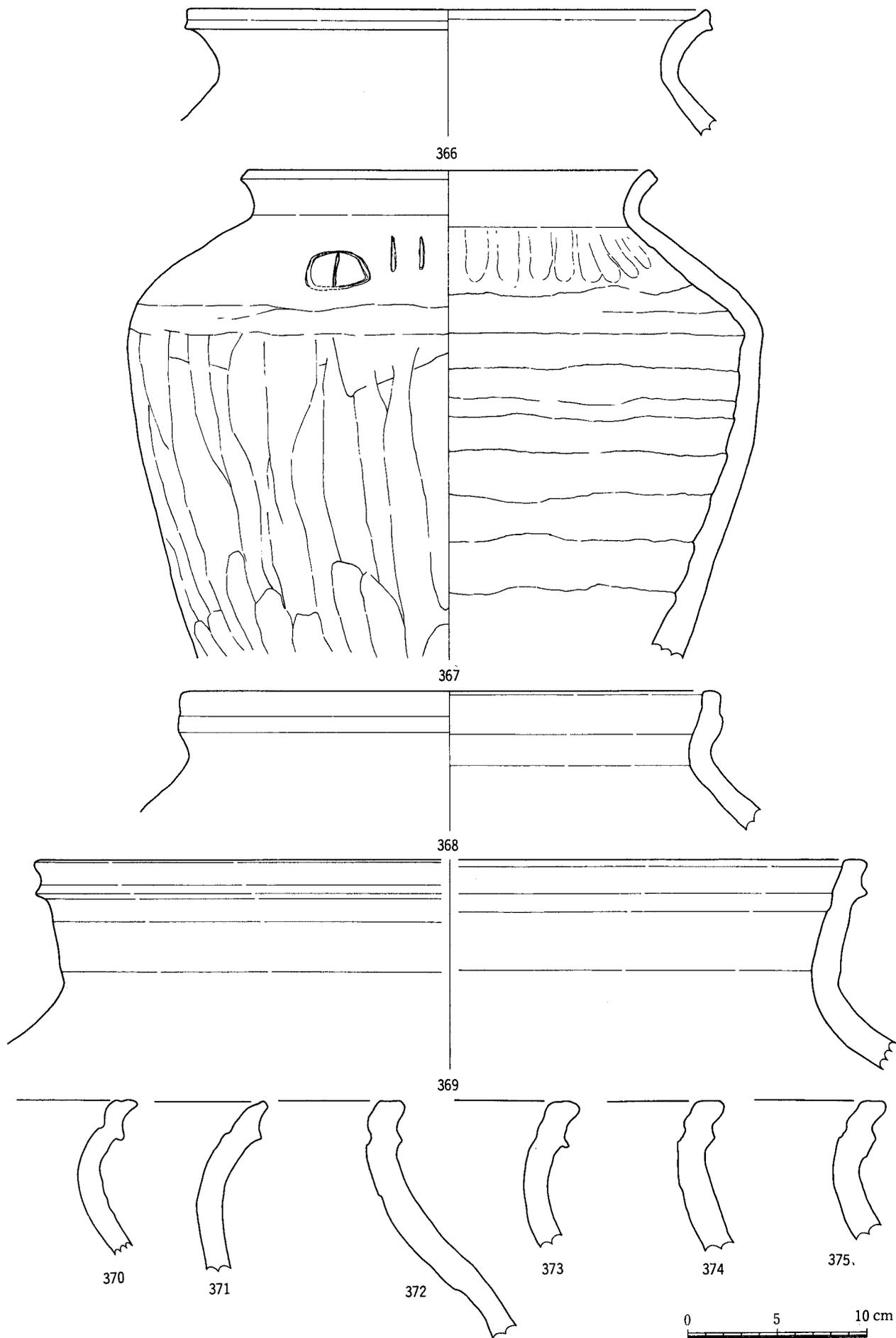
鉢第Ⅴ期(第97図337~341、第96図321~332)西方寺1号窯を標式とする一群である。口径40cm以上の大型器形のものが多くなる。腰高のものが多いのは、前の段階と共通している。真直のびる体部で、2~3cmと幅広な口縁帯は、そのままのびて丸くおさまるか、やや外反するものがほとんどとなり、口縁帯で面をなすものは、ほとんど見られなくなる。その口縁帯内面に粗野な、波長間隔4cm前後を測り、比較的規則正しく施文するものと、不規則に施すものが見られるようになる。施文具も太目の櫛歯状のものを使用し、深く施文する。内面のおろし目も同様な工具により10本前後を単位として全面を充填するものと八条程度のもも見られるようになる。成形、調整については、さらに粗略化が進み、内外面ともに、凹凸をなす轆轤ヒダが顕著となる。特に、口縁部外面処理が粗雑化し、最終調整のナデに簡略化が目立つ。胎土についても、前の段階よりさらに小石、砂粒を多く嚙むようになる。焼成についても、焼きのあまいものが大半を占めるようになり、灰白色を呈するようになる。第97図338は、口径53.6cm、底径18.0cm、器高17.2cmを測るもので鉢の大形化が伺える。ほぼ直線的に開く器体内外面には、粗い轆轤ヒダが認められ、口縁端近くでやや外反し丸くおさまる。口縁帯内面には、波長間隔約4.5cmと粗い波状文を施す。器体内面では、櫛歯9本一単位とするおろし目を内面に向かって放射状に施すものと見られるが、体内面上位より底内面にかけては、使用のため磨滅し観察できない。胎土には、5~6mm大の礫粒を多く含みまた砂粒も多い。さっくりした感じを与えるくらいに焼成はあまく、灰白色を呈する。第97図341のように、口径50cm前後、器高21cm以上と身の深い大形のものも出現するようである。口縁帯に施される波状文の波長間隔も6cm以上と長い。内面では、おろし目は、太い櫛歯6本を一単位とし、重複しながら底内面に向かって充填する。前記と同様、焼成があまいこともあって、使用のため磨滅が著しい。本期に属するもの大半については、焼成のあまさか、使用頻度の高さからか、底内面および、体中下位の磨滅しているものも多く見られる。また、口縁帯を無文でそのままとするもの(第96図334~336)も少数であるが存在する。成形、調整、胎土、焼成などについては、波状文を施すものと同様である。

底部(第98図、第99図など)底部によって類別することは、非常に困難なので傾向性のみを記すこととする。Ⅱ期に属すると思われる第91図258は、底径17.6cmを測り壺の底部に似る。糸切り離しののち木目状の圧痕がある。Ⅲ期に属すると見られる第92図264は、底径16.0cmを測り糸切り痕を留める。Ⅳ、Ⅴ期のものについては、さらに判別が難しくなる。底径20cm前後を測り、底部についても大形化が伺える。また、底部切り離しについても糸切り(静止)と思われるが、焼成のあまさもあり、使用のため磨滅が甚しく判別できるものが少ない。底部内面の器壁は大きさの割には薄いのが、底部と器体部の接合部が非常に厚く、造りも雑になる。大形甕の手法に似るようになる。全般に言えることであるが、持ち上げの際についたと思われる指頭圧痕が、その境界部分に見られる。底内面では、ほとんどが使用のため、おろし目は磨滅している。

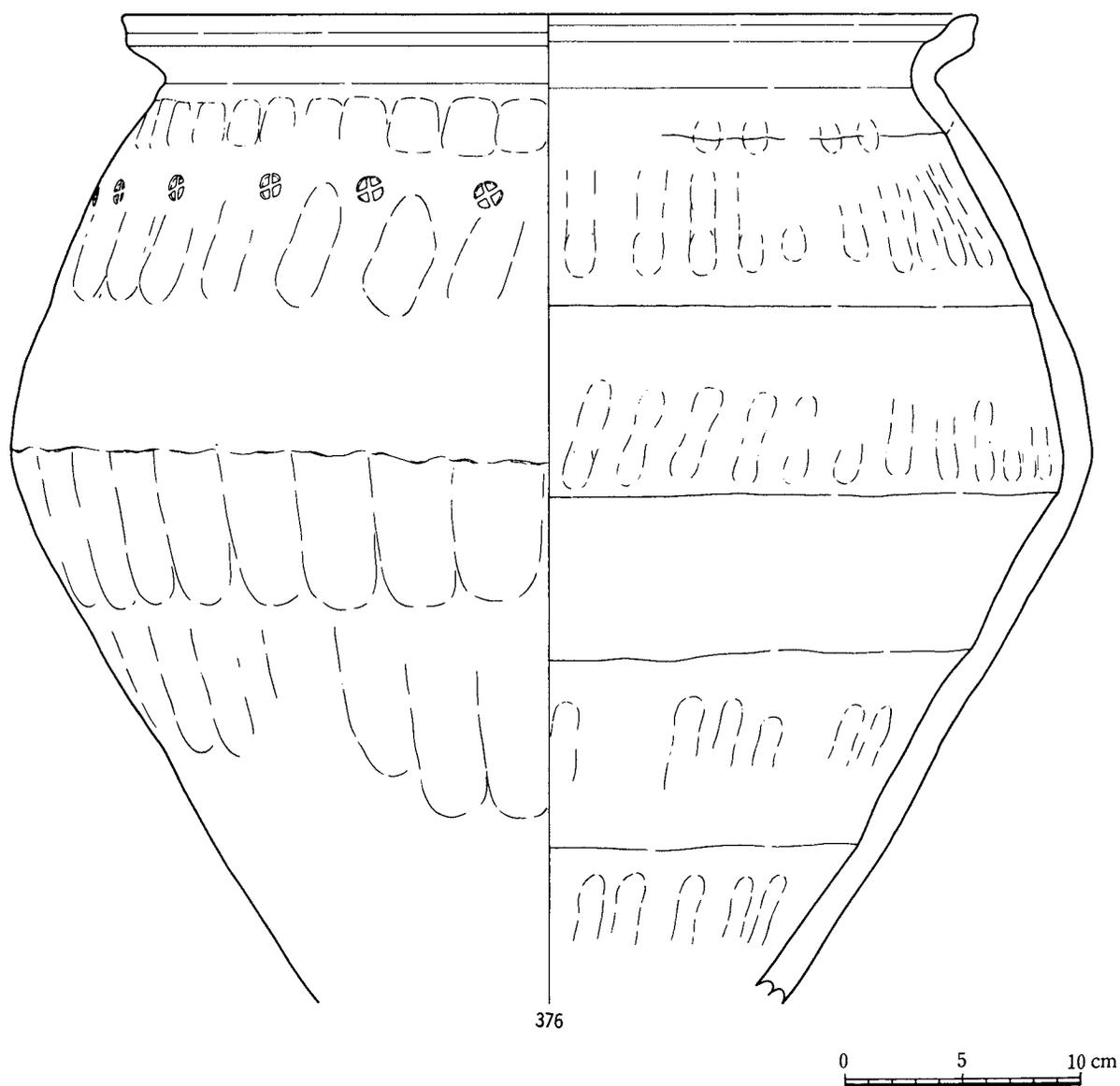
#### (4) 越前(第100図~第105図)

珠洲と比較して多くはない。しかし、そのうちの器種別の構成は、珠洲同様に鉢が多く次いで甕、壺となる。比較的図示し得る数量も少ないので、便宜的な分類で記述を進める。

甕Ⅰ類(第100図366、367、370、371、第101図376)口縁部が「く」の字状に外反し、端部はそのまま面を



第100図 出土遺物越前・甕 (1/3)

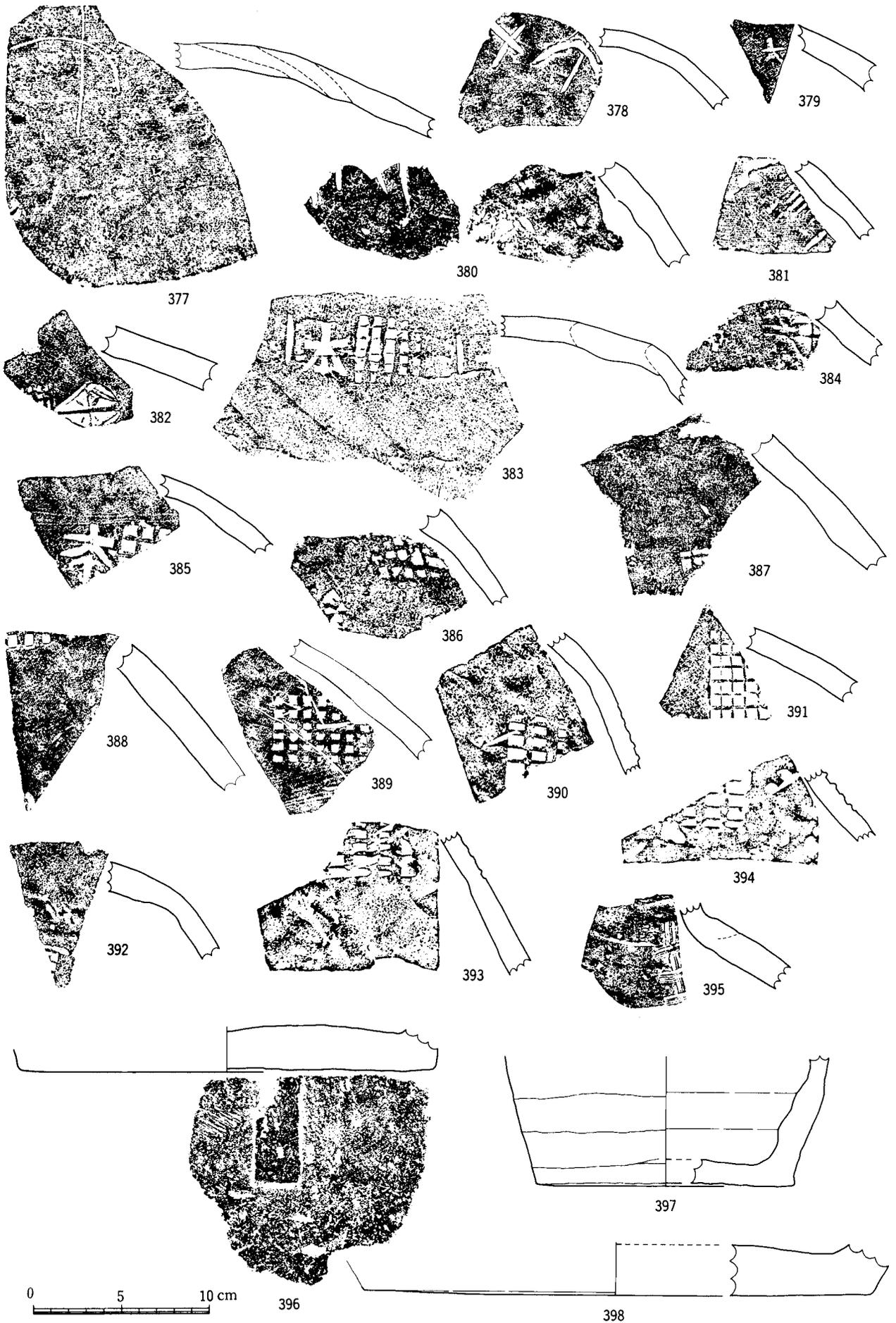


第101図 出土遺物越前・甕(1/3)

なすか、端部をつまみ出し「N」字状にするものを一括した。366は、口径29.1cmを測るもので、「く」の字状にゆるく外反する口縁で、その端部をナデによりつまみ上げ、外側約1.2cmの面をなし受け口となる。最終的な調整は、残存部で観察するかぎり横ナデである。口縁部と胴部との接合は横ナデで消去するが、完全に消去してはいない。赤褐色を呈する。367は、底部を欠失するが、口径22.5cm、最大胴径35.9cm、残存器高27cmを測るものである。肩部に胴部の最大径を有し、ゆるやかに外反する口縁は、外側に面(幅8mm)をもつ。肩から口縁部の内外面にかけては横ナデ調整である。肩部より下半胴部では、上位1ないし2段は、横ケズリあとは縦方向のケズリである。へら状の工具と推定されるが、その幅は1.5cm前後のものである。(ケズリとは言えナデに近いものである。)内面頸部から胴部にかけては、押圧痕を幅広い横ナデで消去する。外面の調整に比して内面のそれは雑である。暗赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。内面下半に油脂状の付着物(漆か)が見られる。肩部に刻印を有する。

370、371は、基本的には366と同様であるが、口縁端部縁帯がやや広くなる。(幅約1.5cm前後)口縁帯を造り出す際に生じたと思われる内面に一条段をなす。

甕Ⅱ類(第100図368、372~375、第103図403、404)ゆるく外反するか、ほぼ直口して口縁端部にほぼ水平な面を有するものを一括した。369は、口径60cm以上の大甕であり、口縁はほぼ直立気味であるが、やや少し外反する。端部は1.2cm前後の水平な面をもつ。口縁帯もやや深く凹み、ゆるく稜をなす。なお、内面にも浅い凹



第102図 出土遺物越前・甕 (1/3)

線一条がめぐる。これらの退化形式とみられるものに、第103図403、404がある。口縁帯(幅約2.5cm)はほとんど凹まず一条の稜のみによって区切る。内面の段が非常にゆるくなる。焼成堅緻でビードロ状の自然釉が融着する。本類中、最終形態を示すと考えられる404は、端部は水平に押し、内面はそのため嘴状に飛び出す。外面口縁帯は(幅約2.9cm)は浅い沈線一条によって表現するだけとなる。赤褐色を呈し、焼成は堅緻である。

壺(第103図399~402、405、406)壺類は、鉢、甕に比して少ない。第103図405は、ゆるく外反する端部を折り返し玉縁状としたものである。406は、口径12cm程度に推定できる口縁部片である。いずれも細片であり詳細は不明である。399は、口径20cm以上になると思われるもので、胴部に断面三角形の突帯一条が貼付されるものである。胎土、焼成などから、4個体(第103図399~402)が存するようである。399では、頸部内面にかけては入念な横ナデを施す。頸部以下内面では、押圧(1×2.5cm前後)ののちナデ調整を施す。肩部に「+」の刻文がある。焼成は堅緻で赤褐色を呈し、肩部には降灰釉がかかる。いずれも突帯は胴部の最も膨む部分に貼付されている。406は、口径16cmを推定できるものでお歯黒壺かと考えられる。

甕、壺底部(第102図396~398)底部片においても甕が多く壺は少ない。破片数で見ると内訳は、甕が31点、壺4点である。396は、底径23.7cmを測る甕底部であるが、幅2.5cmの下駄印がある。底内面は、へら先状のもので不特定方向のナデを施す。398は、底径28.8cmを測る大形甕の底部であるが、破損後に鉢として使用され磨滅が甚しい。図示しなかったが、他には平行線状の圧痕のあるもの、不特定方向の圧痕が見られるものなどがある。また、底内面の二次使用による磨滅の認められるものが数点ある。397は、底径14.7cmを測る壺である。内外面ともに、横ナデによる凹凸が見られる。底外面では、調整段階でつuitaと思われる幅2.5cm前後のナデよりはケズりに近い痕跡が認められる。内底面には、油脂状の付着物がある。

押印、刻文(第102図377~395)383、385に見られるように、格子目と「本」とを組み合わせた押印が多い。また382のように格子目と菱形を組み合わせたものもある。格子目についても383、389のように不規則なもの、391のように一定したものなどがある。刻文では、377、378のような十字文、395のような楯状結束による刻文がある。

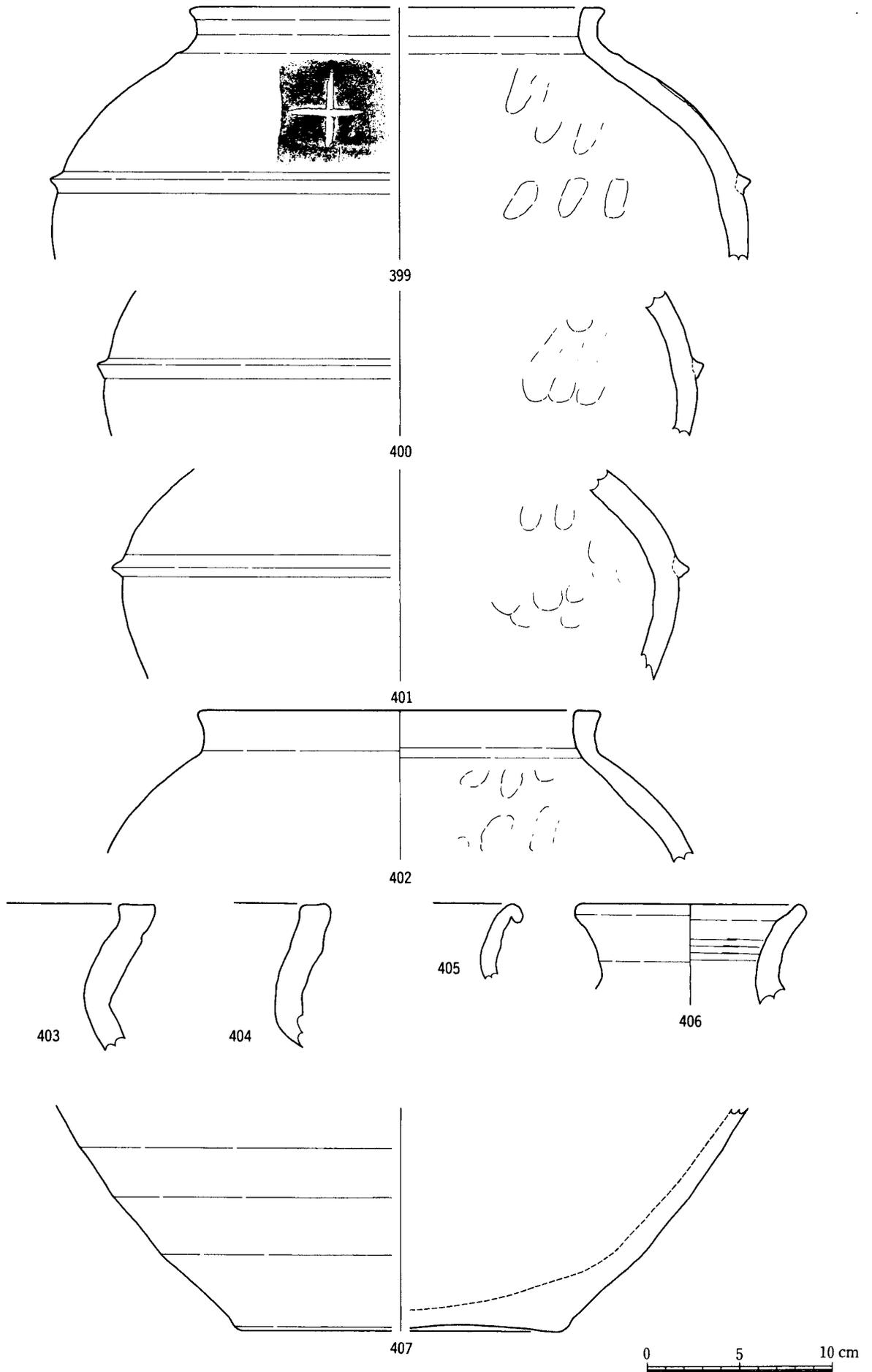
鉢(第104図、第105図)破片点数で76点を数える。全形を伺えるものは少ない。いずれも内面に櫛歯状具によりおろし目を施文するものである。珠洲の場合には、一方の口縁付近より対の口縁に向けて十→×のように交叉させて施文するのが通例であるが、第104図413にみられるように器体を右回転させながら8~11本程度の櫛歯で口縁帯から底内面に向けて放射状に施文する。全体的に中太の櫛歯を使用し施文も深い。円形の粘土盤の上に粘土紐を巻き上げて横ナデを施して成形する技法は珠洲でも変りないが、底部近くではケズリを施すものが見られる。真直にのびる器体で、口縁端部が丸くおわるものと、やや内傾した面をもつものがある。口縁内面には、甕類と同様、端部引き出しの際の凹線が必ずと言ってよいほどに見られる。胎土では、やや砂っぽいものが多いが、割り合いと均一的なものが多い。焼成の方法で暗青灰色を呈し、堅緻なもの、赤灰色を呈し軟陶のものとの二種が存する。器形を復元できるものでは、口径35cm前後、底形15cm前後、器高12.5cm前後を測るものが多いようである。口縁形態の変化により、器体が真直ぐのびて端部がそのまま丸くおさまるタイプ(第104図416、第105図419)より、口縁端部で内傾する面をつくり出すため内面に浅い凹線の施されるタイプ(第104図409、413、414など)また、第104図417、第105図420のように、口縁端面を極端に内屈させるため、内面の凹線の深いものへとの変化が考えられる。

内底面は、磨滅しておりほとんどの器体が不明であるが、第105図429のようにラフな施文方法をとるものと考えられる。また、無文でやや口縁部が内湾する第105図423が1点ある。内外面ナデによるもので、赤褐色を呈するものである。

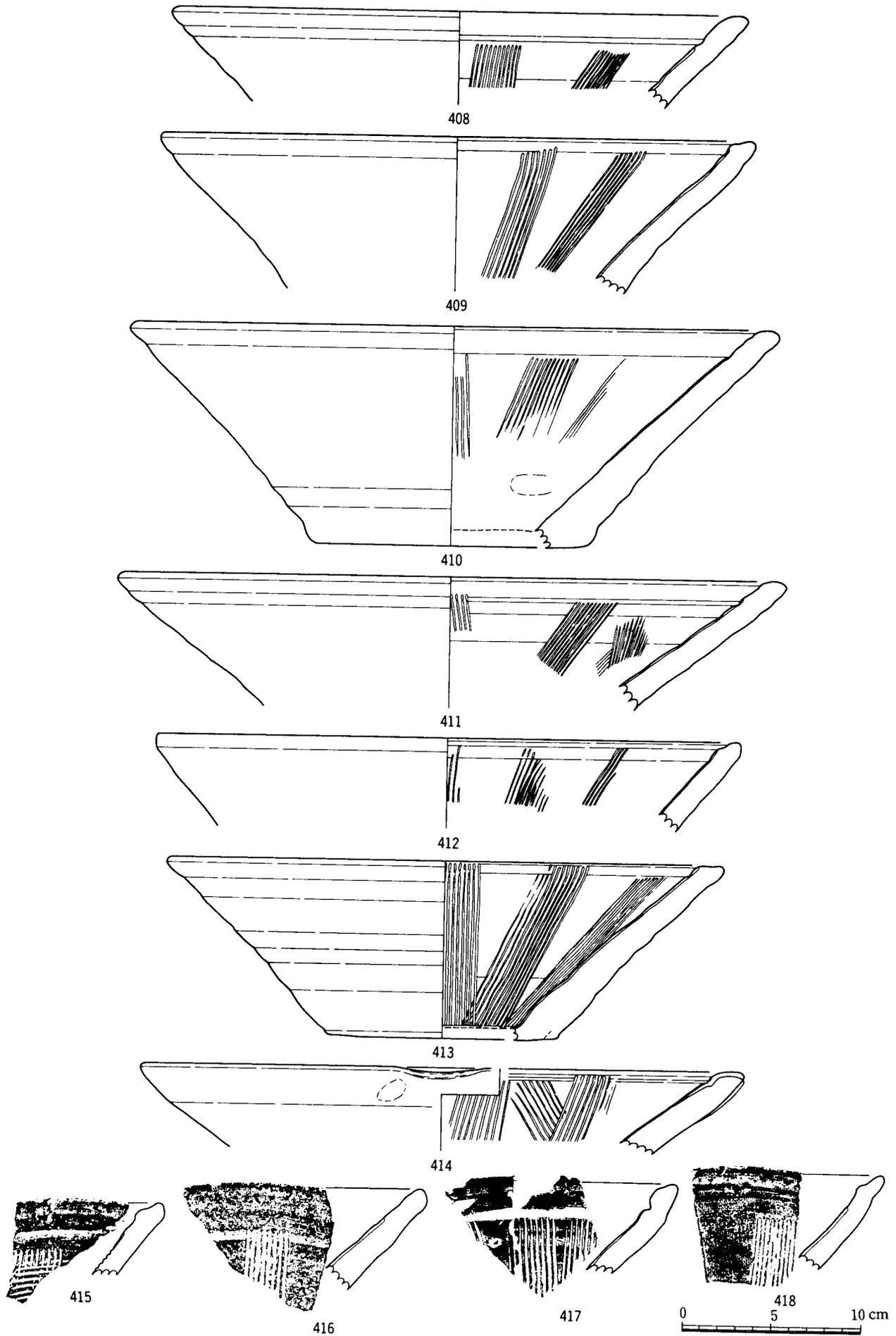
#### (5) 瀬戸・美濃(第106図、第107図)

細片が多いのであるが、ほとんどの器種を網羅するものと思われる。灰釉を施すもの、鉄釉を施すもの二種がある。器種では、香炉、花瓶、水瓶、天目茶碗、平碗、皿、おろし皿、盤、壺がある。

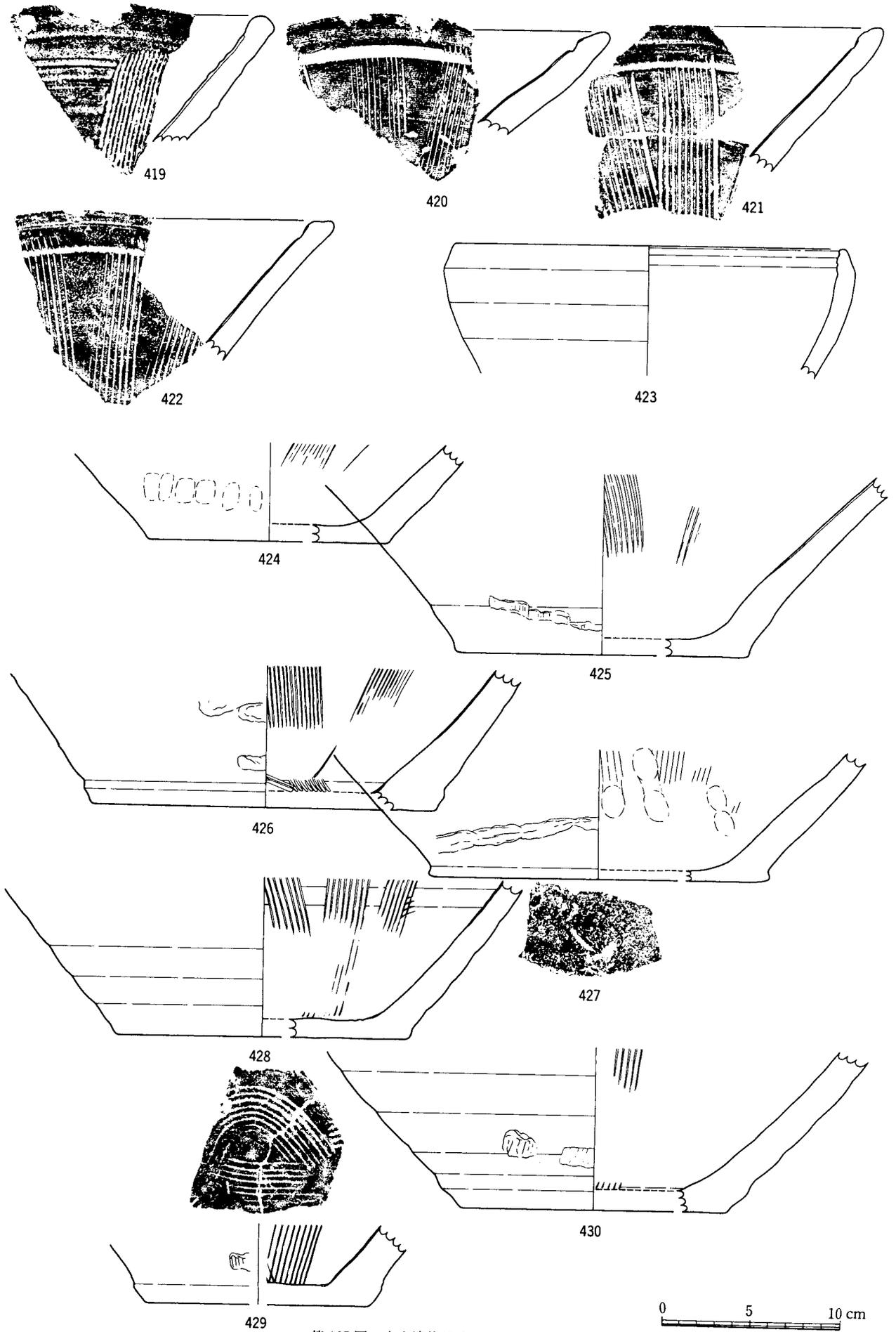
香炉(第106図431~437)筒形と袴腰形との二種類存する。436、437は小壺の底部の可能性も考えられるが、本項で説明する。431は、口縁端部に面をもち内傾する口径9.9cmを測るものである。内面および腰部から底部



第103図 出土遺物越前・甕・壺 (1/3)



第104図 出土遺物越前・鉢 (1/3)



第105図 出土遺物越前・鉢 (1/3)

にかけては釉はかけられないものと見られる。内外面、とくに内面において水挽きの際の凹凸が顕著である。淡緑色の釉調で貫入が著しい。432は、口縁端部を外側へつまみ出す。釉は、高温のために吹き暗緑灰色を呈する。434、435は、いずれも袴腰形を呈するものである。口径11.6cm、器高5.3cm、底径5.4cmを測るものである。底部には三足をもち糸切り痕を留める。内面と腰部から底部にかけては施釉されない。黄緑色を呈する。底内面、見込部分に三ヶ所のトチンの剥離痕が見られる。435は、434に比して口縁部も丸く、胴部も張るようである。口縁内面から胴部にかけては、灰釉がかけられ明るい緑灰色を呈する。13世紀末葉のものである可能性が考えられる。436は、底径6.2cmで三足を有するものと思われる。底面に糸切り痕を留める。胴部の釉は、暗緑灰色を呈する。433は、黒褐色の鉄釉のかかるものである。

瓶(第106図438～442など)438は鉄釉系のもものとみられるが、高温のために流れ褐色部分がまだら模様となる。底部では糸切り痕、内面ではしぼりが認められる。439も鉄釉系のもので頸部から口縁部にかけてのものである。内面では、施釉されなく、しぼり目が観察される。440は、水瓶の胴部片である。胴部に浅く細い沈線が二条施される。釉は淡緑灰色を呈する。441、442は尊式花瓶の口縁部片と思われる。いずれも沈線と言うより水挽きの際に生じたとみられる横線が認められる。釉調では、441は沸いて荒れているが、442では淡緑灰色を呈する。

天目茶碗(第106図444～448)444は、胴部でやや丸みをもち、口縁端部が屈曲する通有の器形のものである。内面では、黒褐色で全面に見られるが、外面では、緑灰色の部分と黒褐色との部分とが認められる。445も同様の器形をなすものであるが、やや器高が低い。口縁部内外面では茶褐色釉が垂下し、他は深い黒褐色を呈する。446は、口縁端部がくびれず、比較的こんもりとした器形である。釉調は、灰釉がやや強く黄褐色に近い。高台は、輪高台のものが多いが内反り高台のものも見られる。露胎のままのもの、薄い鬼板のもの、厚く鬼板を塗ったものが見られる。いずれも削り出し高台である。

碗(第106図450～453)、口径復元の可能なものはないが、平茶碗と見なされるものがある。内面と器体外面1/3程度に施釉されるものと思われる。腰部ではケズリが施される。釉調は、やや暗い緑灰色を呈するものが多い。

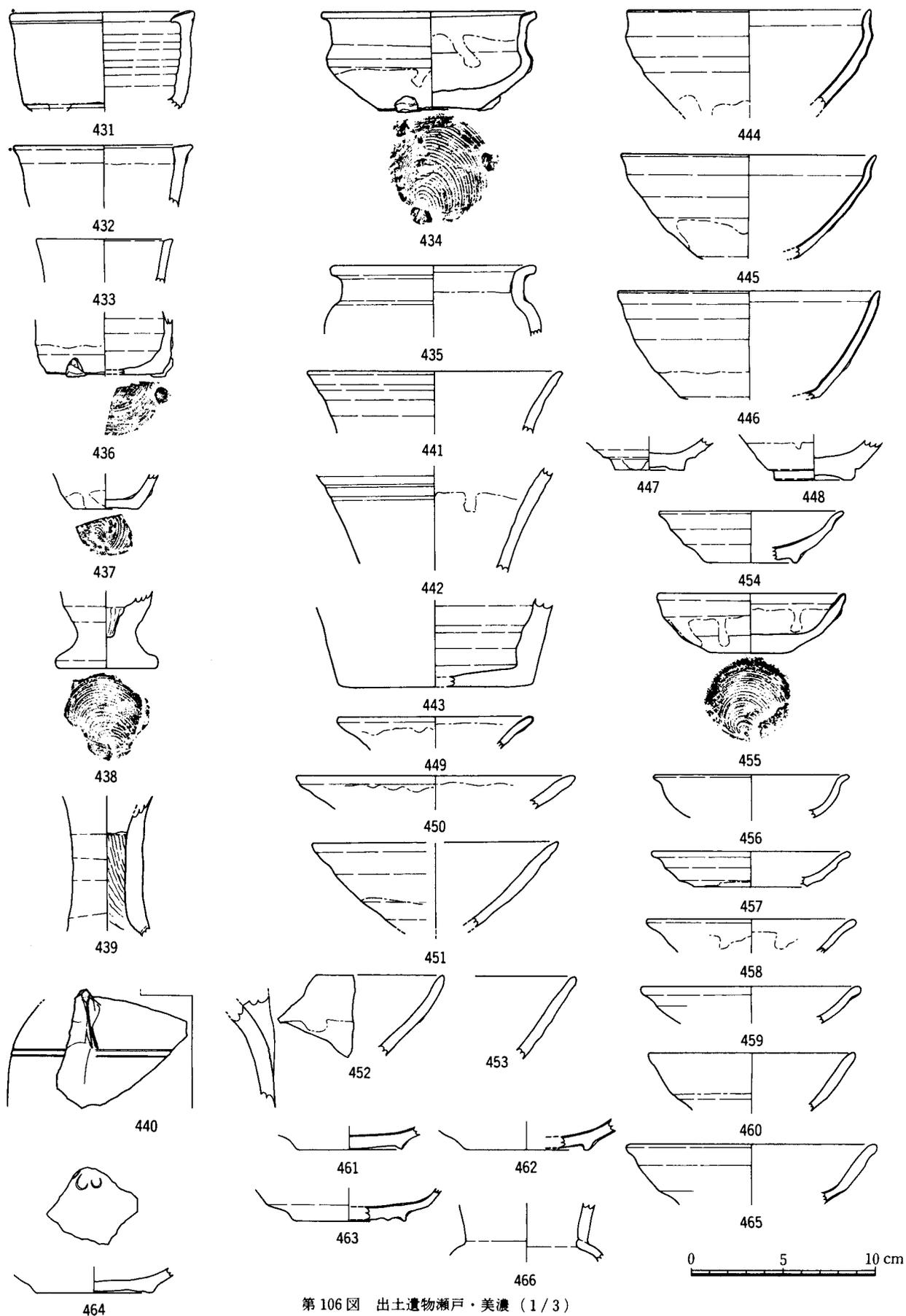
皿(第106図454～465)口径11cm前後を測る小皿と、15cm前後を測る中皿の二種類が存する。中皿と見られる564の見込には、カタバミの印花がある。底部は、削り出しによるが低い碁笥底状に近いもの、462のように輪高台に近いものがあるが前者が圧倒的に多い。内外面ともに灰釉が施されるが、底部が露胎のままのものが少しある。釉は淡緑色を呈するものが多く貫入の単位も大きい。底外面に輪トチの痕跡を残すものも多く見られる。460は鉄釉である。

盤、おろし皿(第107図467～483)口縁を折り縁とするもの、端部を内面に肥厚させるものがある。口径30cm前後を測る470、471は盤である。底部482、483も盤のものである。腰部から底部にかけては、入念なケズリを施す。腰部から底部にかけては露胎で、体中位から内面のみ施釉である。内面見込部分では刷毛塗が多く、灰釉も体部のように緑灰色の発色が見られず、かなり多くの鉄分の混じったものとなる。480は、内外面ともにきれいに発色し片口が挿入法で付けられる。他は、すべておろし皿と考えられる。底部では、472、479のように糸切り痕を留める。内面では、へら先によりおろし目が付けられる。内面および腰部から底部が露胎のままのものが多い。きれいに緑灰色を呈するもの、とんで灰白色に近い色調のものも見られる。472の割れ目には、漆による接合痕跡が認められる。

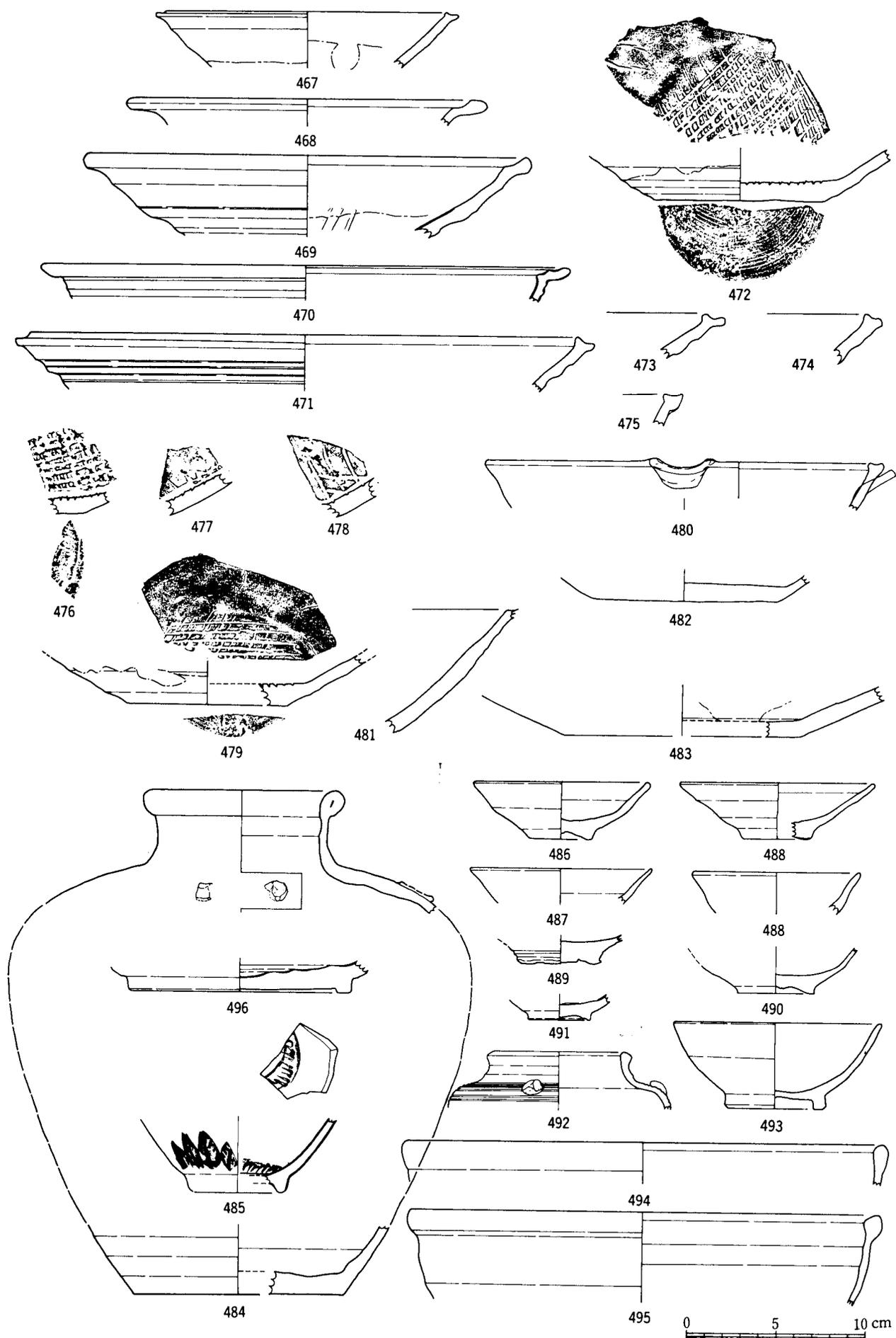
壺(第107図484)底部のみで全形はわからない。底部、胴部に灰緑色の灰釉が施される。図示できなかったが、鉄釉系の四耳壺とみられる口縁、底部片がある。

以上、簡単に説明してきたが、鉄釉の施されるものと、灰釉の施されるものとの器種別の内訳をみると以下のようになる(破片点数である)。

器種 釉	香炉	瓶・壺	天目 茶碗	碗(平)	皿	おろし 皿	盤	その他 、不明	計
灰 釉	12	5	0	5	70	15	24	6	137
鉄 釉	1	6	39	0	3	0	0	1	50
合 計	13	11	39	5	73	15	24	7	187



第106図 出土遺物瀬戸・美濃 (1/3)



第107図 出土遺物瀬戸・美濃・李朝・その他(1/3)

## 2 輸入陶磁器

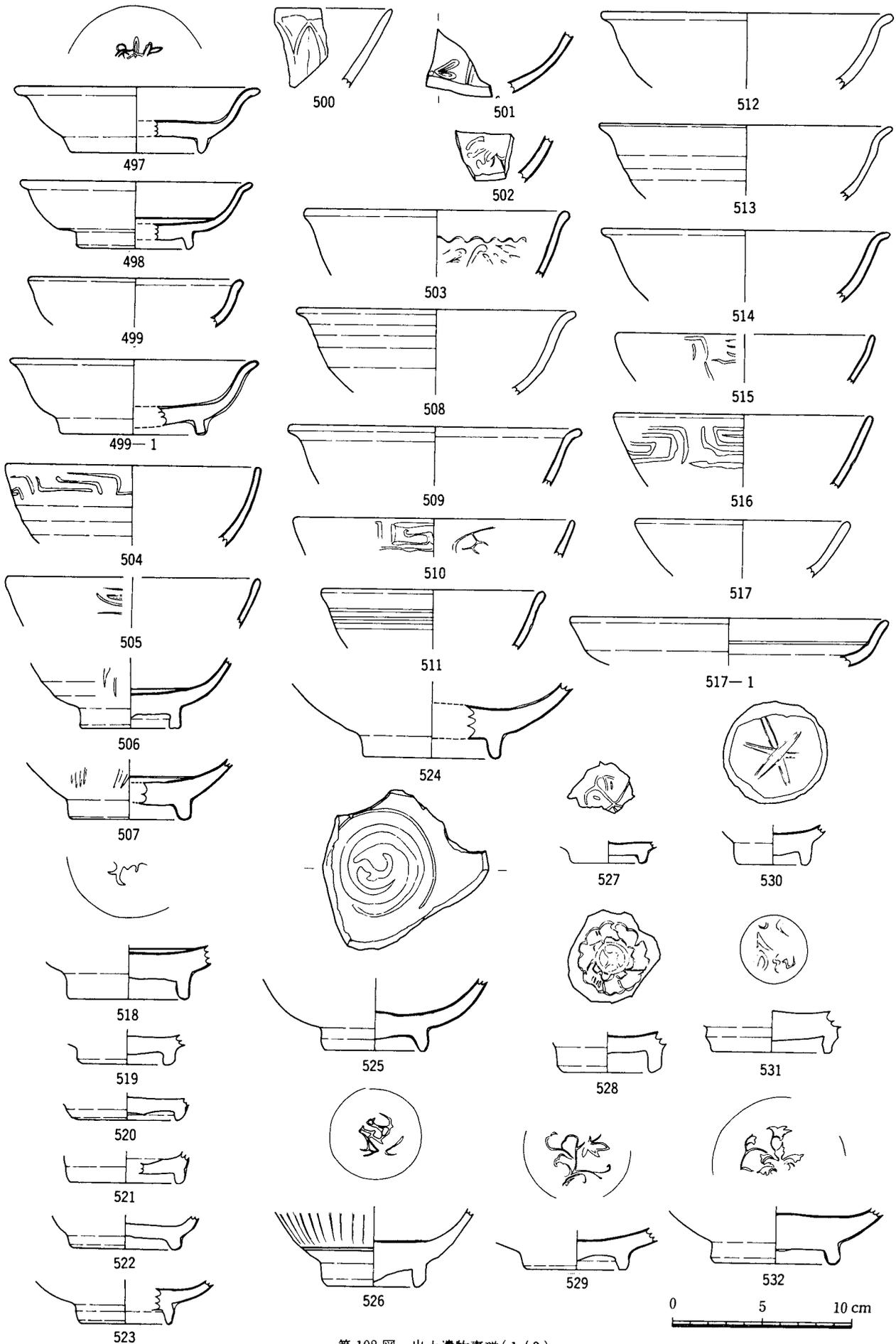
(1) 青磁 (第108図、第109図533~547) 破片数で176点を数える。なかでも碗に次いで皿が多い。

皿 (第108図497~499-1) 腰部が強張り口縁部がゆるやかに外反する皿形器形をなすものと思われる。ほぼ、全形を窺える497では、口径13.4cm、器高3.6cm、底径7.2cmを測るものである。底部外面を除いて、濃緑色の釉が厚くかかる。底部で鉄分によると思われる青磁釉の酸化が所々に見受けられる。磁胎は、底部近くで、磁器化があまり肌色を呈し、そのために釉調もやや明るく感じられる。これについては、499-1でも同様のことが言える。497の内面、見込には全形を窺えないが、花文状の印刻が見られる。499-1の底部外面に墨痕が認められる。498も、同器形のものであるが、内面に一条の沈線を施す。釉調は、497、499-1に比して淡く、全体に均一で薄い。底部の畳付とその外面には、釉はかけられていない。丁寧なケズリが観察される。

稜皿 (第109図535~539) 27点を数えるが、図示できたのは5点である。口唇部を抉り込みにより稜花状にしたものと、口唇部の稜花とあわせて内面にも花文状の線刻のあるものと二種類が見られる。稜花ともに、へら描きにより花文(渦文)を施す537、539は、口径13.5cm、15.0cmを測る。器形は、腰部で、稜をなし(内面では段をなす)強く外反するものである。釉調は淡い緑色で、所々に鉄化によるやや肌色を呈する部分が見られる。内外面ともに、キ目細かい貫入が多い。539も同様のものであるが、釉調が青白色を呈する。これは537、538に比して磁胎が白色に近い関係である。538は、口唇部を稜花状に抉り込むが、花文状のへら描きが施されない。体部外面中位に沈線一条が巡る。やはり、内外面とも貫入が多い。

碗 (第108図) 口縁部片で43点を数える。体部に鎬蓮弁文を浮彫りしたものが、口縁部片で4点(体部片でも4点)ある。また、簡略化された蓮弁文をもつものも多い。蓮弁文は、へら描きにより幅の広いもの、狭いもの、山形となるものがある。口縁部片で9点(体部片10点)ある。また、外面に雷文帯をもつものとその下位体部に簡便(粗放)な蓮弁文をへら描きするものが見られる。口縁部片で7点(体部片3点)ある。これらには、内面にも草花状のへら描きをもつものがみられる。また、外面が無文のものがある。口縁部片で23点を数える。これらには、内面体部に、浮彫り風に見える印花文を施す例がある。また、体部外面に2~3条の沈線のみを施す例もみられる。以上、碗では、大まかに四類が本遺跡で出土している。500は、浮彫りした鎬蓮弁文を有するもので、磁胎も白色に近く、ために青白色に近い釉調を呈する。他の図示しなかったものについても、概ね同様なことが言える。次に、簡便な蓮弁文を有するものが多いのであるが、図示したのは、526の一点のみである。底径5.0cmを測るもので、底部外面は、へら削りにより荒く中央部は残存して高くなる。腰部でも粗いへら削りを施す。内面見込みには、円圈の中にへら描きによる印刻がある。磁胎に長石粒が多いために、釉上に白く浮き出てゴマシオ状を呈する。磁胎は、須恵質の焼成のために釉調は、全体に暗緑灰色を呈する。底部外面のみに施釉されない。蓮弁文は片切りである。図示しなかったが、体部内面に草花文を施す例も見られる。また、焼成段階に釉が飛んで灰白色に近いものも多い。また一点であるが、漆による接着痕を留めるものがある。次に、簡便な雷文帯を有するものであるが、504は、口径14.0cmを測る。雷文帯下位の体部外面には数条にわたってへら削りの痕跡が明瞭に残る。内面および外面には、施文されないものと思われる。割れ目に漆による接着痕を留めている。510は、比較的しっかりした雷文帯を有し、へら描きの線も細い。内面にもへら描き文が認められる。516は、口径15.2cmを測るもので、雷文も他に比して大きく、線も太い。貫入が多く、釉調は明るい青灰色を呈する。次に、体部外面の無文のものについては、501~503のように、内面に浮彫風に見える印花文(型押し?)を配するものがある。503は、口径14.5cmを測るもので、釉調は磁胎の関係から暗濃緑色を呈する。いずれも、口縁端部が外反し、丸く玉縁状をなす器形に、この種のものが多いものと思われる。502、503は貫入が多い。509も、無文のものと思われるが、口縁端部がゆるく外反し、端部外面に一ヶ所、抉り込みが見られるが、全形を知り得ないので輪花状をなすものなのか不明である。貫入が多く、割れ目に漆接合痕が残る。517は、小形の碗と思われるが、口径11.5cmを測る。釉は、黄褐色を呈し割れ目に漆接合痕が残る。

盤 (第109図540~543) 口縁部片で4点(底部片2点)ある。口縁は折縁とするが、541のように立上りのあるものと、540のようにないものと二種類が存する。また、立上りを有するものは平縁のまま、立上りを示さな



第108図 出土遺物青磁(1/3)

いものは、輪花状の抉り込を有するようである。540は、口縁端面に抉り込を施し、それに対応するように、折縁に一条のへら描き沈線でやはり輪花状をなす。体部内面でも幅広の凹線状のカキ取りにより、簡便な鏝文を表現しているようである。釉調は、磁胎が白色に近く焼成された関係から灰青色を呈する。また、貫入も多い。この種の輪花状をなすものは、他にも1点ある。541は、折縁とした先端に立上りのみられるものである。体部内面では縦方向のへら描き沈線が施されるものと思われるが、全形がなく不明である。が簡便な蓮弁文を表わしているものと思われる。

瓶、香炉、その他(第109図533、534)533は瓶類の頸部と思われる。残存する頸部外面に二条の沈線を施す。磁胎も白く焼き上り、ために釉調も明るい緑色を呈する。他に、胴部の破片が1点あるが同一個体かどうかは不明である。534は、口径5.8cm、器高5.0cm、最大胴径6.3cmを測る三足香炉である。脚部は最も退化した形態を示す。底部は、へら削りにより若干上げ底風に作られ、胴部では数条の轆轤ヒダが釉下に認められる。釉調は、黄褐色を呈し底部および体部内面のほとんどは無釉で、貫入が多い。図示できなかったが、胴部にへら先による細かい渦文のある梅瓶の破片と思われるものが、1点ある。磁胎も白色で青白色の釉が外面のみに施釉され、貫入が多い。

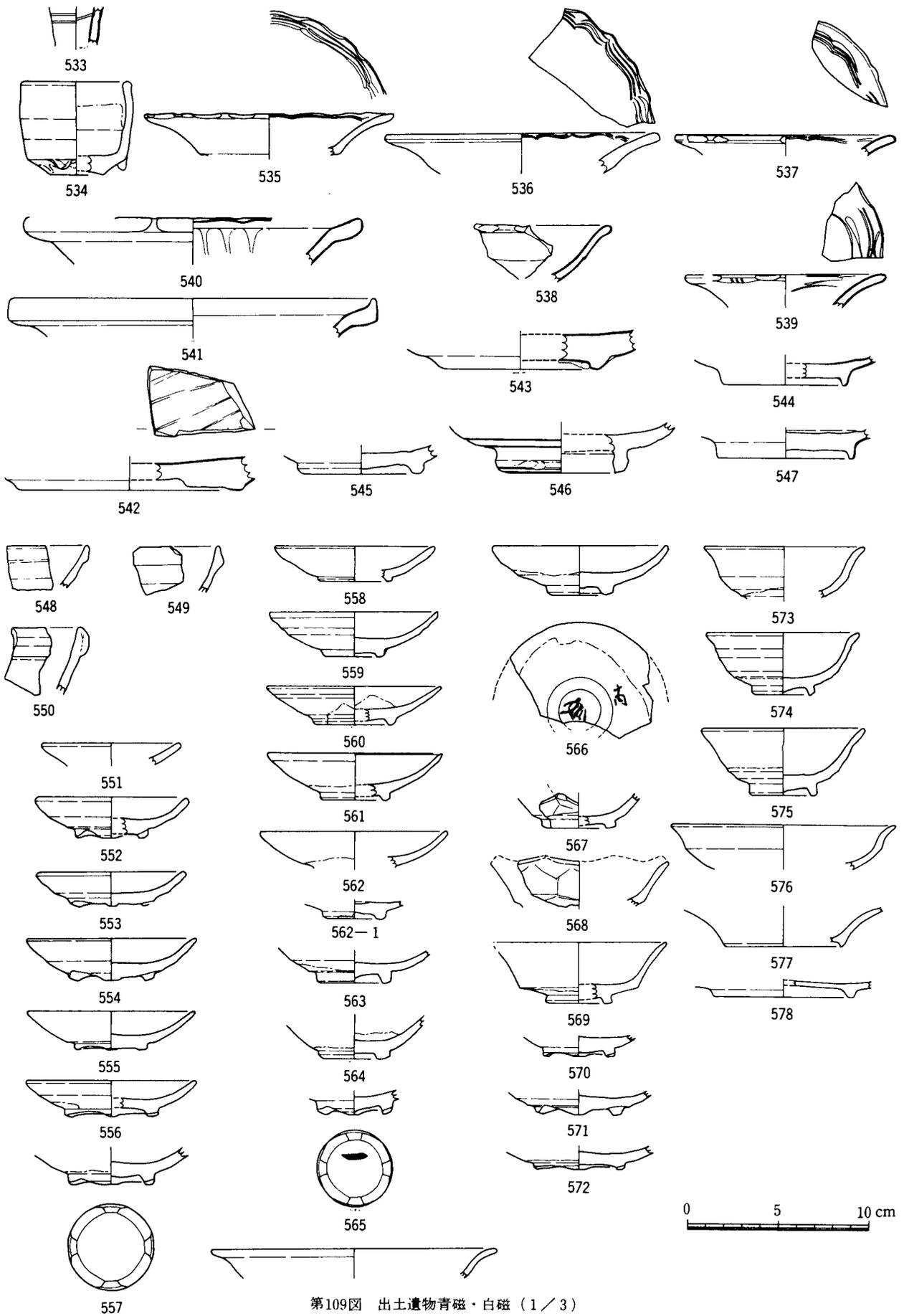
底部(第108図518~532、第109図542~547)30片を数えるが、あえて碗、皿の区別はできなかった。そのうち、見込部分に何らかの印刻のあるものは9点ある。527~529、532のように花文(牡丹文が多い)を表わしたものの、530のように簡略化された花文を表現するもの、また、518、526、531のように判読不能のものなどがある。また、507、520のように、内面見込部分には重ね焼のために露胎のままとなったものが6点ある。542、543は、盤の底部である。542は、幅広な蛇の目高台をなし、畳付の部分に幅2.2cmの露胎の部分を残す。543は、非常に低い高台を削り出しにより付し、底部の器壁も厚い。釉調は濃緑色を呈し、内外面ともに貫入が多い。底外面に融着物がある。

(2) 白磁(第109図)総破片数103点ある。その内訳をみると、14世紀以前のものとしてそれ以後のものとして二大別できる。前者のものについては、数量も少なく玉縁口縁をなす鉢・碗片が3点、それらの底部片とみられるもの4点、皿1点、劃花文を有する碗・皿が3点、口禿げ碗1点がある。また、後者では、皿類が最も多く、口縁部片で36点、抉り高台のもの14点、通有のもの11点、皿胴部片8点、八稜坏と思われるもの8点、小坏口縁部片11点、不明のもの3点がある。

548は、玉縁口縁を有する碗の口縁である。体部外面は入念なへら削りを施すようであるが、細片のため不明である。549は、断面三角形の玉縁、550は、断面半球形の太い玉縁を有し、いずれも鉢の口縁である。いずれの釉調も、ややくすんで青味をおびているものである。これらに対応するやや高く外側に踏んばるものと内面を抉り込んだのみの幅広な低い高台のもの二種類がみられる。また、同時期のものと思われる内面に一条の円圈を有する皿の口縁部片が1点ある。他には、劃花文を有する碗・皿の破片が3点ある。

皿(第109図552~557、570~572)いずれも、四ヶ所に抉りを入れる高台を有するものである。大きさ、焼成方法により二つに別れるものと思われる。553は、口径8.0cm、器高1.9cm、底径3.5cmを測るもので552も同様の規格品と思われる。555では、口径9.1cm、器高2.1cm、底径3.1cmを測り554、556、557もほぼ同様のものであろう。釉調についても二種類がみられる。552~554は、磁化も進み透明な青味をおびたものである。一方、554のように半磁胎に近く不透明な乳白色の釉調を呈するものがある。概して小形のもの磁器化が良く大形のもの半磁胎に近いと言える。また、全面施釉するものと、腰部下位から高台が露胎のままのものとがあり、ほぼ同数である。体部内面には、必ずと言ってよいほど重ね焼の目跡が融着剥離痕としてみられる。565の底部外面には、「一」の墨書がある。572の割れ目に漆接合痕が残る。

皿(第109図558~562-1、566)やや外側に踏ん張る高台を有する通有のものである。ほぼ、法量については一定しているようである。558では、口径9.2cm、器高2.5cm、底径3.0cmを測る。釉調については、先の抉りを有する皿と同様に、やや青味をおびる透明釉とくすんだ乳白色釉のものがある。これは、先述したが磁器化の進んだものと半磁胎の差である。また、施釉箇所についても、全面に施釉するものと、腰部下位から高台が



露胎となるもの、またつけ掛によるとと思われる見込み部分および腰部下位から高台にかけて露胎のものとの三種類がみられる。内面にほとんどのものは、重ね焼痕を留めないが、ただ一点だけ輪状に剥離するものがある。562-1の底外面に墨痕、566には底外面と腰部に各一文字ずつの墨書がある。腰部のものは「南カ」と読めるかも知れない。

八稜坏(第109図567、568)口縁部および体部もほぼ八角形になるものと思われるが、細片が多く全形を知り得るものはない。釉調、焼成については、皿類と同様に磁胎でやや青味をおびたもの、半磁胎でくすんだ乳白色を呈するものの二種類がみられる。残存する底部片で見る限り、腰部から高台にかけては露胎のままのものが多い。

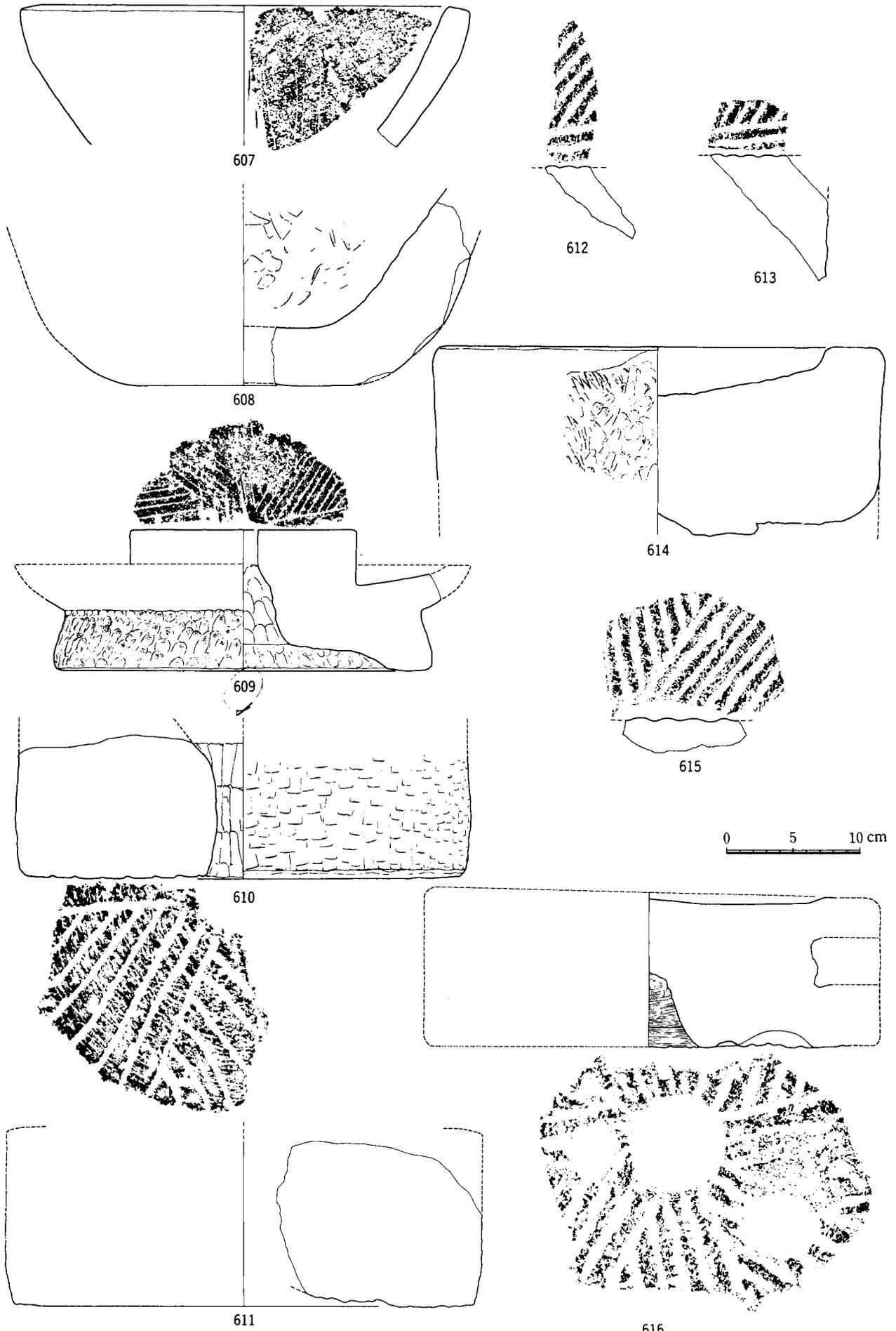
坏(第109図573~575)いずれも小形のもので、比較的丸みをおびる腰部から立上り、口縁端が外反するものである。574は、口径8.1cm、器高3.4cm、底径3.0cmを測るもので、腰部から体部にかけてのへら削り痕跡が釉下に認められる。釉調は、ややくすんだ乳白色を呈し貫入が多い。腰部から高台にかけては、露胎のままである。575は、口径8.8cm、器高3.6cm、底径3.4cmを測るもので、ほぼ574と同様のものであるが、くすんだ乳白色の釉は、腰部から高台にかけてと見込部分に重ね焼の高台部分が輪状に露胎のままとなる。割れ目に漆接合痕を留める。その他の端反りのある口縁部については、坏と見られるが、皿と同様に磁胎で透明な青味をおびた釉調のもの(硬質)と、半磁胎で不透明なくすんだ乳白色を呈する釉調のもの(軟質)との二者が存するようであるが、やや後者の方が多い。

(3) 染付(第107図485)ほとんどが図示できなかったが10点ある。碗が4点、皿が6点である。485は、外面底部近くに芭蕉葉文を一周させている。口縁部は不明であるが波濤文帯を有するものであろう。内面見込には簡略な蓮華文を描く。外面の呉須の発色は良く藍色に近く、内面はくすんだものである。全体の釉調も外面では透明でやや青味をおび、内面はややくすんだものである。割れ目に漆接合痕跡がある。他の碗では、口縁近くに列点文を配するもの、梅月文、唐草文などが見られる。皿では、唐草文が多いようであるが細片のため不明である。軟質なものが2点ある。

(4) 李朝・碗(第107図486~491)破片総数11点あり、その内訳は口縁部片5点、体部片1点、底部片5点である。底部片から胎土、焼成などと考えあわせると5個体以上となる。486は、口径9.6cm、器高3.2cm、底径3.2cmを測るもので、やや径の小さい呉須底気味の底部よりのびる体部は、中位でふくらみながらほぼ直線的に口縁となるものである。底部外面には、へら削りによるとみられる「の」字形の痕跡が山形に見られる。内面についても、体部のふくらみに対応してゆるく段をなし、見込には、砂目が五ヶ所認められる。胎土は、砂(長石粒)混じりで暗灰色で、釉調もくすんだ灰色を呈する。内面および体部の所々に釉が沸いている。また、釉の赤化が所々にある。底部外面にも砂目が五ヶ所認められる。その他のものについてもほぼ同様のことが言える。概して底部処理が雑で、へら削りにより呉須底状にするが、その残りがそのままのもの(486)であったり、削りを入れただけで平底に近いもの(488)があったりする。底部外面および見込みには、必ずと言ってよい位に、五ヶ所の砂目の痕跡が見られる。胎土については、灰色から暗灰青色のものが多く、胎土により釉色も、くすんだ灰青色と対応するようである。体部外面口縁端近くに重ね焼の痕跡である他の器の破片が融着するものが一点見られる。

瓶 図示しなかったが、体部片が3点ある。胎土は、いずれも赤褐色を呈し、外面には暗黄灰色の釉がかかり、内面は無釉である。成形にあたって内外面ともにキ目細いナデにより、その後に孤状のタタキを施す。胎土は緻密で、焼成も堅緻で内面は、須恵質の発色を呈する。以上は李朝の特徴をよく示しているものと思われる。

壺(第107図484)ほぼ同一個体とみられるもので6点ある。四耳壺と思われるもので、ほぼ直立する口頸部に玉縁状に折りまげた口縁帯を付す。肩部には、横位の両端を指で押えた耳がつく。耳本体は残存しないが、体部に残る釉の変化から、幅1.8cm前後のものであったと推定できる。胴部は残存しないので不明であるが、底部では入念なへら削り、また腰部でも同様なへら削りを施している。内面では入念なナデ仕上げを施しており、キ目細かい轆轤痕が見られる。釉色は、口縁端部で灰黄緑色(褐釉に自然釉が高温のために混じった)、口頸部では暗褐色(刷毛塗か)、肩部は、口縁部と同様、胴部は不明、腰部から底部にかけては無釉であるが、褐釉の雫が振り



第110図 出土遺物石製品 (1/4)

第4章 出土遺物

かかるが他は暗灰褐色を呈する。内面も無釉で暗灰青色を呈し底部近くでは黄褐色気味となる。焼成は非常に堅緻で高温で焼かれたことが伺える。

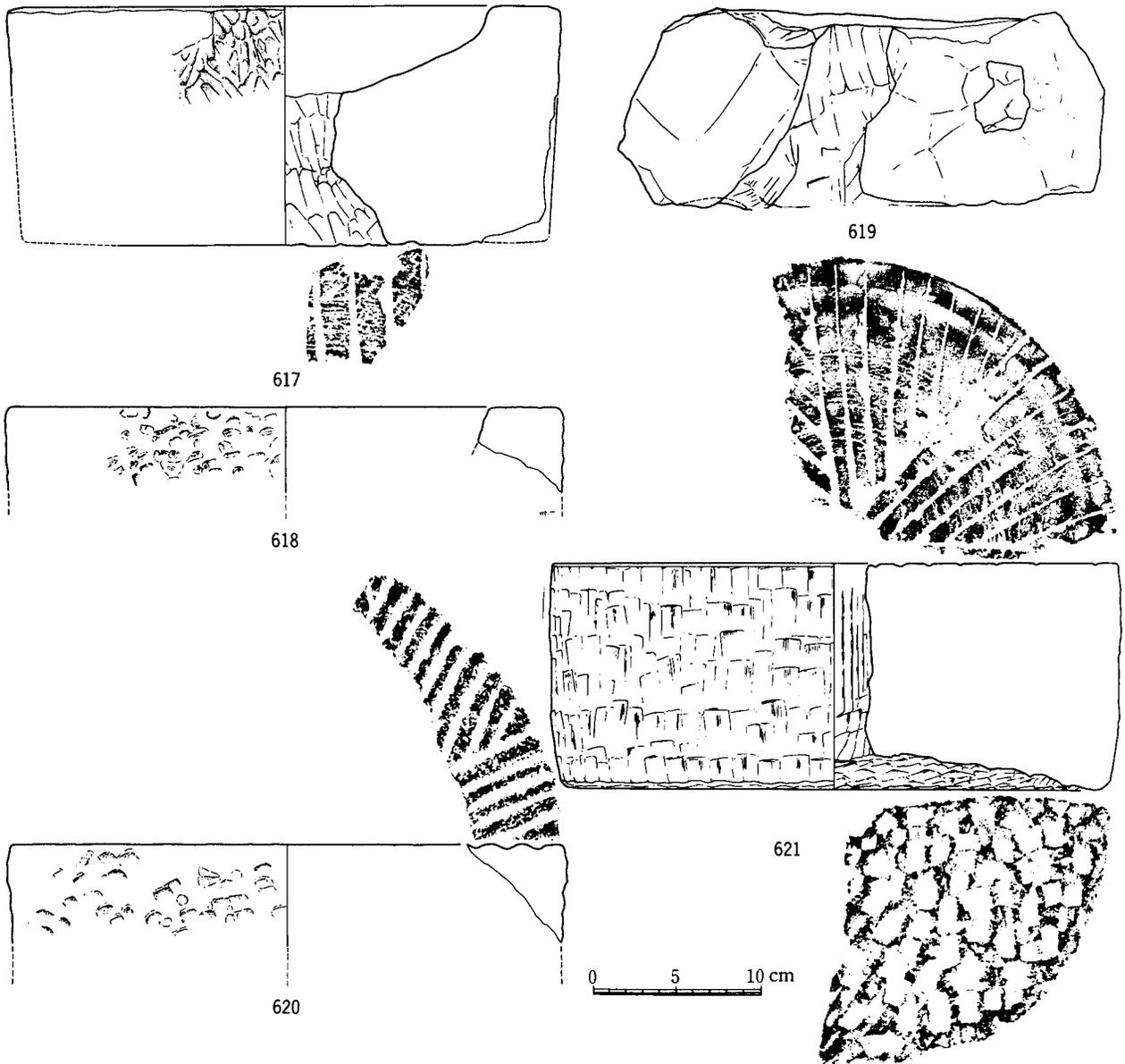
3 土製品 (第83図)

(1) 土錘 いずれも土師質のもので、紡錘形のものと同筒形のものとの二種がある。580のものは最大で長さ6.6 cm、最大径5.8 cm、孔径1.9 cm、重さ197 gを測る。おそらく、両面からの穿孔であろう。円筒形をなす587は、長さ2.5 cm、径3.4 cm、孔径1.5 cm、重さ33.5 gを測る。暗茶褐色を呈し、焼成堅緻である。小さいものでは、591で長さ2.8 cm、最大径1.8 cm、孔径0.4 cm、重さ9.5 gを測る。以上、土錘は、総数17点ある。ほとんどが、平安時代に属するものと思われるが、587のように、円筒形のを切断して量産したと思われるものは、それ以降に下るものであろう。

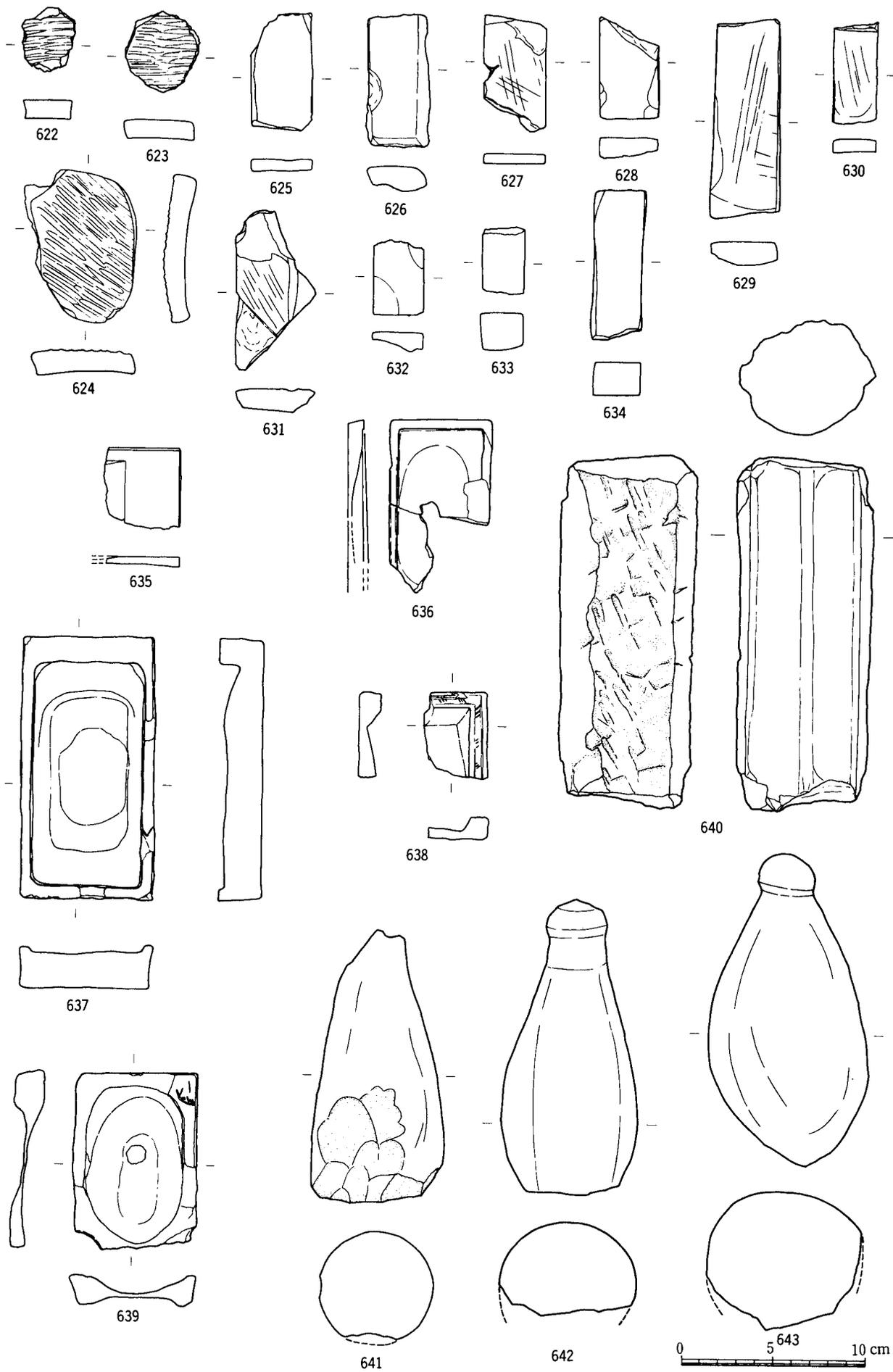
(2) 鞠の羽口 破片で細片が多いが55点ある。いずれも通有のもので円筒形をなし先端部でややすぼまるものである。径7 cm前後を計測し、2~3 cmの円孔を有する。端部と器体上半には、ビードロ状の付着物が甚しい。604は、径9 cm前後を測る長大なものとなろう。いずれも、茶褐色~黒褐色を呈し、土師質で砂粒の混入が多い。また、高温使用のため随所にひび割れが認められる。

4 石製品 (第110、111、112図)

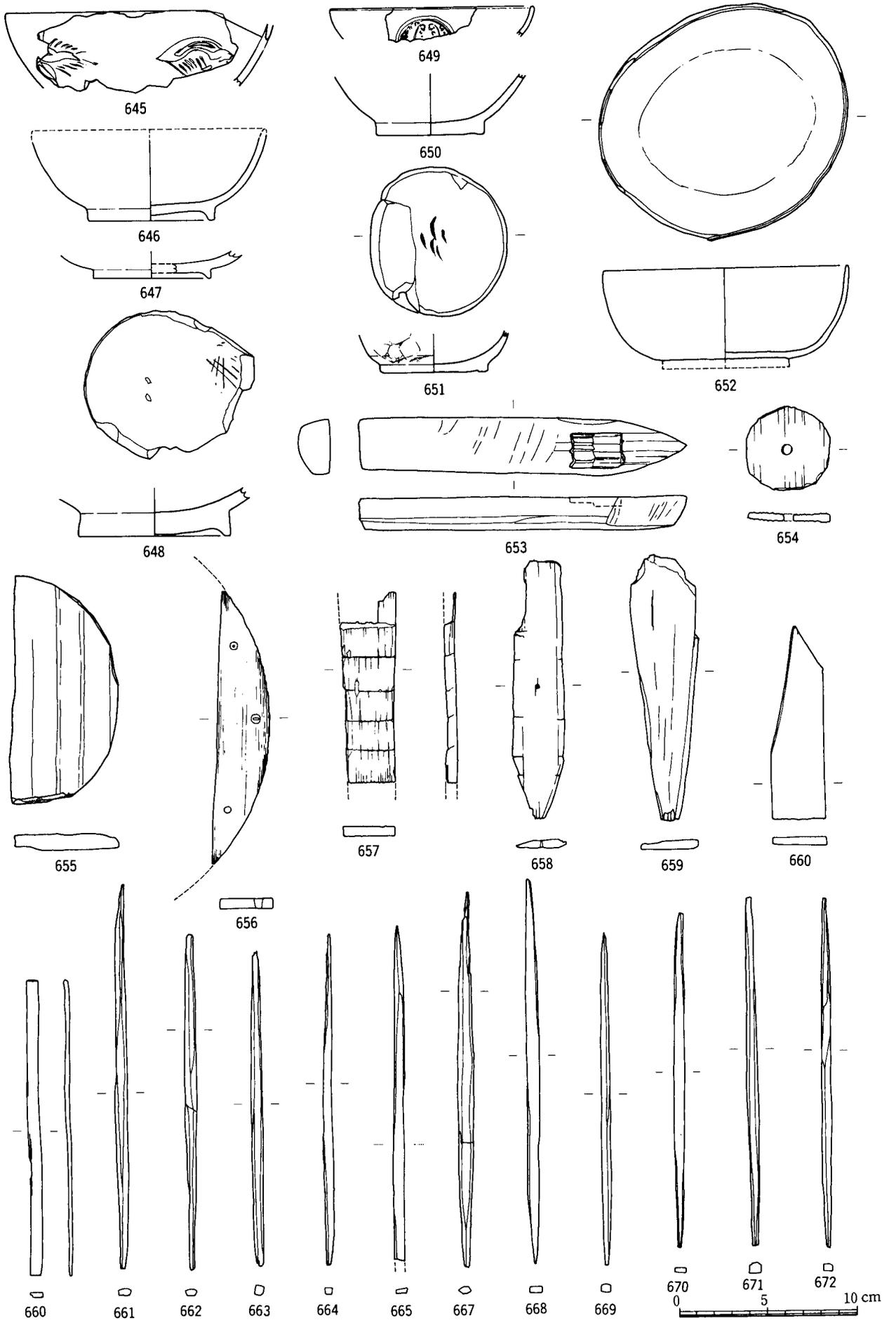
石鉢、石臼、硯、砥石、石錘、メンコ、不明のものなどがある。



第111図 出土遺物石臼 (1/4)



第112図 出土遺物石製品 (1/3)



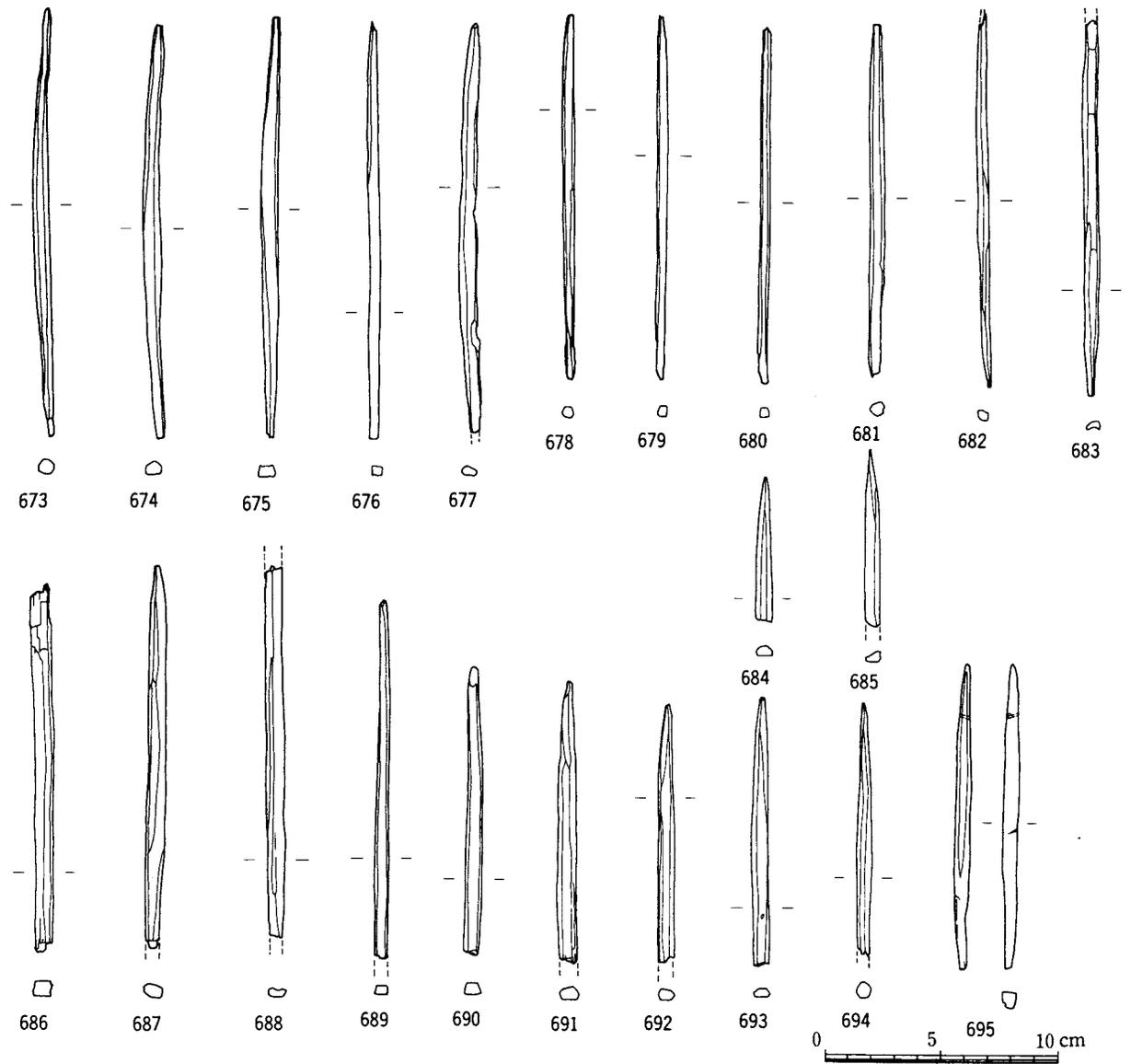
第113図 出土遺物木製品(1/3)

- (1) 石鉢(第110図607、608) 607は、口径8cmを測り、内面に鋭いおろし目を跳ね上げにより施文する。灰白色を呈する凝灰岩質である。608の内面は使用により磨滅している。
- (2) 石臼(第110、111図) 穀臼と茶臼とがある。609は、茶臼の下臼の部分である。おろし目は、8分割で10本の副溝を細かく鋭く施文する。芯棒孔は、一辺1.7cmの方形となる。受け皿状をなすものであるが皿部を欠失している。穀臼では、上臼6点、下臼5点と考えられる。上臼では、全形を知り得るものはないが、上面は皿状に凹ませ、横に取手を入れる穴を設け、供給口のみられるものがある。(第110図616、第111図619) 下臼では、第111図621のように比較的残りのよいものがある。径34.0cm、器高13.2cmを測り芯棒穴は下まで貫通する。底面は上げ底風に仕上げる。側面、底面では工具痕が明瞭に観察される。8分割で8本の副溝を有するものと見られる。
- (3) メンコ(第112図622~624) いずれも珠洲の壺、甕類の胴部片に面取りをしたものである。624は、周囲が磨滅しており、あるいは砥石として使用された可能性も考えられる。
- (4) 砥石(第112図625~634) 14点ある。633、634のように断面が方形で棒状のもの、626、629のように断面が長方形のもの、また断面が長方形で薄いものなどがある。626、633、634は砂岩質のもので、中砥か荒砥として、その他は灰白色か青灰色を呈する比較的軟い材で中砥か仕上砥として使用されたものであろう。
- (5) 硯(第112図635~639) 7点ある。いずれも長方形をなすものである。636のように、使用のため擦り減って陸の部分に孔を生じるものもある。全形を伺える637では、長辺14.2cm、短辺7.2cm、厚さ2.1cmを測るもので、陸部では使用のためやや凹むが差しては、使われなかったと思われる。青灰色を呈するやや軟かい凝灰岩質のものと思われる。底面も水平に作られ、使用者によると思われる記号(文字風)様の擦痕がある。639は、黒褐色を呈する粘板岩製と思われるもので、海、陸兼用の玉子形の抉り込みを有するものである。底面にも方形の抉り込みが見られ、硯として使用した可能性がある。表右肩部に記号様の印刻がある。638の側縁部にも見られる。
- (6) 石錘(第112図641~643) 3点ある。乳房状のつまみに、球胴状の錘部がつくものである。つまみの部分で径3cm前後、胴部で7.5cm前後、長さ17cm前後を測るものである。

#### 5 木製品(第113、114図)

漆器、箸状木器、桶底、紡錘車、船形、木柱根、用途および形状の不明なものなどがある。

- (1) 漆器(第113図645~652) 内外面ともに、黒漆で内面、外面いずれかに朱塗りの文様のあるものと無文のままのもの、また内外面朱塗りでおそらく無文であったもの、内面が朱塗り、外面が黒塗地に朱塗りの文様を施すものと施さない無文のものとの5つのタイプに分けることができる。文様も草花文風なもの、家紋状のものがある。
- (2) 箸状木器(第113、114図) 総数で53点ある。両先端を荒く削り4面から不規則な面取りを施す通有のものである。長さ20cm前後を計測するものが多いようである。断面方形のものは扁平で薄い。面取りを5回以上施すものにあっては、断面が丸形に近いもの、楕円形に近いものなどが見られる。
- (3) 船形(第113図653) 全長18.6cmを測るもので、舟首は削り出しにより明確な表現をしているのに対し、舟尾は鋸で切断したままの雑なものである。その他、舟底なども入念な削りで仕上げる。表に、長さ3cm、幅2cm、深さ0.3~0.5cmの抉り込みがある。舟室を表現すると思われるが、作工途中の感がある。全体のつくりは稚拙でおそらく玩具であろう。
- (4) 円盤(紡錘車)、(第113図654) 径4.7cm前後のほぼ円形を呈するもので、中央部に焼火箸によると思われる径0.5cmの孔が穿たれる。厚さ0.5cmを測り紡錘車として使用されたものと考えている。
- (5) 桶底(第113図655、656) 655は、直径13cm前後になるもので、厚さ約1cmを測る。内、外面の加工は粗い。656は、3ヶ所に針孔があるもので厚さ0.5cmを測るものである。内外面とも漆状の黒塗りが施してあり、釘孔などの関係から見ても家材、家具類の装飾具と考えた方がよいかも知れない。
- (6) 不明品(第113図657~660) 塔婆状あるいは筥状に先端部が鋭った658~660のようなものの他に、厚さ0.5cm前後、幅3cm前後の板材がかなりあり、本簡とも考えられるが断定できない。657は、一方の面に、ほぼ1.



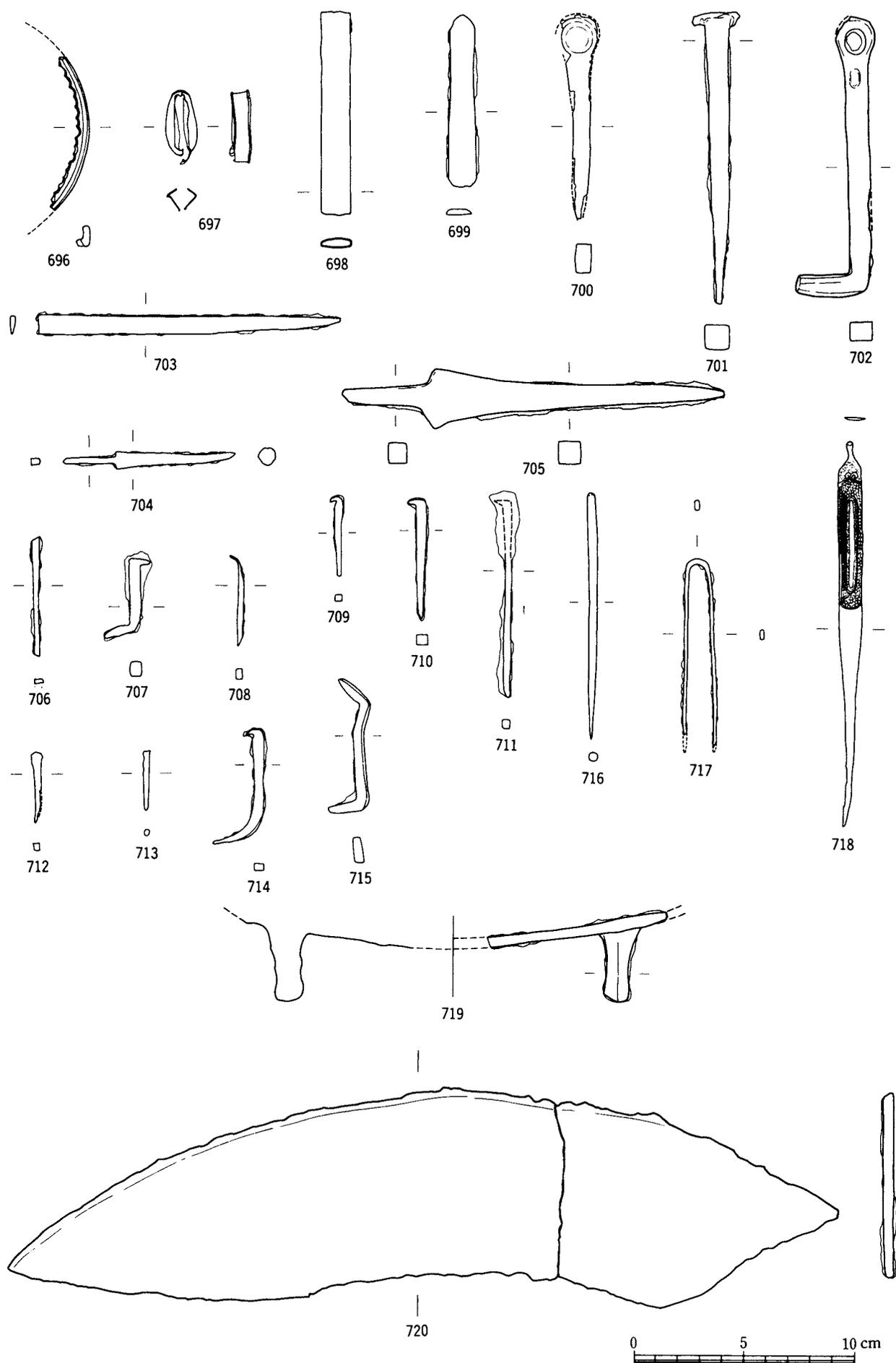
第114図 出土遺物箸状木器 (1/3)

5 cm 等間隔に切れ目を施すもので曲物の部材と見られるものである。他にも、用途不明の加工痕跡を留める部材がある。自然木枝も若干ある。

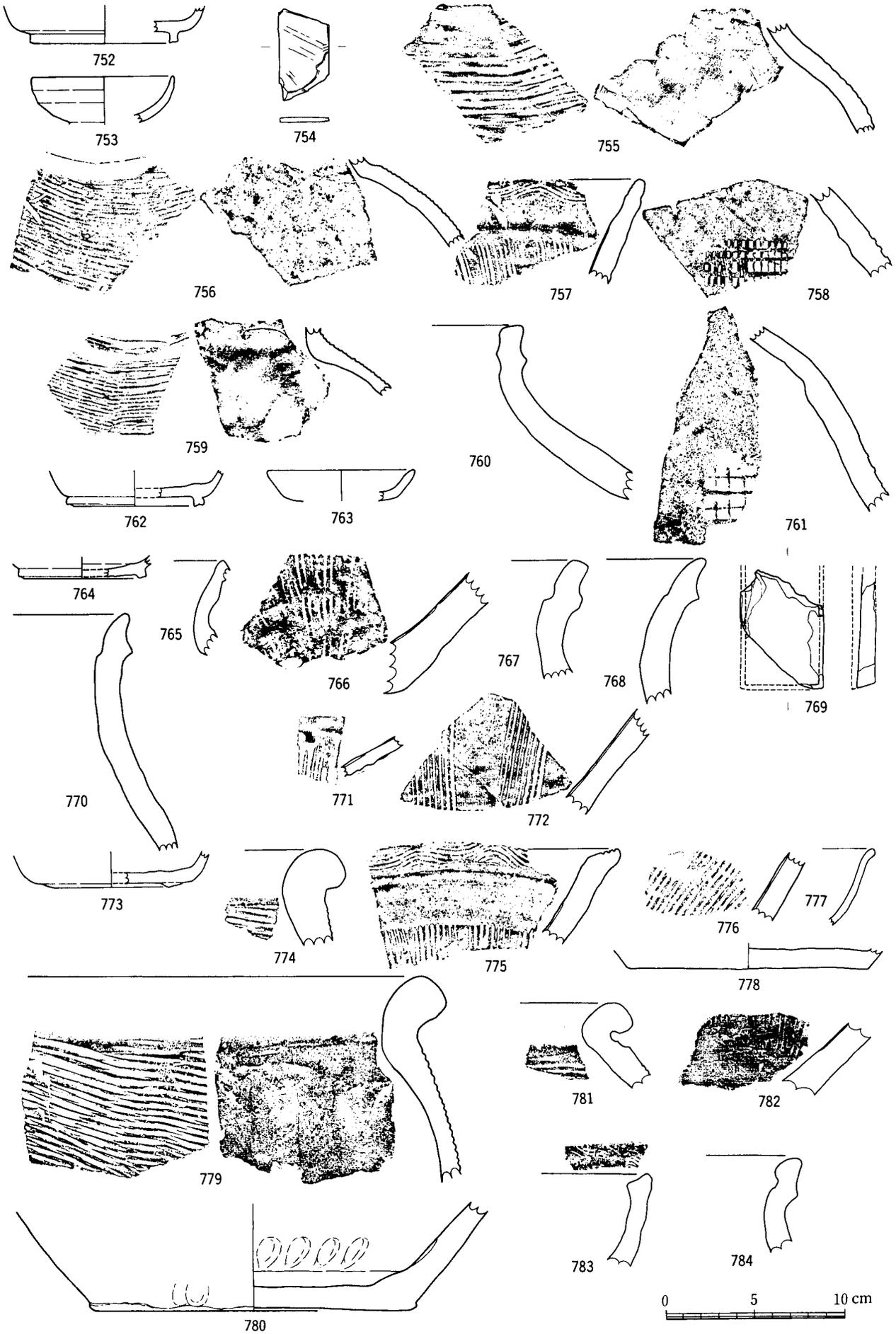
6 鉄、銅製品 (第115図)

鏡、小刀、鉄鏃、鋏、筭、小柄、鐔、鍋、釘、その他不明のものなど27点ある。

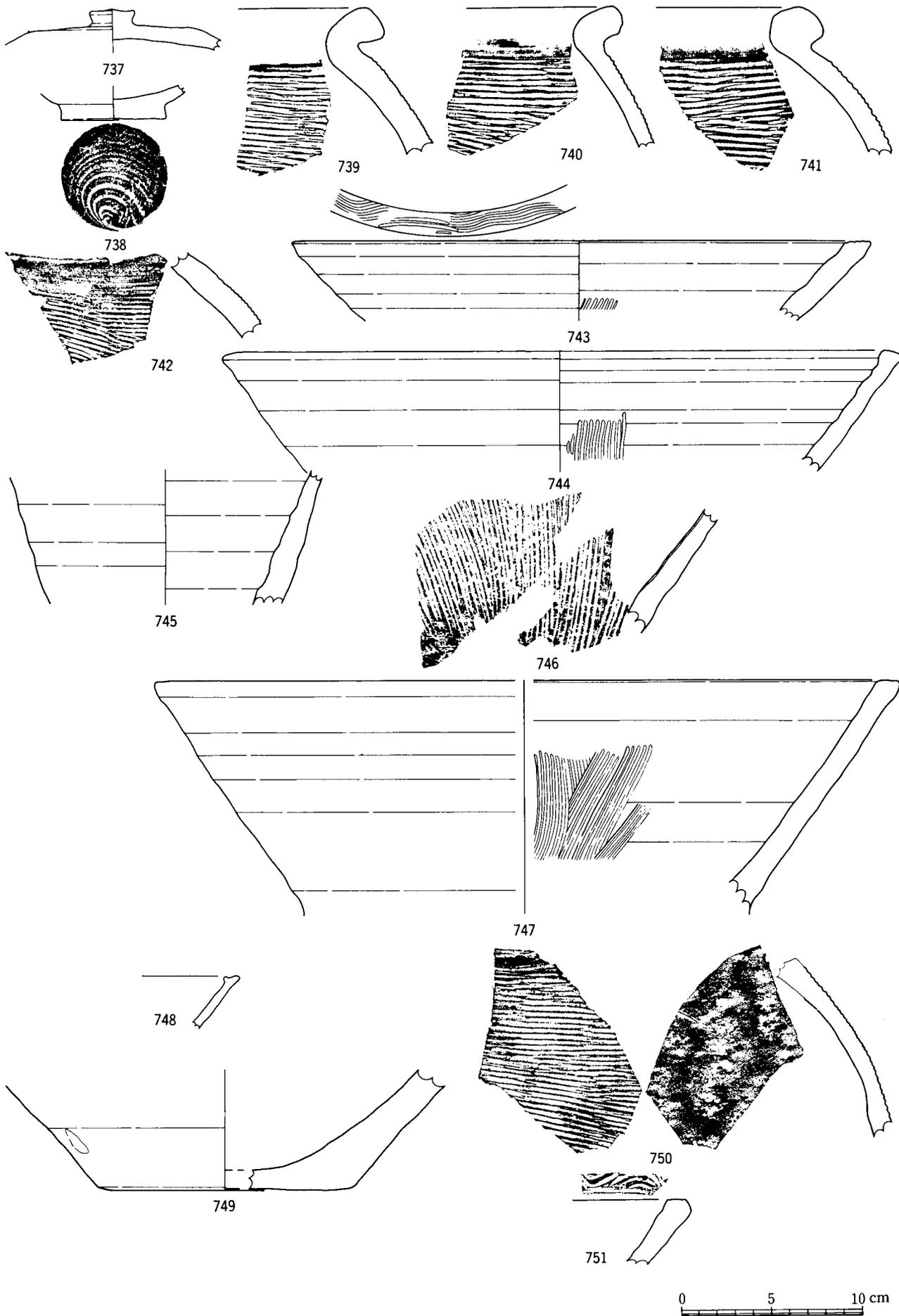
- (1) 鏡 (第115図 696) 青銅鏡の一部で、鏡縁の部分である。鏡面を鑢状のもので切り取った断片である。その鑢も棒状のもので径0.4 cm 前後のものである。鏡は、本来径10.7 cm を有したものである。
- (2) 鐔 (第115図 697) 鉄製のもので、変形しているが、もとは長径2.8 cm、短径1.5 cm を測る長楕円形を呈するものであったろう。
- (3) 小刀 (第115図 703) 細身のもので、茎の部分を欠失する。胴張りの可能性があり全面に緑青がみられる。698 は柄の部分と思われるが文様などはない。銅製であるが、内部に鉄製の茎が残る。
- (4) 鉄鏃 (第115図 704、705) 704は、全長7.8 cm を測るものである。茎の端部を若干欠失する程度でほぼ完形である。茎の断面はほぼ方形となる。705は、全長17.5 cm を測るもので銛と思われるものである。
- (5) 鋏 (第115図 717) 端部を欠失するが、毛抜き鋏と見られるものである。錆化がかなり進んでいる。
- (6) 筭 (第115図 718) 全長17.5 cm を測るもので身の部分に細かい線刻による文様が施される。耳搔き部も良く



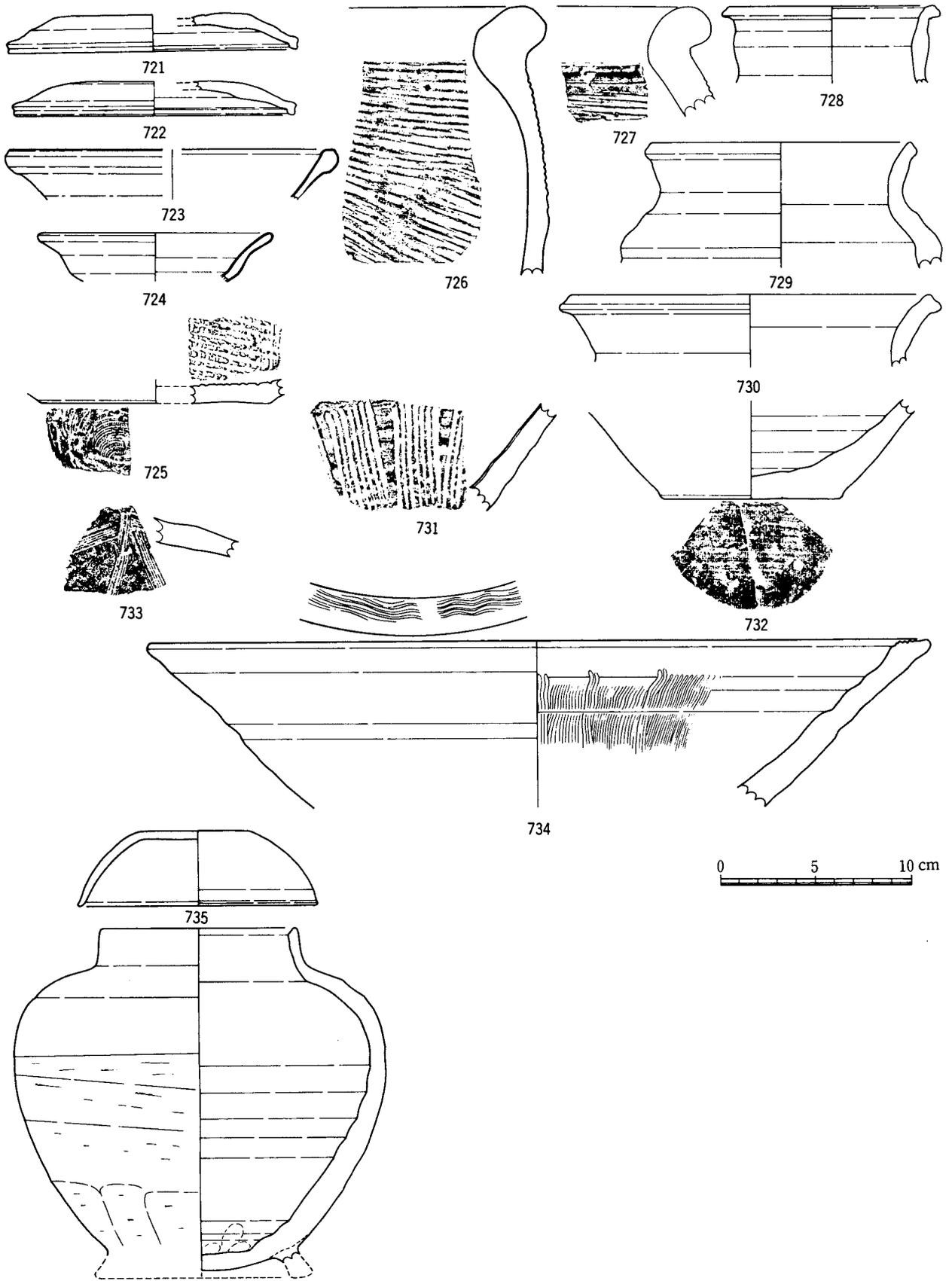
第115図 出土遺物鉄・銅製品(1/3)



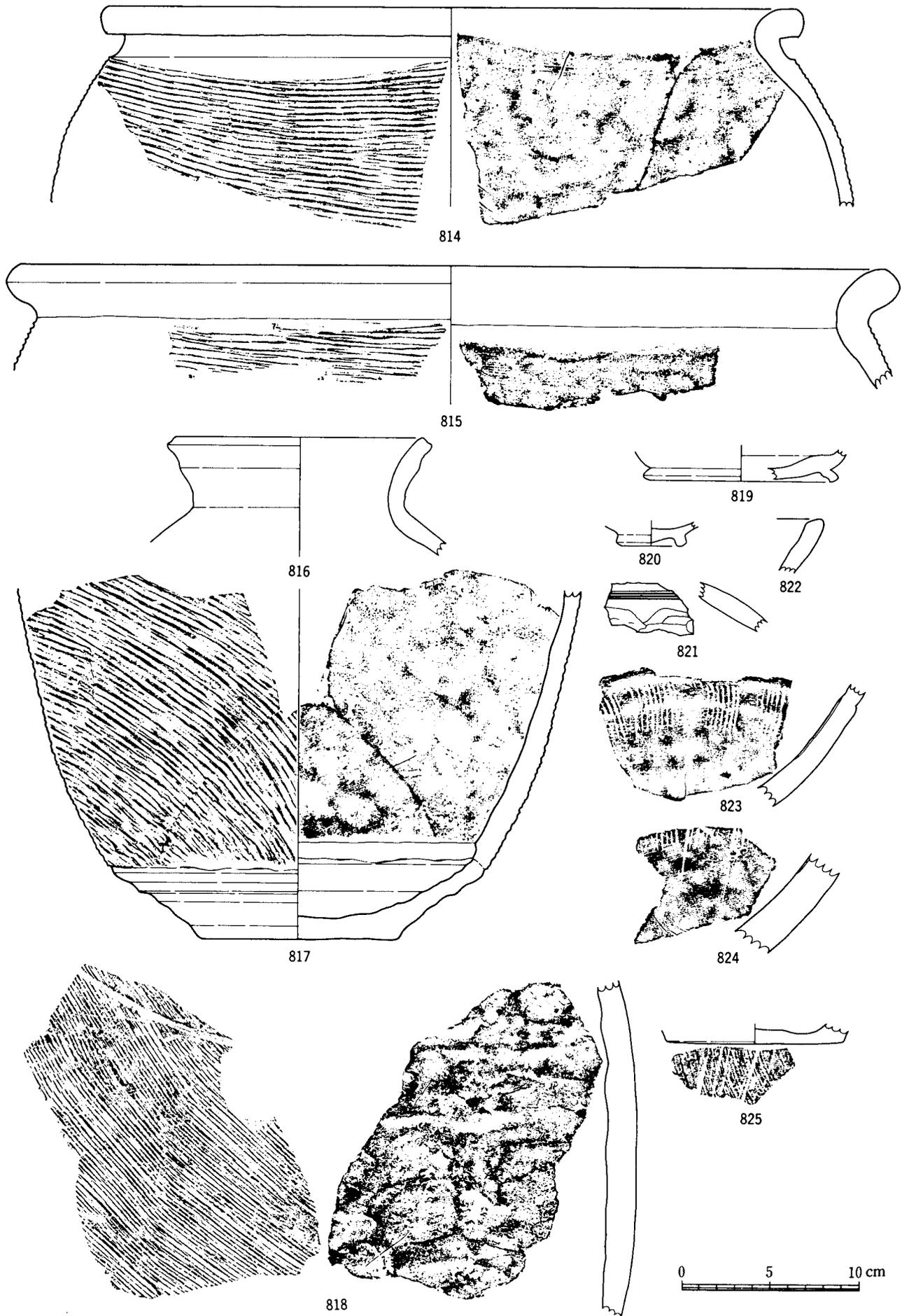
第116図 遺構出土遺物第1号土壇、第2号土壇、1号井戸他(1/3)



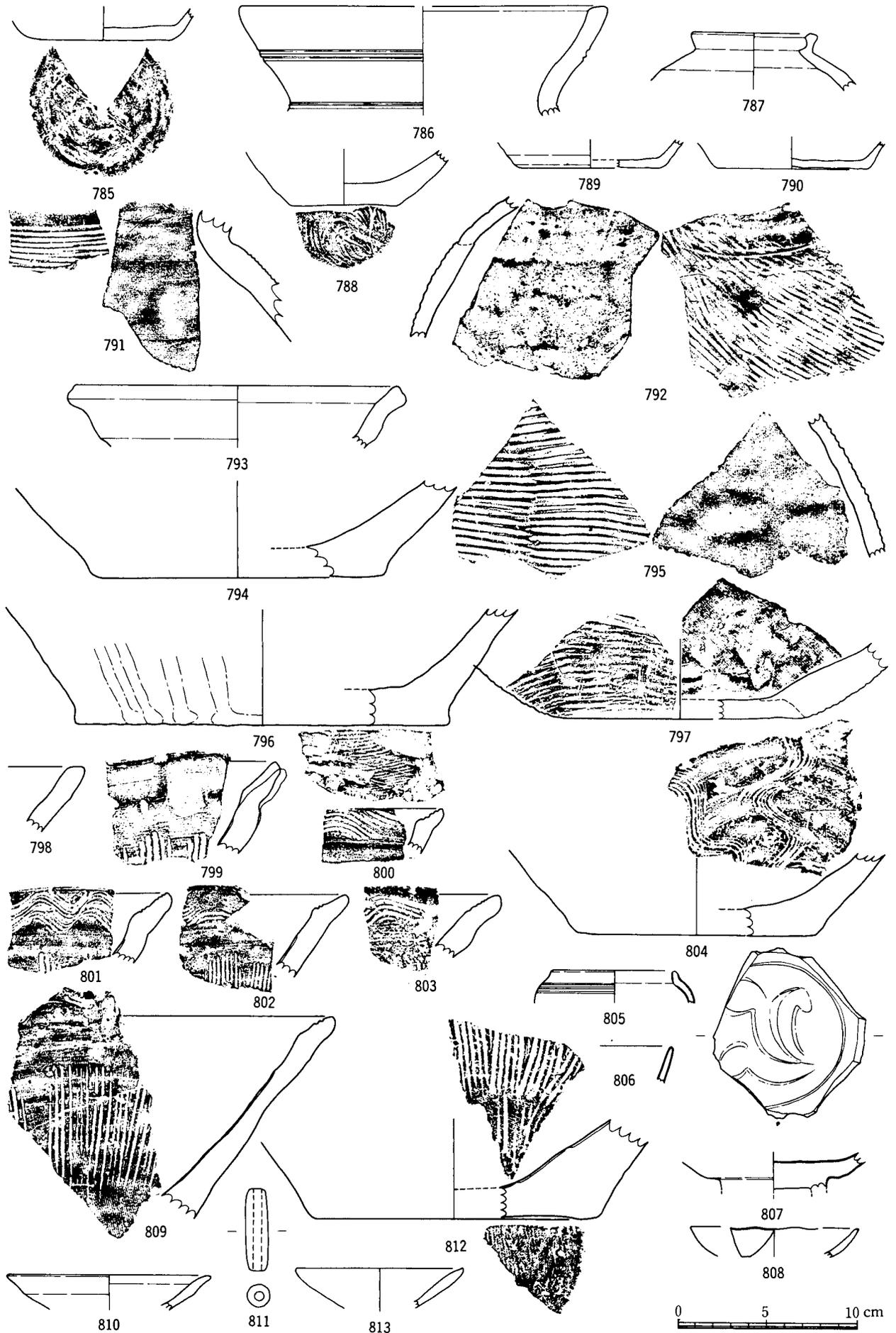
第117図 遺構出土遺物溜樹、第2号配石(1/3)



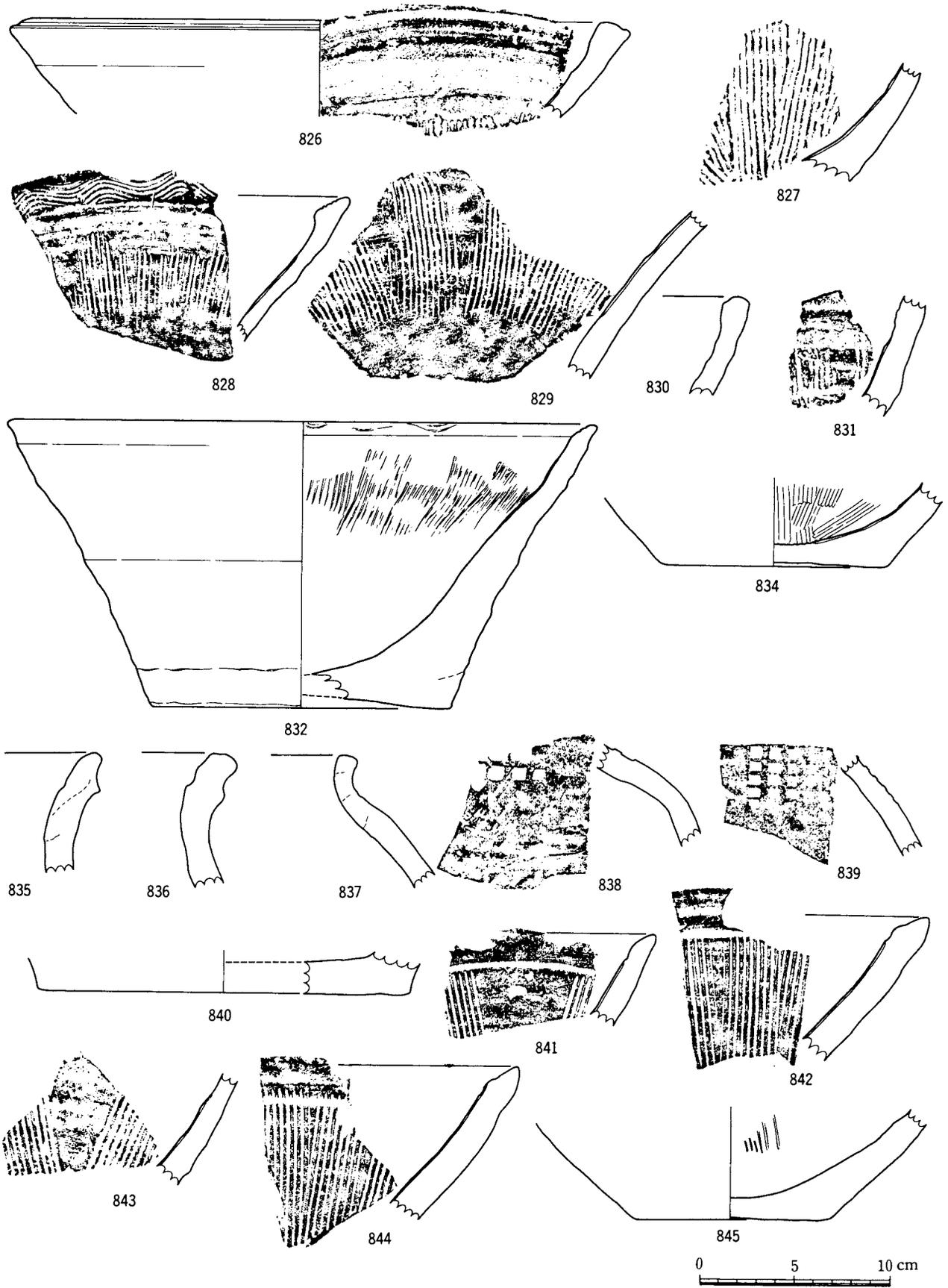
第118図 遺構出土遺物第3号配石、ピット (1/3)



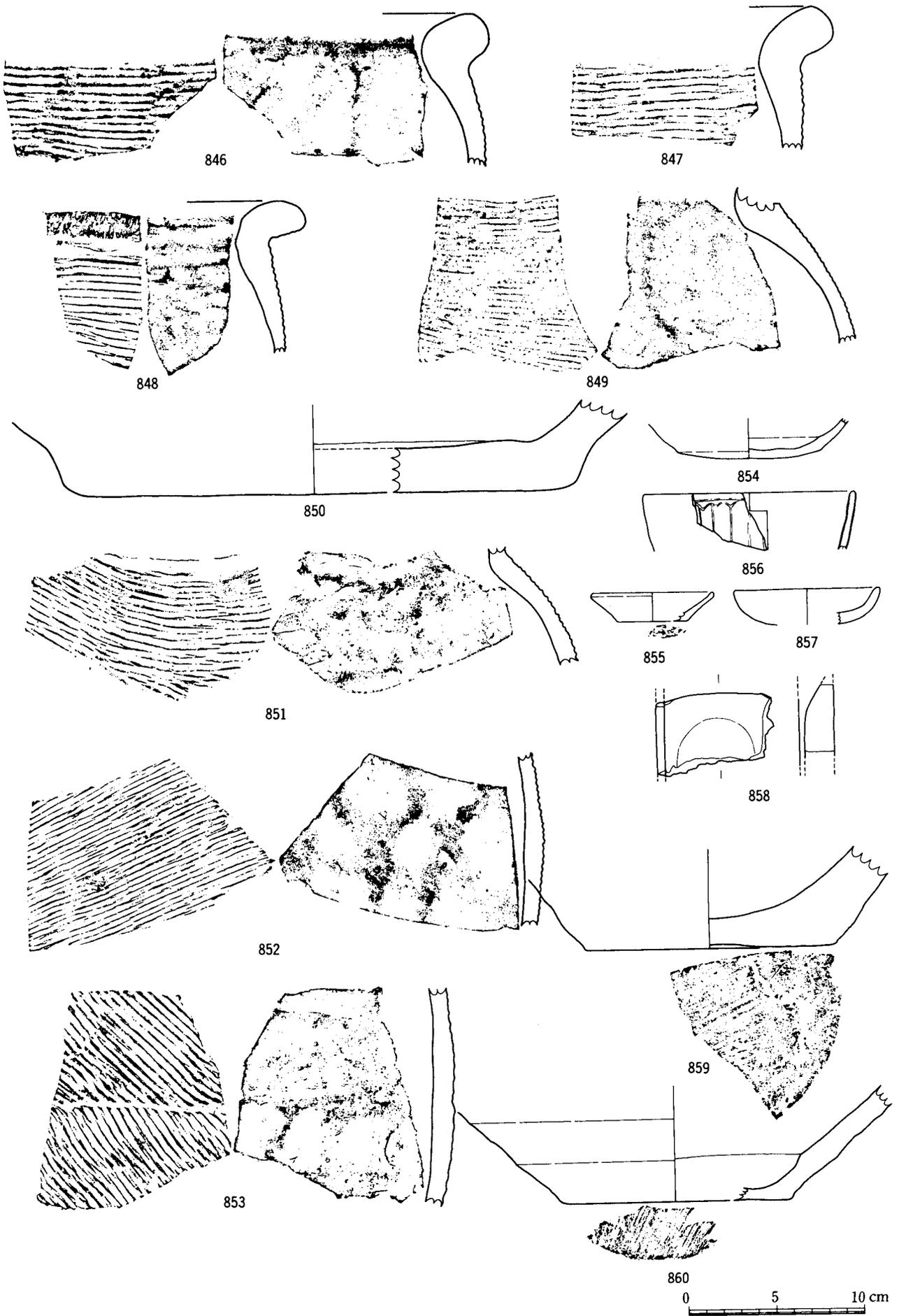
第119図 遺構出土遺物第1号配石排水溝 (1/3)



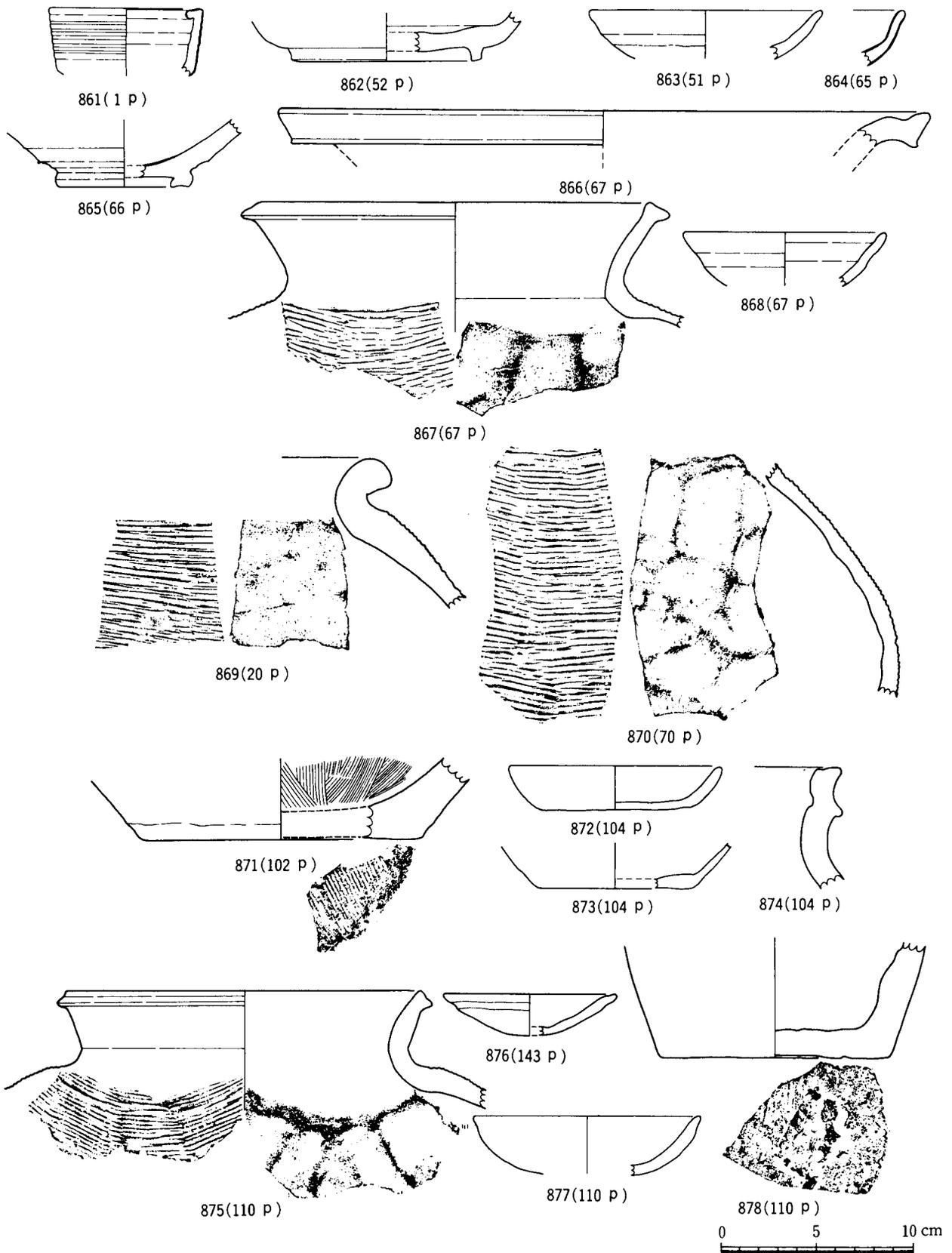
第120図 遺構出土遺物第2号配石排水溝 (1/3)



第121図 遺構出土遺物第1号配石周辺 (1/3)



第122図 遺構出土遺物第1号配石周辺 (1/3)



第123図 遺構出土遺物ピット (1/3)

第4章 出土遺物

残っている。鉄製である。

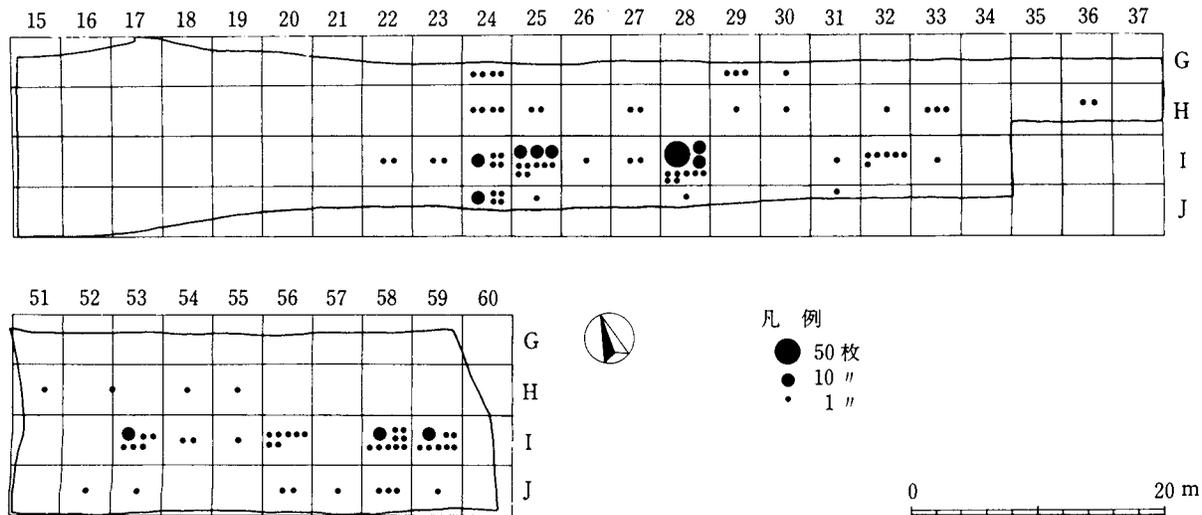
(7) 鍋(第115図719)鍋の底部と思われるものである。一足しか残存しないが、おそらく三足を有する通有のものとなろう。

(8) 釘(第115図706~715)3cmから6cmを測るものが多い。断面方形で頭をたたいてL字状になるものが圧倒的に多い。701のように全長12.2cmを測る大形のものもある。

(9) その他(第115図)700は、一種の釘と思わせるものであるが、頭部でねじり二枚の端部をもつピン状のものであろうか。702は、錠と思われる。716は、全長11.2cmを測るもので針状を呈するものである。断面は丸く、先端は鋭い。鉄製のものである。720は鉄製のものであるが、何の部材かは不明である。

(10) 銅 銭

本遺跡の調査区から、280枚の銅銭を検出した。それらはすべて渡来銭である。第124図はグリッド別の銅銭出土状況で、表土等の不明確なものを23枚を除く257枚(全体の91.8%)を図示したものである。この図と第6図及び第11図の遺構配置図等とを参照すると、ある程度の傾向性が窺える。検出された銅銭は、西側調査区の22グ



第124図 グリッド別銅銭出土状況(1/600)

リッド(以後グリッドはGで表わす)以東で、21G以西では皆無である。これは中世遺跡が河岸段丘上に立地し21G以西は段丘の端に当たり緩やかに傾斜して行くためであろう。比較的検出数の多い位置を5区に分けてみた。第1区は24・25G、第2区が27~29G、第3区が32・33G、第4区が53~56G、第5区が58、59Gとした。これらと遺構とを合わせると第1区には第1・2号配石跡があり、第2号配石からは50枚を検出した。第2区には第3号配石跡と第1号井戸があり、第3号配石跡より77枚、第1号井戸からは3枚を検出した。第3区には第4・5号配石跡があり、第4区と第5区は井戸が集中する位置に当たる。配石跡は建物跡で第2区と第3区、第4区と第5区の間にはそれぞれ路状遺構が南北に走ると考えられる。このように銅銭の出土状況は遺構配置と対応することが判り、配石跡か井戸、またはその周辺からの検出が大半を占めている。

第3表は出土銅銭一覧表である。銭種、書体別でみると判読可能銭268枚は36種51書体が確認でき、初鑄年からみると最古の銭は西暦621(唐・武徳4)年の「開通元寶」で、最新の銭は西暦1461(琉球・尚徳元)年の「世高通寶」である。鑄造国別銭貨の比率をみると、北宋銭が最も高く全体の72.9%(204枚)を占めている。次に明銭の12.1%(34枚)、唐銭が7.9%(22枚)、南宋銭が1.4%(4枚)、金銭が1.1%(3枚)、琉球銭が0.4%(1枚)という順になり、判読不明銭が4.3%(12枚)である。次に銭貨名別の比率が高いものを掲げると、北宋銭の「皇宋通寶」が全体の11.1%(31枚)、明銭の「永樂通寶」が9.6%(27枚)、北宋銭の「熙寧元寶」「元豊通寶」が各々8.6%(24枚)、「元祐通寶」が7.6%(21枚)、唐銭の「開通元寶」が7.6%(21枚)となってい



#### 第4章 出土遺物

る。これら中国銭に混じって琉球の「世高通寶」1枚が検出されている点が注目される。このように北宋銭が多いのは、多額の銅銭を鑄造していた北宋からの大量の輸入によるもので、中世を通じて多く流通していたものと思われる<sup>(註1)</sup>。各地の遺跡からの出土例もほぼ同じ傾向の比率を示しているようである。

これらの銭貨の中で背面などに特徴のみられるものは「開通元寶」(第125図-2)の背上に月文を示すものが、8枚みられる。同じく(第125図-3)背上に「昌」の字を示すものが1枚みられ、これは江蘇省揚州の鑄造であることを示している。「宋通元寶」(第125図-6)の背下に月文が示され、「紹熙元寶」(第127図-57)の背下に「三」の数字が、「嘉定通寶」(第127図-59)の背上下に「四」の数字、「紹定通寶」(第127図-60)の背上に「四」の数字が示されている。これらの数字は鑄造年を示しており、「紹熙元寶」の「三」は紹熙3(1192)年、「嘉定通寶」の「四」は嘉定14(1220)年、「紹定通寶」の「四」は紹定4(1231)年の鑄造であることを示している。また「紹定通寶」の「四」は特に数が少ないといわれている。<sup>(註2)</sup>そして「洪武通寶」(第127図-62)の背右に不明確ではあるが「錢」が示され、これは重さを示すと考えられている。<sup>(註3)</sup>また月文の意味は、いろいろ考えられるが八掛の類いとも考えられているようである。<sup>(註4)</sup>

次に銭貨の中央の孔形が正常の方形でなく、星形状を呈しているものを「孔形加工」銭とした。<sup>(註5)</sup>全部で21枚(全体の7.5%)が確認できた。「皇宋通寶」「元祐通寶」に各5枚、「熙寧元寶」に4枚、「元豐通寶」に3枚、「祥符通寶」「嘉定通寶」に各々1枚である。

銭貨の中で「有孔銭」<sup>(註6)</sup>が4枚みられる。「熙寧元寶」(第127図-66)には、各文字の間に径約2mmの孔が4ヶ所に穿たれている。また「天禧通寶」の「寶」の字の下に、「皇宋通寶」の「宋」の字の右横に、「元豐通寶」の「寶」の字の内にそれぞれ2.5mmの不整形の孔が穿たれている。

これらの他に孔の枠がずれたもの、面、背面または両面が摩滅しているものが数枚みられるが、故意によるものか流通過程での摩滅であるかの判断が難しく表記しなかった。

次に「切銭」<sup>(註7)</sup>と呼ばれているもの、いわゆる銭貨の一部分か約半分をカットしたと考えられるものが7枚ある。部分切銭(第127図67・68)と考えられるものが「寧元寶」と「天禧」の2枚、半切銭(第127図69~73)が「明元寶」「樂通」「皇通」「符通」「聖元」の5枚である。

以上のように銭貨の比率や特徴等を示してきたが、芝田悟氏の「<sup>(註8)</sup>県下出土古銭地名表」によると、大量に銅銭が出土している遺跡の大半は備蓄銭と考えられるものである。近年、加賀・能登における発掘調査で検出銅銭の多い中世の集落遺跡は本遺跡と金沢市普正寺遺跡(193枚出土)<sup>(註9)</sup>、鳥越村鳥越城跡(約200枚出土)<sup>(註10)</sup>が特筆される。鳥越城跡は性格上除くと、集落遺跡では2遺跡に過ぎない。

貨幣経済の発達、14世紀後半にはほぼ全国的な傾向とみられる年貢物の代銭納化が進み、本遺跡周辺でも例外ではなかったであろう。また、「地方における年貢の銭納化にあっては、<sup>(註11)</sup>荘官クラスのもとに現物の年貢が収納され、それを積出港の市場で銭に換えて送る場合がもっとも多い。」といわれている。本遺跡は八ヶ川の河口にあたり、普正寺遺跡は犀川河口に位置し、共に背後に大小の差はあるが平野(生産地及び消費地)を有し、銅銭の検出がほぼ遺跡全域におよぶ点などの共通性がみいだせる。同伴遺物との考察が必要であるが、遺跡の性格を考える上で出土銅銭の果す役割も重要視されよう。

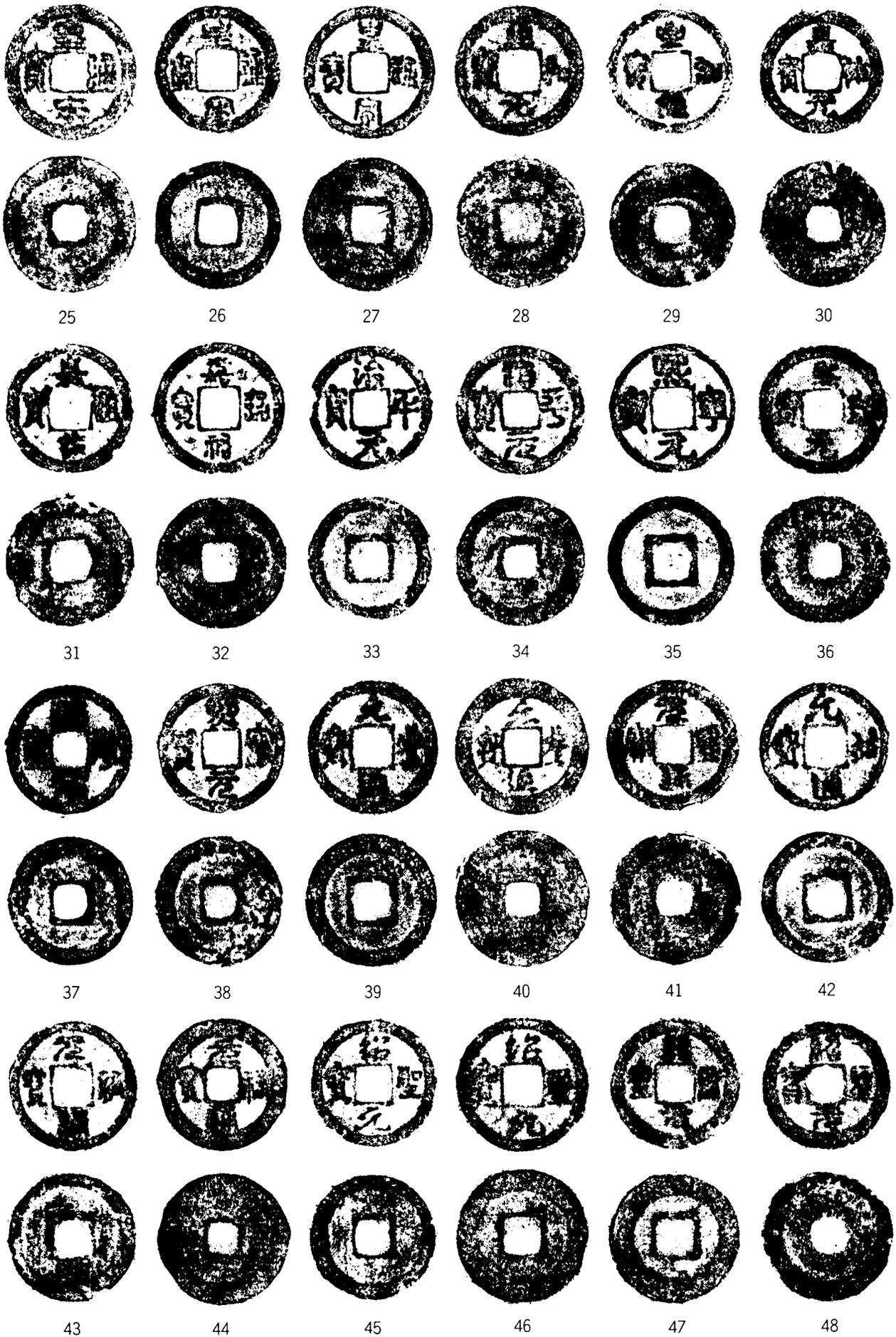
なお本遺跡周辺からの渡来銭の出土は、本遺跡より東方約1.8kmの館遺跡より備蓄銭と考えられる約106貫の銅銭が一括出土している。この他に深見遺跡より「祥符元寶」「紹聖元寶」の北宋銭2枚が表採されている。<sup>(註12)</sup>

註 銅銭の分類、参考資料等を芝田 悟、垣内光次郎両氏より、御教示、提供を賜った。

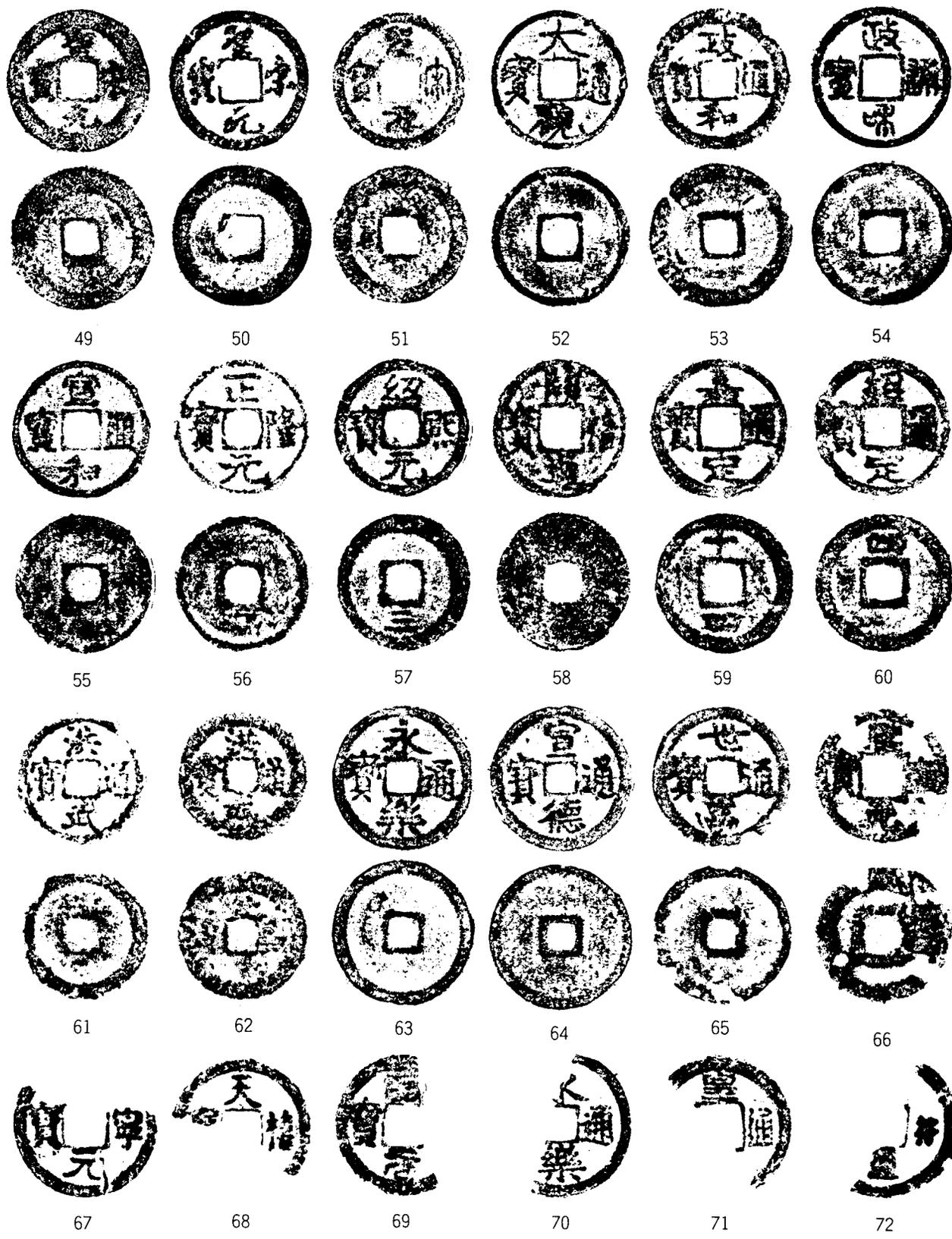
- (1) 豊田 武「中世商業の種々相」『体系日本史叢書13・流通史I』1981年
- (2) 『伝・泉福寺遺跡』新潟県南魚沼郡湯沢町教育委員会 1976年の表6 石白古銭の背文一覧による。
- (3) 檀上 誠「草戸千軒町遺跡出土の古銭」『草戸千軒』No.22 1981年の第2表 古銭背文分類表による。
- (4) 芝田 悟「能登・加賀における古銭(備蓄銭)出土遺跡」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号 1983年
- (5) 芝田 悟氏より御教示を受ける。
- (6) 芝田 悟氏と協議の上、「有孔銭」とした。
- (7) (5)と同じ。
- (8) 芝田 悟『多太神社境内遺跡』多太神社 1984年

- (9) 垣内光次郎、芝田 悟『普正寺遺跡』石川県立埋蔵文化財センター 1984年の検出数161枚に第1次調査(1965年)の31枚、分布調査(1981年)の1枚を集計した数である。
- (10) 西野秀和他『鳥越城跡』「発掘調査概報」鳥越村教育委員会 1979年
- (11) (1)と同じ
- (12) (8)と同じ





第126図 銅銭拓影(3-2)(1/1)



第127圖 銅錢拓影(3-3)(1/1)



第4章 出土遺物

第5表 グリッド別銅銭一覧表(3-2)

番号	出土地	銭貨名	書体	背文	孔形加工	切銭その他	径(cm)	枚数	番号	出土地	銭貨名	書体	背文	孔形加工	切銭その他	径(cm)	枚数		
9	I-28 (3号配石)	淳化元寶	行	無	無		2.5		46	I-28 (3号配石)	紹聖元寶	行	無	無		2.4			
		"	草	"	"	"	"	"			"	"	"	"	"	"	"	2.5	
14		至道元寶	楷	"	"		"		50		聖宋元寶	"	"	"		"			
		"	草	"	"	"	2.4				"	篆	"	"	"	"	2.4		
		咸平元寶	楷	"	"	"	"				"	"	"	"	"	"	"	"	
		祥符元寶	"	"	"	"	2.5				52		大觀通寶	楷	"	"	"	"	2.5
天禧通寶	"	"	"	"	2.4		政和通寶	篆	"	"			"	"	2.4				
19		"	"	"	"	2.6		54		"	"	"	"	"	"	2.5			
		天聖元寶	"	"	"	"	2.4				"	"	"	"	"	"	"	"	
20		"	篆	"	"	"	2.5		59		正隆元寶	楷	"	"	"	"	"		
		明道元寶	"	"	"	"	"				嘉定通寶	"	古	有	"	2.4			
24		景祐元寶	"	"	"	"	"				永樂通寶	"	古	無	無	"	2.5		
		"	"	"	"	"	"				"	"	"	"	"	"	"	"	
25		皇宋通寶	楷	"	"	"	2.4				"	"	"	"	"	"	"		
		"	"	"	"	"	"				"	"	"	"	"	"	"	"	"
26		"	隸	"	有	無	2.5				"	"	"	"	"	"	"		
		"	篆	"	"	"	2.4				"	"	"	"	"	"	"	"	"
28		"	"	"	"	"	"				"	"	"	"	"	"	"		
		"	"	"	"	"	2.5				"	"	"	"	"	"	"	"	"
28		至和元寶	楷	"	"	"	2.4				不明 2	"	"	"	"	2.3 2.4	77		
		嘉祐通寶	篆	"	"	"	"				J-28	元豐通寶	篆	無	無	"	2.5	1	
		熙寧元寶	楷	"	"	"	2.6				G-29	咸平通寶	楷	"	"	"	"		
		"	"	"	"	"	2.4				(1号井戸)	"	"	"	"	"	"	"	3
		"	"	"	"	"	"				不明 1	"	"	"	"	2.4			
		"	"	"	"	"	"				34	H-29	治平元寶	篆	無	無	"	1	
		"	"	"	"	"	2.5				G-30	元祐通寶	行	"	"	"	"	1	
		"	"	"	"	"	2.4				H-30	開通元寶	隸	"	"	"	2.3	1	
		"	篆	"	無	"	"				I-31	"	"	月文	"	"	"	1	
		"	"	"	"	"	"				J-31	"	"	無	"	"	2.4	1	
		"	"	"	"	"	2.3				H-32	明道元寶	篆	"	"	"	2.5	1	
		元豐通寶	行	"	"	"	2.4				11 13	I-32	開通元寶	隸	月文	"	"	2.4	
		"	"	"	"	"	2.5						至道元寶	草	無	"	"	2.5	
		"	"	"	"	"	2.4				景德元寶	楷	"	"	"	"	"		
		"	"	"	"	"	2.4				皇宋通寶	隸	"	"	"	"	"		
		"	"	"	"	"	2.4				元豐通寶	行	"	"	"	"	"	6	
42		元祐通寶	行	"	無	有	"				H-33	開通元寶	隸	"	無	2.4 2.5	3		
		"	"	"	"	"	2.4				不明 2	"	"	"	"	"	"		
44		"	"	"	"	"	"		61	I-33	洪武通寶	楷	無	無	"	2.2	1		
		"	"	"	"	"	"				H-36	永樂通寶	"	"	"	"	2.5	2	
45		"	篆	"	無	"	2.5				"	"	"	"	"	"			
		"	"	"	"	"	2.4				H-51	開通元寶	隸	月文	"	"	"	1	
45		"	"	"	"	"	"		35	J-52	大觀通寶	楷	無	"	"	2.4	1		
		紹聖元寶	行	"	"	"	"				熙寧元寶	"	"	有	"	"	1		

第6表 グリッド別銅銭一覧表(3-3)

番号	出土地	銭貨名	書体	背文	孔形加工	銭その他	径(cm)	枚数	番号	出土地	銭貨名	書体	背文	孔形加工	銭その他	径(cm)	枚数					
17 29 51 55 63	I-53	開通元寶	隸	?	無		2.4	15	64	I-58	宣德通寶	楷	無	無		2.5	19					
		祥符通寶	楷	無	"		2.2		65		世高通寶	"	"	"		2.4						
		"	"	"	"		2.5				不明1	"	"	"		2.3						
		"	"	"	"	有			2.4	J-58	天聖元寶	楷	無	無		2.5	3					
		天禧通寶	"	"	"	無			2.5		天聖□□	篆	"	"	不明			2.3				
		至和元寶	篆	"	"	"			2.4		不明1	"	"	"								
		48 71 60 16 31 38 40 41 43 70	I-53	嘉祐元寶	楷	"	"			2.5	15	73	I-59	天聖元寶	楷	無	無		2.5	17		
				元豐通寶	行	"	"		"					2.4	"	篆	"	"	半切		不明	2.4
				"	行	"	"		"					2.5	□聖元□	楷	"	"	"		2.5	
				紹聖元寶	行	"	"		"					2.4	熙寧元寶	篆	"	"	"		2.3	
				聖宋元寶	篆	"	有			"				"	"	"	"	"	"		2.4	
				宣和通寶	"	"	無			"				"	元豐通寶	"	"	"	"		2.4	
				永樂通寶	楷	"	"		"	2.5				"	元祐通寶	行	"	有	無		2.5	
				"	"	"	"		"	"				"	"	行	"	"	"		"	
				"	"	"	"		"	"				"	"	篆	"	"	"		2.4	
J-53	紹聖元寶			篆	"	"		2.4	1	政和通寶				篆	"	"	"	2.5				
H-54	開通元寶			隸	"	"		"	1	71				皇□通□	隸	"	"	半切	"			
I-54	"			"	?	"		2.3	2	60				I-54	紹定通寶	楷	四	"			2.4	
皇宋通寶	楷			無	"		2.5	永樂通寶							"	無	"		2.5			
"	"			"	"	"		2.4							"	"	"	"	"		"	
H-55	"			篆	"	"		2.4	1	"				"	"	"	"	"	"			
I-55	祥符通寶	楷	"	"		2.5	1	"	"	"	"	"	"	"								
I-56	祥符元寶	"	"	"		"	7	J-59	表土 その他	洪武通寶	楷		不明		不明	1						
	皇宋通寶	"	"	"	2.4	開通元寶				隸	?	無		2.4								
	"	隸	"	有	2.5	"				"	"	"	"	2.5								
	元豐通寶	行	"	無	2.4	"				楷	無	"	"	2.4								
	元祐通寶	"	"	"	"	"				"	"	"	"	"								
	"	"	"	"	"	"				"	"	"	"	"								
	"	"	"	有	2.5	"				"	"	"	"	2.5								
J-56	嘉祐通寶	楷	"	無		2.4	2	皇宋通寶	篆	"	"	"	"									
照寧元寶	篆	"	"	"	"	"		"	"	"	"	"										
J-57	元豐通寶	"	"	"		"	1	"	"	"	"	"	2.4									
3 15 18 27 40 41 43 70	I-58	開通元寶	隸	昌	"		2.3	15	49	I-58	"	"	"	有		2.3						
		祥符通寶	楷	無	"		"				"	"	"	"	"	"	2.5					
		"	"	"	"		2.5				"	"	"	"	"	"	2.4					
		"	"	"	"		2.3				熙寧元寶	"	"	無	"	"	2.5					
		天聖元寶	"	"	"		2.6				元豐通寶	行	"	"	"	"	2.3					
		明道□寶	篆	"	"		2.5				"	篆	"	"	"	有孔	2.4					
		皇宋通寶	"	"	"		"				"	行	"	"	"	"	"					
		"	"	"	有		2.4				元祐通寶	"	"	"	"	"	"					
		元豐通寶	行	"	無		2.6				紹聖元寶	"	"	"	"	"	"					
		"	行	"	"		2.4				聖宋元寶	"	"	"	"	"	"					
		元祐通寶	"	"	"		"				"	"	"	"	"	"	2.5					
		紹聖元寶	"	"	"		"				"	"	"	"	"	"	"					
		□武通寶	楷	"	"		2.3				58	政和通寶	篆	"	"	"	"	"				
		永樂通寶	"	"	"		2.4				開禧通寶	楷	?	"	"	"	2.4					
		"	"	"	"		2.5				洪武通寶	"	?	"	"	"	2.3					
"	"	"	"		"	永樂通寶	"	無	"	"	"	2.5										
合計																	280					

## 第5章 成果と課題

### 第1節 縄文土器について

底部・その他を除くもので、凶化したものは496点である。内分けは、前・中期18点、後期347点、晩期127点で、後期に属するものが全体の70%弱を占める。特に加曾利B<sub>1</sub>式並行期と酒見式期のものが65%弱を占め、晩期の中屋式期以後は、減少する傾向にある。

本項では、堀ノ内II式並行期～酒見式期について、若干の整理を行ないたい。

#### 後期

堀ノ内II式並行期～井口II式期まで、連続した出土がある。堀ノ内II式並行期とした第1群は、出土量のほぼ半数が縦縄文の土器で占められ、区画文・渦巻文を施すものや、縦縄文に沈線文を施すものの出土量は少ない。器形は、口縁がやや外反するか、直口する深鉢形土器、内湾するか直口し、口縁内面がくの字状に内屈する鉢形土器がある。縦縄文に沈線文を施すものは、志賀町火打谷大垣内遺跡、押水町上田うまばち遺跡、七尾市赤浦遺跡等での報告例があり、堀ノ内II式並行期～加曾利B<sub>1</sub>式期に属するものである。

加曾利B<sub>1</sub>式期は、条線文、沈線文、刻み目文で占められ、内分けは、条線文系土器—33%、沈線文系土器—29%、刻み目文を施すものや、注口形土器—共に10%、内面に沈線や帯縄文を施すもの—18%で、条線文・沈線文系土器が主体的である。器形は深鉢形土器、鉢形土器、注口形土器、椀形土器がある。深鉢形土器は、(1)口縁が直口するもの (2)胴部からやや外反するものがあり、条線文、S字状沈線文、蛇行状文が施される。条線文は、弧線、平行線を施すもので、本江遺跡、三仏生遺跡での出土がある。鉢形土器は、波状口縁・平口縁で、S字状沈線を施すものは、口縁が外反する器形をとる。口縁内面に帯縄文、平行沈線、刻み目を施すものは、(1)口縁が直口するもの (2)やや外反ぎみのもの (3)直角状に内屈するものがあり、刻み目は口唇部に施される。内面に沈線をもつ鉢形土器は、本江遺跡、三仏生遺跡、滑川市常盤町遺跡での出土がある。S字状沈線文系土器は、縦縄文で、(1)平行沈線間に条線を施し、連結するもの (2)縄文地に平行沈線を施し、切るものがある。斜状文・帯縄文・条線文・無文地のものは、沈線を切る。S字状沈線文は、加賀市横北遺跡、押水町うまばち遺跡での出土があり、比較すると、横北遺跡では、(1)無文地に平行沈線を施し、切るもの (2)帯縄文に平行沈線を施し、切るものがある。うまばち遺跡では、無文地に平行沈線を施し、切るものがあり、いずれも、縄文、条線文を欠いている。注口形土器は、(1)球形状胴部で、弧線文による波状区画を連結させた文様を施すもの (2)直口状に外反し、内面に平行沈線と刻みを施すもの (3)沈線による円文を施すもの (4)条線による平行線と刻み目文を施すものがあり、他遺跡と比較すると、横北遺跡、三仏生遺跡では、弧線文による波状区画を施すもの、本江遺跡では、S字状沈線と円文、刻み目文を施すものが出土している。

酒見式期では、波状沈線 (1類)、帯縄文 (2～10・19類)、刻み目文 (11・16類)、羽状縄文 (12類)、沈線内列点文 (14類)、弧線文 (15類)、隆帯 (17類)、末端刺突文 (18・24類)、注口形土器 (23類) に分けられ、帯縄文系土器が主体を占める。この帯縄文系土器は酒見シンドウ遺跡でも主体的で、富来町史資料編酒見シンドウ遺跡第1類A類・B類、本江遺跡A型とされているものである。酒見シンドウ遺跡では、口縁部に帯縄文を施すものは、(1)口縁がほぼ直口状のもの (2)やや外反するものがあり、胴部に施すものは、くの字状に内湾するものがある。縦縄文に平行沈線を施すものは、やや外反する。縦位の短線で切るものは、(3)口縁部と胴部に2段の帯縄文を施し、胴部下半では、縄文地に縦位の短線、口縁内面に横位の短線を施すもの、帯縄文に平行沈線を施すものは、(4)口縁内面に3本の平行沈線を施すもの、帯縄文を弧線で切るもので、(5)内面無文とするもの、幅のせ

まい縦位の短線を施すものがあり、器形は、球形状胴部の深鉢形土器で、口縁はやや外反ぎみである。道下元町遺跡では、(1)帯縄文に平行沈線を施すもの (2)口縁部・胴部に施すもの (3)刻み目文を伴うもの (4)胴部に弧線を施すものがある。県内では、横北遺跡に、深鉢形土器で口縁内面に、横位の沈線の短線を施すものがある。

弧線文系土器は、道下元町遺跡では深鉢形土器で、(1)短線で帯縄文と連結するもの (2)向かい合う弧線文を連結するもの (3)弧線区画外を磨消すものがあり、器形は、(1)口縁が直口するもの (2)やや外反するもの (3)胴部が球形状に湾曲するもの (4)くの字状に屈折するものがある。酒見シンドウ遺跡では、(1)縦縄文で、弧線内に斜位の沈線を施すもの (2)平行沈線を施し、弧線内を磨消すもの (3)刻み目を伴う隆帯と、弧線交点に小点を施すもの (4)列点を施すものと、小単位の弧線文を施すもので、(5)縄文地のものと (6)無文地のものがある。器形は深鉢形土器で、(1)波状口縁で胴部からくびれるもの、平口縁で(2)口縁内面に段をもつもの (3)やや内湾するものと、口縁くの字状に内屈する鉢形土器がある。

末端刺突文系土器は、道下元町遺跡では弧線先端、酒見シンドウ遺跡では、平行沈線と弧線先端に施される。いずれも深鉢形土器で、(1)口縁くの字状に屈折するもの (2)やや内湾するもの (3)ほぼ直口状となるものがあり、弧線文、末端刺突文系土器は、元住吉山Ⅰ式に類似するものである。

隆帯を施すものは、道下元町遺跡では平口縁・波状口縁の深鉢形土器があり、平口縁のものは、(1)やや外反し、刺突を伴うS字状隆帯を施すもの (2)口縁くの字状に内湾し、口唇部尖頭状で、刻みを施す縦位隆帯を施すもの (3)くの字状に内湾し、口縁肥厚するものがある。酒見シンドウ遺跡では、平口縁・波状口縁があり、平口縁で弧状隆帯を施すものは、(1)球形状胴部で帯縄文を施すもの (2)口縁くの字状に外反し、斜縄文に平行沈線を施すもの、隆帯が突起するもので、(3)口縁くの字状に内屈し、胴部でくびれるもの (4)断面くの字状の隆帯で、口縁外反し、平行沈線と刻み目文、内面にくぼみをもつものがある。縦位の隆帯を施すものは、(1)口縁くの字状に内屈し、2本の平行沈線を施すもの (2)やや外傾し、縄文地に平行沈線と列点文を施すもの (3)口縁部に平行沈線、くびれ部に縄文と弧線を施すもの (4)隆帯に縦位の刻み目を施すもの (5)口縁部に連続して施し、やや内湾するもの (6)くの字状に内湾するものがある。波状口縁のものは、L字状隆帯と縦位の隆帯を施すものがあり、L字状隆帯は口縁くの字状に内湾するもので、(1)無文のもの (2)縄文のものがある。弧状隆帯を施し、内湾するものは、(1)口縁部に帯縄文を施すもの (2)縦長の隆帯で、刻み目を施すものがある。縦位の隆帯を施し内湾するものは、(1)列点を施すもの (2)刻み目を施すものがある。県内では、野々市町御経塚遺跡に、連続した縦位隆帯を施す鉢形土器が出土している。

羽状縄文系土器は、道下元町遺跡では横位で、平口縁の鉢形土器は、(1)球形状胴部で、刻み目文・曲沈線を伴うもの (2)内湾して平行沈線を施し、口縁部を磨消すもの (3)外反し、縄文地に平行沈線を施すもの (4)やや外反し、沈線を施さないものがある。波状口縁の深鉢形土器は、キャリパー状に湾曲し、刻み目文・曲沈線を伴う。酒見シンドウ遺跡では、横位と縦位のものがあり、鉢形土器は横位で、(1)やや外反し、平行沈線を伴うもの (2)列点文を施すもの (3)やや外反し、平行沈線間に列点文を施すものがある。縦位のものは、(1)やや外反するもの (2)くの字状に外反し、平行沈線・曲沈線間に、刻み目を施すものがある。県内では、御経塚遺跡の鉢形土器に、横位の羽状と曲沈線、横北遺跡第Ⅲ群に、外反・内湾する鉢形土器で、(1)横位の羽状と平行沈線 (2)曲沈線と縦位の羽状 (3)湾曲した胴部に、曲沈線と縦位の羽状 (4)刻み目文を施すものがある。深鉢形土器は、波状口縁でキャリパー状のものがあり、横位の羽状を施す。縦位のもの、刻み目文・曲沈線を伴うものは、加曾利 B<sub>2</sub> 並行期とされている。

注口形土器は、道下元町遺跡では、(1)平行沈線と弧線文を施すもの (2)貝殻擬縄文を施すもの (3)沈線内に連続刺突文を施すもの (4)半円形または円形の隆帯を施し、細かい刻み目文を施すものがあり、酒見シンドウ遺跡では、(1)内傾し、口縁部に刻み目文、胴部に弧線文を施すもの (2)内湾し、縄文地に平行沈線と縦位の沈線を施すもの (3)内湾し、列点文を施すもの (4)口縁直角状で、弧線末端に刺突文を施すもの、貝殻擬縄文を施すもので、(5)内傾し、弧線末端刺突文・刻み目文を施すもの (6)口唇部に刻み目文、胴部に弧線文と単位をもつ擬縄文を施すもの (7)内湾し、沈線内連続刺突文と、刻みを伴う隆帯を施すもの。(8)平行沈線と斜状沈線で、三角形区

画文を施し、沈線内連続刺突文を施すものがある。

道下元町遺跡・酒見シンドウ遺跡の沈線内連続刺突文系土器や、酒見シンドウ遺跡の貝殻擬縄文系土器は、一乗寺K式と並行関係にある。県内では、野々市町御経塚遺跡に、算盤形で貝殻擬縄文を施すもの、押水町<sup>ツツ</sup>上田うまばち遺跡に、内傾し、刻み目文と貝殻擬縄文を施すものがあり、富山県では井口遺跡第1群2類に、貝殻擬縄文、沈線内連続刺突文を施すものがある。

刻み目文を施すものは、酒見シンドウ遺跡では鉢形土器があり、(1)外反する器形で、口縁くの字状に内屈し、平行沈線と弧線間に施すもの (2)内傾し、平行沈線を伴う二段の刻み目文の単位をもつもの (3)内湾し、一段の刻み目文を施すもの (4)球形状胴部で、口縁部に二段の刻み目文を施すものがある。県内では、横北遺跡の鉢形土器に、(1)球形状胴部で口縁部に施すもの (2)内湾し、口縁部に施すもの (3)外反し、口縁部に施すものがあり、野々市町御経塚遺跡に、外反する鉢形土器で、内・外面に平行沈線と刻み目文を施すものがある。いずれも、加曾利 B<sub>2</sub> 並行期におかれるものである。

また、酒見シンドウ遺跡第8群とした、平行沈線と沈線の短線を施す鉢形土器は、(1)波状口縁でやや内湾するもの (2)外反するものがあり、県内では、類例をみないものである。

以上、堀ノ内II式並行期～酒見式期について、まとめてみた。

## 参 考 文 献

- 1957 『三仏生』長岡市立科学博物館  
1960 『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会  
1963 『新潟県佐渡三宮貝塚の研究』立教大学博物館学講座研究報告2  
1964 『石川県押野村史』「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」高堀勝喜  
1966 『大境』第2号「東砺波郡井口遺跡出土遺物の紹介」小島俊彰  
1967 『大境』第3号「北陸の縄文時代晩期について」上崎政子  
1969 『石川考古学研究会会誌』第12号「金沢市松村縄文遺跡概報」米沢義直  
1971 『考古学雑誌』第56巻4号「石川県下野遺跡の研究」吉岡康暢  
1974 『志賀町史』第一巻資料編・第3章 志賀町の考古資料 石川県羽咋郡志賀町役場  
九・「火打谷大垣内遺跡」市堀藤夫  
1974 『富来町史』資料編・第一節 縄文時代の遺跡 石川県羽咋郡富来町役場  
一 「福浦ヘラソ遺跡」杉島孝博  
十 「酒見シンドウ遺跡」高堀勝喜・市堀藤夫  
1976 『大境』第6号「上市町眼目新丸山A遺跡」酒井重洋  
1977 『赤浦遺跡』七尾市教育委員会  
1977 『松任市長竹遺跡発掘調査報告』石川県教育委員会  
1977 『加賀市横北遺跡発掘調査報告書』石川県教育委員会  
1978 『上山田貝塚』宇ノ気町教育委員会・石川考古学研究会  
1979 『滑川市史』考古資料編「本江遺跡」小島俊彰  
1979 『京都大学構内遺跡調査年報』泉拓良 京都大学埋蔵文化財センター  
1979 『倉敷考古館研究集報 第14号』「広江・浜遺跡」間壁忠彦  
1981 『金沢市中屋遺跡』金沢市教育委員会  
1981 『内浦町史』第1巻資料編 石川県珠洲郡内浦町役場  
第2節 縄文文化  
二・新保遺跡 高堀勝喜・平口哲夫  
四・松波農場遺跡 高堀勝喜・平口哲夫

1982『能都町史』第三卷通史編 石川県能都町役場

第2章 原始時代の遺跡・遺物

五・波並西の上遺跡 高堀勝喜

1983『北陸の考古学』

「羽咋郡志賀町火打谷大垣内遺跡出土土器再見

いわゆる気屋式土器概観」 米沢義光 石川考古学研究会

1983『鹿島町徳前C遺跡調査報告』IV 石川県立埋蔵文化財センター

1983『野々市町御経塚遺跡』野々市町教育委員会

1983『押水町上田うまばち遺跡』石川県羽咋郡押水町教育委員会・石川考古学研究会調査団

1984『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器II「近畿地方の土器」泉 拓良











## 第3節 奈良・平安時代以降の集落について

奈良時代以前についても若干の遺物が出土している。須恵器に関しては、非常に少ないのであるが、土師器ではやや多いと言える。該期の遺構については皆無に近い。が遺物の出土状況、遺物の項でも述べたように、I-31グリッドより集中して出土した土師器甕類に見られる二次的な加熱現象は集落内における何かしらの生活行為を暗示するものと考えられる。これら甕類に残された加熱部位を見てみると、普通の煮沸などによって生じたものでないことは明白である。土器廃棄後に火災に遭ったと言うような広い範囲にわたって見られるものでもなく、火を伴う小範囲の何かしらの祭祀的行為によるものと考えておきたい。また、須恵器では七世紀後半代に属するものと見られる坏蓋が一点検出されている。細片であるので不明の点が多いのであるが、低平な返しを有するものである。ところで、古墳時代の遺跡の皆無に近い門前町にあっては、今後の調査研究に委ねざるを得ない。今回の調査地点は、砂丘端部に近く、比較的、湧水位の高いことなども考えあわせると南側に延びて遺存している可能性が高い。また、第3章第2節でも述べたように、河川の氾濫原となっておりやや南側の高位に存する確率は極めて高い。河川（ハケ川）の北進につれて奈良末から平安時代前葉にかけては、かなり活発な生活活動が伺えるようになってくる。それらは、遺物の上からと若干の遺構より知ることができる。日常の食生活の器としての須恵器、土師器の他にかなりの点数の墨書土器の出土が特記される。また、ピットに埋納された薬壺(736)がある。これは、蔵骨器として使用された可能性が高い。また、伴出遺物はなかったが、第2号井戸も該期の所産と考えられる。墨書土器では、判読可能なものでは「𠄎」が5点以上、「𠄎」が1点ある。墨書土器については、従来から多くの説が発表されている。それらは、所有者、所属名、地名、用途名、吉祥句、数量などを表すものが多いと言われている。本遺跡出土のものは、全て一字のみの墨書であるために、なかなか理解が困難である。同一字句の墨書を多量に出土する遺跡では、金沢市戸水C遺跡の「𠄎」、羽咋市寺家遺跡の「𠄎」（記号の可能性も考えられる）と「𠄎」、小松市漆町遺跡の「𠄎」、小松市高堂遺跡の「𠄎」、「𠄎」などがあげられる。これらの遺跡に共通する点は、郡衙級の集落であると言える。本遺跡においては、建造物の検出が明確になされたものではないが、古墳時代と同様に調査地点の南方に大集落の存在する可能性が考えられる。本遺跡出土の「𠄎」が数量を表わすのか、集落内における単なる記号的字句であるのか、吉祥句であるのか、人名あるいは地名の一字を表わしているのか定かに判定はできない。「𠄎」についても同様のことが言える。該期の遺物では、他に灰釉陶器の検出があげられる。すべて破片であるが、門前町においては初例のものである。今後、能登半島部での調査により出土する遺跡の増加は推定されるが、本遺跡を考えるうえで考慮すべきものと言える。また、土錘についても、そのほとんどが該期に属するものと思われるが、本集落の生活基盤の一端を暗示しているものと思われる。平安時代中～後葉にかけての遺物は、調査区域においては皆無に近い、近くを流れるハケ川本流あるいは、鉄川の氾濫により完全に本調査区外に移動したものと考えられる。これらのことは、第3章第2節に述べたとおり、中世に入ってから集落が氾濫原上を利用して構築されていることから伺える。12世紀から13世紀にかけても、まだ安定した土地ではなく、たびたび氾濫が繰り返されたものであろう。しかしながら、少しずつであるが本期の遺物が検出され、ようやく中世に向けての集落の開拓が始められたことが想像される。この時期の遺物では、土師質土器の坏(100～104)が数点と珠洲の甕、鉢(153～155、252)が数点と白磁の碗、皿(548～550)がともに数点あるのみである。これらの出土状況を見てみると調査区内で、一ヶ所に集中するのではなく散発的なものである。また、これらの遺物を伴う遺構も検出されておらず周辺部（南方）からの流れ込みによるものと考えられる。以上のようなことから、この時期においても、いまだ不安定な土地状況であったことが伺える。第83図の鞆の羽口なども、ほぼ本期に属するものと推定されるが、伴出遺物がなく確証はない。しかし、鞆の羽口とあわせて鉦滓の出土などから集落内で小鍛冶をしていたことも伺える。遺構との関係は明確ではないが、鞆の羽口および鉦滓の集中して検出したのは、I-32グリッド周辺と第2号配水溝からと、I-23グリッドからも数点検出した。なかでも、I-32グリッド周辺のI-31、I-30、H-32、H-31、H-30にかけて振りをもって散布する。これらは、第1遺構面および第2遺構面との関係が十分に考えられるところである。

珠洲の第Ⅲ期（約13世紀末葉から14世紀前半）になると珠洲で見るとかぎりにおいても、かなりの数量のものが出土するようになってくる。このことは、氾濫源である八ヶ川が北上したか、その支流の鉄川の流路が変動したか、人工による防災事業が実施されたかの三点が考えられるが、自分では後者と考えたい。第2遺構面として把えた遺構群は、そのほとんどが珠洲の第Ⅳ期（馬縹窯）から第Ⅴ期（大島窯）にかけての所産と考えられる。それらは、第1号土壇の遺物（752～758）、第2号土壇（759～764）、第1号井戸（765～772）、ピット143（876）などの伴出遺物からも伺える。ただ、本遺跡は前述したように4ないし5面の遺構面をもつことから遺構間の切りあい、包含層の移動などにより、遺物相互の混在の可能性は大きくある。本期に属する遺構では、第1号井戸、溜枿、土壘、土壇6基以上と柱痕および多数の柱穴がある。調査区域がちょうど、集落の北端にあたっており、集落構造については不明の点が多い。土壘、溜枿についても、調査区域の南側で終了しており、上述のことが確かめられる。本期においても、前期同様に集落の主要部分は、南側未調査区に良好に遺存するものと思われる。

次いで、第1遺構面にみられる遺構群は、前期にもまして整備される時期である。出土遺物量から見ても、ほとんど前期より間断なく整備され続けたことが伺える。本遺構群の大半は、珠洲第Ⅳ期から同Ⅴ期（西方寺窯）にかけてのものである。本期における主要な遺構は、7基以上を数える配石址、両側に側溝（第1号配石溝、第2号配石溝）を有する幹線道路と掘立柱建物の1号建物などである。共伴遺物としては、第2号配石址の737～747、第3号配石址の721～734、第1号配石溝の814～825、第2号配石溝の785～813などがある。遺構のうちから最も注目すべきものに、西調査区のはほぼ中央部を南北に貫通する両側に配石溝を有する道路がある。その道路敷幅員約6mを測るものである。また、この両側に検出された多くの配石址も注目に値する。これらの性格についても、墳墓跡、住居跡との考えもなされるのであるが今後の類例を待ちたい。集落の中央部を貫通する幹線道路は南北に貫通すると想定すれば、北端はいずれかの地点で八ヶ川左岸の低湿地に至り、南端は、現道下集落の中核部、現諸岡比古神社に至る。これらのことを考えあわせると諸岡比古神社を中心として発達した門前町的性格が濃厚となってくる。がしかし、現時点での諸岡比古神社の歴史的な性格については、今一つ判然としない点が多い。これらに関して、後に少しく考えて見ることとする。一方、東調査区で検出された9基の石組の井戸、石敷の道路、石垣もまた注目される。が伴出遺物が少なく不明の点が多いのであるが、東調査区でも2面の遺構面を確認しており、それぞれ、おおまかに言って西調査区の第1遺構面、第2遺構面に対応するものと思われる。ほぼ南北方向に検出された石敷道路、東西方向に検出された石垣なども西調査区の南北幹線道路ともあわせて本集落を考えるうえで主要なこととなる。因みに、道路については現宝泉寺方向に南進するものと思われる。9基の井戸を検出しているが、建物との関係がつかめなく集落構造については不明の点が多い。

14世紀後半代から16世紀初頭にかけて、西調査区、東調査区の集落は全盛期を迎えるのであるが、これら集落の整備にあたっては、前代に集落を幾度となく襲ったであろう洪水が運んだ河原石を多く使用している。これらの点については、県内の中世集落と大きく違うところである。9基の石組の井戸、石敷の道路、土壘（石壘）、7基以上の配石跡などすべてがそうである。本集落は、永年の怨敵の産物、河原石を巧みに再利用し、整備、完成されたと言える。がしかし、この完成された集落も再び、砂の猛威に埋ずもれることとなる。日本海より吹き寄せる西風に伴って飛来する砂による砂丘の発達である。16世紀中葉からはじまり、16世紀後半には完全に砂丘下と化する。人々は、永い洪水の歴史には、打ち勝って来たのであるが、新たな砂の飛来には、うつすべもなかったと言える。これら西調査区と東調査区においては、やや集落の趣きを異にしている。それは、西調査区では南北に貫通する幹線道路と、その両側に整然と配置された配石跡と、東調査区においては石敷の道路と多数の石組の井戸群である。東側集落では、配石跡に見られるように、何か特殊な建造物跡が想像されるのに対して、両側調査区では建造物跡が検出されなかったとは言え普通の集落が存在した可能性が高い。これらの集落は、単に鉄川宮、宝泉寺のみにかかわるものではないであろう。これらのことともあわせて、曹洞宗大本山諸獄山総持寺の隆盛衰退とも無関係ではなかったものと思われる。教宣の拡大とともに、人々の往来も激しくなったものと思われる。本集落は、八ヶ川河口に発達した港町性格と門前町性格をあわせ持っていたものと考えられる。隔地間を海上輸送する港としての適地と言える。北は、輪島市の親之港、南は富来福良湊の中間地点にあつて外浦

海運の重要拠点の一つであったことは想像にかたくはない。中世における港の立地を考えると他地域の遺跡においても、それぞれ共通点がある。調査された遺跡では、加賀市田尻川河口の小塩辻タンジリ遺跡、金沢市犀川河口の普正寺遺跡、同大野川河口の戸水C遺跡、羽咋市羽咋川河口の寺家遺跡、輪島市町野川河口の西時国遺跡、穴水町小又川河口に発達した西川島遺跡群、七尾市礪川河口の檜物町遺跡などがある。それぞれ集落の内容については、個々に差違が認められるが、いずれの遺跡でも内陸に立地する集落への物資の供給基地的な側面が伺えることである。

本遺跡出土の遺物の特色を記すと最も量の多いのは、陶磁器類の中では、珠洲が圧倒的優位を占める。器種別では、鉢、甕、壺の順となる。鉢および、破片となった以後の甕底内面に観察される異常なまでの磨滅痕は、食生活の一端を伺い知ることができると思われる。また、接合痕に見られる漆もまた多い。これらは、国産陶磁器、輸入陶磁器の別なく多く見られる。以上の事柄は、集落内での生活様式あるいは器物の供給の緩急などによるものと考えられる。一方、輸入陶磁器類の中では中国製品の他に、朝鮮製の陶磁器が見られることである。それは、李朝の碗、壺である。量的には多くはないが、今後の流通史を考えるうえで重要と思われる。これらのことは、半島部における特殊性なのか今後の類例を待ってあらためて考えて見たいことである。因に、朝鮮製陶磁器を出土する遺跡は増えているとは言え、羽咋市寺家遺跡（象嵌）、志賀町中村畑遺跡（象嵌）、金沢市桂遺跡（碗）の三遺跡のみである。今後、同種遺跡の出土遺物の検討作業のうちで若干の新知見が得られる可能性がある。

その他の出土遺物においては、石製遺物の臼、硯、砥石、石錘などがある。なかでも、7個体を数える硯は、かなりの識字層の存在を裏付けているものと思われる。また、木製遺物についても、地下水位の高いことから良好なる遺存状況を示している。その大半は遺構群同様に未調査区に遺存することとなる。数10本にのぼる柱痕の実測、材質などの検討を本報告に掲載することができなかった。他の機会に譲ずることとしてお詫びする。

本集落の特色については、おのおの各時期について記述してきたつもりであるが、佃 和雄氏の「諸岡村史」によれば、永和三年（1377年）の宝泉寺の田畠寄進状の中に、「旧市の河原」の地名が出てくることから、八ヶ川流域の道下小字向田付近に「河原市」の場所を想定されている。この場所も調査区域とは至近距離にあることから、検出された幹線道路の北端にあたる可能性が非常に高い。これらのことを考慮すれば、なお、「石瀬湊」、「市の河原」、また南方後背地に所在したであろう「鉄川宮」、その別当寺の「鉄川寺」、現存する「護摩堂宝泉寺」、内陸部の「総持寺」など中世寺社との関係が明瞭となってくる。港、市などと深くかかわり、広く蘆比庄、志津良庄に物資を供給する基地的性格を有する集落として考えておきたい。

筆者が主として記述した中世の項については、浅学のいたすところ、はなはだ不十分なものとなり申し訳なく思う。調査に際して始終協力を惜しまれなかった佃 和雄氏の意を十分に活かすことができなかった、また陶磁器類でお世話になった井上喜久男氏、江崎 武氏の御意見も意にそぐわない形となったこととあわせて深くお詫びする次第である。





発掘区全景 航空写真（東方から）



発掘区全景 航空写真（南方から）



遺跡遠景(北方から)



遺跡近景(西方から)



配石址出土状況全景（西方から）



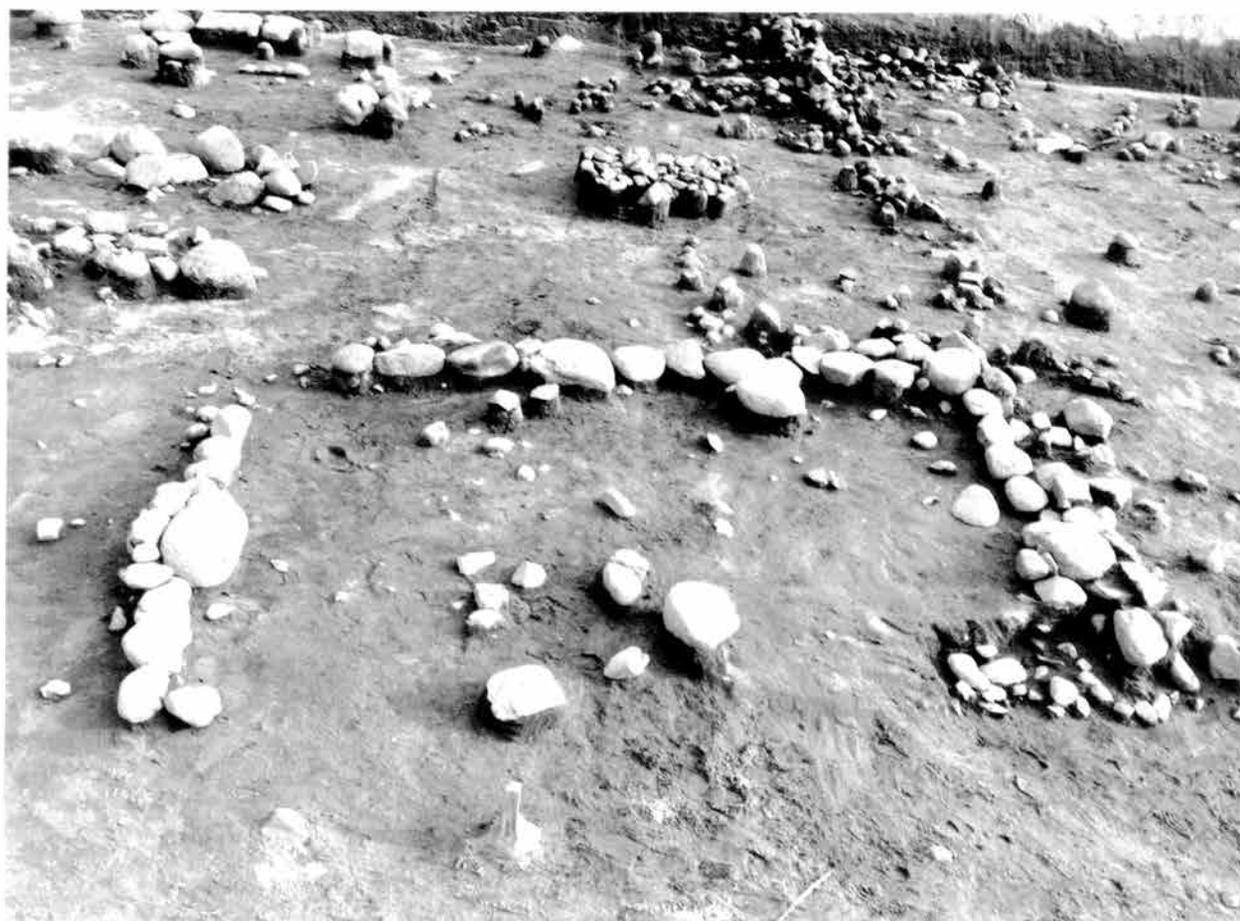
配石址出土状況全景（東方から）



配石址出土状況近景 (西方から)



第1号 配石址 (南方から)



第2号 配石 址 (北方から)



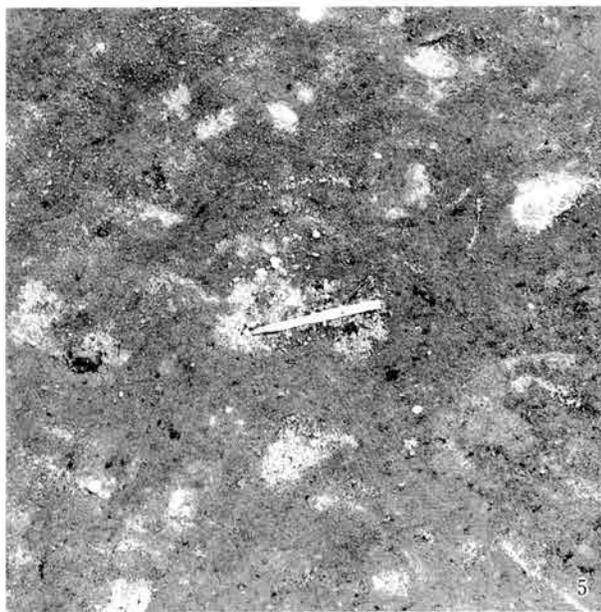
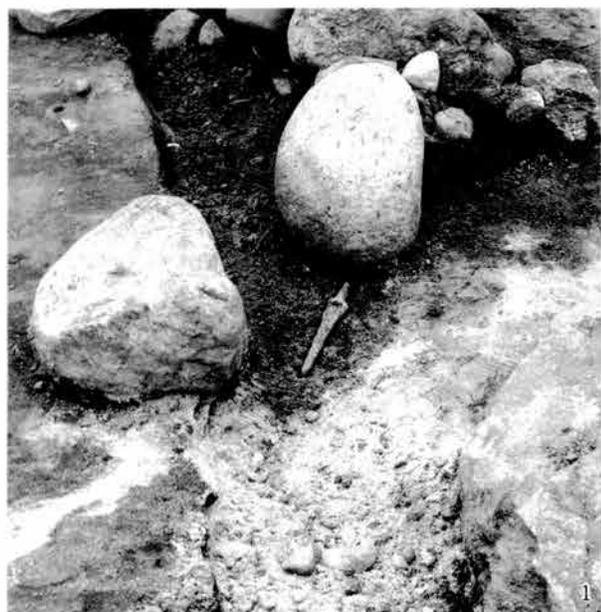
第3号 配石 址 (西方から)



第2号 溝出土状況 (南方から)



第1・2号 溝完掘状況 (北方から)



遺物出土状況

1. 鎗 2. 土鐘 3~5. 刀子 6. 第1号配石址内銅銭



第2遺構面検出状況（東方から）



第2遺構面検出状況近景（東方から）



土罌端部検出状況 (西方から)



土罌端部検出状況 (南方から)



第2遺構面検出状況近景（北方から）



第2遺構面検出状況近景（東南から）



1. 石囲炉 2. 第1号土壇 3. ビット内埋納 4. 第2号土壇 5. 木柱根 6. 第3号井戸



第4遺構面検出状況（西方から）



第4遺構面検出状況（東方から）



1



2



3

1. 第4遺構面近景 2. 縄文時代ピット群 3. 縄文時代包含層の状況



東発掘区全景 (西方から)



東発掘区近景 (西方から)



井戸検出状況（南方から）



井戸検出状況（南方から）

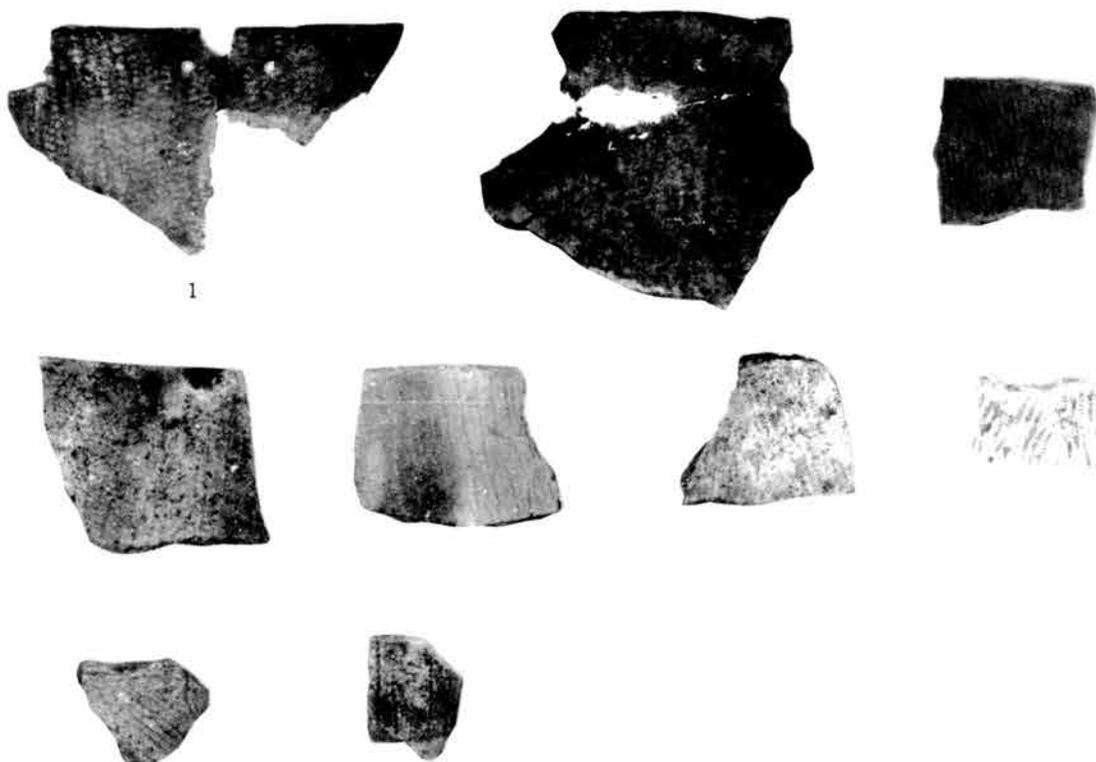
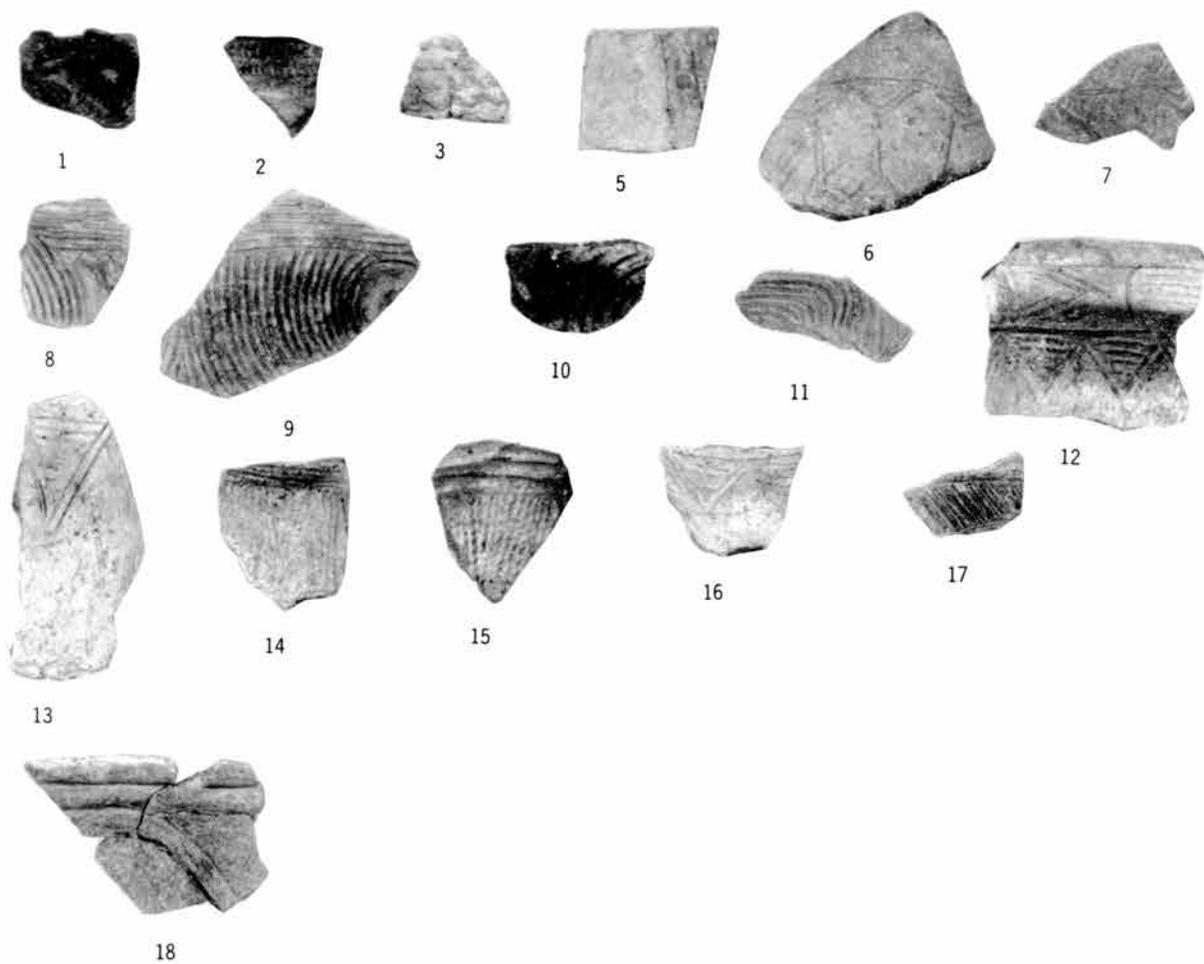


1. 第4号井戸 2. 第10号井戸 3. 第6号井戸 4. 第8号井戸 5. 第11号井戸 6. 第11号井戸木製品出土状況



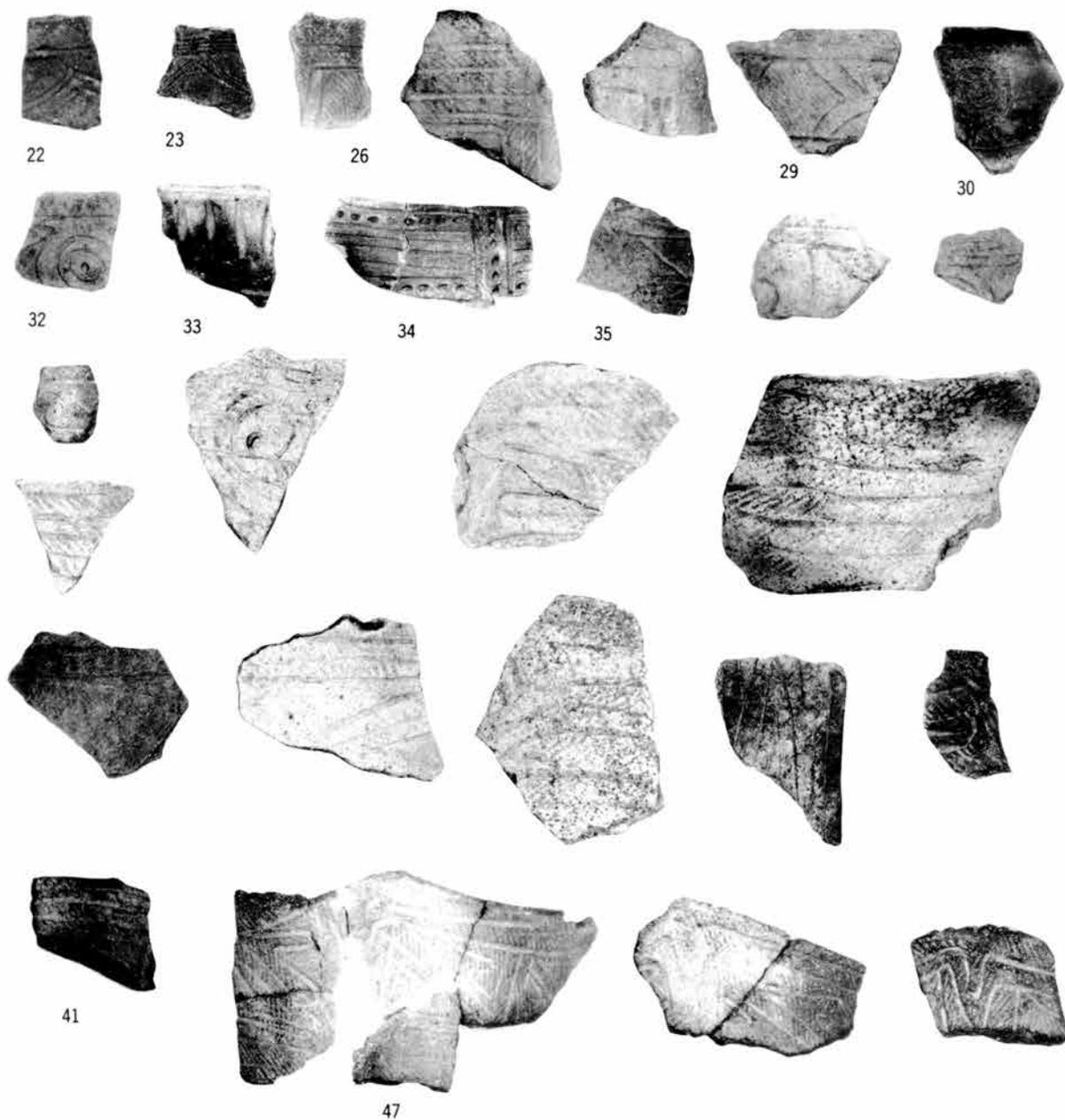
1. 第6号井戸漆碗 2. 第3号井戸断面 3. 第7号井戸断面 4. 石組検出状況 5. 6. 下層の石組検出状況

前期・中期土器

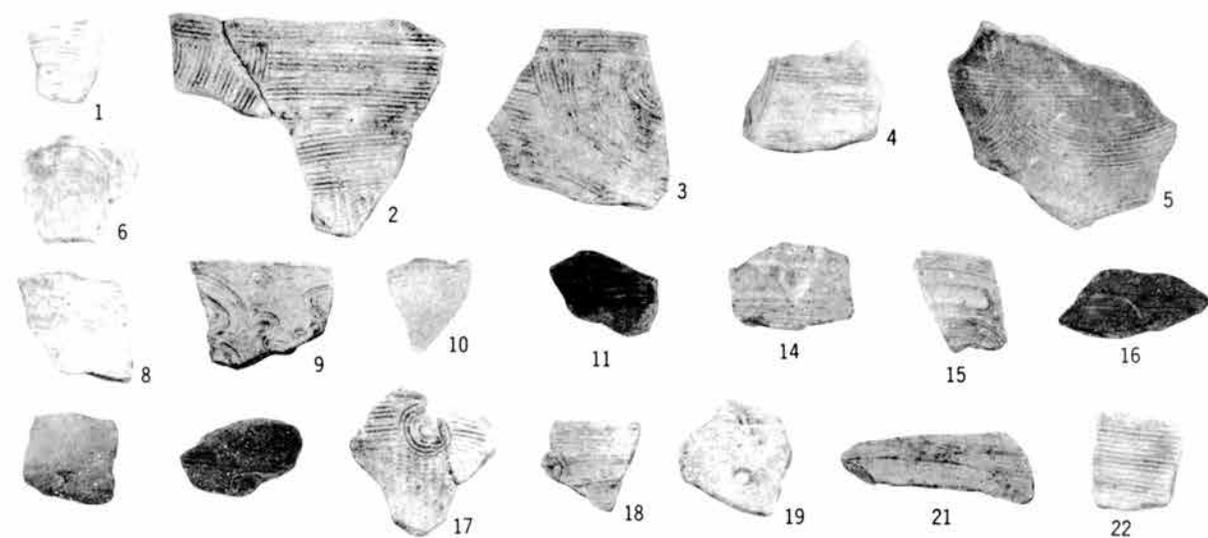


繩文式土器

上田式・堀ノ内II式土器

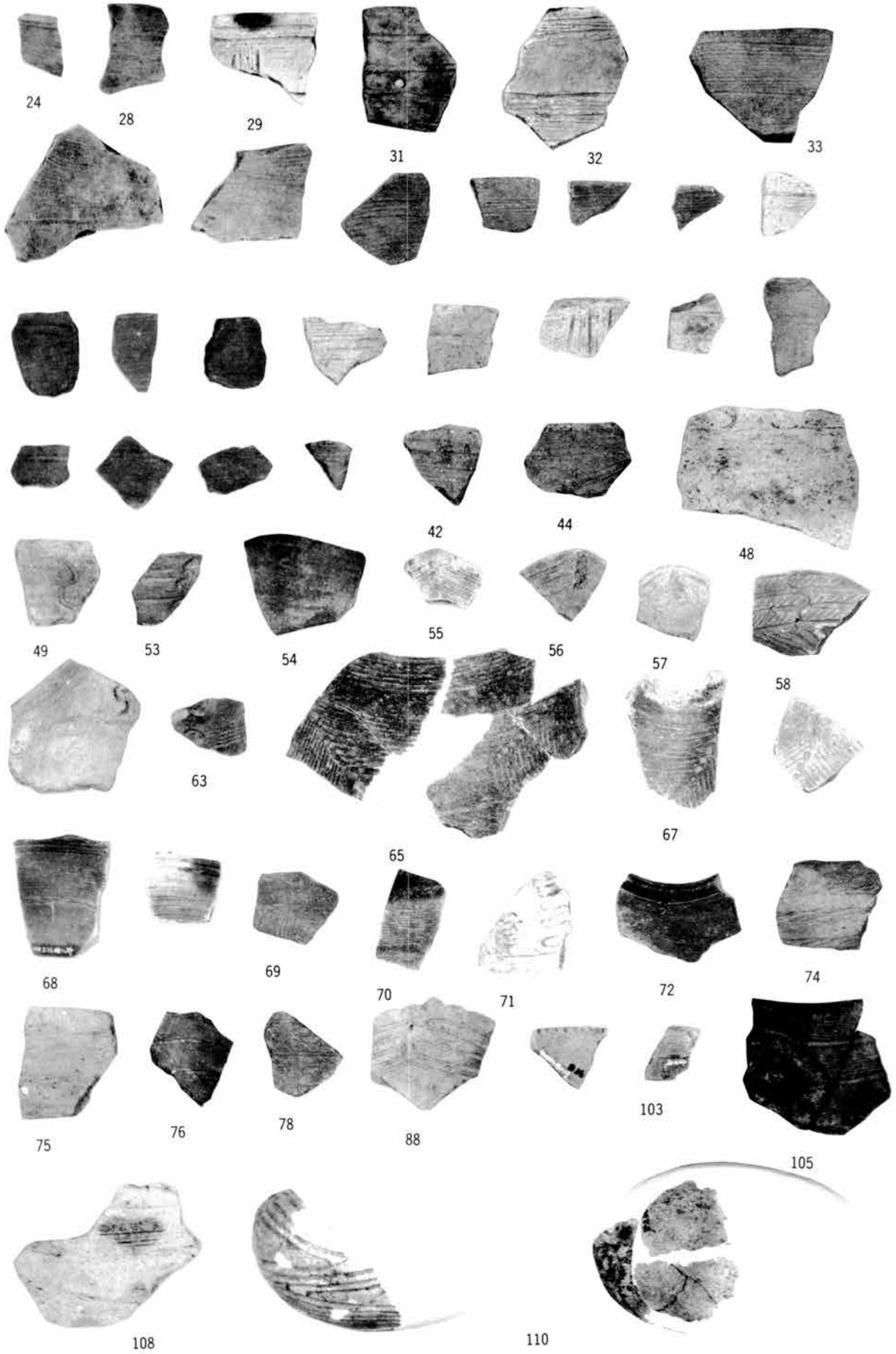


加曾利 B<sub>1</sub> 式土器



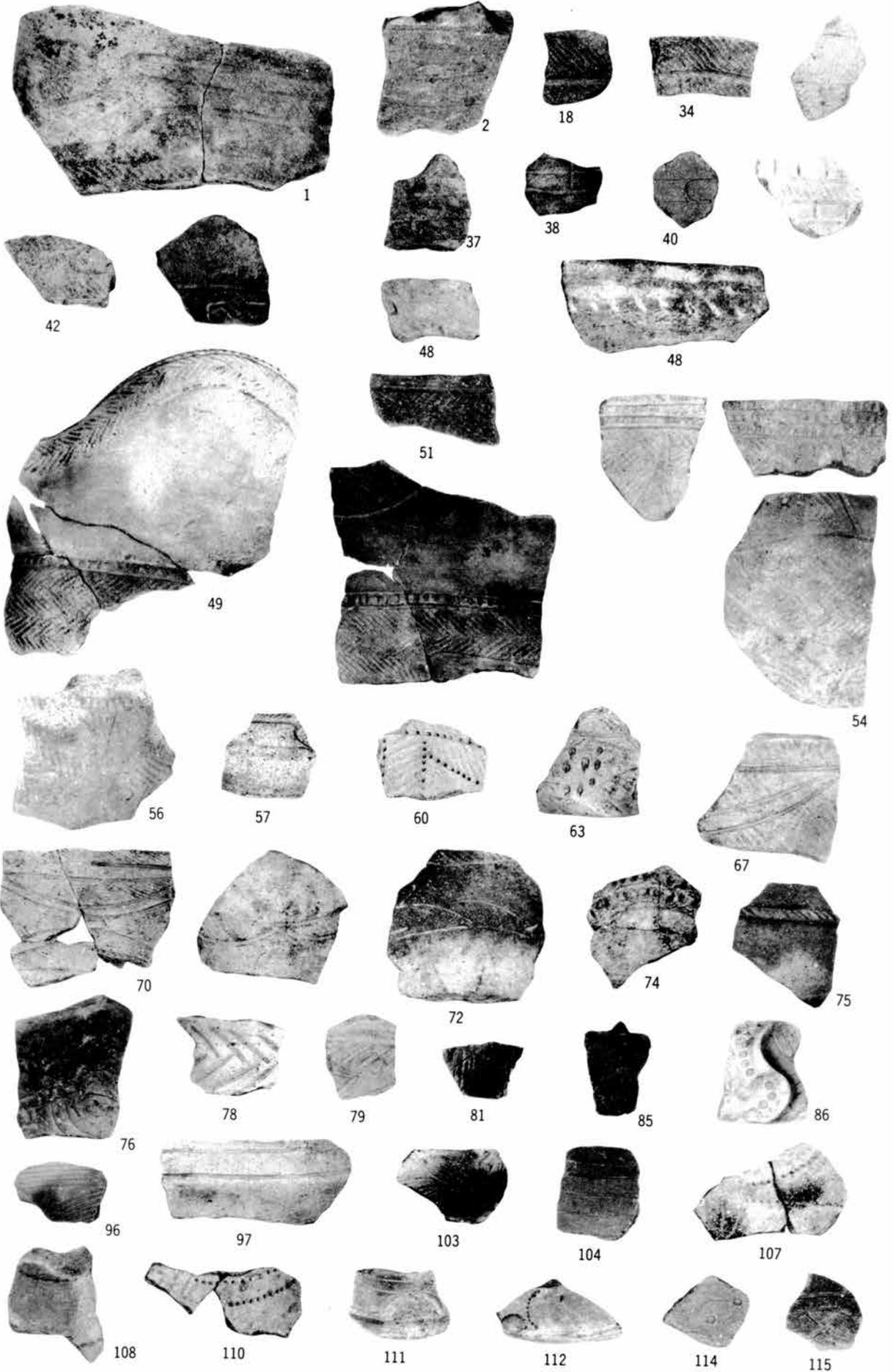
縄文式土器

加曾利 B<sub>1</sub> 土器



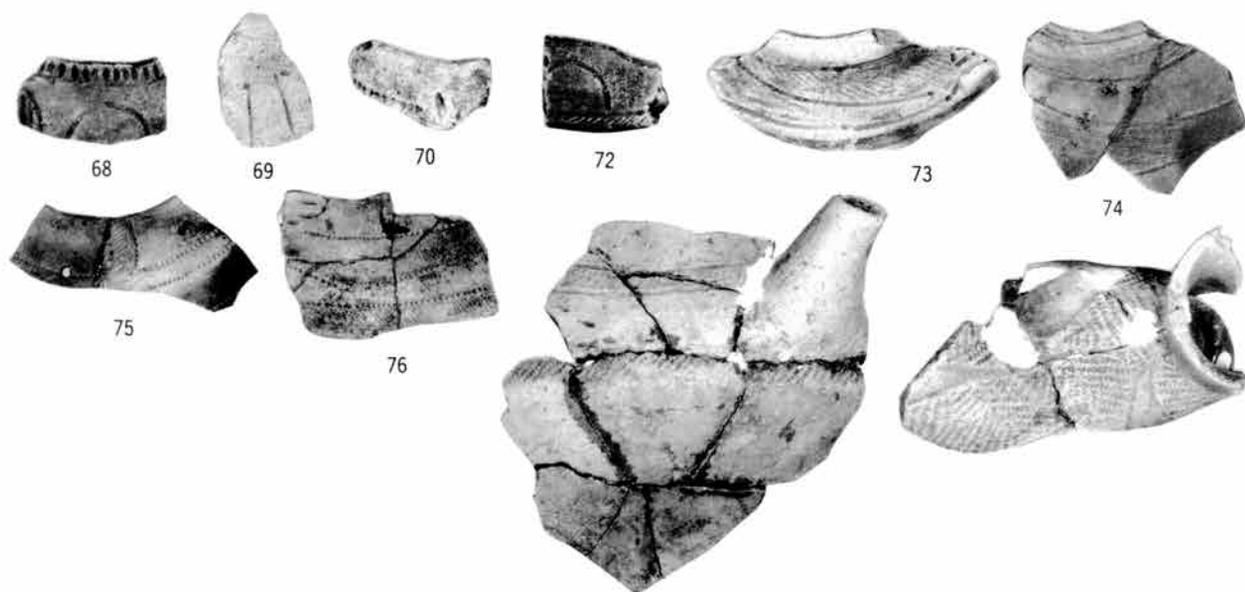
縄文式土器

酒見式土器

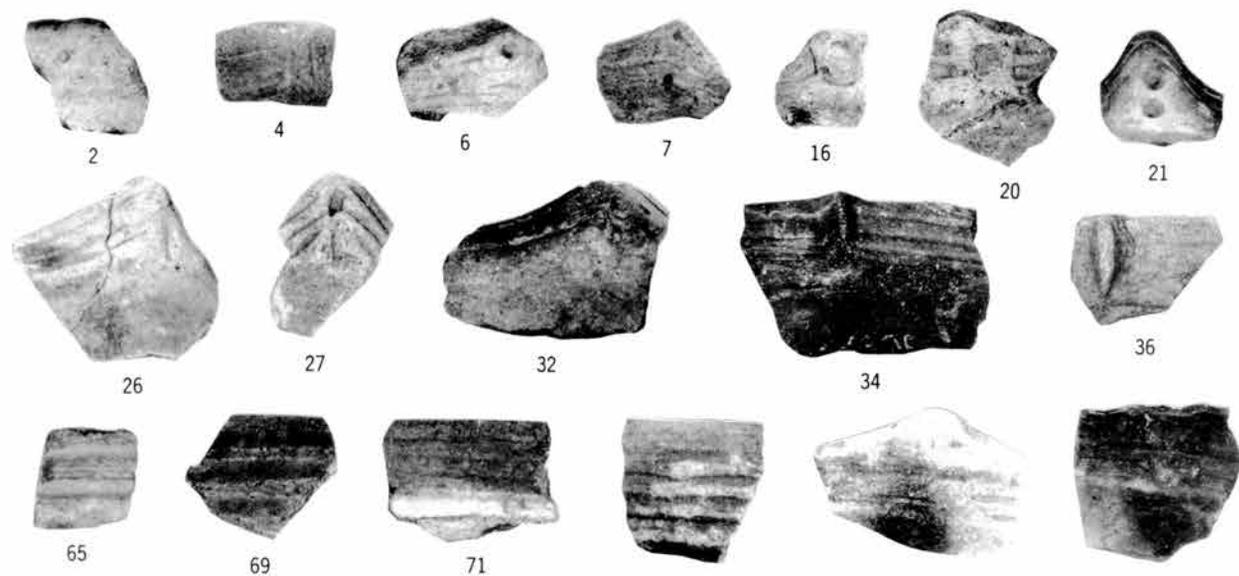


繩文式土器

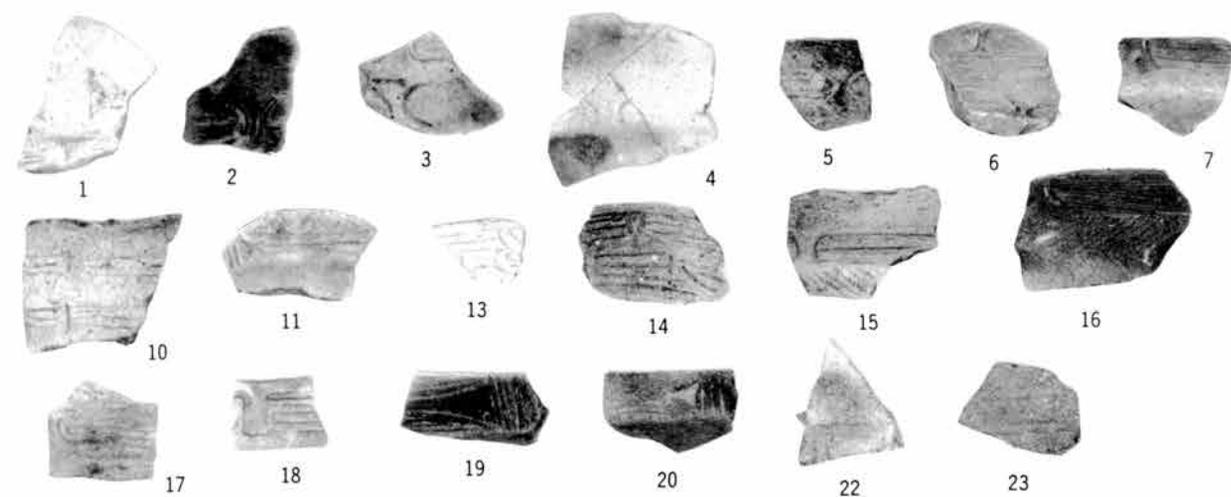
酒見新堂遺跡



井口II式土器

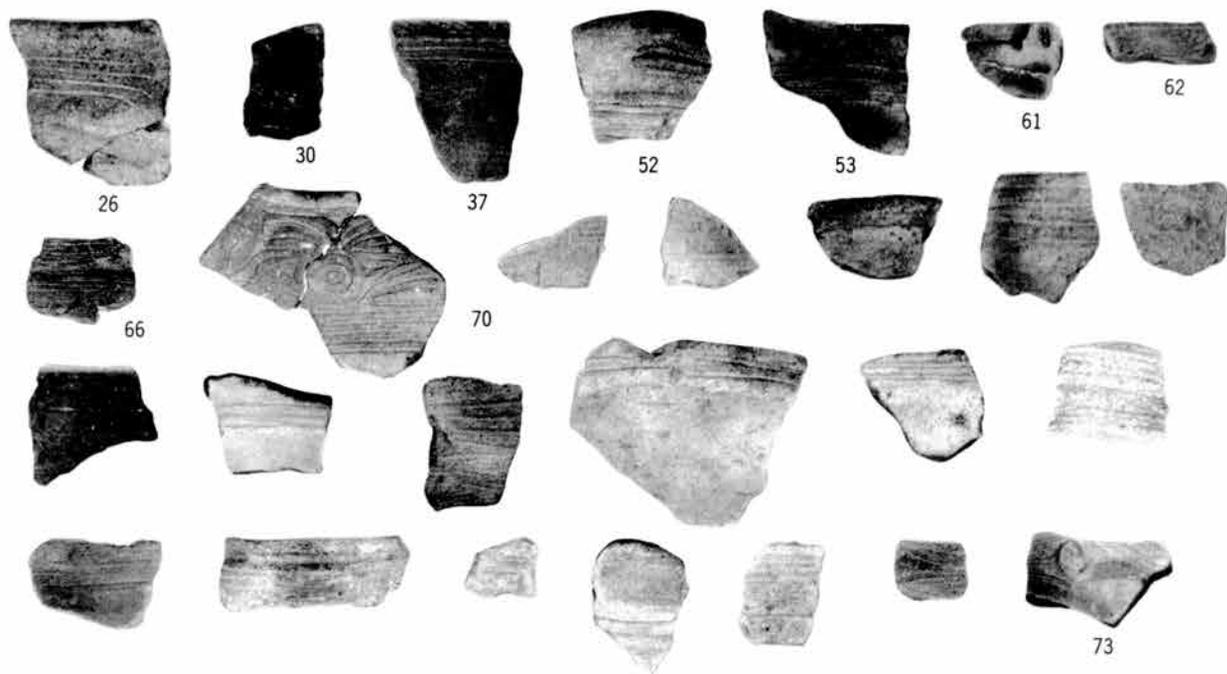


八日市新保式土器

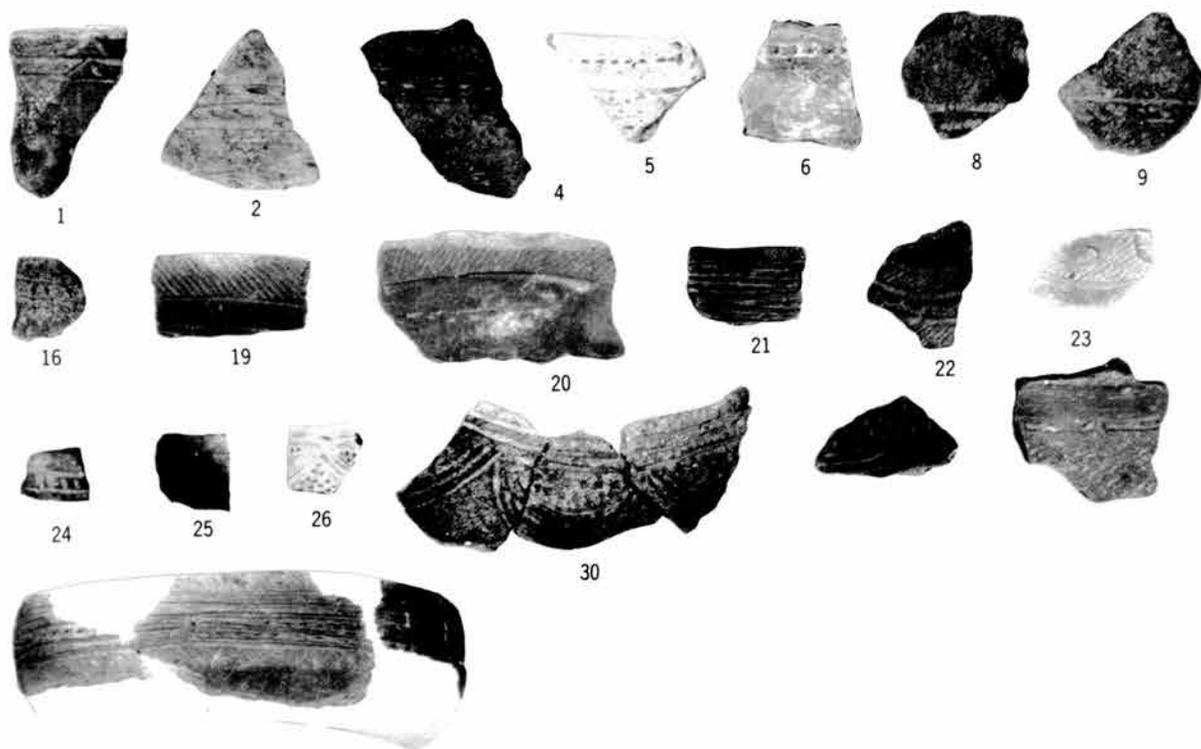


縄文式土器

八日市新保・勝木原式土器

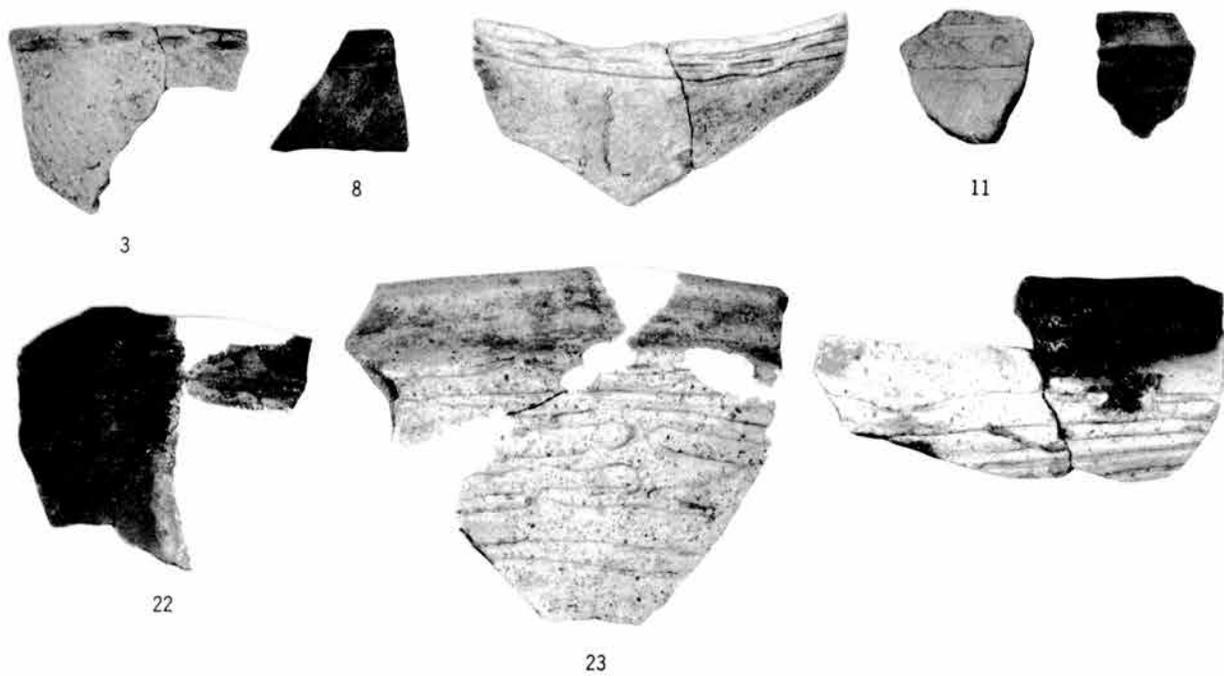


中屋式土器

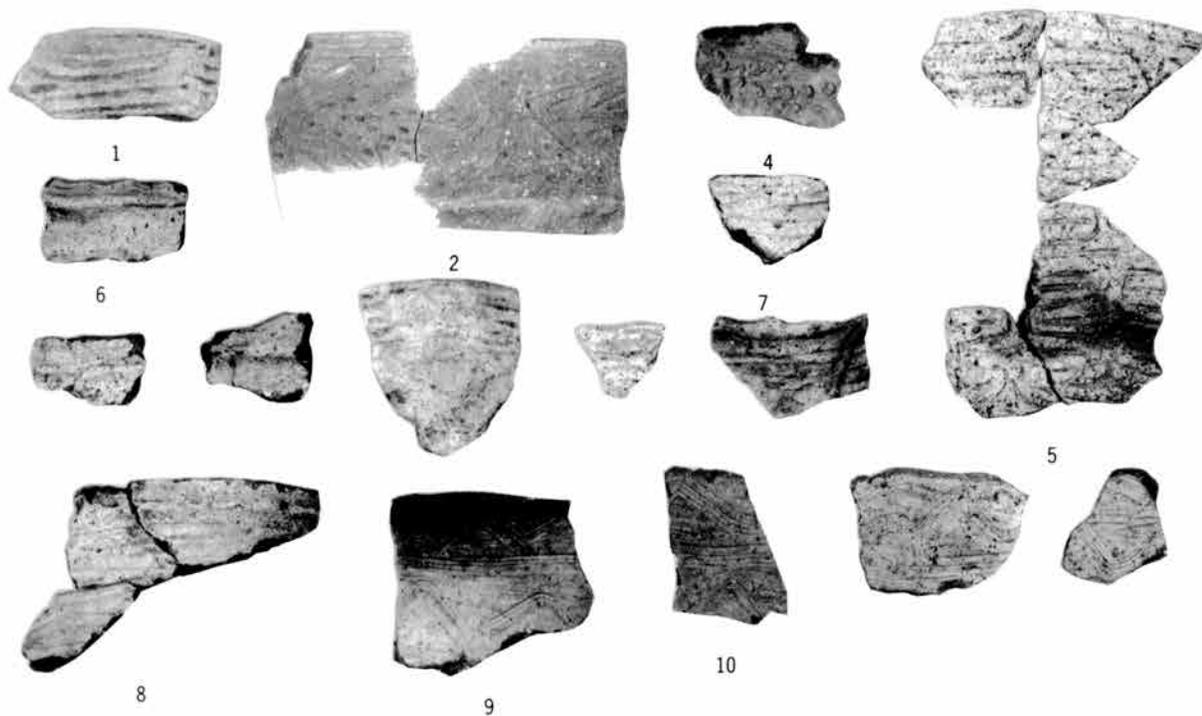


縄文式土器

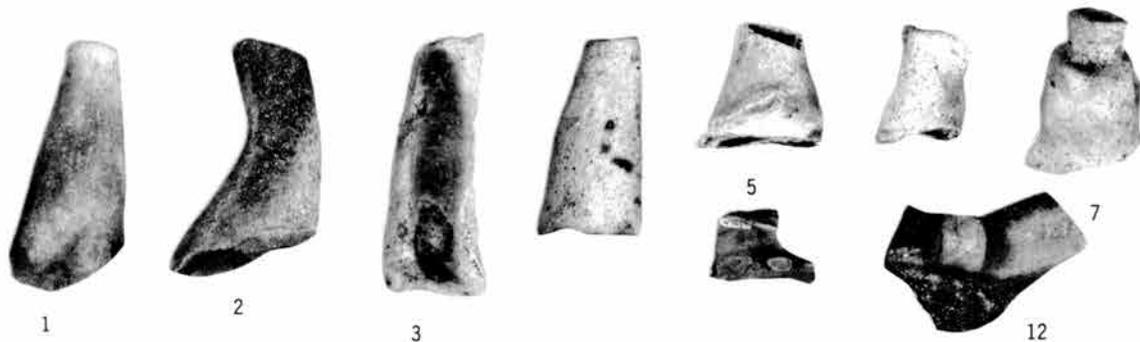
下野式土器



晩期・弥生式土器



注口形土器

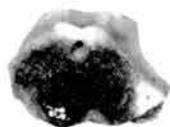


縄文式土器

土器底部



7



8



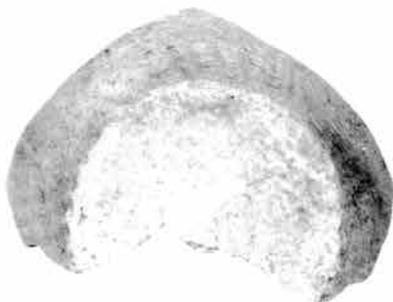
11



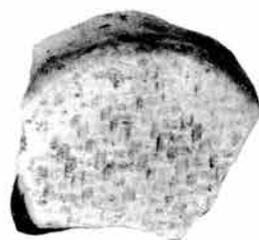
21



22



23



28



30



37



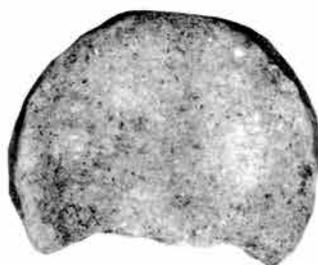
40



41



42



43



57



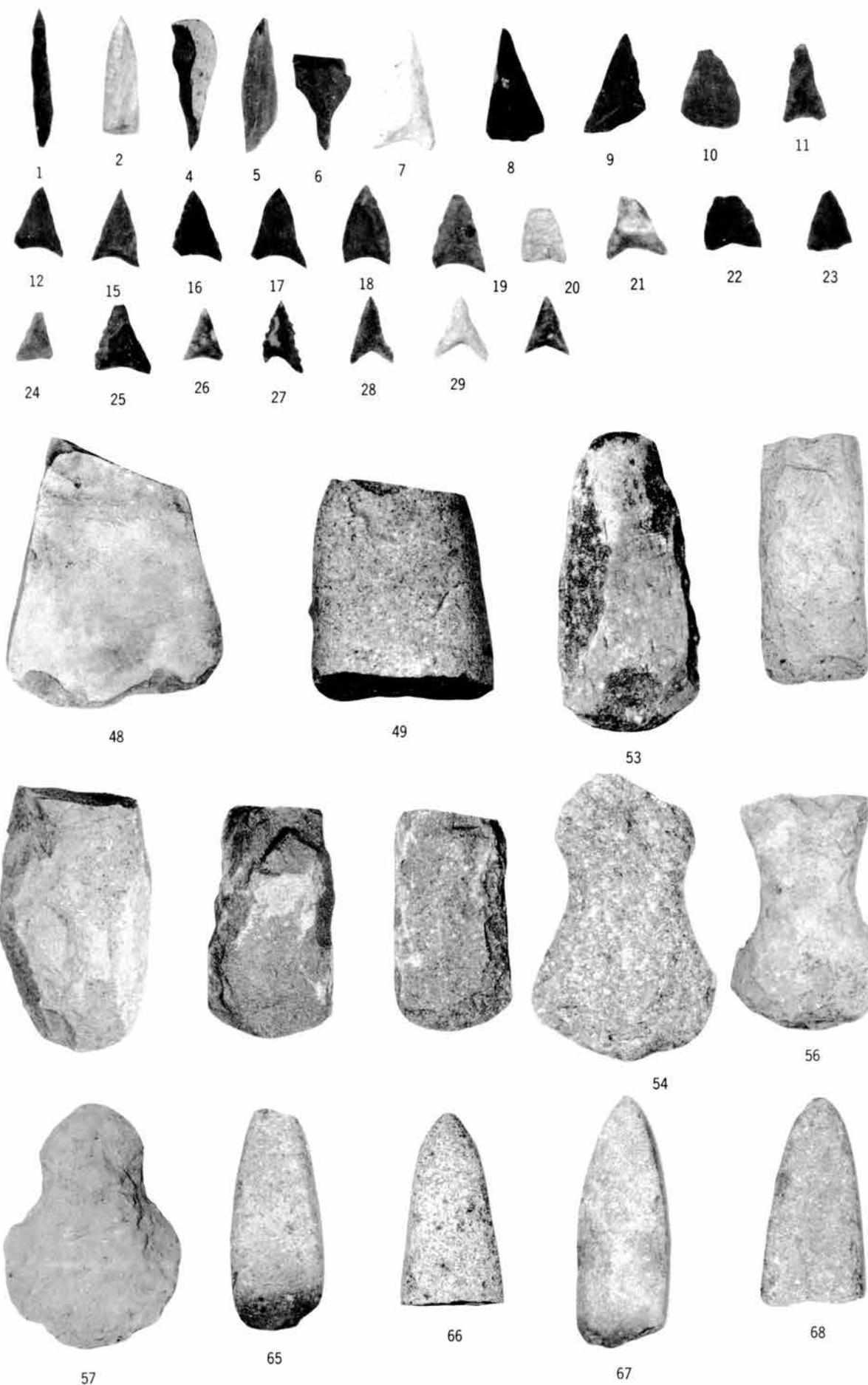
65



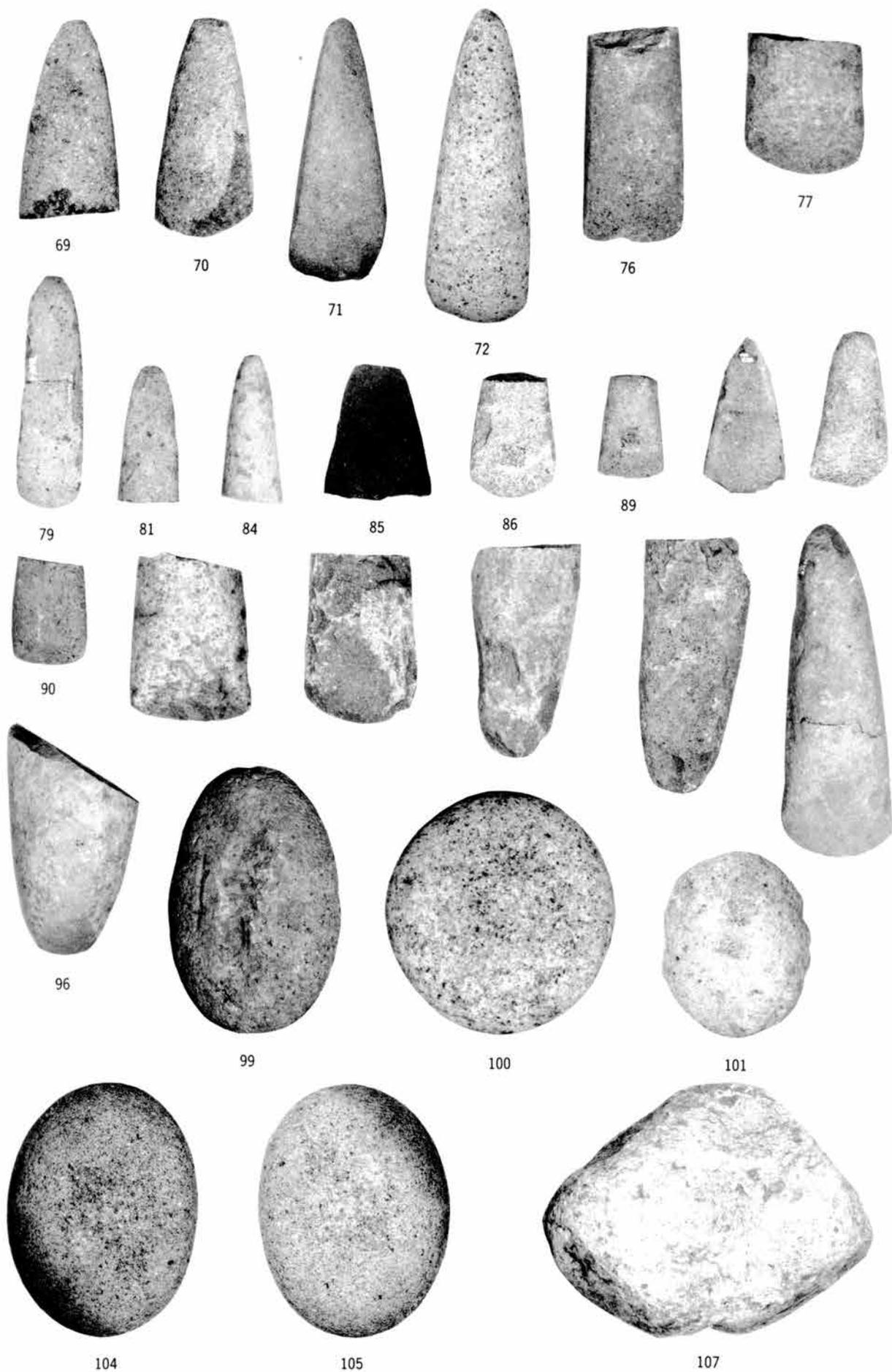
自然遺物（骨）H 26・27 G 黒褐色粘質土



縄文式土器・自然遺物



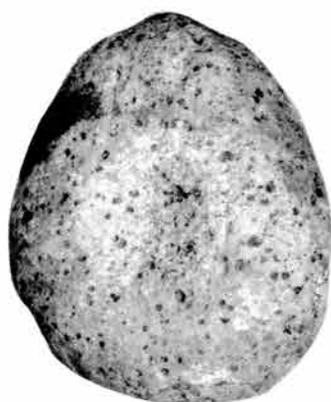
縄文時代石器



縄文時代石器



108



109



110



115



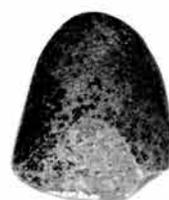
118



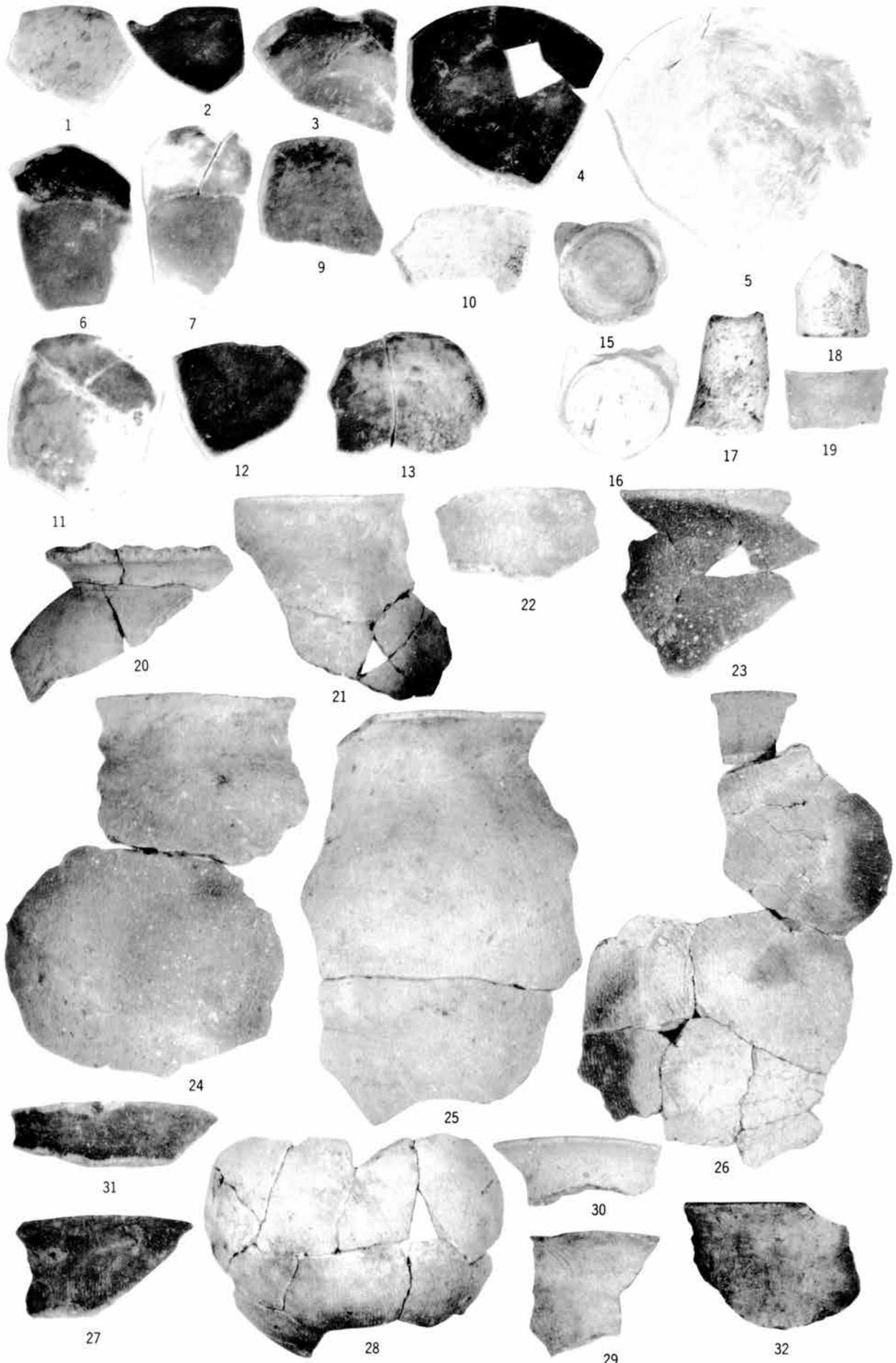
119



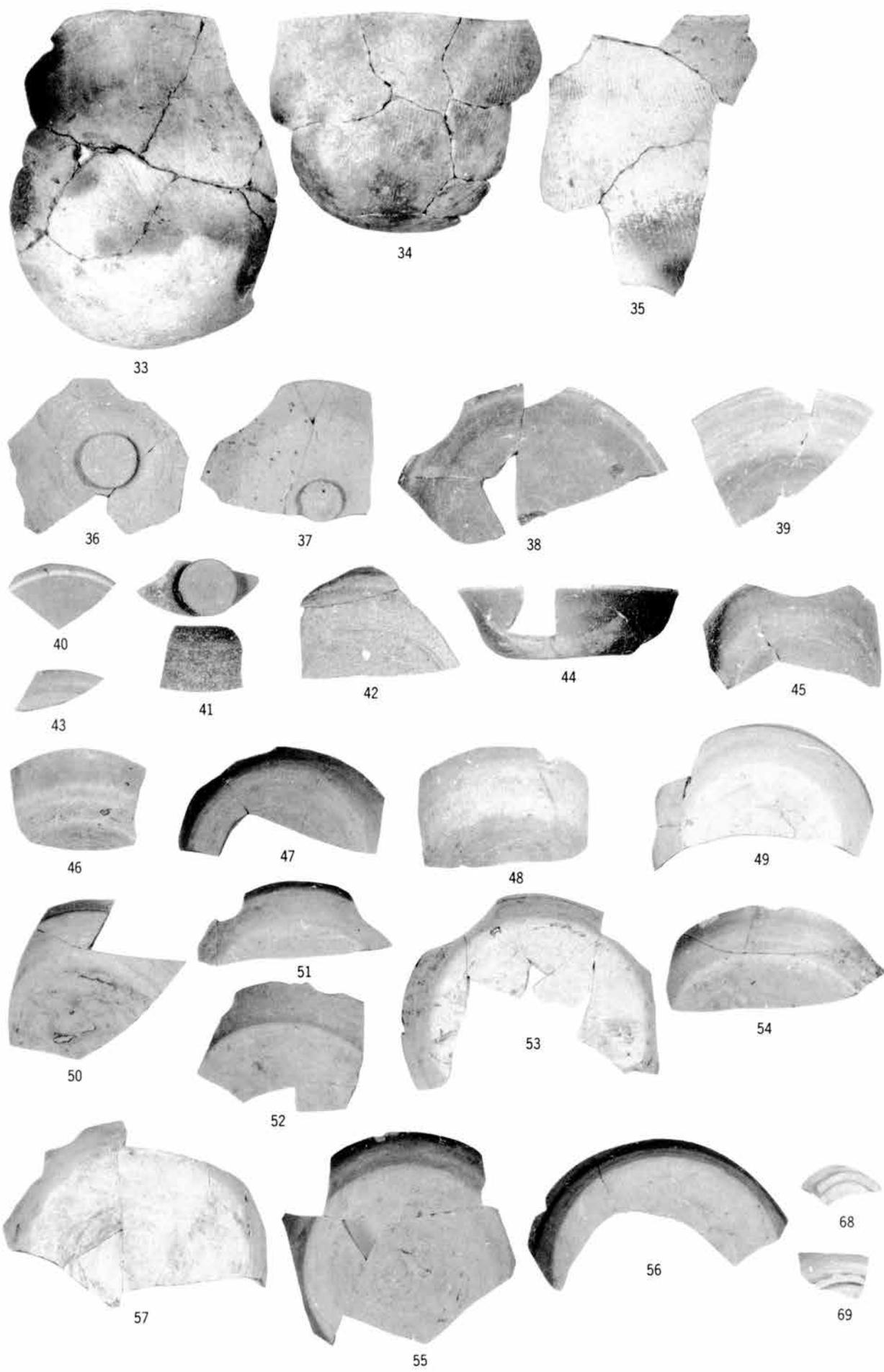
123



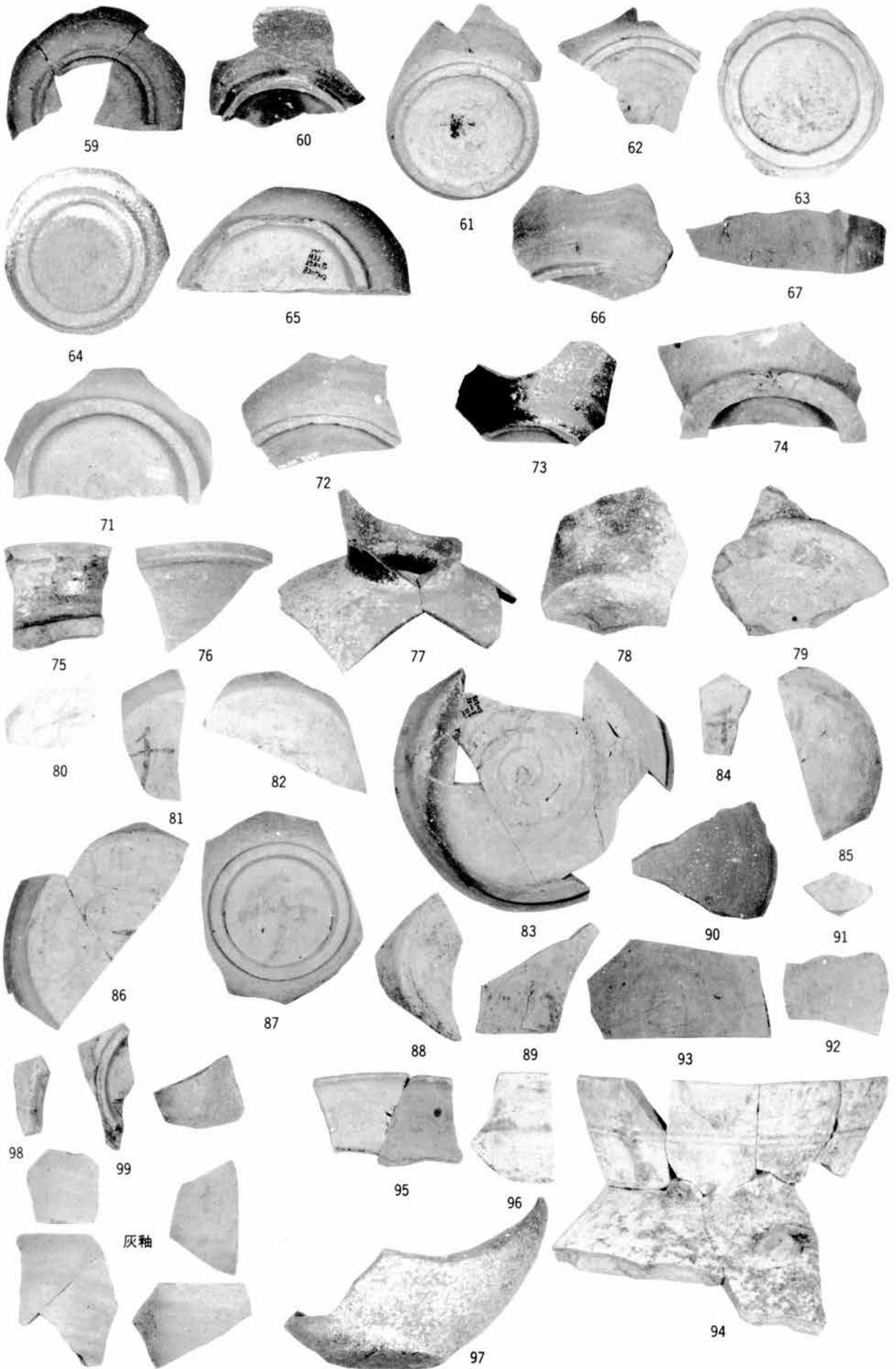
126



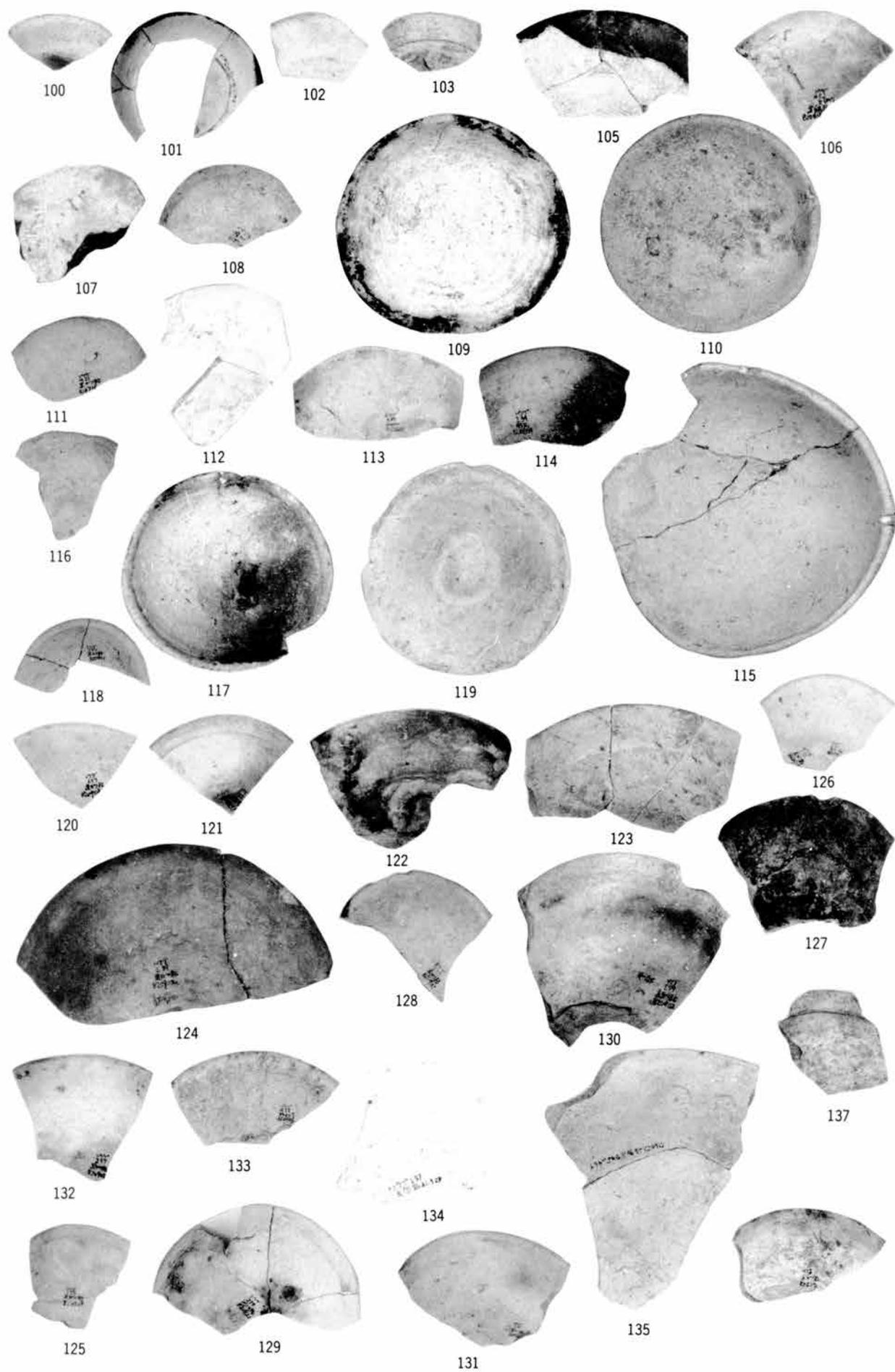
土 師 器



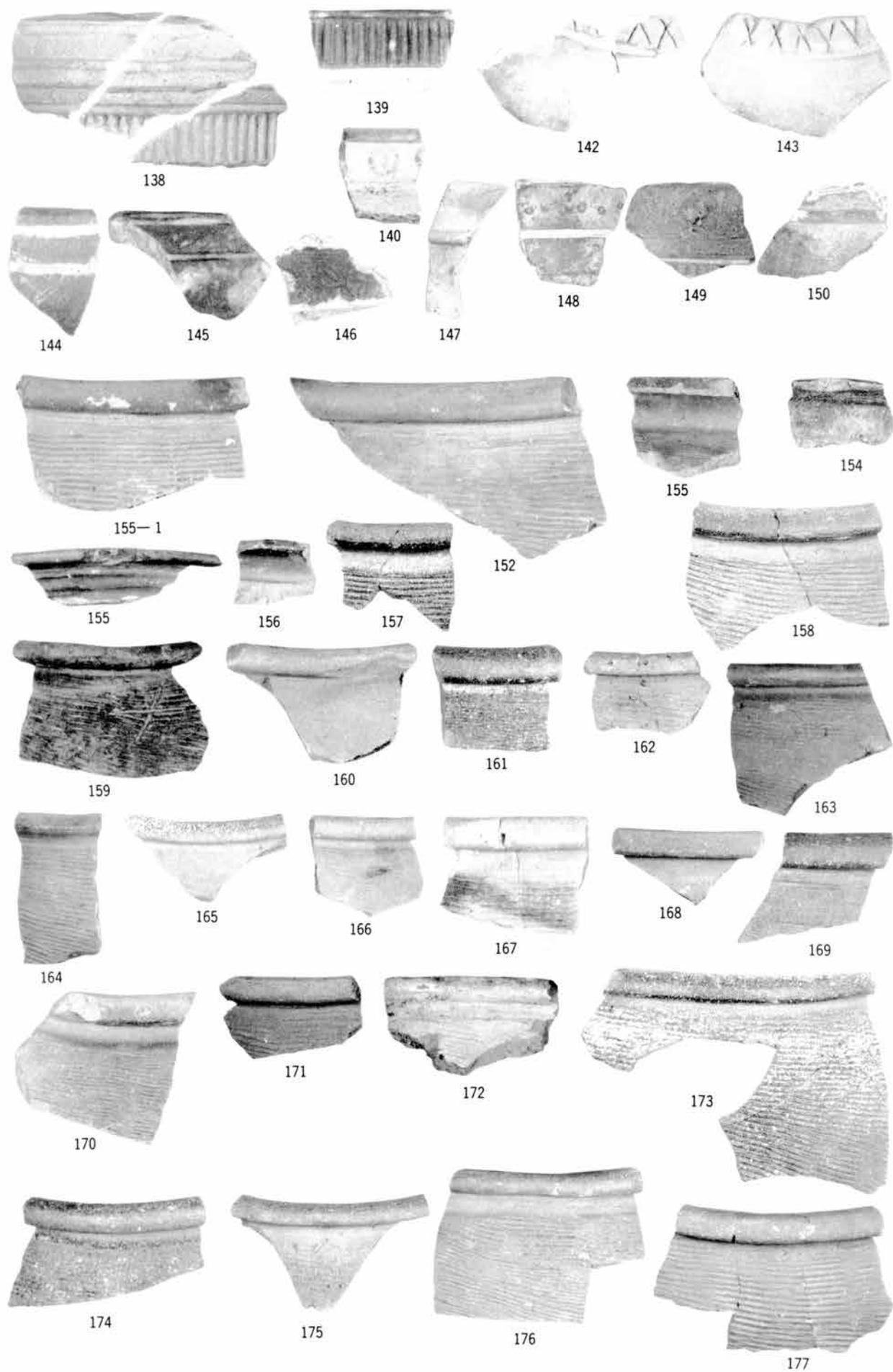
土師器、須恵器



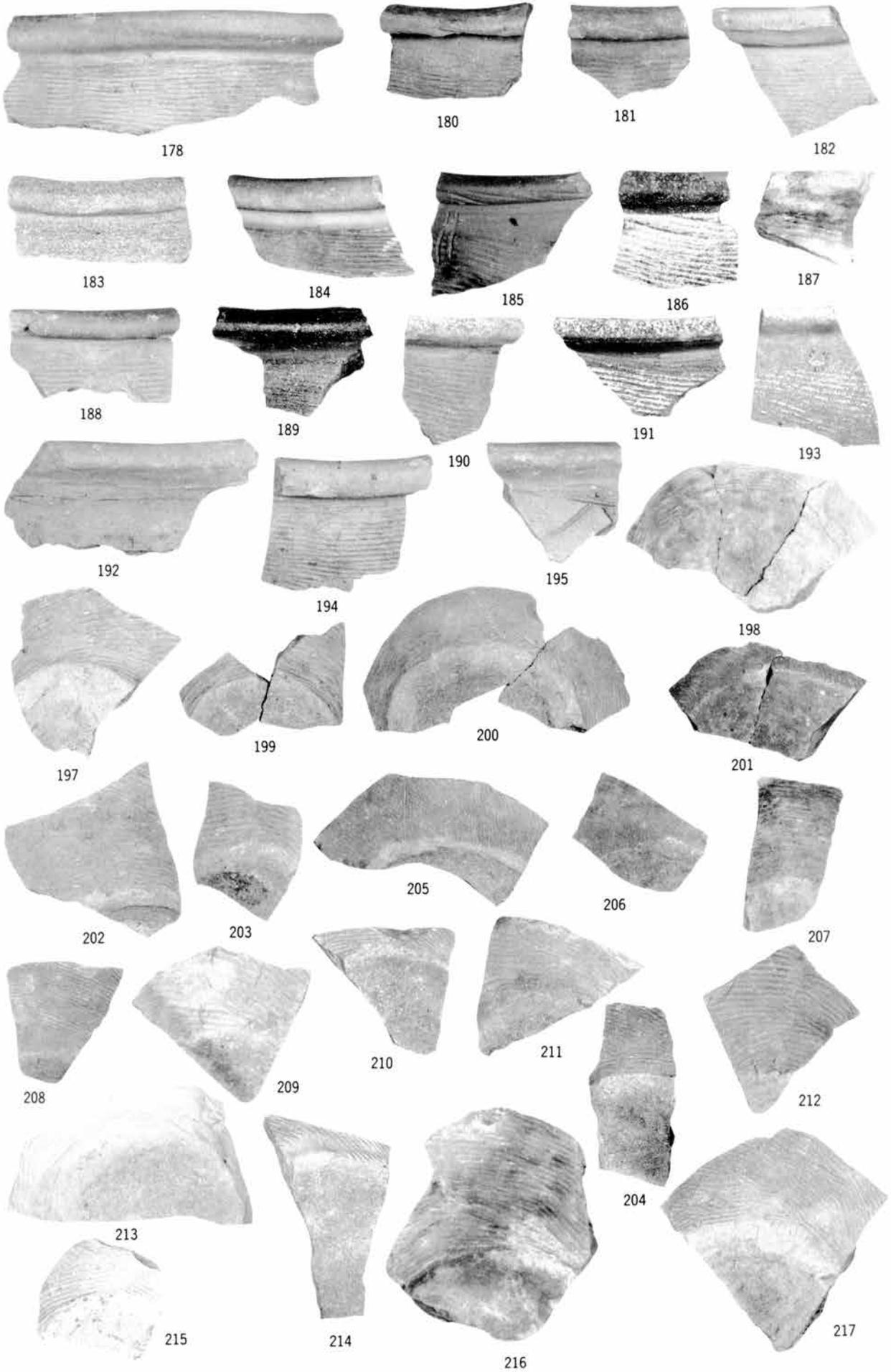
須恵器、灰釉陶器



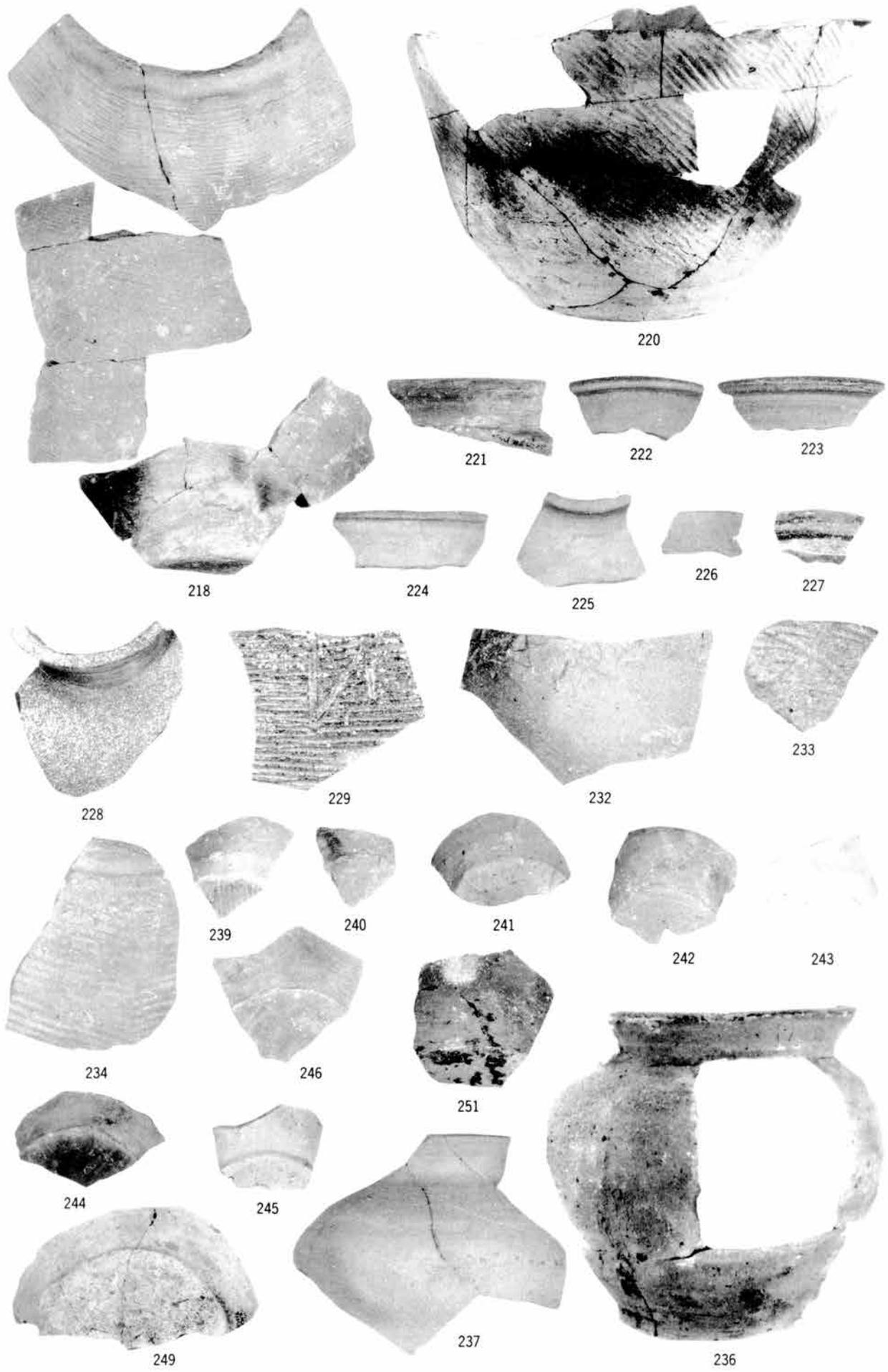
土師質土器



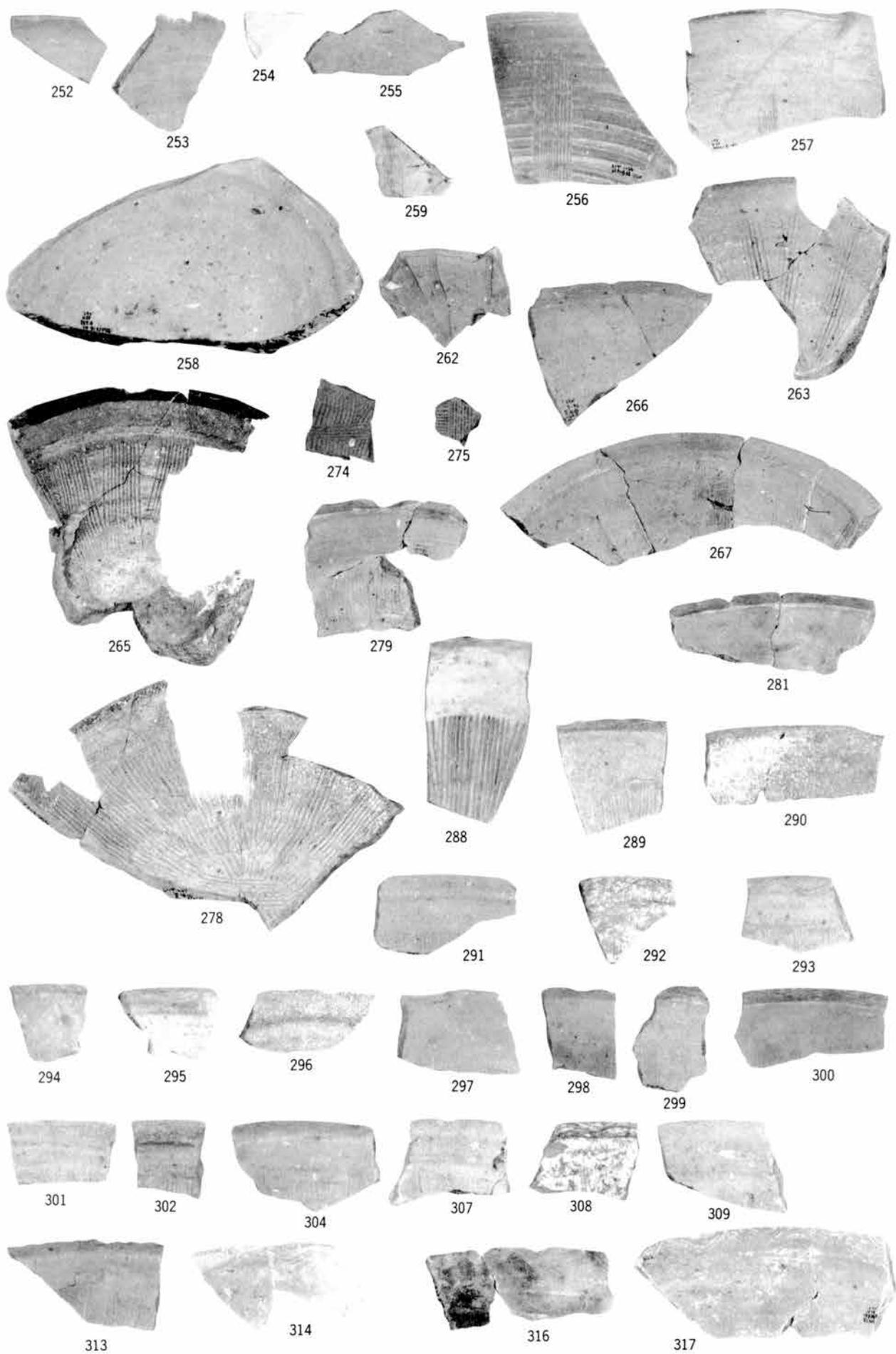
瓦質土器、珠洲・甕



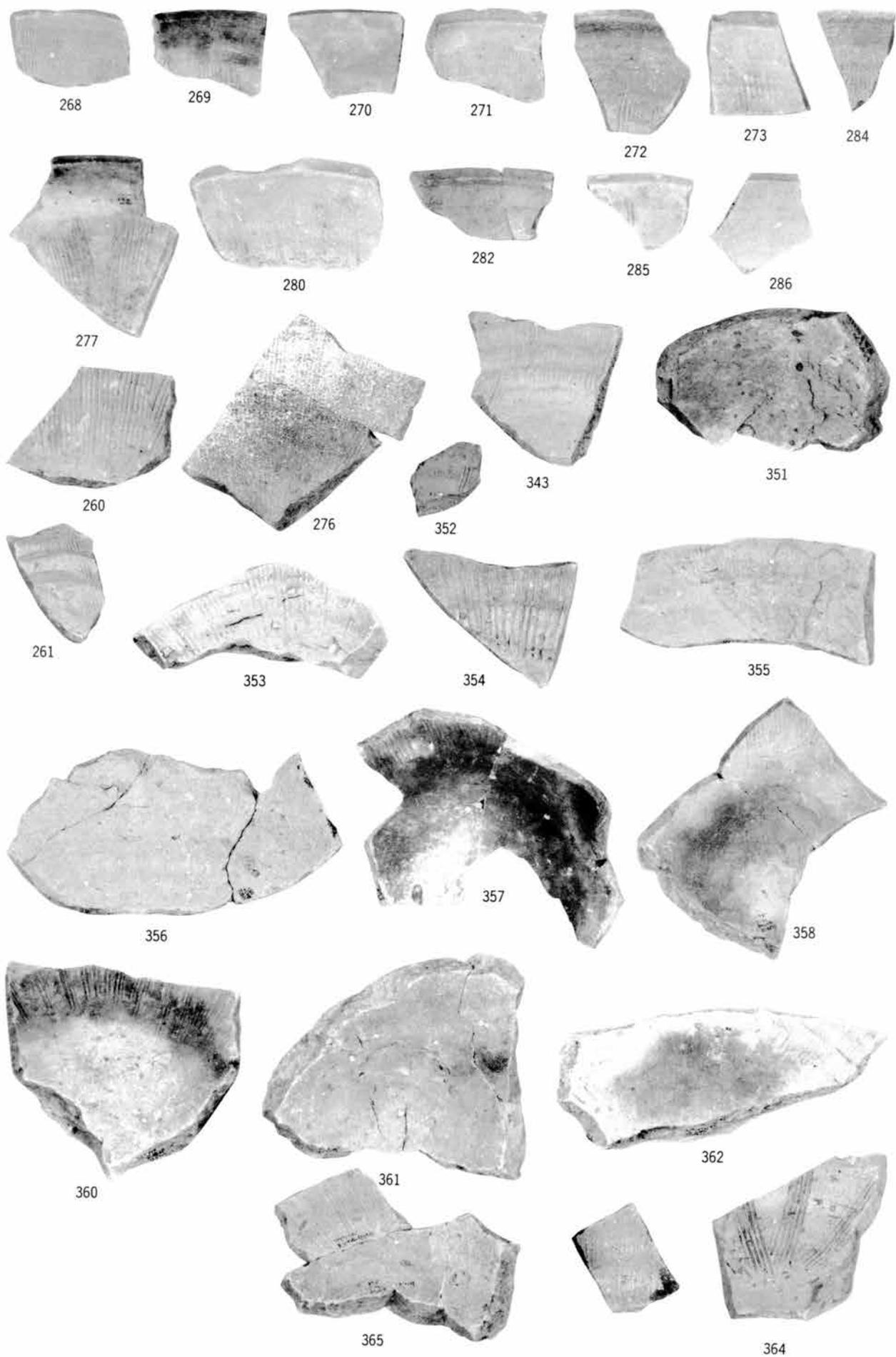
珠洲·甕



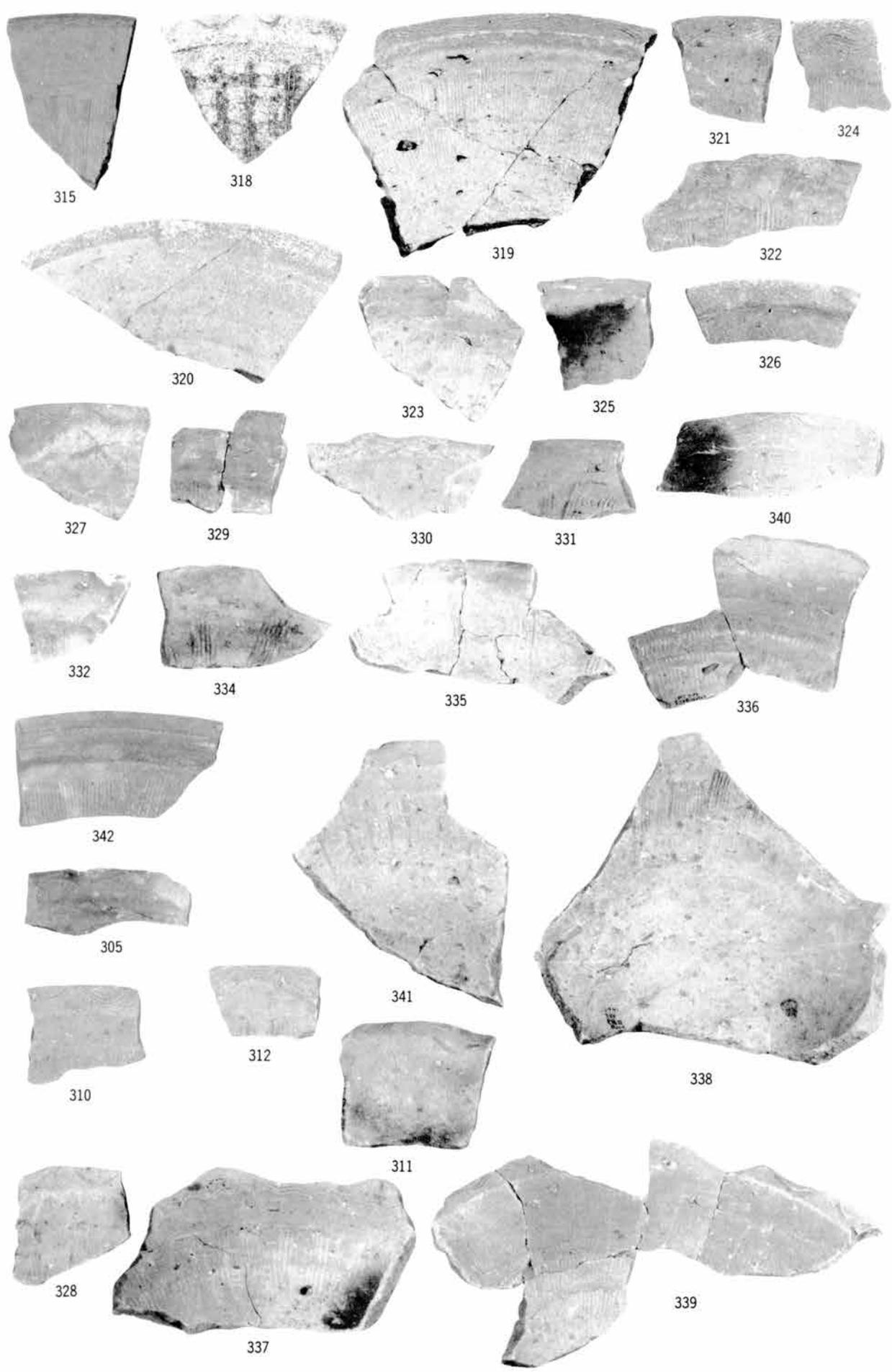
珠 洲 · 壺



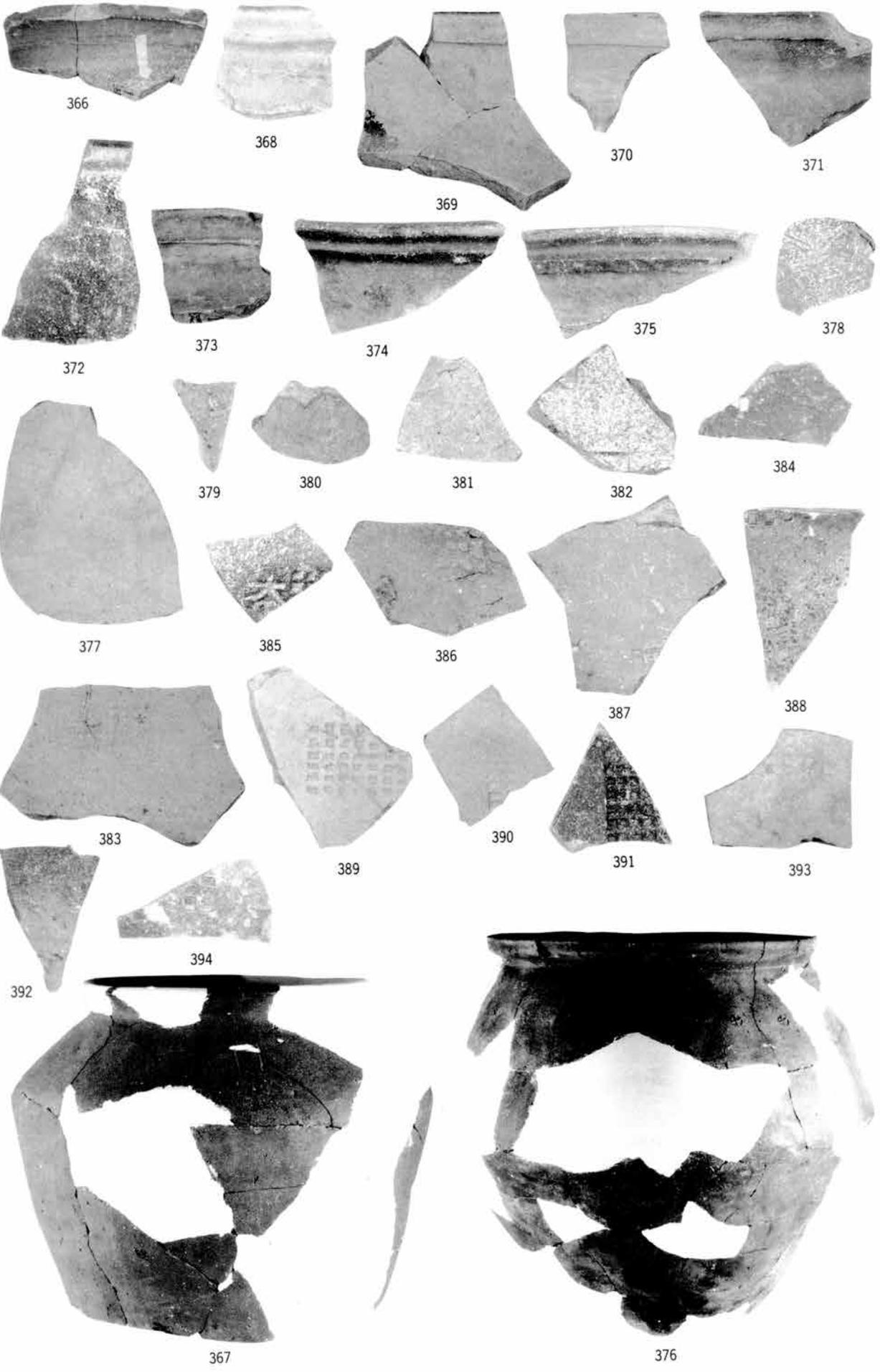
珠洲・鉢



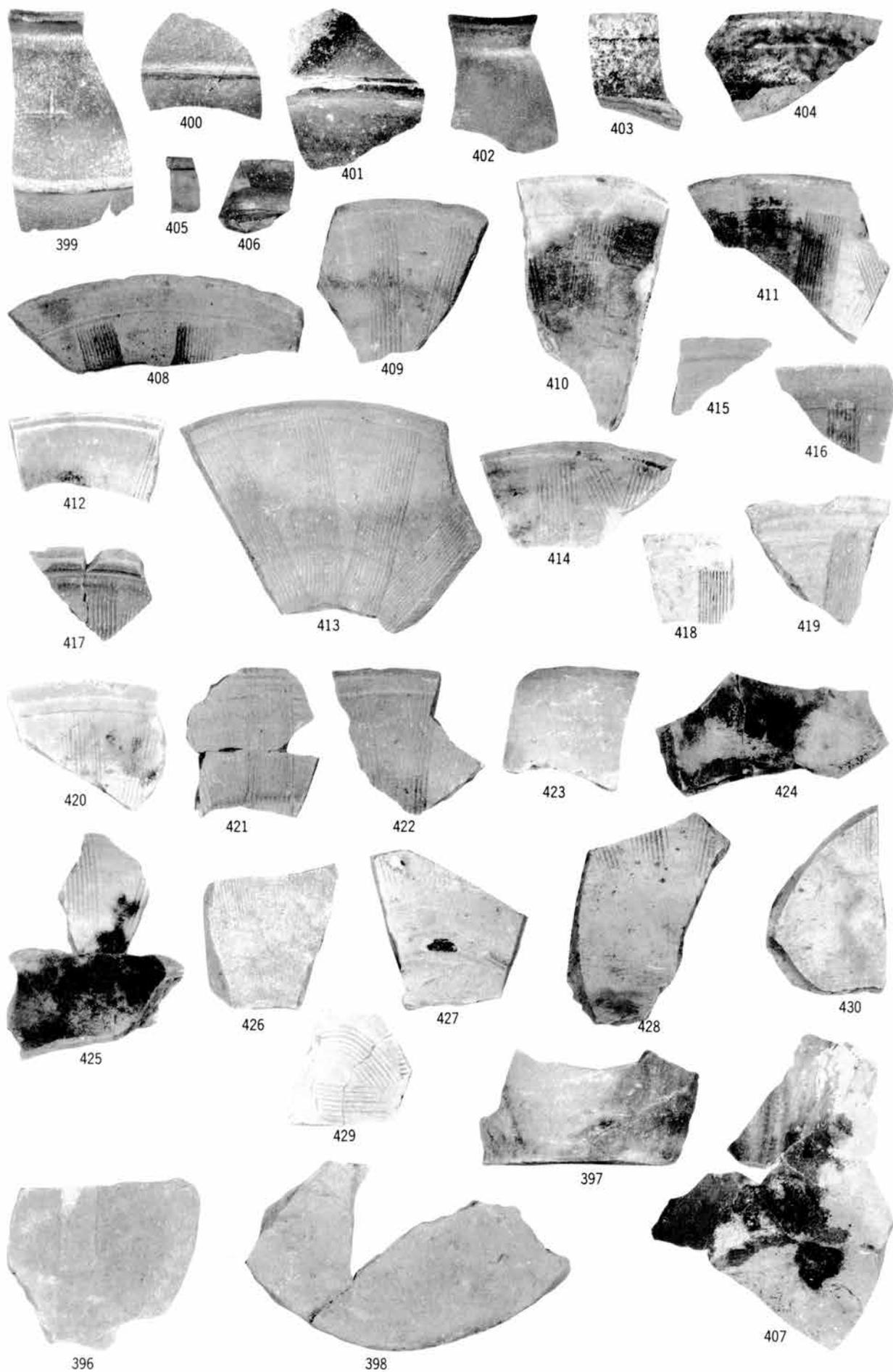
珠洲・鉢



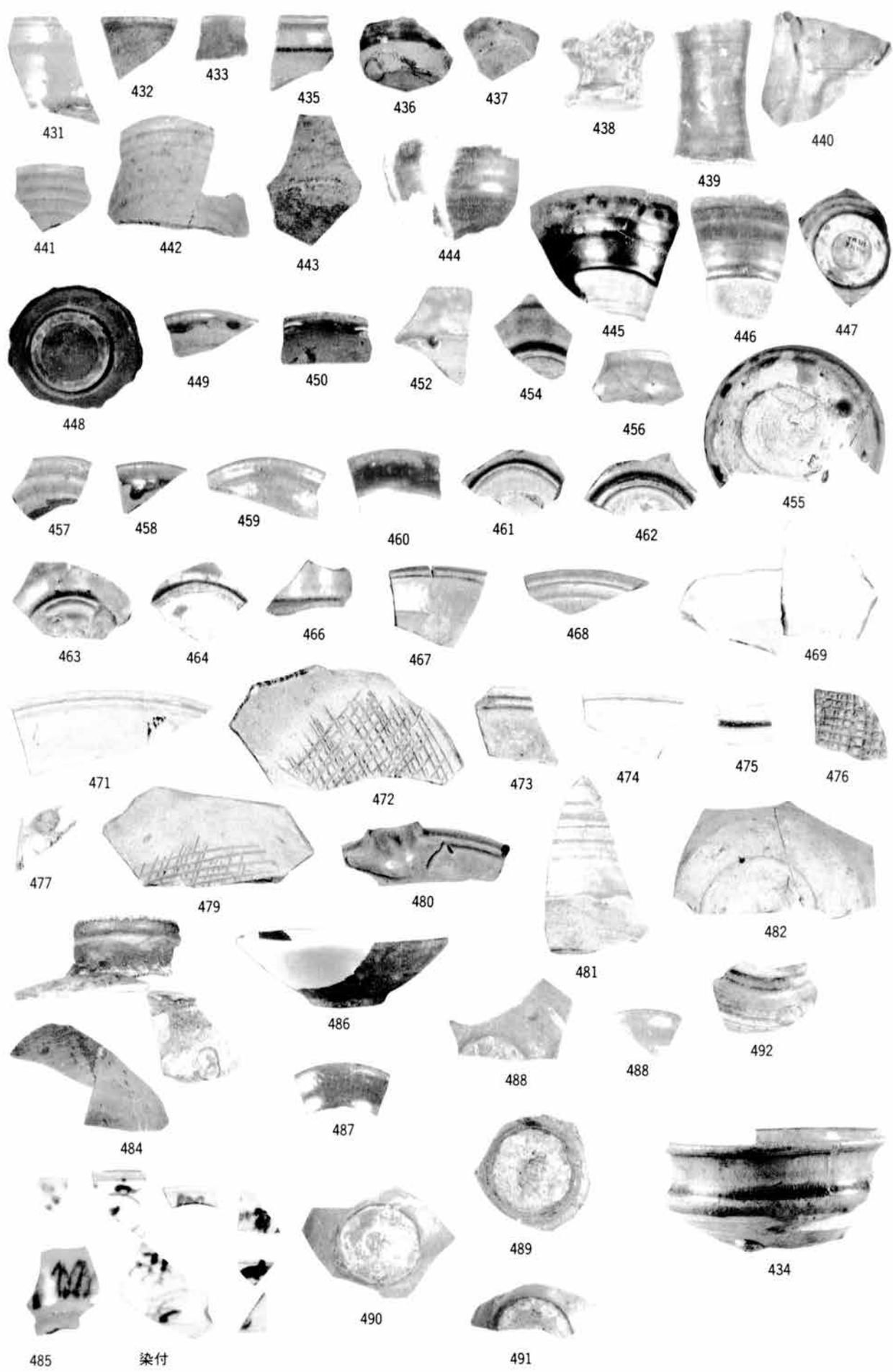
珠 洲・鉢



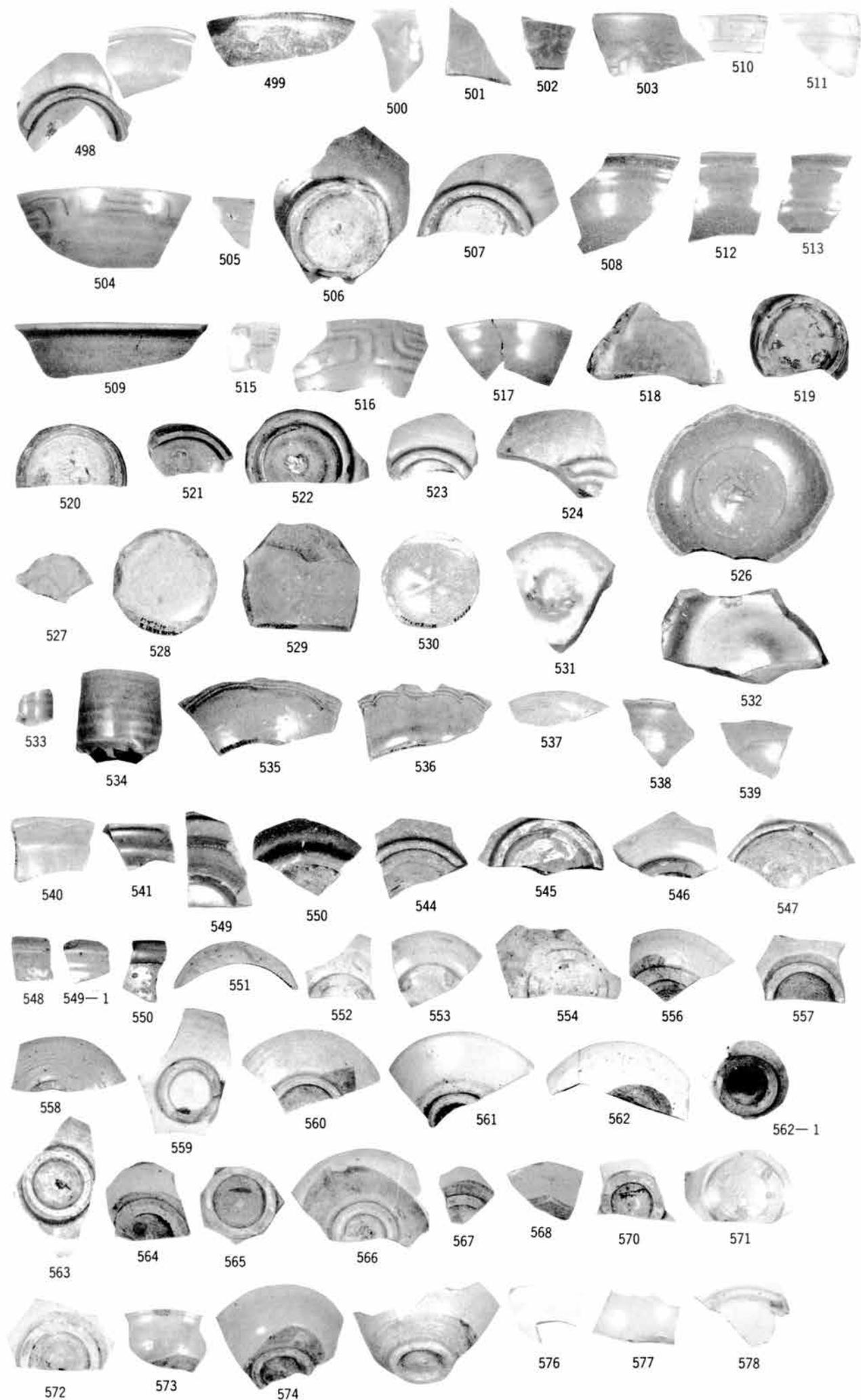
越前・甕



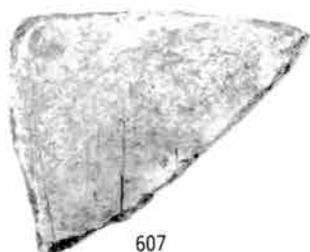
越前・壺・鉢



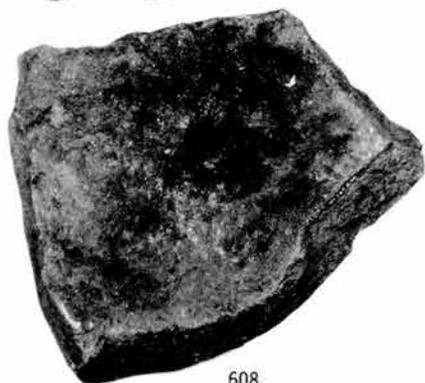
瀬戸・美濃、李朝



青磁白磁



607



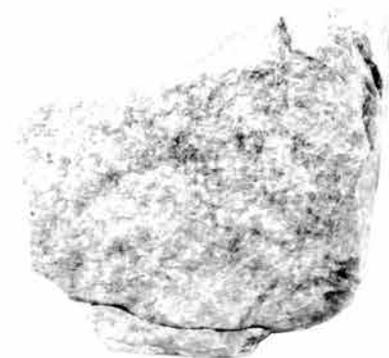
608



617



610



614



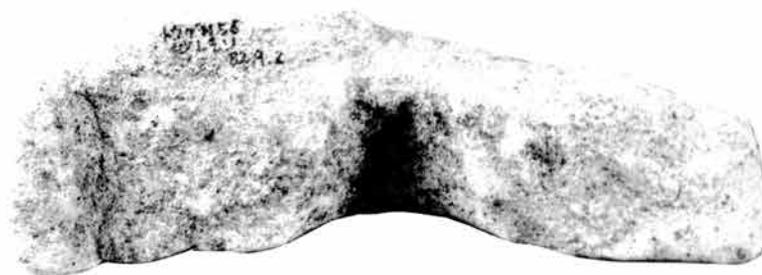
609



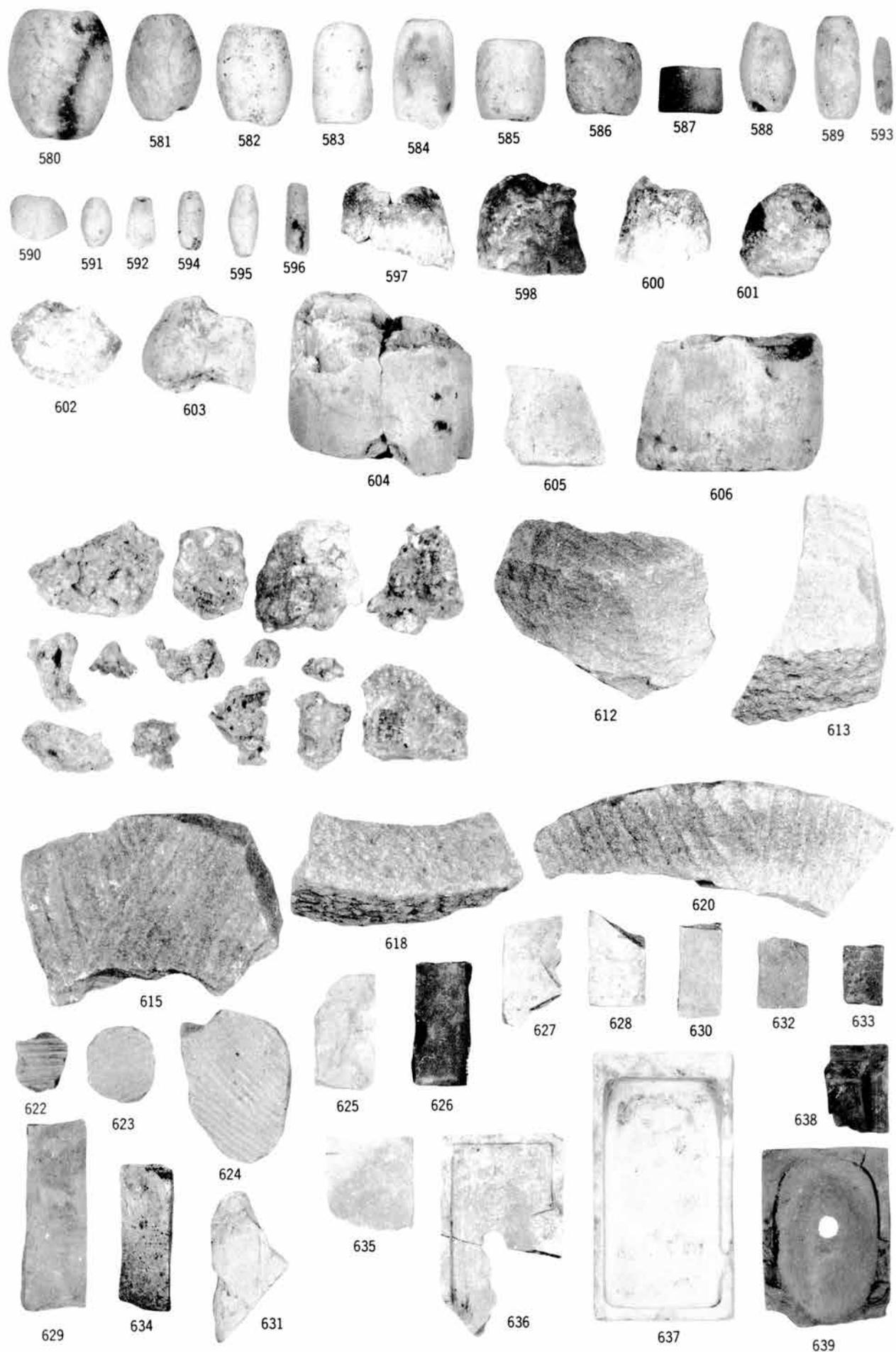
621



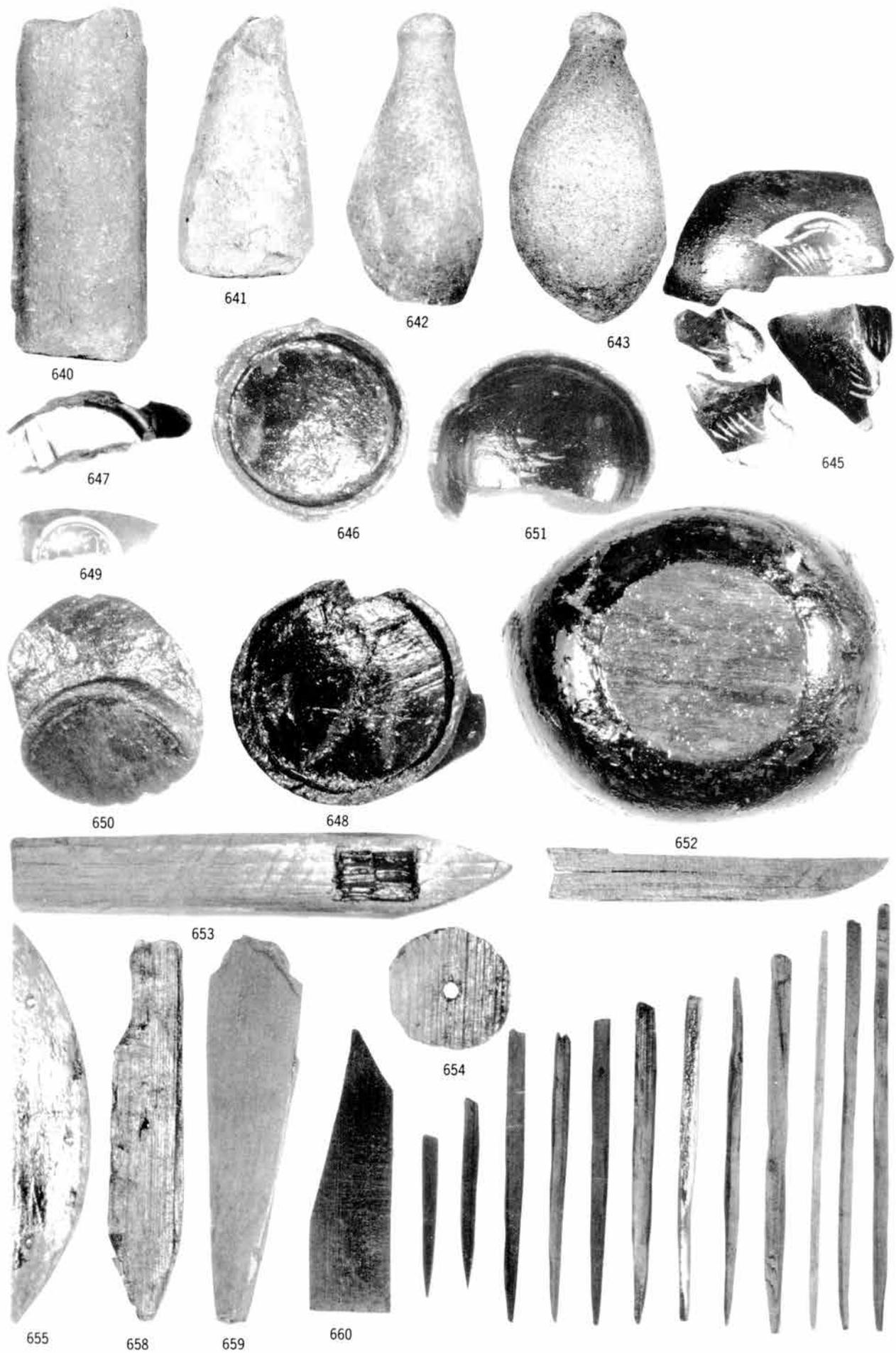
616



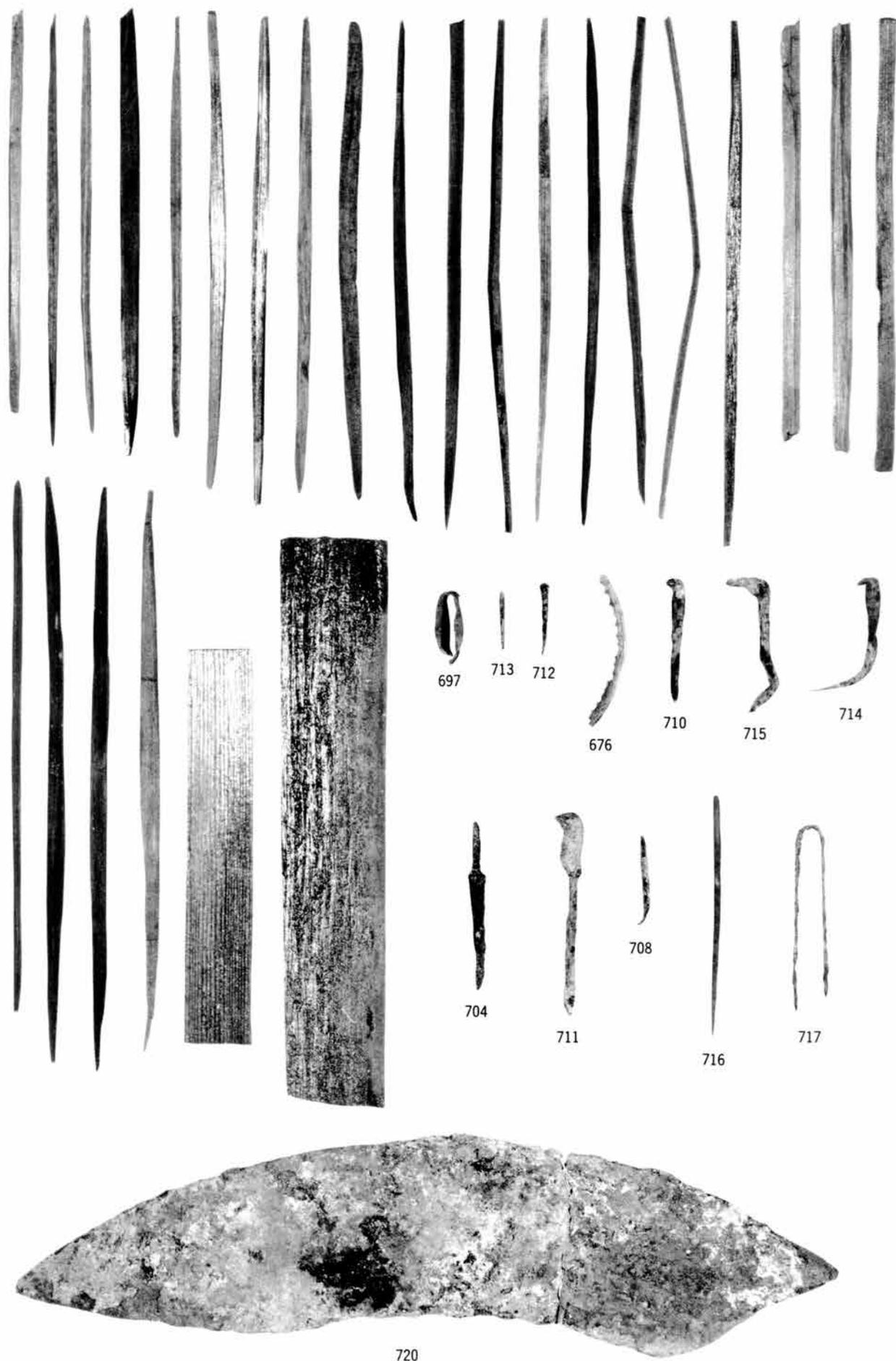
石 鉢、石 臼



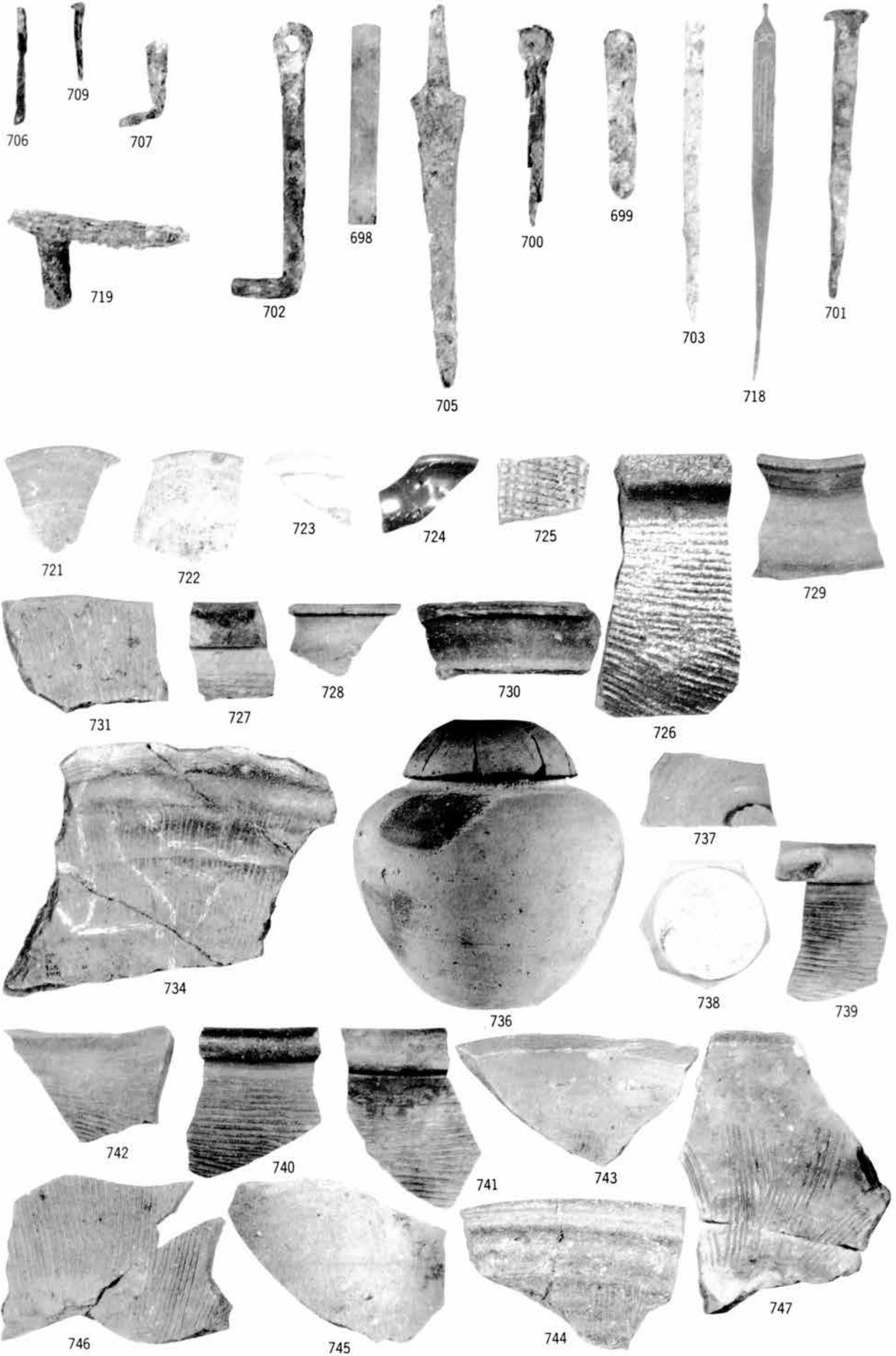
土錘、鞆の羽口、石製品



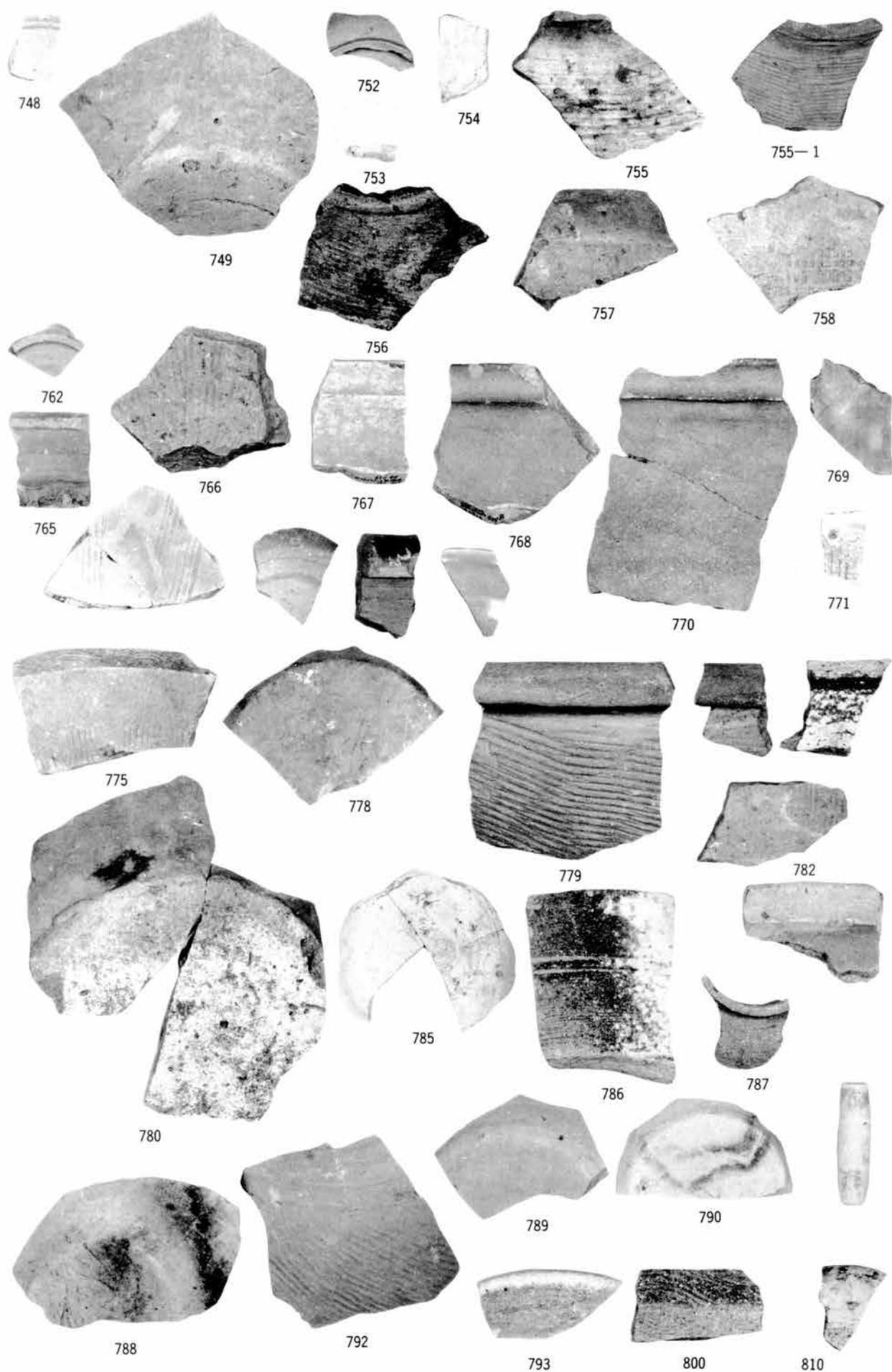
石製品、木製品



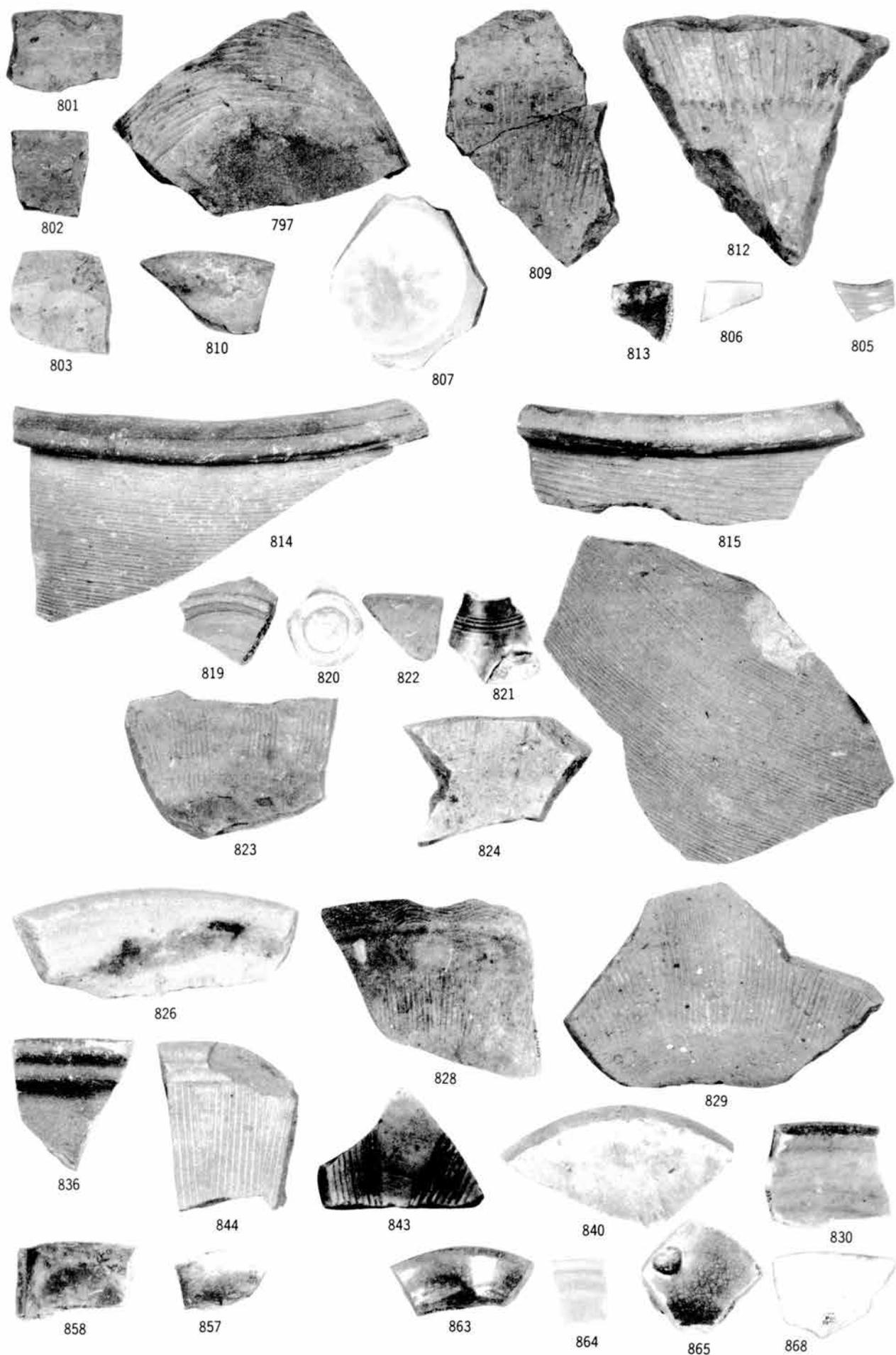
箸状木器、銅・鉄製品



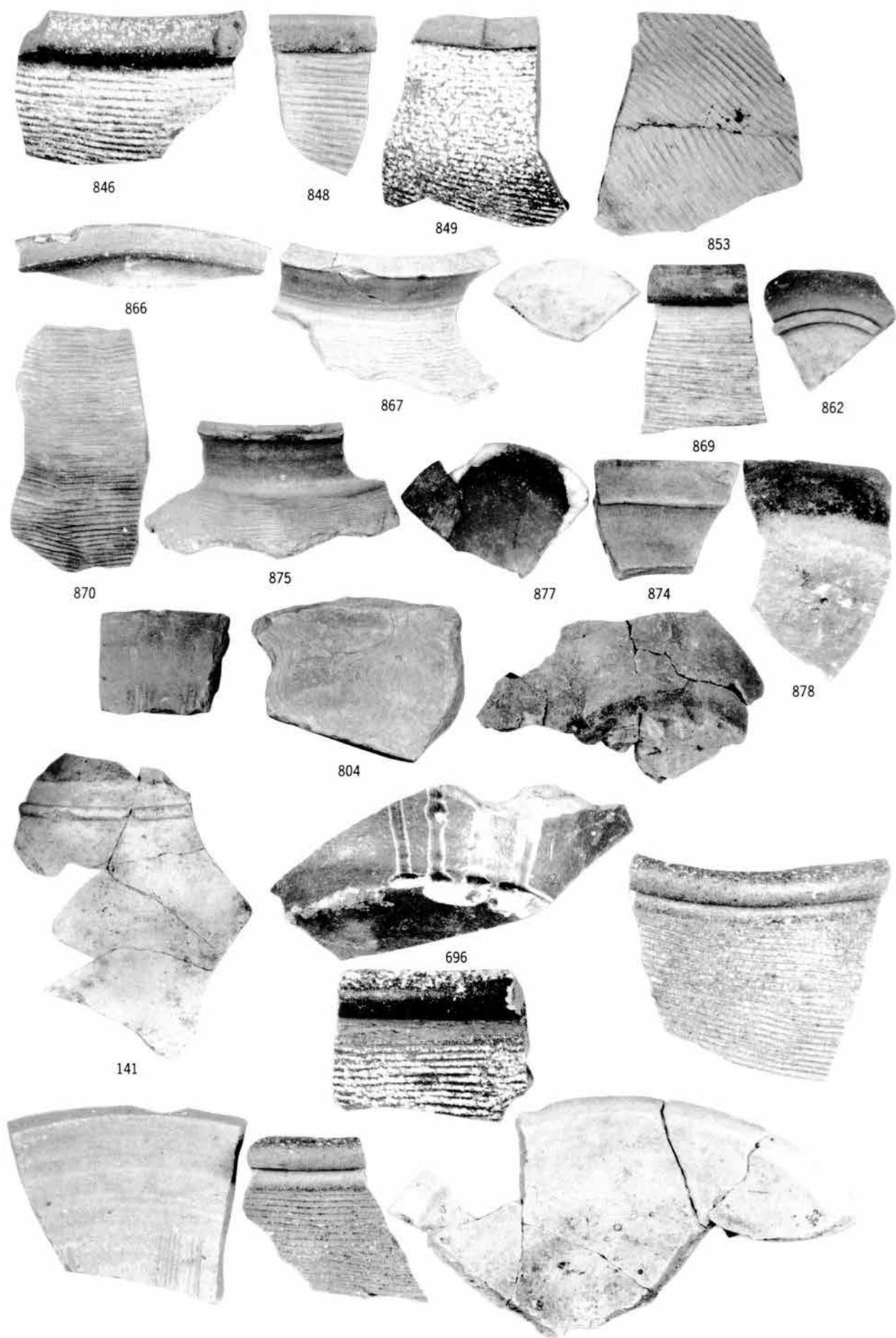
第3号配石、ピット、溜桝、第2号配石



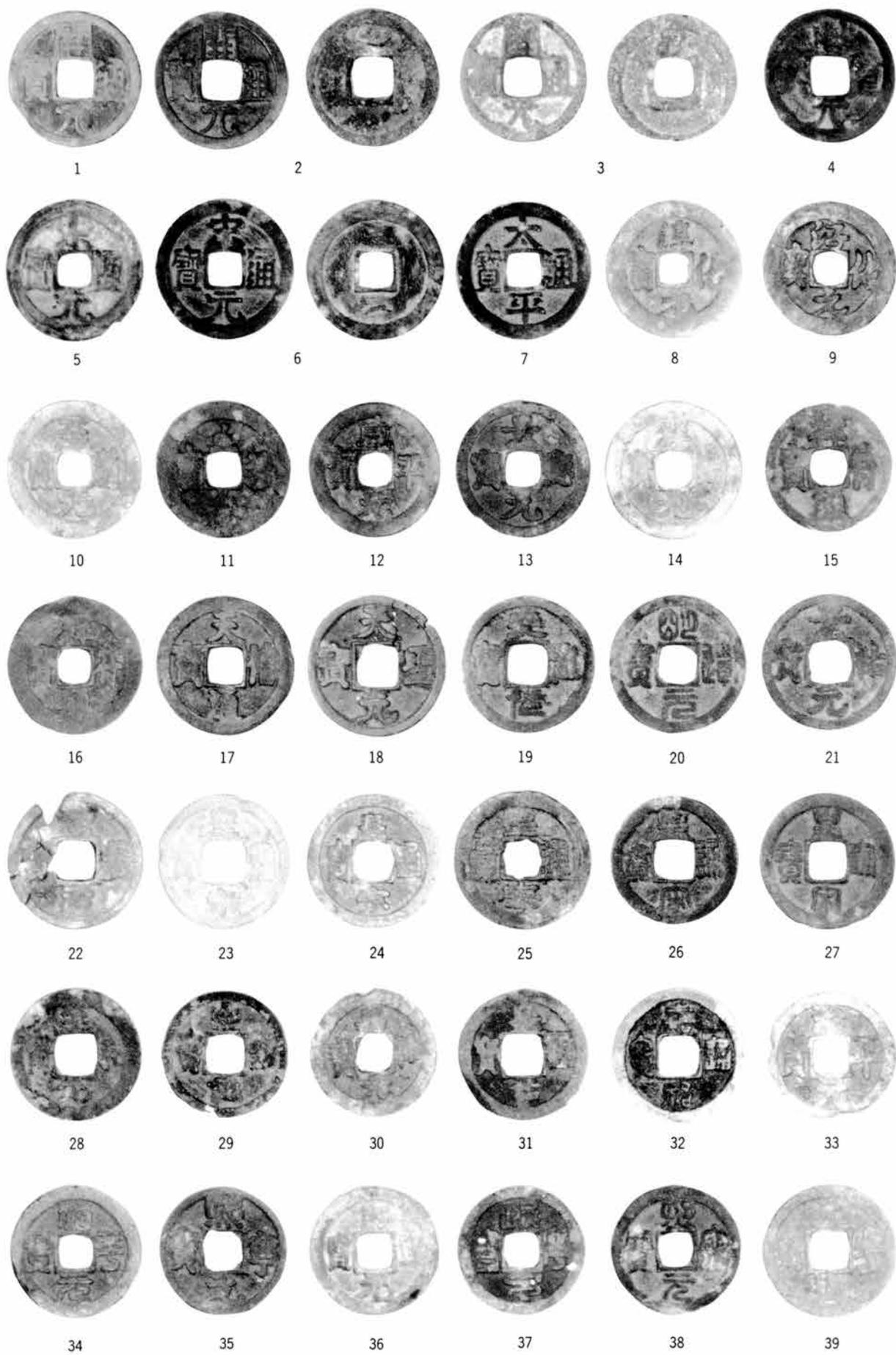
第 2 号土坛、第 2 号土坛、第 3 号土坛



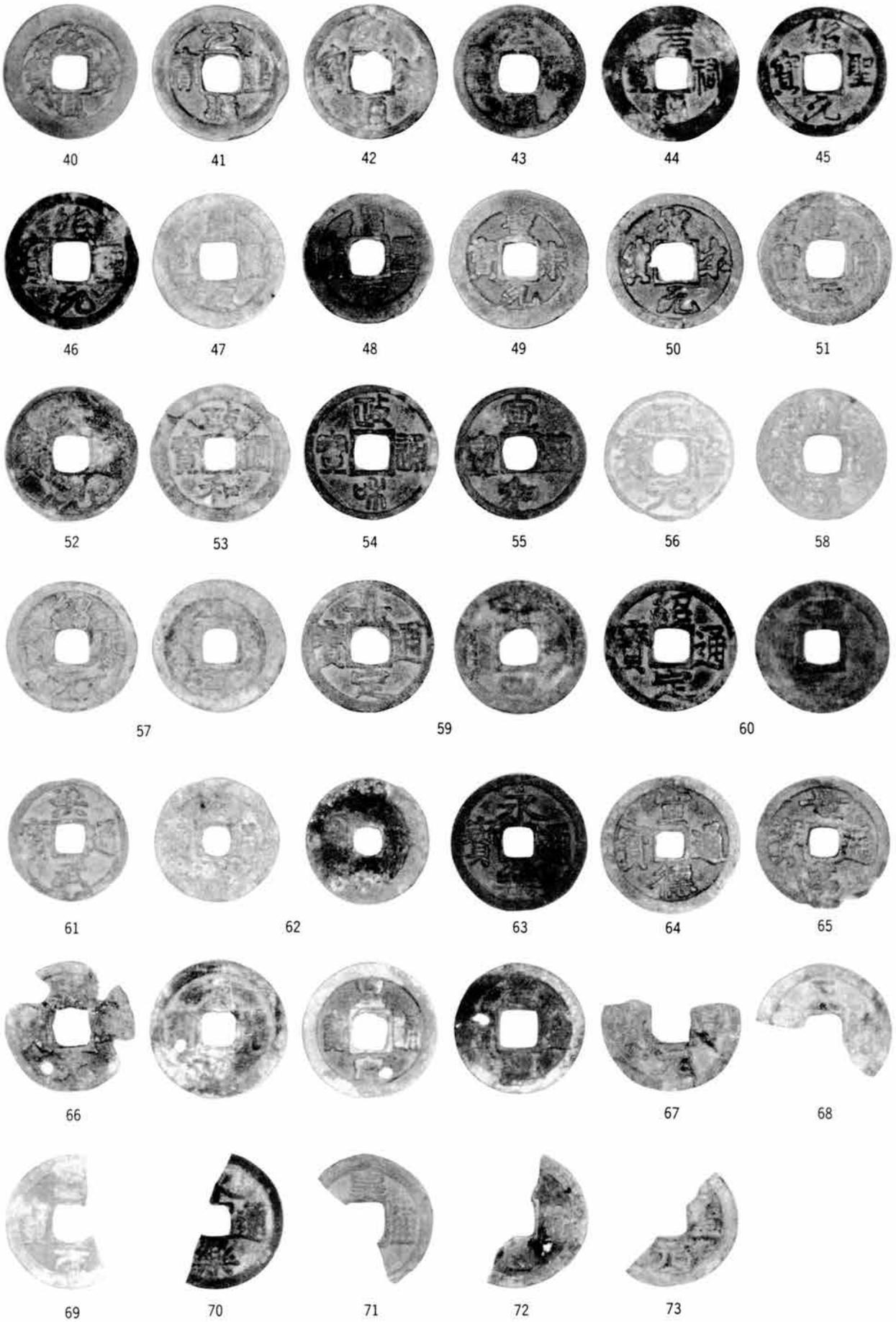
第 2 号配石排水沟



ピット、その他



銅 錢 (大)



銅 錢 (実大)

---

門前町道下元町遺跡

一般国道249号改良事業に係る  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

発行日 昭和60年3月20日(1985)

編集者 石川県立埋蔵文化財センター  
発行者

〒921 金沢市米泉4-133

電話 (0762)-43-7692

印刷者 (株) 橋本確文堂

〒920 金沢市大手町2-35

電話 (0762)61-8221

---



